洲 本 市

白池遺跡
隅田遺跡
竹ノ鼻遺跡

県道鳥飼洲本線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2011（平成23）年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

洲 本 市

白池遺跡
隅田遺跡
竹ノ鼻遺跡

県道鳥飼洲本線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2011(平成23)年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例　　言

1．本書は兵庫県洲本市五色町鳥飼に所在する、白池遺跡･隅田遺跡･竹ノ鼻遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は県道鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴うもので、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成17年度に本発掘調査を実施した。

3．出土品整理は兵庫県淡路県民局長の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が兵庫県立考古博物館で平成21年度と平成22年度に実施した。

4．本書に使用した方位は国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。また､標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

5．出土品の分析は、年代測定を株式会社パレオ・ラボに依頼した。

6．地図は、図版１：国土地理院「徳島」1/200,000
　　図版３：国土地理院「都志」1/25,000を縮小加筆
　　図版４：洲本市「洲本市都市計画図18・19・26・27」1/2,500
　　を使用した。

7．執筆は、第３章～第５章の遺物の項目の土器を岡田章一、第６章第１節を株式会社パレオ・ラボ、第２節を青木哲哉（立命館大学非常勤講師）が行い、上記以外は篠宮　正が行った。

8．編集は篠宮が行った。

9．本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物などは、兵庫県立考古博物館に保管している。

10. 発掘調査および報告書作成にあたり、
洲本市教育委員会・淡路市埋蔵文化財調査事務所・旧津名郡埋蔵文化財調査事務所の各機関および、青木哲哉（立命館大学講師)、伊藤宏幸・大石雅一・足立敬介（淡路市教育委員会)、浦上雅史・金田匡史（洲本市教育委員会)、山崎裕司・坂口弘貢・定松佳重・的場　薫（南あわじ市教育委員会）の各氏にご援助・ご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

白　池　遺　跡
隅　田　遺　跡
竹ノ鼻　遺　跡

県道鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

本　文　目　次

例　言
目　次

第１章　遺跡をとりまく環境……1
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1

第２章　調査の契機と経過……4
　第１節　調査の契機……4
　第２節　確認調査の経過と成果……4
　第３節　本発掘調査の経過……5
　第４節　出土品整理の経過……7

第３章　白池遺跡の発掘調査成果……8
　第１節　調査の概要……8
　第２節　白池遺跡２・３・４区の調査成果……8

第４章　隅田遺跡の発掘調査成果……11
　第１節　調査の概要……11
　第２節　隅田遺跡１・３・４区の調査成果……11
　第３節　隅田遺跡２区の調査成果……23

第５章　竹ノ鼻遺跡の発掘調査成果……25
　第１節　調査の概要……25
　第２節　竹ノ鼻遺跡１区の調査成果……25
　第３節　竹ノ鼻遺跡２区の調査成果……28

第６章　自然科学的調査の成果……33
　第１節　隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）……33
　第２節　白池遺跡・隅田遺跡および竹ノ鼻遺跡の地形環境……36

第７章　まとめ……45
　第１節　要約……45
　第２節　白池遺跡・隅田遺跡の広がり……47

遺物一覧……48～52

図版……１～30

写真図版……１～42

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　暦年較正結果……35
第２図　鳥飼川下流部の地形分類図……37
第３図　調査区付近における完新世段丘Ｉの微地形……38
第４図　白池遺跡２～４区におけるトレンチ断面図……39
第５図　隅田遺跡１・３・４区におけるトレンチ断面図……41
第６図　竹ノ鼻遺跡２区におけるトレンチ断面図……43
第７図　調査地と完成した県道……45
第８図　白池遺跡・隅田遺跡の広がり……46

表　目　次

第１表　測定試料及び処理……33
第２表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果……34
第３表　土器一覧⑴～⑸……48～52
第４表　遺跡石器一覧……52
第５表　遺跡金属器一覧……52

図　版　目　次

図版１　１．兵庫県の位置　２．洲本市の位置　３．白池遺跡の位置
図版２　白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡周辺の遺跡一覧
図版３　白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡地形と主要遺跡（1/35000）
図版４　白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡調査区の位置図（1/2500）
図版５　白池遺跡　遺構　平面図・断面図（1/50・1/200）　SK012S（1/40）　SD016S（1/20）
図版６　白池遺跡　遺構　平面図・断面図（1/50・1/200）　SD001S（1/20）
図版７　白池遺跡　遺構　平面図・断面図（1/50・1/200）　SK403S・SK414S（1/40）SD415S（1/20）
図版８　白池遺跡　遺物　土器（101～118）
図版９　隅田遺跡　１区　遺構　平面図・南壁断面図（1/50・1/200）
図版10　隅田遺跡　１区　遺構　平面図・南壁断面図（1/50・1/200）
図版11　隅田遺跡　１区　遺構　土坑SK006U・SK114U・SK117U・SK186U（1/20）
図版12　隅田遺跡　１区　遺構　土坑SK154U（1/40）　SK124U（1/20）
図版13　隅田遺跡　１区　遺構　土坑ST156U・ST150U（1/20）
図版14　隅田遺跡　１区　遺構　土坑SK153U（1/80）　水溜SE304U（1/40）
図版15　隅田遺跡　１区　遺構　溝SD001U・SD002U・SD004U・SD005U・SD007U・SD010U・SD126U・SD127U・SD125U・SD152U・SD151U・SD155U・SD415U・SD456U・SD306U・SD308U・SD307U（1/20）
図版16　隅田遺跡　１区　遺物　土器１（201～236）
図版17　隅田遺跡　１区　遺物　土器２（237～273）
図版18　隅田遺跡　１区　遺物　土器３・石器・金属器（274～287・S21～S23・M21～M26）
図版19　隅田遺跡　２区　遺構　平面図・北壁断面（1/50・1/200）　SD201U（1/20）
図版20　隅田遺跡　２区　遺物　土器・石器・金属器（288～294・S24・M27・M28）
図版21　竹ノ鼻遺跡　１区　遺構　平面図・南壁断面図（1/50・1/200）
図版22　竹ノ鼻遺跡　１区　遺構　平面図・南壁断面図（1/50・1/200）　柵列SA151T（1/80）　溝SD101T（1/30）　SD103T・SD126T（1/20）
図版23　竹ノ鼻遺跡　１区　遺構　土坑SK108T・SK109T・SK106T・SK107T・SK105T（1/20）　SK102T（1/30）
図版24　竹ノ鼻遺跡　１区　遺物　土器・石器・金属器（301～315・S31・S32・M31）
図版25　竹ノ鼻遺跡　２区　遺構　平面図・南壁断面図（1/50・1/200）
図版26　竹ノ鼻遺跡　２区　遺構　平面図・南壁断面図（1/50・1/200）
図版27　竹ノ鼻遺跡　２区　遺構　平面図・南壁断面図（1/50・1/200）
図版28　竹ノ鼻遺跡　２区　遺構　掘立柱建物SB210T（1/80）　溝SD202T・SD203T・SD204T（1/20）
図版29　竹ノ鼻遺跡　２区　遺物　土器１（316～350）
図版30　竹ノ鼻遺跡　２区　遺物　土器２・石器・金属器（351～364・M32・M33）

写真図版目次

写真図版１			遺跡	1　調査地　遠景（西から）	2　調査地　遠景（東から）
写真図版２			遺跡	3　調査地　遠景（北から）	4　調査地　遠景（南から）
写真図版３	白池遺跡・隅田遺跡		遺構	5　白池遺跡から西を望む（東から）	6　隅田遺跡から東を望む（西から）
写真図版４	竹ノ鼻遺跡		遺構・遺物	7　竹ノ鼻遺跡から東を望む（西から）	陶磁器
写真図版５	白池遺跡		遺構	8　２区全景（東から）	9　溝SD016S（南西から）
写真図版６	白池遺跡		遺構	10　３区全景（東から）	11　溝SD001S（西から）
写真図版７	白池遺跡		遺構	12　４区全景（東から）	13　４区全景（西から）
写真図版８	白池遺跡		遺構	14　土坑SK012S　断面（南から）	15　土坑SK403S　断面（西から）
				16　土坑SK414S　断面（西から）	17　溝SD016S　断面（南西から）
				18　溝SD001S　断面（西から）	
写真図版９	白池遺跡		遺物	土器	
写真図版10	隅田遺跡	１区	遺構	19　隅田遺跡３区から白池遺跡を望む（西から）	20　３区　全景（西から）
写真図版11	隅田遺跡	１区	遺構	21　１区東半（東から）	22　１区東端（西から）
写真図版12	隅田遺跡	１区	遺構	23　１区東半（西から）	24　１区中央部（東から）
写真図版13	隅田遺跡	１区	遺構	25　４区　全景（西から）	26　４区東端（西から）
写真図版14	隅田遺跡	１区	遺構	27　１区中央部（南から）	28　４区東端（西から）
写真図版15	隅田遺跡	１区	遺構	29　３区　全景（西から）	30　隅田遺跡３区から白池遺跡を望む（西から）
写真図版16	隅田遺跡	１区	遺構	31　土坑SK006U　断面（南から）	32　溝SD005U　断面（北から）
				33　溝SD004U　断面（北から）	34　溝SD003U　断面（北から）
				35　溝SD001U・SD002U　断面（西から）	36　溝SD456U　断面（南から）
写真図版17	隅田遺跡	１区	遺構	37　土坑SK154U 検出状況（南から）	38　土坑SK124U（北から）
写真図版18	隅田遺跡	１区	遺構	39　墓ST150U 検出状況（西から）	40　墓ST150U（東から）
写真図版19	隅田遺跡	１区	遺構	41　墓ST156U 検出状況（西から）	42　墓ST156U（西から）
写真図版20	隅田遺跡	１区	遺構	43　水溜SE304U（南から）	44　水溜SE304U 断面（南から）
				45　水溜SE304U　掘形（南から）	
写真図版21	隅田遺跡	１区	遺構	46　溝SD125U　断面（南から）	47　溝SD152U　断面（東から）
				48　溝SD151U　断面（西から）	49　溝SD155U　断面（西から）
				50　溝SD307U　断面（東から）	51　溝SD306U　断面（東から）
				52　溝SD308U　断面（南から）	53　溝SD415U　断面（南から）
写真図版22	隅田遺跡	１区	遺構	54　柱穴P132U　断面（南から）	55　柱穴P133U　断面（東から）
				56　柱穴P335U　断面（西から）	57　柱穴P075U　断面（西から）
				58　柱穴P447U　断面（東から）	59　柱穴P038U　断面（東から）
写真図版23	隅田遺跡	１区	遺物	土器⑴	
写真図版24	隅田遺跡	１区	遺物	土器⑵	
写真図版25	隅田遺跡	１区	遺物	土器⑶	
写真図版26	隅田遺跡	１区	遺物	土器⑷	
写真図版27	隅田遺跡	１区	遺物	土器⑸	
写真図版28	隅田遺跡	１区	遺物	土器⑹	
写真図版29	隅田遺跡	１区	遺物	石器・金属器	
写真図版30	隅田遺跡	２区	遺構	60　全景（西から）	61　全景（東から）
写真図版31	隅田遺跡	２区	遺物	土器・石器・金属器	
写真図版32	竹ノ鼻遺跡	１区	遺構	62　全景（東から）	63　東半部全景（西から）
写真図版33	竹ノ鼻遺跡	１区	遺構	64　南壁土層断面（北から）	65　溝SD101T　断面（南西から）
				66　土坑SK106T　断面（南から）	67　溝SD101T　偶蹄類足跡（南西から）
				68　土坑SK107T　断面（南から）	69　溝SD103T　断面（西から）
				70　土坑SK108T　断面（南から）	71　土坑SK104T　断面（南西から）
写真図版34	竹ノ鼻遺跡	１区	遺物	土器⑴	
写真図版35	竹ノ鼻遺跡	１区	遺物	土器⑵・石器・金属器	
写真図版36	竹ノ鼻遺跡	２区	遺構	72　全景（西から）	73　全景（東から）
写真図版37	竹ノ鼻遺跡	２区	遺構	74　２区東半部（西から）	75　掘立柱建物SB210T（西から）
写真図版38	竹ノ鼻遺跡	２区	遺構	76　掘立柱建物SB210T（東から）	77　掘立柱建物SB210T（南から）
写真図版39	竹ノ鼻遺跡	２区	遺構	78　南壁土層断面（北から）	79　溝SD203T・SD204T 検出状況（南から）
				80　溝SD203T・SD204T　断面（南から）	81　溝SD202T　断面（南から）
				82　掘立柱建物SB210TP213T（南から）	83　掘立柱建物SB210TP217T（南から）
				84　掘立柱建物SB210TP222T（南から）	85　掘立柱建物SB210TP221T（南から）
写真図版40	竹ノ鼻遺跡	２区	遺物	土器⑴	
写真図版41	竹ノ鼻遺跡	２区	遺物	土器⑵	
写真図版42	竹ノ鼻遺跡	２区	遺物	土器⑶・金属器	

第１章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境（図版１・３　写真図版１・２）

白池遺跡･隅田遺跡･竹ノ鼻遺跡は洲本市五色町鳥飼に所在する。洲本市五色町（旧津名郡五色町）は、淡路島のほぼ中央部のやや南寄りの西海岸に面する。

鳥飼川流域はその北方に龍宝寺山・東方に先山・南方には小さな峰である愛宕山という、いずれも領家新期あるいは同古期に属する花崗岩系の母岩からなる三山に囲まれている。この三山に囲まれる範囲には、各峰から派生した低位の山塊や丘陵が広がっており、いずれも砂礫・砂・シルト・粘土・火山灰層等から構成される大阪層群の下部亜層群とされるものである。鳥飼川流域の平野部とされるものは、厳密には砂礫・砂・シルト・粘土からなる中・低位段丘層であり、平野部は河口付近と広石小学校付近のみとされる。

白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡は洲本市五色町の南端部に所在し、播磨灘に注ぐ鳥飼川の下流域に位置する。鳥飼川によって形成された平野部の幅は河口付近の鳥飼浦で約500m、中流域で300m強程度を測る。鳥飼川は広石下付近で北東方向の本流と南東方向の境川に枝分かれし、実質的な平野部は両分流域に建つ広石小学校と境小学校付近までとなる。従って、河口部からの総延長は約４㎞を測る。白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡は鳥飼川の河口から約700m上流の北岸に位置する。

白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡は鳥飼川と都志川の間の標高50m程度の山塊から派生した南向きの扇状地の末端にあたる低位段丘上に位置している。発掘調査地周辺は、水田地帯を形成しているが、水の確保から谷上部には溜池が多数作られている。

第２節　歴史的環境（図版２・３）

白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡は鳥飼川流域の中世の遺跡を主体とし、縄文時代の遺物も出土している。従って、洲本市五色町の鳥飼川流域を中心として、周辺も含めて歴史的な環境を見ていくことにする。なお、鳥飼川流域の北方の山塊から都志川流域に至る間にはほとんど遺跡の分布が無く、南側も南あわじ市西淡町との境界付近は慶野松原付近まで遺跡の存在が確認されていない。東域については先山の山塊部となるため、ここでも遺跡の存在は全く確認されていない。従って、鳥飼川流域という限られた範囲内でひとつの地域史を形成している。

１．縄文時代

特に注目したいのは、洲本市五色町内における縄文時代の遺跡が、現時点でこの鳥飼川流域のみで確認されている事実である。同河川の河口付近で分かれる奥所川の分岐部付近に奥ノ下遺跡（51）、その最上流部に中島遺跡（55）が存在するものの、両遺跡ともその実態は明らかではない。ただ、中島遺跡からは旧石器時代から縄文時代草創期に属すると考えられるサヌカイト製の有舌尖頭器が１点出土している。一方､平野奥部に近い鳥飼川南岸の外ヶ鼻遺跡（63）と五反田遺跡（62）では発掘調査が行われ、外ヶ鼻遺跡では淡路島内でも類例の少ない縄文時代後期の竪穴住居跡が確認されている。五反田遺跡では縄文時代後期の旧河道を調査している。鳥飼川北岸の喜住西遺跡（70）では石鏃が出土しており、今

回調査を実施した隅田遺跡（37）では遺構は検出していないが、縄文後期土器と石鏃が出土している。

２．弥生時代

弥生時代になっても、遺跡数の急激な増加傾向は見受けられない。奥ノ下遺跡の北西部に石出遺跡(48)が、中島遺跡の東側に倉谷遺跡（56）がみられる。鳥飼川本流域では面積的にかなりの広がりをもつ喜住西遺跡（70）・喜住遺跡（71）・飛谷遺跡（72）をはじめとして、北岸に家の東遺跡（59)、南岸の大崩遺跡（58）など若干の広がりをみせるが、まだ平野部の上流域に限られている。また、これらの集落遺跡はいずれも所謂高地性集落に分類される立地条件にあるものばかりであり、時期的にも中期の後半から後期を中心としている。このうち飛谷遺跡では、竪穴住居３棟を調査しており、中期末の建物を描いたと想定される絵画土器が２点出土している。喜住遺跡からは、同時期の土器棺墓を確認している。喜住西遺跡では竪穴住居３棟や掘立柱建物・土坑・溝を調査している。立地から考慮して、未調査である喜住遺跡を中心として、喜住西遺跡と飛谷遺跡を合わせた遺跡群として捉えるべきであろう。

一方、平野部に位置する外ヶ鼻遺跡では、中期に属する土器棺墓と木棺墓が確認されている。

南あわじ市西淡町には中の御堂遺跡（80）や次郎谷遺跡（78）や西原遺跡があり、中の御堂遺跡からは中の御堂銅鐸が、西原遺跡からは古津路銅剣が出土している。

３．古墳時代

集落遺跡は喜住西遺跡で中期の掘立柱建物を調査しているのみであり、実態は不明である。奥ノ下遺跡南東の殿熊遺跡（52）では小規模な丘陵頂部から銅鏡１面が出土していることから、古墳が存在していたのではないかと考えられている。中島遺跡から、さらに谷を遡った山腹部に所在する愛宕山古墳群（57）は、３基の円墳から成る後期古墳であり、１・２号墳は横穴式石室を埋葬施設とするが、３号墳は小石室を埋葬施設としている。１号墳が群形成の契機となった古墳であり、石室内からは須恵器・土師器の土器類の他に、ガラス小玉・水晶製切子玉・勾玉・管玉等の玉類と鉄鏃や馬具・耳環など豊富な遺物が出土している。南あわじ市西淡町・緑町との町境に存在する築穴古墳群は現在２基の古墳が残るが、いずれも横穴式石室を埋葬施設とする。消滅してしまったものも含め、洲本市五色町内に存在していた古墳の半数近くがこの二つの古墳群に集中することとなるが、その立地条件等から勘案して、これらの古墳群は奥所川上流域に属するものではなく、南あわじ市西淡町の松帆地域あるいは南あわじ市三原町・南あわじ市緑町の倭文地域を意識して築造されたものと考えられる。

４．古代

古代になっても、遺跡数の増加傾向は見受けられない。出石遺跡の北側段丘上にとみのはら遺跡(34)・鳥飼八幡宮遺跡（35）が、その西側に宗田原遺跡（47）等があり、河口部を中心とした展開をみせるが、その実態はほとんど明らかになっていない。津名郡の政治・経済的な中心である郡衙が、その地名から一宮町の郡家に置かれていたと考えられるため、海路を用いた租税・物資の運搬に適した海岸部が活気を帯びてきたものと考えられる。生産遺跡は８世紀末から９世紀前半に操業していたとされる角床古窯址群（67）と奥ノ池古窯址（66）が築穴古墳群（68）の付近に存在する。愛宕山古墳群・築穴古墳群同様、国衙の置かれていた三原郡方面の関係によって構築・運営されたことが想定できる。

５．中世～近世

中世になると、爆発的に遺跡数が増加する。山間部にも２、３の遺跡が見られるものの、その多くは鳥飼川流域の平野部とそれを見下ろす段丘上に立地するようになる。比較的大規模となるものは、平野部の北山遺跡（31）・肥余遺跡（36）・居内達跡（60）・才ノ神遺跡（61）・五反田遺跡（62）などであるが、その内、最大となるものは河口部に成立する鳥飼中瀬遺跡（32）である。流域平野奥部を占める肥余遺跡から五反田遺跡と対峙するように、河口部・港湾を押さえる鳥飼中瀬遺跡の図式がそこには読みとれる。流域平野部全体が活動拠点として最大限に活用されはじめたことを伺わせる。こうした集落遺跡を統括するように、海岸部には岡田城跡（24）、鳥飼中瀬遺跡の北側には高丸城跡（30）、中流部の南岸には市城跡（43）が築城されるが、いずれも小規模な山城である。

これらの遺跡の増加は石清水八幡宮の荘園である鳥飼荘が置かれたことに起因すると考えられる。鳥飼荘の成立年代は不詳であるが、貞応二年（1223）の『大田文』によると「旧三原郡庄分、八幡宮御領、鳥飼庄、田卅町、畠、浦一所」とあり、文安二年（1445）の『兵庫北関入舩納帳』には「淡路鳥飼年貢石清水八幡宮」の「米二十七石五斗」が北関を通過している。12世紀後半から15世紀までは荘園の存在が明らかである。また『大田文』により13世紀前半の鳥飼は津名郡ではなく三原郡に含まれていたことがわかる。

参考文献

兵庫県　『兵庫の地質』1996年
五色町教育委員会・淡神文化財協会　『柳杭遺跡　発掘調査報告書』1991年
五色町教育委員会　『五色町遺跡分布図－町内遺跡詳細分布調査報告書－』1994年
五色町教育委員会社会教育課　『ごしきの遺跡　平成２～９年度ほ場整備事業に伴う発掘調査』1999年
津名郡町村会　『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』平成７～９年度埋蔵文化財発掘調査　1999年
津名郡町村会　『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』平成10年度埋蔵文化財発掘調査　2000年
津名郡町村会　『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』平成11年度埋蔵文化財発掘調査　2001年
津名郡町村会　『津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』平成12年度埋蔵文化財発掘調査　2002年

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機（図版４）

１．調査の契機

兵庫県淡路県民局洲本土木事務所では一般県道鳥飼浦洲本線道路改良事業を進めている。一般県道鳥飼浦洲本線は洲本市五色町鳥飼浦の鳥飼浦交差点を起点とし、洲本市納の洲本インターチェンジ前交差点に至る延長約10.6㎞の道路である。合併後の洲本市街と洲本市五色町を結ぶメインルートであり、淡路島の西岸と東岸を結ぶルートのひとつで、地域の生活道路としても使われている。このうち起点部の鳥飼地区は集落内を鳥飼川沿いに屈曲した狭い道路部分が連続し、歩行者の安全確保や渋滞緩和などが問題になっていた。

平成11年度からは鳥飼上地区と鳥飼中地区では鳥飼川北岸部分の圃場整備が実施されることになり、圃場整備部分の中央部に約1.25㎞のバイパスを建設する一般県道鳥飼浦洲本線道路改良事業が計画された。

この事業対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である白池遺跡、隅田遺跡、竹ノ鼻遺跡、北山遺跡、鳥飼中瀬遺跡の範囲内を東西に走る県道であり、圃場整備に伴い津名郡五色町教育委員会が周辺で調査を行っている。これらの遺跡は距離が長いため、東側に位置する白池遺跡、隅田遺跡、竹ノ鼻遺跡の３遺跡と西側に位置する北山遺跡、鳥飼中瀬遺跡の２遺跡を２回に分けて調査を実施した。

今回報告する白池遺跡、隅田遺跡、竹ノ鼻遺跡は事業地の中ほどに位置する当時町営住宅の西側を走る当時町道から東部分に存在する遺跡である。

事業用地は、先行する周辺の圃場整備事業において余剰帯として残されており、周辺の圃場および農道は完成していた。

２．県営圃場整備事業に伴う既往の調査

津名郡五色町教育委員会では鳥飼地区の県営圃場整備事業に先立ち、平成11年度に確認調査を実施し、白池遺跡、隅田遺跡、竹ノ鼻遺跡の３遺跡で、遺跡の存在を確認した。このため、圃場整備事業で切土により削平が行われる部分と水路部分について平成14年度に本発掘調査が行われた。

第２節　確認調査の経過と成果（図版４）

本事業に伴う確認調査を平成15年度と平成16年度の二箇年わたって実施した。

１．確認調査の経過

⑴　平成15年度（遺跡調査番号2003167）

平成15年度の確認調査は道路センター杭№35～№62までの延長約540mの確認調査を実施した。確認調査範囲は竹ノ鼻遺跡の一部と隅田遺跡と白池遺跡に該当する。幅1.5m ×長さ４mの調査区を12箇所（1T～12T）設定し、発掘調査を行った。調査期間は、平成15年11月５日・６日の２日間。調査面積は72㎡である。

調査はバックホーにより表土や無遺物層を掘削した後、人力により掘り下げ、遺構・遺物の確認や遺構検出面までの深さや遺物包含層の深さを確認した。

調査の結果、1T～3Tで土坑やピットを検出し、6T～11Tで土坑やピットあるいは遺物包含層を検出

した。4T・5T・12Tでは遺構や遺物包含層は検出できなかった。

⑵　平成16年度（遺跡調査番号2004233）

平成16年度の確認調査は道路センター杭№0～№35までの延長約700mの確認調査を実施した。確認調査範囲は北山遺跡と鳥飼中瀬遺跡と竹ノ鼻遺跡の一部に該当する。幅２ｍ×長さ５ｍの調査区を23箇所（2T～24T）設定し、発掘調査を行った。今回の本発掘調査に該当する部分は道路センター杭№30～№35までの延長約100mで、23Tと24Tが該当する。調査期間は、平成17年２月３日～３月９日の10日間。調査面積は230㎡である。

調査はバックホーにより表土や無遺物層を掘削した後、人力により掘り下げ、遺構・遺物の確認や遺構検出面までの深さや遺物包含層の深さを確認した。

調査の結果、23Tで落ち込みを検出し、23T・24Tで遺物包含層を確認した。

２．確認調査の成果

平成15年度の1T～3Tと平成16年度の23T・24Tが竹ノ鼻遺跡の範囲内にあたる。中世の遺物を検出している。

平成15年度の6T～11Tが隅田遺跡・白池遺跡の範囲内にあたる。中世の遺物を検出している。

以上、竹ノ鼻遺跡・隅田遺跡・白池遺跡の範囲内に該当する部分の本発掘調査が必要であると判断した。

３．確認調査の組織

⑴　平成15年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当　企画調整班　主査　深井明比古

⑵　平成16年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当　調査第１班　調査専門員　吉田　昇

　　主査　　鐵　英記

第３節　本発掘調査の経過（図版４）

確認調査の結果を踏まえ、本発掘調査を平成17年度に実施した。今回の調査は白池遺跡と隅田遺跡と竹ノ鼻遺跡の３遺跡合わせて実施した。

本発掘調査は、圃場整備事業がすでに完成しており、農道は生活道路として使用されていた。余剰帯として残された県道用地も農道をつなぐ生活道路として使用されており、生活道路を確保しながらの調査を行った。白池遺跡は先に３区の調査を実施し、調査終了後埋め戻しを行った後、２区の調査を実施

した。隅田遺跡は先に１区の調査を実施し、調査終了後埋め戻しを行った後、３区と４区の調査を実施した。したがって、航空写真測量は４回に分けて実施した。

１．白池遺跡（遺跡調査番号2005010）

調査期間は平成17年６月20日に着工し、現地の調査は６月27日に開始し、９月22日に終了した。

白池遺跡は２区と３区と４区と調査区を分けて調査を実施した。３区は６月29日に機械掘削を開始し、７月１日から包含層掘削・遺構検出を行い、７月30日に写真測量を実施した。８月５日から８月10日にかけて埋め戻しを行い、道路を切り替えた。２区は８月22日に機械掘削を開始し、８月24日にから包含層掘削・遺構検出を行い、９月１日に写真測量を実施した。９月８日に深堀を実施した。４区は８月30日に機械掘削を開始し、９月13日から包含層掘削・遺構検出を行い、9月16日に写真測量を実施した。９月22日に深堀を実施した。

調査面積は868㎡である。

２．隅田遺跡（遺跡調査番号2005011）

隅田遺跡は１区・２区・３区・４区と、それぞれ調査区を分けて調査を実施した。１区は６月27日に機械掘削を開始し、６月29日から第１面の調査を実施し、７月11日から第２面の包含層掘削・遺構検出を行い、７月30日に写真測量を実施した。８月８日から８月10日にかけて埋め戻しを行い、道路を切り替えた。２区は７月１日に機械掘削を開始し、７月11日から包含層掘削・遺構検出を行い、７月30日に写真測量を実施した。４区は８月24日に機械掘削を開始し、８月25日に第１面の調査を実施し、８月26日から第２面の包含層掘削・遺構検出を行い、９月１日に写真測量を実施した。３区は９月１日に機械掘削を開始し、９月８日から包含層掘削・遺構検出を行い、９月16日に写真測量を実施した。

調査面積は843㎡である。

３．竹ノ鼻遺跡（遺跡調査番号2005012）

竹ノ鼻遺跡は１区と２区とに調査区を分けて調査を実施した。１区は７月11日に機械掘削を開始し、７月25日から包含層掘削･遺構検出を行い、８月10日に写真測量を実施した。２区は８月４日に機械掘削を開始し、８月17日から包含層掘削･遺構検出を行い、９月16日に航空写真測量を実施した。９月22日には深堀を実施した。

調査面積は1,866㎡である。

４．本発掘調査の組織

⑴　平成17年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　平岡憲昭

総務課　主幹　大西義明

企画調整班　主幹　輔老拓治　主査　深井明比古

調査第２班　調査専門員　山本三郎

調査担当　調査第２班　主査　岸本一宏　久保弘幸　篠宮　正

調査補助員　竹知克征

第４節　出土品整理の経過

１．出土品整理の概要

出土品整理は、平成21年度と平成22度に兵庫県立考古博物館で実施した。

平成21年度は出土遺物の水洗・注記は兵庫県立考古博物館魚住分館で実施し、接合以降は兵庫県立考古博物館で実施した。出土遺物の接合・補強を行った後、実測や写真撮影するものを選択した。これと並行して、金属器の保存処理を実施した。その後、土器・石器・金属器の実測を行った。

出土品の分析は、遺跡の年代や地形形成を考えるため炭の年代測定をパレオ・ラボAMS年代測定グループに依頼した。

平成22年度は土器の復原を行い、石製品と合わせて遺物の写真撮影を行い、写真の整理を行った。また、木製品の保存処理を行った。遺構図はトレースが行えるように補正し、実測した遺物図と遺構図と共に、レイアウト・トレースを行った。原稿執筆・編集を行った後、報告書を刊行した。

２．出土品整理の組織

⑴　平成21年度

調査主体　兵庫県教育委員会

整理事務　兵庫県立考古博物館

館長　石野博信

副館長兼総務部長　藤原　悟

総務課　課長　前川浩子　主査　大西晃彦

埋蔵文化財調査部　部長　若生晃彦

整理保存班　調査専門員　森内秀造　　主査　菱田淳子

整理担当　整理保存班　主査　篠宮　正

非常勤嘱託員　島田留里・川村由紀

⑵　平成22年度

調査主体　兵庫県教育委員会

整理事務　兵庫県立考古博物館

館長　石野博信

副館長兼総務部長　安部邦明

総務課　課長　前川浩子

埋蔵文化財調査部長　若生晃彦　主幹　吉田　昇

整理保存課　課長　村上泰樹　　主査　篠宮　正　　主査　山本　誠

主査　岡本一秀

整理担当　　整理保存課　担当課長補佐　岡田章一

整理保存課　主査　篠宮　正

非常勤嘱託員　島田留里・宮田麻子・森園悦子・西村美緒

日々雇用職員　谷脇里奈

第３章　白池遺跡の発掘調査成果

第１節　調査の概要

１．白池遺跡の立地

白池遺跡は、鳥飼川の北岸の北東から南西に向かって緩やかに傾斜する扇状地に立地している。標高は14.9m～16.0mを測る。

２．調査区の呼称

白池遺跡の調査対象地の周辺は、圃場整備事業の実施により整然と農道と水路が整備されている。この農道が生活道路となっており、県道部分の北側と南側の通行を確保するため、３分割して調査を行う必要が生じた。道路交点の東側の南側部分の調査区を２区と呼称した。２区の北側を３区と呼称した。道路交点の西側を４区と呼称した。４区の南側部分は埋設管のため、調査ができていない。なお、４区の西端は隅田３区に接続してる。

白池遺跡は３区と４区の未掘削部分を含め、延長54.5mあり、座標Y軸の20mの単位ごとに地区を設定し、東側から西に向ってA～Fと呼称した。

第２節　白池遺跡２・３・４区の調査成果

１．概要（図版５～７　写真図版３・５～７）

層序は圃場整備に関連する道路新設のため、耕作土を取り除いて、盛土を行っており、２区・３区が約70㎝～1.3m、４区が45㎝～60㎝の厚みがある。盛土の下に旧耕作土の一部と床土があり、床土の下に、古い耕作土が堆積している。検出面の土層は黒褐色シルト質極細砂である。

白池遺跡の２区・３区・４区は別々に調査を実施したが、図面を合成し、遺構の説明を行っている。

遺構は、柱穴21基と土坑３基、溝３条を調査した。

２．遺構

⑴ 柱穴群

柱穴は調査区の東半部中心に分布しているが、調査区外にも伸びていることと、圃場整備による撹乱と削平のため残りが悪く、完全に建物が復原できるものはほとんどない。

⑵土坑

SK012S（図版５　写真図版８）

検出状況　白池３区の東端のA区に位置する。北側は調査区外に延びている。

概　　要　円形を呈するが半分以上調査区外にあるため不明である。規模は東西4.2m・南北1.3m、深さ約30㎝を測り、中央部分はさらに35㎝落ち込んでいる。埋土は４層で、上層は暗灰黄色の極細砂から粗砂、中層が黄灰色の粗砂が混じるシルト、下層が暗灰黄色の極細砂質シルト、最下層が灰黄色の下層のブロックを含む粗砂である。

出土遺物　土師器杯104、椀105、皿106・107が出土している。

SK403S（図版７　写真図版８）

検出状況　白池４区の東半部のD区に位置する。

概　　要　平面形は東西に長い楕円形を呈する。規模は東西1.20m・南北0.87m、深さ10㎝を測り、断面形は浅いU字形を呈する。埋土は黒褐色の極細砂から粗砂で、下部は粒子が粗い。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK414S（図版７　写真図版８）

検出状況　白池４区の東半部のE区に位置し、SK403の西側にある。

概　　要　平面形は東西に長い楕円形を呈する。規模は東西1.0m・南北0.8m、深さ22㎝を測り、断面形は浅いU字形を呈する。埋土は黒褐色の細砂から粗砂で、マンガンを多く含んでいる。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

⑶　溝

SD016S（図版５　写真図版５・８）

検出状況　白池２区の東半部のA・B区に位置する。南西部は調査区外に延びており、北東部は削平されて残っていない。

概　　要　最大幅35㎝・深さ５㎝・全長９m以上を測る溝である。北西から南東に直線的に傾斜する。方位は北から東へ67°振っている。断面形は浅いU字形を呈する。埋土は灰黄褐色の極細砂から細砂である。

出土遺物　土師器皿101と瓦器椀102が出土している。

SD001S（図版６　写真図版８）

検出状況　白池３区の西半部のC区に位置する。両端は調査区外に延びている。

概　　要　幅30㎝・深さ10㎝・全長17m以上を測る溝である。東から西に直線的に傾斜する。方位は北から西へ89°振っている。断面形は浅いU字形を呈する。埋土は暗灰黄色の極細砂から細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD415S（図版７）

検出状況　白池４区の西端のF区に位置する。西側は圃場整備時の撹乱で削られている。

概　　要　幅62㎝・深さ15㎝・全長3.8m以上を測る溝である。東から西に直線的に傾斜する。方位は北から西へ81°振っている。断面形は浅いU字形を呈する。埋土は２層で、上層が黄灰色の細砂から粗砂、下層が暗灰黄色の極細砂から細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

３．遺物

⑴　土器

SD016S（図版８　写真図版９）

101は土師器皿である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。内外面とも砂が多量に附着する。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。102は瓦器椀である。器面は著しく摩滅する。焼成はややあまく、色調は灰色を呈する。

２区包含層（図版８　写真図版９）

103は須恵器杯である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整でヘラ切痕が残る。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。119は緑釉陶器である。

SK012S（図版８　写真図版９）

104は土師器杯の底部である。105は土師器椀の底部片である。器面の摩滅が著しく調整は不明である。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。106は土師器皿である。ロクロ成形で器壁は非常に薄い。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。107は土師器皿である。ロクロ成形で器壁は非常に薄い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内外面は強い回転ナデ、体部内外面には回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

３区包含層（図版８　写真図版９）

108・109は土師器焙烙の口縁部片である。いずれも内外面に回転ナデ調整を施し、口縁端部を上方につまみ上げる。110は土師器皿である。ロクロ成形で器壁は全体的に厚い。平底で体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部から体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整でヘラ切痕が残る。焼成は良好で色調はにぶい橙色を呈する。内面に附着物が見られる。

４区包含層（図版８　写真図版９）

111は土師器皿である。ロクロ成形を行い、平底である。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。器面の摩滅が著しい。底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成はややあまく、色調は橙色を呈する。112は土師器椀である。断面三角形状の高台を貼り付ける。内外面ともナデ調整を施すが器面の摩滅が著しい。焼成はややあまく、色調はにぶい橙色を呈する。113は土師器鍋である。口縁部は内傾し、口縁部外面に退化した鍔をナデで作り出す。口縁部外面には強いヨコナデ調整を、体部内外面にはナデ調整をそれぞれ施す。焼成はややあまく、色調は橙色を呈する。長谷川分類の播磨型Ⅱ類相当で、16世紀中頃～後半代に比定される。114は土師器鍋である。口縁部は内傾し、口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。口縁部内外面に強いヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。外面に煤が附着する。播磨型ＩC類相当で、15世紀後半～16世紀初頭に比定される。115は土師器鍋の口縁部片と考えられる。口縁部はラッパ状に外方にひらく。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は灰黄褐色を呈する。

116は須恵器杯である。平底で断面台形状の高台を貼り付ける。底部外面はヘラケズリ調整を施す。焼成は堅緻で色調は灰色を呈する。117は須恵器壺である。平底で断面台形状の比較的高い高台を貼り付ける。内外面とも回転ナデ調整を施す。焼成は堅緻で色調は灰色を呈する。118は無釉陶器擂鉢である。口縁端部は斜め方向に切る。内外面とも回転ナデ調整を施し、体部内面に７条１単位の櫛描きの擂目を施文する。焼成は堅緻で、色調は灰黄褐色を呈する。備前焼Ⅲ期相当で14世紀代に比定される。

４．小結

遺構は柱穴と土坑３基、溝３条を検出した。遺構の時期は中世後半に位置付けられる。遺構の密度から集落の縁辺部分であると考えられる。

遺物は14世紀から16世紀にかけての時期のものが出土している。

第４章　隅田遺跡の発掘調査成果

第１節　調査の概要

１．遺跡の立地

隅田遺跡は、白池遺跡の西側に位置する。鳥飼川の北岸の北東から南西に向かって緩やかに傾斜する扇状地に立地している。標高は13.8m～14.9mを測る。

２．調査区の呼称

隅田遺跡の調査対象地の周辺は、圃場整備事業の実施により整然と農道と水路が整備されている。この農道が生活道路となっており、県道部分の北側と南側の通行を確保するため、４分割して調査を行う必要が生じた。北側部分の延長65m、幅５mの調査区を１区と呼称した。１区西端の道路を挟んで西側を２区と呼称した。１区の南側部分のうち東側を３区と呼称し、西側を４区と呼称した。１区・４区と２区の間は水道管が埋設されているため、調査は不可能であった。３区と４区の間は生活道路確保のため調査が不可能であった。なお、３区の東端は白池４区に接続してる。３区の南側部分は埋設管のため、一部調査ができていない。

第２節　隅田遺跡１・３・４区の調査成果

１．概要（図版９・10　写真図版３・10～15）

隅田遺跡１・３・４区は３回に分けて調査を実施した。延長34mあり、座標Y軸の20mの単位ごとに地区を設定し、東側から西に向ってA～Dと呼称した。

層序は圃場整備に関連する道路新設のため、耕作土を取り除いて、盛土を行っており、約20㎝～１mの厚みがある。盛土の下に旧耕作土の一部と床土があり、床土の下に、古い耕作土が堆積している。D区は堆積土層が増えており、隅田遺跡２区と同様に水田地帯である。

隅田遺跡の１区・３区・４区は別々に調査を実施したが、図面を合成し、遺構の説明を行っている。遺構はC区の上層で、土坑２基と溝５条を検出した。下層では、柱穴群と土坑８基、墓２基、溝15条を調査した。

２．遺構

⑴　**柱穴群**（写真図版22）

隅田遺跡では214基の柱穴を検出した。特にB・C区に集中している。調査区外にも伸びていることと、重複が著しいため建物が復原できなかった。P075U・P447U・P038U・P036U・P081U・P088U・P120U・P421U・P422U・P424U・P425U・P429U・P430U・P437U・P438U・P448U・P454U・P485U・P494Uでは柱穴内に柱材の一部が残存したり、P132U・P133U・P335U・P094Uでは柱穴内に石が据えられている。

また、P066U・P067U・P086U・P187U・P092U・P119U・P043U・P087U・P013U・P029U・P045U・P098U・P031U・P161U・P082U・P117U・P338U・P339U・P407U・P412U・P423U・P430U・

P432U・P454U・P494U・P464Uから土器が、P493Uから石器が出土している。P090U・P091Uからは鉄滓が出土している。

⑵　土坑

SK006U（図版11　写真図版16）

検出状況　調査区中央部のC区上層に位置し、溝SD004UとSD005Uの間にある。

概　　要　平面形は楕円形を呈する。規模は長径約95㎝、短径約70㎝、深さ約12㎝を測る。埋土は灰黄褐色の極細砂でマンガンと炭を含んでいる。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK401U（図版10　写真図版14）

検出状況　調査区中央部のC区上層に位置し、南側と東側は調査区外に延びている。SD004Uを切り、SD005Uに切られる。

概　　要　平面形は長方形を呈する。規模は東西約9.0m以上、南北約2.5m以上、深さ約40㎝を測る。土坑底は平坦である。埋土は灰黄褐色の極細砂である。

出土遺物　土師器皿257、無釉陶器壺258、擂鉢259～261、染付磁器碗262、青磁碗263、軒丸瓦264、不明銅製品が出土した。

SK114U（図版11）

検出状況　調査区中央部のC区に位置し、SK117UとSD126Uに切られている。南側は調査区外に延びている。

概　　要　平面形は長方形を呈する。規模は南北約1.15m以上、東西約0.9m、深さ約17㎝を測る。土坑底は平坦である。埋土は３層で、上層は灰黄褐色の極細砂で、中層は黄褐色と灰褐色の混じる極細砂で、下層は黒色の炭層である。

出土遺物　土師器皿206・207、無釉陶器208、不明石製品S25が出土している。

SK117U（図版11）

検出状況　調査区中央部のC区に位置し、SK114UとSD010Uを切っている。南側は調査区外に延びている。

概　　要　楕円形を呈する。規模は長径約1.3m以上、短径1.0m、深さ約13㎝を測る。埋土は４層で、上層は灰黄褐色で僅かに炭が混じる極細砂で、中層は褐灰色で僅かに炭が混じる細砂で、下層は褐灰色の粗砂で、最下層は褐灰色の炭が混じるシルトである。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK186U（図版11）

検出状況　調査区東端のA区に位置している。東側は調査区外に延びている。

概　　要　平面形は長方形を呈する。規模は東西約9.0m以上、南北約2.5m以上、深さ約40㎝を測る。土坑底は平坦である。埋土は黒褐色のシルト質極細砂である。

出土遺物　寛永通寶M21が出土した。

SK154U（図版12　写真図版17）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、北側は調査区外に延びている。

概　　要　平面形は長方形を呈する。規模は東西約3.5m以上、南北約1.2m以上、深さ約35㎝を測る。土坑底は平坦である。埋土は３層で、上層はにぶい黄橙色の極細砂から細砂で、中層は灰黄褐色の極細

砂から中砂で、下層が褐灰色のシルト質極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK124U（図版12　写真図版17）

検出状況　調査区中央部のC区に位置する。

概　　要　平面形は南北に長い楕円形を呈する。規模は長径約1.80m、短径1.45m、深さ約８㎝を測る。全体に炭が混じり、上層は灰黄褐色細砂、中層は褐灰色シルト質極細砂を埋土としている。最下層は炭層である。

出土遺物　土師器皿209～211、鍋212、石臼S21が出土した。

SK153U（図版14）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、SD125U・SD152U・SE304Eに切られている。

概　　要　平面形は長方形を呈する。規模は東西約5.2m、南北約4.3m、深さ約40㎝を測る。南側は深さ約10㎝下がっている。最上層は暗灰黄色の極細砂から粗砂で、上層は黒褐色シルト極細砂で、下部に炭を含む。中層は基盤層のブロックを含む黄褐色のシルト質極細砂で、下層は黒褐色の極細砂から細砂である。

出土遺物　土師器皿216・239～244、椀or杯217、青磁碗245、青花磁器皿218、土製品土錘246、不明鉄製品が出土した。

SE304U（図版14　写真図版20）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、SK153Uを切っている。

概　　要　平面形は東西に長い楕円形を呈する。長径約2.4m、短径2.2m、深さ55㎝の掘形の東側に寄って桶を埋めている。桶の直径は1.35mを測り、箍の痕跡が三段残る。掘形の埋土は基本的に基盤層を掘削した土を埋め戻しており、桶内には暗灰黄シルト質極細砂から粗砂が埋まった後、周囲の土が流入している。

出土遺物　土師器皿247、瓦器椀248、青磁碗249が出土した。

⑶　墓

ST156U（図版13　写真図版19）

検出状況　調査区東端のA区に位置している。

概　　要　全長1.60m・幅0.82mの長方形の墓壙で、深さ最大30㎝を測る。木棺の痕跡は検出できなかったが、釘が出土していることから木棺の可能性が高い。主軸方位は北から13°東に振る。埋土は２層で、上層は黒褐色のシルト質極細砂から粗砂で、下層は黄褐色の極細砂質シルトで炭を含んでいる。

出土遺物　鉄釘M23・M24が出土した。

ST150U（図版13　写真図版18）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、ST156Uの西側にある。北端はSD151Uに、南東隅はピットに切られている。

概　　要　全長2.18m・幅0.88mの長方形の墓壙で、深さ12㎝を測る。木棺の痕跡は検出できなかった。主軸方位は北から15°東に振る。炭層を挟んで大きく上層と下層に分かれる。上層は黄褐色や暗灰黄系の炭を含む土層が中心であり、大礫を含んでいる。下層は黄灰色の極細砂質シルトあるいは細砂で基盤層のブロックを含んでいる。

出土遺物　土師器皿213・214と土師器鍋215が出土した。

⑷　溝

SD003U（写真図版16）

検出状況　調査区中央部の上層C区で検出した。溝SD004Uと土坑SK401Uの西側に位置する。

概　　要　幅約50㎝、深さ20㎝、全長10.3m以上を測る直線的な溝である。断面形はU字形である。方位は北から東へ16°振る。埋土は褐灰色の極細砂から細砂でラミナである。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD004U（図版15　写真図版16）

検出状況　調査区中央部の上層C区で検出した。溝SD005Uの西側に位置し、SK401Uに切られる。

概　　要　幅70㎝、深さ25㎝、全長6.5m以上を測る直線的な溝である。断面形はU字形である。方位は北から東へ13°振る。上層が灰黄褐色の細砂～粗砂でラミナ、下層がにぶい黄褐色の極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD005U（図版15　写真図版16）

検出状況　調査区中央部の上層C区に位置し、SK401Uを切っている。

概　　要　幅70㎝、深さ25㎝、全長8.7m以上を測る直線的な溝である。断面形はU字形である。方位は北から東へ５°振る。埋土はにぶい黄褐色の細砂から粗砂である。

出土遺物　無釉陶器甕203と染付磁器碗204・205、鉄滓が出土した。

SD402U

検出状況　調査区中央部の上層C区で検出した。土坑SK401Uと溝SD003Uの間に位置し、SK401Uに切られる。１区では検出できなかった。

概　　要　幅1.0m、深さ20㎝を測る直線的な溝である。断面形は浅いU字形である。埋土は灰黄褐色の極細砂～細砂である。

出土遺物　無釉陶器擂鉢252と鉢253が出土した。

SD406

検出状況　調査区中央部の上層C区で検出した。溝SD004Uの東側に位置し、SK401Uに切られる。

概　　要　幅30㎝、深さ８㎝を測り、L字形に屈曲する溝である。断面形は浅いU字形である。埋土は灰黄褐色の極細砂から粗砂である。

出土遺物　土師器鍋254が出土した。

SD007U（図版15）

検出状況　調査区中央部のC区に位置し、北側は調査区外に延びる。

概　　要　幅55㎝、深さ30㎝、全長2.3m以上を測る直線的な溝である。断面形は逆台形である。方位は北から東へ13°振る。埋土は灰黄褐色の極細砂から粗砂のラミナである。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD010U（図版15）

検出状況　調査区中央部のC区に位置し、P115U・SK117Uなどに切られている。北側は調査区外に延びている。

概　　要　幅80㎝、深さ８㎝、全長4.0m以上を測る溝である。埋土は４層で、上層は黒褐色と黄褐色が混じる極細砂で、中層は黒褐色の極細砂で、下層はにぶい黄褐色の極細砂から細砂で、最下層は黒色の炭層である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD001U（図版15　写真図版16）

検出状況　調査区西半部のC・D区に位置し、SD003Uに切られ、ほぼ並行して走る溝SD002Uを切っている。東側は圃場整備により、西側は深堀によって削平されている。

概　　要　幅50㎝、深さ８㎝、全長11.6m以上を測る直線的な溝である。断面形はU字形である。方位は北から東へ89°振る。埋土は灰黄褐色の極細砂である。

出土遺物　土師器皿201が出土した。

SD002U（図版15　写真図版16）

検出状況　調査区中央部のC区に位置し、ほぼ並行して走る溝SD001Uに切られ、西側は深堀によって削平されている。

概　　要　幅45㎝、深さ５㎝、全長4.4m以上を測る直線的な溝である。断面形はU字形である。方位は北から東へ86°振る。埋土は灰黄褐色の極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD126U（図版15）

検出状況　調査区中央部のC区に位置し、SD127Uを切っている。南側は調査区外に延びている。

概　　要　幅90㎝、深さ８㎝、全長2.1m以上を測る直線的な溝である。方位は北から西へ21°振る。埋土は褐灰色の細砂から粗砂である。

出土遺物　土師器皿202が出土した。

SD127U（図版15）

検出状況　調査区中央部のC区に位置し、SK114Uを切り、SD126Uに切られている。南側は調査区外に延びている。

概　　要　幅50㎝～30㎝、深さ20㎝、全長1.1m以上を測る直線的な溝である。方位は北から東へ34°振る。埋土は褐黄灰色の細砂から粗砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD125U（図版15　写真図版21）

検出状況　調査区中央部のB・C区に位置し、SD303Uに切られ、SK153Uを切っている。西側は調査区外に延びている。

概　　要　幅30㎝、深さ５㎝、全長4.5m以上を測る直線的な溝である。断面形は逆台形である。方位は北から東へ78°振る。埋土は褐灰色の細砂から粗砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD152U（図版15　写真図版21）

検出状況　調査区東半部のA・B区に位置し、SK153Uを切っている。SD307Uと同一の可能性が高い。

概　　要　幅55㎝、深さ４㎝、全長5.5m以上を測る直線的な溝である。方位は北から西へ71°振る。埋土は暗灰黄色の極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD151U（図版15　写真図版21）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、ST150Uを切っている。

概　　要　幅60㎝、深さ３㎝と浅いため途中で途切れている。全長6.1mを測る直線的な溝であり、方

位は北から西へ74°振る。埋土は灰黄褐色の極細砂でマンガンを含んでいる。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD155U（図版15　写真図版21）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、ST151Uの南側に並行している。

概　　要　幅25㎝、深さ３㎝、全長1.5mを測る直線的な溝である。方位は北から西へ77°振る。埋土は灰黄褐色の細砂で鉄分とマンガンを含んでいる。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD303U

検出状況　調査区中央部のB･C区に位置する。西側は調査区外に延びている。SD125UとSD306Uを切っている。

概　　要　最大幅は西端で60㎝、深さ15㎝、全長2.3mを測る浅いU字形の溝である。埋土は上層が褐灰色の細砂、下層が炭を含む細砂から粗砂である。

出土遺物　土師器皿237が出土した。

SD305U

検出状況　調査区中央部のB・C区に位置し、西側は調査区外に延びている。

概　　要　幅15㎝～30㎝、深さ10㎝、全長4.7mを測る直線的な溝である。方位は北から西へ90°振る。埋土は褐灰色の細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD306U（図版15　写真図版21）

検出状況　調査区中央部のB・C区に位置し、SD303Uに切られ、SK153Uを切っている。西側は調査区外に延びている。

概　　要　幅1.8m、深さ20㎝、全長4.1mを測る直線的な溝である。方位は北から西へ90°振る。埋土は２層あり、シルト質極細砂のブロックを多量に含み、上層は黄灰色の細砂から粗砂、下層が暗黄灰色のシルト質極細砂である。

出土遺物　土師器鍋238が出土した。

SD308U（図版15　写真図版21）

検出状況　調査区東端のA区に位置し、調査区に直交しており、両側は調査区外に延びている。

概　　要　幅1.5m、深さ18㎝、全長2.4mを測る直線的な溝である。方位は北から東へ７°振る。埋土は暗灰黄色のシルト質極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD307U（図版15　写真図版21）

検出状況　調査区東半部のA・B区に位置する。南東側は調査区外に延びている。SD152Uと同一の可能性が高い。

概　　要　幅60㎝、深さ５㎝、全長8.0mを測る直線的な溝である。方位は北から西へ71°振る。埋土は鉄分を含み、黄灰色の細砂から粗砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD415U（図版15　写真図版21）

検出状況　調査区中央のC区に位置し、SK401Uに切られている。

概　　要　幅60㎝、深さ５㎝、全長3.2mを測る直線的な溝である。方位は北から西へ18°振る。埋土は２層あり、上層は黒色あるいは黒褐色の極細砂で炭層を多く含み、下層は灰黄褐色のシルト質極細砂で鉄分を含んでいる。

出土遺物　土師器皿255と無釉陶器壺256が出土した。

SD483U

検出状況　調査区中央部のC区で検出した。上層の溝SD003Uのほぼ同位置の下層に存在する。

概　　要　幅約60㎝～70㎝、深さ20㎝、全長10.3m以上を測る直線的な溝である。断面形はU字形である方位は北から東へ16°振る。埋土は褐灰色のシルト質極細砂でラミナである。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD456U（図版15　写真図版16）

検出状況　調査区西端のD区に位置している。１区側は深堀で検出できなかった。

概　　要　幅40㎝、深さ４㎝、全長４mを測る直線的な溝である。方位は北から東に４°振る。埋土は黒褐色の極細砂で鉄分をを含んでいる。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

３．遺物

⑴　土器

SD001U（図版16　写真図版23）

201は土師器皿である。低い平高台を持ち、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。

SD126U（図版16　写真図版23）

202は土師器皿である。非ロクロ成形で器壁は非常に薄い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内外面には強いヨコナデ調整、体部内外面にはヨコナデ調整をそれぞれ施す。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

SD005U（図版16　写真図版24・25）

203は無釉陶器甕である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。体部外面には縦方向の板ナデ調整を、体部内面にはヨコ方向の板ナデ調整をそれぞれ施す。焼成は堅緻で、色調は褐灰色を呈する。内面に胡麻状の灰被りが見られる。備前焼と考えられる。204は染付磁器碗である。高台は比較的細く高く、底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。内外面とも草花文と界線を施文する。肥前系で19世紀前半代に比定される。205は染付磁器碗である。高台は比較的細く高く、底部の器壁は厚い。体部はやや内彎気味に外上方に延びる。外面に酸化コバルトで染色体状文を描く。色調は白色を呈する。瀬戸・美濃系で19世紀前半以降に比定される。

SK114U（図版16　写真図版23・24）

206は土師器皿である。非ロクロ成形で体部は短く外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。207は土師器皿である。ロクロ成形で器壁は非常に薄い。低い平高台を持ち、体部は緩やかに外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。208は無釉陶器の底部片である。平底で体部は直線的に外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整

を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。丹波焼と考えられる。

SK124U（図版16　写真図版23・24）

209は土師器皿である。非ロクロ成形で器壁は非常に薄い。口縁部内面はやや窪む。口縁部内外面には強いヨコナデ調整が、体部内外面にはヨコナデ調整がそれぞれ施される。焼成は良好で色調は褐灰色を呈する。210は土師器皿である。ロクロ成形で、平底、底部内面は若干窪む。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。口縁部から体部内外面には回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。211は土師器皿である。非ロクロ成形で器壁は非常に薄い。口縁部内面はやや窪む。口縁部内外面には強いヨコナデ調整、体部内外面にはヨコナデ調整をそれぞれ施す。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。212は土師器鍋である。体部は内彎し口縁部は若干内傾する。口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。粘土紐巻き上げ成形で口縁部内外面には強いヨコナデ調整を施す。体部外面には斜め方向の平行叩き目が残る。体部内面には板ナデ調整を加える。焼成は良好で、色調は赤灰色を呈する。播磨型ＩＡ類相当で、15世紀前半代に比定される。

SK150U（図版16　写真図版23・24）

213は土師器皿である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。内外面ともナデ調整を施すが、器面の摩滅が著しい。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。214は土師器皿である。ロクロ成形で平底、体部は直線的に外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。215は土師器鍋である。口縁部は内傾し、外面の鍔は欠落する。粘土紐巻き上げ成形で、口縁部内外面には強いヨコナデ調整を加える。体部外面には斜め方向の平行叩き目が残る。体部内面はナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は暗灰色を呈する。播磨型鍋と考えられる。

SK153U（図版16　写真図版23・24）

216は土師器皿である。ロクロ成形で器壁は非常に薄い。体部は若干内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部から体部内外面は回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。217は杯あるいは椀の底部である。平底で体部は緩やかに外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。218は青花磁器皿である。碁笥底で体部は緩やかに外上方に延びる。底部の器壁は比較的厚い。底部内面に淡い呉須で人形の壽字文を描く。底部外面は露胎である。焼成はややあまく、色調は青灰色を呈する。景徳鎮民窯の製品で16世紀代に比定される。

１区ピット（図版16　写真図版23・25）

219はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部から体部内外面には回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は橙色を呈する（P086U出土）。220は土師器皿である。ロクロ成形で、体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部～体部内外面は回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る（P119U出土）。221はロクロ成形の土師器皿底部である。平底で底部外面には糸切痕と板状圧痕が残る。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する（P087U出土）。222はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は緩やかに外上方に立ち上がる。体部内外面には回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する（P161U出土）。223は非ロクロ成形の土師器皿であ

る。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。口縁部から体部内外面はヨコナデ調整を施す（P187U出土）。224はロクロ成形の土師器皿である。平底で底部外面には糸切痕が残る。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する（P043U出土）。225は非ロクロ成形の土師器皿である。器壁は非常に薄く、体部は外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する（P029U出土）。226は非ロクロ成形の土師器皿である。器壁は非常に薄く、体部は外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。227は非ロクロ成形の土師器皿である。器壁は非常に薄く、体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する（P031U出土）。228はロクロ成形の土師器皿である。器壁は比較的薄い。平底で体部は僅かに内彎気味に、緩やかに外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部から体部内外面は回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する（P098U出土）。229は土師器甕の口縁部片で、外方に若干ひらく。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成は比較的良好で、色調はにぶい橙色を呈する（P066U出土）。230は土師器鍋である。口縁部は内傾し、外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。粘土紐巻き上げ成形で口縁部内外面に強いヨコナデ調整を施す。体部外面には斜め方向の平行叩き目が残る。体部内面にはナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は赤灰色を呈する。播磨型ＩA類相当で15世紀前半代に比定される（P067U出土）。231は土師器鍋である。口縁部は内傾し、口縁端部は上面に端面を持つ。口縁部外面に断面三角形状の鍔を貼り付ける。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を施し、体部外面には平行叩き目が残る。焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。体部外面には煤が附着する。播磨型ＩA類相当で、15世紀前半代に比定される（P092U出土）。232は土塊である（P045U出土）。233は無釉陶器擂鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部の１箇所を捻って片口を作り出す。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施し、体部内面に櫛描きの擂目を施文する。焼成は堅緻で、色調は褐灰色を呈する。備前焼Ⅳ期相当で15世紀代に比定される（P082U出土）。234は無釉陶器擂鉢である。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は斜め方向に切り、端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施し、体部内面に櫛描きの擂目を疎に施文する。焼成はあまく、色調はにぶい黄橙色を呈する。備前焼Ⅳ期相当で15世紀代に比定される（P117U出土）。

１区包含層（図版16　写真図版23）

235は瓦器椀である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。内外面ともヨコナデ調整を施すが器面の摩滅が著しい。焼成はややあまく、色調は黒色を呈する。236は土錘である。棒状のものに粘土紐を巻きつけて成形する。端部は若干欠落する。外面はナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は橙色を呈する。

SD303U（図版17　写真図版26）

237はロクロ成形の土師器皿である。平高台を持ち、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。体部内外面は回転ナデ調整を施す。底部外面と側面は不調整で、底部外面には糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。

SD306U（図版17　写真図版26）

238は土師器鍋である。体部はほぼ直立し、口縁部は内傾する。口縁端部は丸味を持ち、口縁部外面には段状の鍔を持つ。口縁部内外面に強いヨコナデ調整を加え、体部内外面にはヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。播磨型Ⅱ類で16世紀中頃～後半代に比定される。

SK153U（図版17　写真図版26）

239はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。口縁部から体部内外面に回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。240はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を加え、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。241はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は僅かに内彎気味に、緩やかに外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を、体部内外面には回転ナデ調整をそれぞれ施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。242はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。口縁部から体部内外面に回転ナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は灰黄色を呈する。243はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に緩やかに外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を、体部内外面には回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。244はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部から体部内外面は回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で色調は浅黄橙色を呈する。245は青磁碗である。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。体部内面は型押しで花弁文を施文し、内外面とも青磁釉を施釉して、明緑灰色に発色する。龍泉窯系青磁と考えられる。246は土錘である。棒状のものに粘土紐を巻きつけて成形している。両端とも欠損する。外面にはナデ調整を加える。焼成は良好で、色調は灰黄褐色を呈する。

SE304U（図版17　写真図版26）

247は非ロクロ成形の土師器皿である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。248は瓦器椀である。器壁は全体に薄く、体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。249は青磁碗である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。内外面とも青磁釉を施釉しオリーブ灰色に発色する。龍泉窯系青磁と考えられる。

３区ピット（図版17　写真図版26）

250は非ロクロ成形の土師器皿である。器壁は比較的薄く、体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する（P338U出土）。251は非ロクロ成形の土師器皿である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。内外面ともヨコナデ調整を施し、焼成は良好で、色調は灰白色を呈する（P339U出土）。

SD402U（図版17　写真図版26）

252は無釉陶器擂鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施し、体部内面に８条１単位の櫛描きの擂目を施文する。焼成は堅緻で、色調は褐灰色を呈する。備前焼Ⅳ期相当で15世紀代に比定される。253は無釉陶器鉢の口縁部片である。口縁部は上下に拡張して縁帯を作り、１箇所を捻って片口を作り出す。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。備前焼Ⅳ期相当で15世紀代に比定される。254は土師器鍋である。体部はほぼ直立し、口縁部外面に強いナデで段状の鍔を作り出す。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を、体部内外面にはヨコナデ調整をそれぞれ施す。さらに体部内面にはヨコ方向のハケ目調整が見られる。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。播磨型Ⅱ類相当で16世紀中頃～後半代に比定される。

SD415U（図版17　写真図版26）

255は非ロクロ成形の土師器皿である。器壁は非常に薄く体部は緩やかに外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。256は無釉陶器壺である。頸部は直立し口縁部は小さい玉縁状に肥厚する。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は明オリーブ灰色に発色する。外面に胡麻状の灰被りが見られる。備前焼と考えられる。

SK401U（図版17　写真図版26・27）

257はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、底部と体部の境は不明瞭である。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部から体部内外面に回転ナデ調整を施し、底部外面に僅かに糸切痕が観察される。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。258は無釉陶器壺である。頸部は短く直立し、口縁端部は小さい玉縁状に肥厚する。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施す。体部外面に灰釉が附着する。焼成は堅緻で色調はにぶい赤褐色を呈する。259は無釉陶器擂鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部の１箇所を捻って片口を作り出す。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を加え、体部内面に櫛描きの擂目を施文する。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。備前焼Ⅳ期相当で15世紀代に比定される。260は無釉陶器擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に沈線が２条巡る。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施し、体部内面に６条１単位の擂目を施文する。焼成はややあまく、色調は明褐灰色を呈する。備前焼Ⅴ期相当で16世紀代に比定される。261は無釉陶器擂鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して縁帯をつくる。口縁部外面に凹線が２条巡る。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施し、体部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。体部内面に８条１単位の櫛描きの擂目を施文する。焼成は堅緻で、色調はにぶい赤褐色を呈する。堺・明石産擂鉢で18世紀代の製品である。262は染付磁器碗である。器壁は全体に厚い。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内外面とも簡易な草花文を描く。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で18世紀後半代に比定される。263は青磁碗である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。体部外面に線描きの蓮弁文を施文し、内外面とも青磁釉を施釉する。色調は明オリーブ灰色に発色する。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗で16世紀代に比定される。264は巴文軒丸瓦である。焼成は堅緻で、灰白色に発色する。

SK407U（図版17　写真図版27）

265はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部から体部内外面に回転ナデ調整を施す。底部外面に僅かに糸切痕が認められる。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

４区ピット（図版17　写真図版27）

266はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に緩やかに外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面には糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する（P412U出土）。267は非ロクロ成形の土師器皿である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。口縁部から体部内外面にヨコナデ調整を施す。焼成は良好で色調は灰白色を呈する（P423U出土）。268はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面には糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する（P403U出土）。269はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部から体部内外面には回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する（P432U出土）。

270は非ロクロ成形の土師器皿である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は若干内側に引き出す。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を、体部内外面にはナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する（P454U出土）。271は非ロクロ成形の土師器皿である。体部は直線的に外上方に延び口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内外面には強いヨコナデ調整、体部内外面にはナデ調整を施す。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する（P454U出土）。272は無釉陶器鍋である。体部は内彎し口縁部は内傾する。口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。粘土紐巻き上げ成形で、口縁部内外面に強いヨコナデ調整を施す。口縁部から体部内面にはヨコ方向のハケ目調整を施す。焼成は堅緻で、色調は褐灰色を呈する（P494U出土）。273は土製の鋳型片と考えられる。色調は黄灰色を呈する（P464U出土）。

４区包含層（図版18　写真図版28）

274は非ロクロ成形の土師器皿である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。口縁部から体部内外面にヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。275は非ロクロ成形の土師器皿である。体部は若干外反気味に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。口縁部内外面には強いヨコナデ調整、体部内外面にはヨコナデ調整をそれぞれ施す。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。276はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は緩やかに外上方に延びる。底部外面に糸切痕が見られる。焼成はあまく、色調は灰白色を呈する。277は土師器皿の底部である。278は台付杯である。279は土師器鍋である。口縁部は僅かに内傾し、口縁部外面に断面三角形状の鍔を貼り付ける。口縁部内外面に強いヨコナデ調整を施し、体部内面にはヨコ方向のハケ目調整を加える。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。播磨型ＩＡ類相当で15世紀前半代に比定される。280は土師器鍋である。体部は内彎し、口縁部は内傾する。口縁端部は外上方につまみ出す。口縁部外面に段状の鍔を持つ。粘土紐巻き上げ成形で口縁部内外面に強いヨコナデ調整を施す。口縁部から体部内面にはナデ調整を施し、体部外面にはヨコ方向の平行叩き目が残る。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。播磨型Ⅱ類相当で、16世紀中頃～後半代に比定される。281は土師器鍋である。体部は内彎し、口縁端部は外上方につまみ出す。口縁部外面に断面三角形状の退化した鍔を貼り付ける。口縁部内外面に強いヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。播磨型ＩＣ類相当で15世紀後半～16世紀初頭に比定される。282は瓦器椀である。断面台形状の低い貼り付け高台を持ち、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。体部外面は指おさえの後、ナデ調整、体部内面はヘラミガキ調整を加え、暗文が残る。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。283は須恵器鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は玉縁状に肥厚する。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を、体部内外面にはナデ調整をそれぞれ施す。焼成はあまく、色調は褐灰色を呈する。284は無釉陶器鉢である。口縁部内外面には強い回転ナデ調整が、体部内外面には回転ナデ調整がそれぞれ施される。口縁部外面に胡麻状の灰被りが見られる。焼成は堅緻で、色調は褐灰色を呈する。備前焼Ⅳ期相当で15世紀代に比定される。285は無釉陶器甕である。頸部は短く直立し、口縁部は断面楕円形状に肥厚する。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施し、体部外面には灰釉が附着する。焼成は堅緻で、色調は暗赤灰色を呈する。備前焼Ⅳ期相当で15世紀代に比定される。286は青磁碗である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。外面は片切彫りで蓮弁文を施文し、内外面とも青磁釉を施釉する。色調はオリーブ灰色を呈する。龍泉窯系青磁蓮弁文碗で13世紀代に比定される。287は白磁碗である。高台は浅く削り出し、底部の器壁は厚い。底部内面に透明釉を施釉し灰白色に発色する。底部外面は露胎である。横田・森田分類白磁碗Ⅳ類で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

⑵　**石器**（図版18　写真図版29）

石器および石製品は３点出土した。

SK124Uからは石臼S21が出土した。上臼の一部で、直径20㎝、高さ３㎝以上を測る。臼の目は八分画で各分画に10溝入れていると思われるが、７溝残る。回転の擦痕が明瞭に残る。もの入れの直径は約３㎝を測る。P493Uからは石鏃S23が出土した。サヌカイト製の凹基無茎式石鏃である。基部の抉りは浅い。二次加工は表裏から行う。包含層からは石臼S22が出土した。下臼の皿部である。直径29㎝、高さ4.2㎝以上、皿の深さは1.6㎝を測る。

⑶**金属器**（図版18　写真図版29）

金属器は４点出土した。

SK186Uからは寛永通寶M21が出土した。直径2.4㎝を測る。SK153Uからは不明意鉄製品M25が出土した。断面形が山形の鉄製品で、先端を欠く。SK401Uからは青銅製品の一部M26が出土した。柄を挿入する部分のみ残り、本体を欠いている。内径は1.7㎝を測り、1.5㎜の目釘穴が存在する。ST156Uからは釘M23・M24が出土した。いずれも、頭部および先端を欠き、断面の一辺は４㎜である。包含層からは刀子M22が出土した。鋒部分で、幅1.3㎝、背の厚さ３㎜を測る。

４．小結

今回の調査区では、上下２層の遺構面を調査し、B・C区において高い密度の遺構分布が確認した。これらの遺構群は、重複が顕著な柱穴を中心としており、数棟以上の掘立柱建物跡が重複して存在したことは明らかであるが、調査区内での検討からは建物跡を復原することはできなかった。溝・土坑・墓を検出し、当該時期の集落の中でも中枢部と考えられる。西側は水田面が伴う。出土遺物は、13世紀から16世紀の遺物が中心である。

上層は土坑と溝が中心で、18世紀から19世紀前半代の遺物が中心である。西側は水田面が伴う。

遺物は12世紀から19世紀にかけて幅広く出土しており、長期にわたって継続に集落である。

第３節　隅田遺跡２区の調査成果

１．２区の概要（図版19　写真図版30）

座標Y軸の20mの単位ごとに地区を設定し、東側から西に向ってA・Bと呼称した。

層序は圃場整備に関連する道路新設のため、耕作土を取り除いて、盛土を行っており、約50㎝～80㎝の厚みがある。盛土の下に旧耕作土の一部と床土があり、床土の下に、古い耕作土が堆積している。遺構は盛土の下、約40㎝で検出した。

隅田遺跡２区では、溝を検出したのみである。

２．遺構

⑴**溝**

SD201U～SD203U（図版19）

検出状況　調査区南東隅から北西部において検出した。SD201UをSD202U・SD203Uが切っている。

概　　要　調査区南東隅では南からSD201U・SD202U・SD203Uの順で並んでいる。SD201Uは直線的に西北西に伸び、西端で屈曲して北に向かっている。幅80㎝～55㎝、深さ15㎝を測り、断面形は浅いU字形である。SD202UとSD203Uは調査区の南東隅から南西部に湾曲して流れている。溝の護岸には杭が打ち込まれており、杭列の痕跡を検出した。幅1.0m前後、深さ15㎝を測り、断面形は浅いU字形である。埋土は上層が黄灰色の極細砂から細砂、下層が黒褐色土のシルト質極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

３．遺物

⑴　土器（図版20　写真図版31）

包含層

288は縄文土器である。拡張した口縁部に沈線を施文する縁帯文土器である。289は土師器杯もしくは皿の底部片である。器面は著しく摩滅するが、底部外面に糸切痕が残る。焼成はややあまく、色調は橙色を呈する。290は土師器鍋である。体部は内彎し口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸味を持つ。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整を施す。口縁部から体部外面は指おさえの後、ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。291は須恵器鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。口縁部外面に重ね焼き痕が残る。東播系須恵器で13世紀代に比定される。292は須恵器鉢である。体部は直線的に外上方に延び口縁端部は斜め方向に切る。内外面とも強い回転ナデ調整を加える。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。口縁部外面に重ね焼き痕が残る。東播系須恵器で12世紀代に比定される。293は青磁碗である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。外面に浅いヘラ彫りで雷文帯を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、明オリーブ灰色に発色する。龍泉窯系青磁雷文帯碗で15世紀代に比定される。294は土錘である。全体の1/3程度が残存する。棒状のものに粘土紐を巻き付けて成形する。外面にナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。

⑵　石器（図版20　写真図版31）

包含層から出土のS24は片岩製の石包丁で、表面は自然面を残す。側縁に加工を施し、刃部を作り出している。

⑶　金属器（図版20　写真図版31）

包含層から釘M27・M28が出土している。M27は頭部を半円形に作り出しており、脚部の断面形は長方形である。先端は折れ曲がっている。M28は頭部を欠く。断面は一辺４㎜である。

４．小結

遺構面を１面調査した。検出した遺構は溝３条のみである。時期は明確ではないが、溝は水田に伴うものと考えられ、以後継続して水田が作られている。

遺物は縄文時代後期の土器が出土しており、注意を要する。

第５章　竹ノ鼻遺跡の発掘調査成果

第１節　調査の概要

１．竹ノ鼻遺跡の立地

竹ノ鼻遺跡は、鳥飼川北岸の扇状地に立地し、北東から南西方向に向かって傾斜する。標高は11.2m～13.0mを測る。

２．調査区の呼称

本発掘調査対象地は、圃場整備事業の実施により整然と農道と水路が整備されている。したがって必然的に調査区は水路および農道によって区切られることになった。このため農道を境に東側を１区、西側を２区と呼称した。

第２節　竹ノ鼻遺跡１区の調査成果

１．１区の概要（図版21・22　写真図版32・33）

座標Y軸の20mの単位ごとに地区を設定し、東側から西に向ってA～Eと呼称した。

層序は圃場整備に関連する道路新設のため、耕作土を取り除いて、盛土を行っており、約20㎝～50㎝の厚みがある。盛土の下に旧耕作土の一部と床土があり、床土の下に古い耕作土が堆積している。土坑や溝などの下層の遺構は盛土の下、約30㎝～70㎝で検出した。

検出した遺構は柵１基、柱穴26基、溝２条、土坑７基である。

２．遺構

⑴　柵

SA151T（図版22）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、北西側は調査区外に延びている。

概　　要　方位を北から52°東に振る柱穴列である。東西２間（4.2m）以上の規模で、柱間は2.1mである。埋土は灰黄褐色の細砂から中砂もしくは、黒褐色のシルト質極細砂が堆積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

⑵　溝

SD101T（図版22　写真図版33）

検出状況　調査区東端のB区に位置し、北東側および南西側、両方共に調査区外に延びている。

概　　要　北東から南西に流れる自然流路である。幅2.5m～3.0m、深さ最大30㎝を測る。埋土は流れた堆積状況を示している。流路の底には偶蹄類の足跡痕跡多数見られ、鉄分が沈着している。

出土遺物　土師器鍋301と青磁碗302と削器S31Tが出土した。

SD103T（図版22　写真図版33）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、SD101Tの西側にあり、SK102Tに切られている。

概　　要　幅25㎝、深さ４㎝、全長4.1mを測る直線的な溝である。方位は北から85°西に振る。埋土は黄褐色の細砂から中砂で、鉄分を含む。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD126T（図版22）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、SD103Tの西側にある。

概　　要　幅15㎝、深さ３㎝、全長2.8mを測る東西方向の溝である。埋土は暗灰黄色の極細砂から細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

⑶　土坑

SK102T（図版23）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、SD101Tの西側、溝SD103Tの南側に接している。

概　　要　平面形は隅丸方形で、断面形は浅いU字形である。規模は東西約1.10m、南北0.95m、深さ約５㎝を測る。埋土は暗灰褐色の細砂～中砂で、オリーブ黒色のシルトが混在している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK104T（写真図版33）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、SD101Tの西側にあり、溝SD103Tに切られている。

概　　要　平面形は楕円形で、断面形は浅いU字形である。規模は南北約1.15m、東西0.70m、深さ約12㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色の細砂から中砂で、鉄分を含んでいる。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK105T（図版23）

検出状況　調査区東半部のB区に位置し、SD103Tの西側に接している。

概　　要　平面形は楕円形で、断面形は浅いU字形である。規模は東西約1.15m、南北0.70m、深さ約５㎝を測る。埋土は暗灰色の極細砂である。

出土遺物　土師器鍋303が出土している。

SK108T（図版23　写真図版33）

検出状況　調査区中央部のC区に位置する。

概　　要　平面形は突出部のある楕円形で、断面形は浅いU字形である。規模は長径約80㎝、深さ約20㎝を測る。埋土は２層あり、上層は灰黄褐色のシルト質極細砂、下層は暗黄褐色のシルト質極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK106T（図版23　写真図版33）

検出状況　調査区中央部のC区に位置し、土坑SK108Tの北西側にある。

概　　要　平面形は円形で、断面形は浅いU字形である。規模は直径約0.65m、深さ約10㎝を測る。埋土は３層あり、上層は灰黄褐色の極細砂、中層は灰黄褐色の細砂から粗砂、下層は黒褐色の極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK107T（図版23　写真図版33）

検出状況　調査区中央部のC区に位置し、土坑SK106Tの北西側にある。北側は調査区外に延びている。

概　　要　平面形は円形で、断面形はU字形である。規模は直径約1.1m、深さ約20㎝を測る。埋土は上

層が鉄分を含むにぶい黄褐色のシルト質極細砂で、中層は灰黄褐色の細砂から粗砂で、下層はマンガンを含む黒褐色の極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SK109T（図版23）

検出状況　調査区中央部のD区に位置し、土坑SK106Tの南西側にある。南側は調査区外に延びる。

概　　要　平面形は円形で、断面形はU字形である。規模は直径約55㎝、深さ約18㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色の極細砂で、上面付近に指頭大のマンガンが集積している。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

３．遺物

⑴　土器

SD101T（図版24　写真図版34）

301は土師器鍋である。口縁部は僅かに内傾し、口縁部外面に断面楕円形状の退化した鍔を貼り付ける。内外面ともヨコナデ調整を施すが、器面の摩滅が著しい。焼成はあまく、色調は灰褐色を呈する。302は青磁碗の底部である。底部の器壁は非常に厚く、底部外面は露胎である。龍泉窯系青磁と考えられる。

SK105T（図版24　写真図版34）

303は土師器鍋である。口縁部は若干内傾し、口縁部外面に退化した断面三角形状の鍔をナデて作り出す。口縁端部はナデて上方につまみ上げる。口縁部内外面に強いヨコナデ調整を施し、体部内面にはナデ調整を加える。体部外面は斜め方向の平行叩き目が残る。焼成はややあまく、色調は浅黄橙色を呈する。播磨型Ⅱ類相当で16世紀中頃～後半代に比定される。

ピット（図版24　写真図版34）

304はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部内外面には回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する（P115T出土）。305はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に緩やかに斜め上方に延びる。体部内外面には回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。（P135T出土）。

包含層（図版24　写真図版34・35）

306はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は僅かに内彎気味に短く外上方に延びる。口縁部から体部内外面には回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で色調は浅黄橙色を呈する。307はロクロ成形の皿もしくは杯の底部片である。平底で底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。308もロクロ成形の皿もしくは杯である。平底で体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部内外面にはナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。309は土師器杯と考えられる。断面台形状の短い高台を貼り付ける。内外面ともナデ調整を施す。焼成はあまく、色調は橙色を呈する。310は土師器壺の底部と考えられる。底部の器壁は厚く内外面ともナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は灰褐色を呈する。311・312はいずれも足鍋の脚部である。体部外面には縦方向のナデ調整、内面にはハケ目調整を施す。焼成は良好で、色調はいずれも橙色を呈する。313は須恵器片である。314は須恵器鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は小さい玉縁状に肥厚し、斜め上方につまみ上げる。315は土錘である。棒状のも

のに粘土を巻きつけて成形し、端部は若干欠落する。外面にナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

⑵　**石器**（図版24　写真図版35）

S31はサヌカイト製の削器で端部に自然面を残している。表面の一辺のみを加工して片刃を作っている。S32はサヌカイト製の二次加工のある剥片である。

⑶　**金属器**（図版24　写真図版35）

M31は釣針の形状を呈する青銅製品であるが、用途は不明である。

４．小結

遺構面を１面調査した。検出した遺構は柵１基と自然流路１条、溝２条、土坑７基である。遺構からの遺物は少ない。土坑SK105Tから土師器鍋が出土しており、16世紀に位置付けられる。

16世紀以降の時期は水田化されていたと考えられ、以後継続して水田が作られている。遺物は弥生時代から16世紀にかけて幅広く出土している。

第３節　竹ノ鼻遺跡２区の調査成果

１．２区の概要（図版25～27　写真図版 36・37・39）

竹ノ鼻遺跡２区は延長66mあり、座標Y軸の20mの単位ごとに地区を設定し、東側から西に向ってA～Gと呼称した。

層序は圃場整備に関連する道路新設のため、耕作土を取り除いて、盛土を行っており、約35㎝～1.0mの厚みがある。盛土の下に旧耕作土の一部と床土があり､床土の下に古い耕作土が堆積している。なお、下層には上層と異なった位置に大畦畔や段が存在し、２～３回大きく水田を作り変えている可能性がある。掘立柱建物や溝の下層の遺構は盛土の下、約50mで検出した。上層には圃場整備直前の水路に切られる水路が存在していたが、十分な記録は取れていない。

遺構は掘立柱建物１棟、柱穴５基と溝４条を調査した。他に、上層で溝を２条検出した。

２．遺構

⑴　**掘立柱建物**

SB201T（図版28　写真図版 37～39）

検出状況　調査区の中央部のD区において検出した。建物の北辺は調査区北壁と接しているため、北に延びる可能性がある。

概　　要　南北方位が北から西に１°振る総柱建物跡である。東西４間（5.5m）、南北２間（3.5m）の規模である。建物の柱間は、東西１間1.45m・1.10m、南北１間1.75mである。

柱　　穴　円形と隅丸方形を基本とし掘形の一辺15㎝～25㎝、深さは約３㎝～35㎝である。埋土は黄灰色のシルト質極細砂から細砂に黒褐あるいは褐灰色の極細砂から細砂ブロックが混っている。

出土遺物　柱穴P212Tからは瓦器椀316が出土している。

⑵　溝

SD225T（図版26）

検出状況　調査区東半部のC区において検出した。南北とも調査区外に延びている。

概　　要　調査区に直交する南北方向の溝で、中央部で途切れている。東側と西側の段差部分に存在し、幅30㎝、深さ35㎝、全長9.8m以上を測る。方位は北から西に２°振る。埋土は灰黄色極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD203T・SD204T（図版27・28　写真図版39）

検出状況　調査区西半部のF区において検出した。南北とも調査区外に延びている。

概　　要　調査区に直交する南北方向の溝である。東側にSD203T、西側にSD204Tが並行し、中央部分で連結している。SD203Tは幅40㎝、深さ８㎝。SD204Tは幅35㎝、深さ７㎝。断面形はいずれも浅いU字形を呈する。全長はいずれも9.6m以上を測り、方位は北から西に４°振る。埋土はSD203T・SD204Tともに、埋土は褐灰色の極細砂～細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD202T（図版27・28　写真図版39）

検出状況　調査区西端のG区において検出した。南北とも調査区外に延びている。SD203T・SD204Tの西側に位置する。

概　　要　北から南に流れるV字形の直線的な溝である。幅60㎝、深さ20㎝、全長10m以上を測る。方位は北から東に８°振る。埋土は黒褐色シルト質極細砂である。

出土遺物　図示できる出土遺物はない。

SD231T

検出状況　調査区中央部のE区上層において検出した。溝SD203Tの東側に平行している。南北共に調査区外に延びている。

概　　要　北から南に流れる幅1.0m程度、深さ60㎝程度のU字形の水路である。埋土はにぶい黄褐色細砂から極細砂である。

出土遺物　土師器皿322、須恵器坏323、施釉陶器秉燭324が出土している。

SD232T

検出状況　調査区中央部のE区上層において検出した。溝SD252Tの東側に直行して合流している。

概　　要　東から西に流れる幅1.0m程度、深さ60㎝程度のU字形の水路である。埋土はにぶい黄褐色細砂から極細砂である。

出土遺物　須恵器鉢317・杯320、無釉陶器壺321、染付磁器碗318、染付青磁碗319が出土している。

３．遺物

⑴　土器

SB210TP212T（図版29　写真図版40）

316は瓦器椀である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施し、口縁部内面には横方向のミガキ調整を施す。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。

SD232T（図版29　写真図版40）

317は須恵器鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は小さい玉縁状に肥厚し、上方に引

き上げる。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。東播系須恵器で13世紀代に比定される。318は染付磁器碗である。高台は断面台形状で小さく低い。体部は若干内彎して外上方に延びる。外面に菊花文を施文し、内面にはくずれたコンニャク印判で五弁花文を施文する。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で18世紀後半代に比定される。319は染付青磁碗である。高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。外面は青磁釉を施釉しオリーブ灰色に発色する。内面はコンニャク印判で五弁花文を施文する。肥前系で18世紀代に比定される。320は須恵器杯である。平底で断面台形状の低い高台を貼り付ける。内面は回転ナデ調整、底部外面にはヘラケズリ痕が残る。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。321は無釉陶器鉢である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。体部内外面に回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整である。焼成は比較的堅緻で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

SD231T（図版29　写真図版40・42）

322はロクロ成形の土師器皿である。器壁は全体に非常に薄い。平底で体部は僅かに内彎気味に短く外上方に延びる。口縁部から体部内外面に回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で、色調はにぶい浅黄橙色を呈する。323は須恵器杯である。平底で断面台形状の低い高台を貼り付ける。内面は回転ナデ調整を施し、底部外面にはヘラケズリ痕が残る。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。324は施釉陶器の秉燭である。平底で脚部は大きく外反して外上方に延びる。口縁部は欠落し、体部内面には凸帯が１条巡る。凸帯には抉りが１箇所入る。外面には灰釉を施釉し、色調は灰オリーブ色に発色する。底部外面･体部内面は露胎である。信楽焼と考えられ､19世紀前半代の所産である。

包含層（図版29・30　写真図版４・40・41・42）

土師器　325・326はロクロ成形の土師器皿である。326は器壁は全体に厚い。平底で体部は直線的に短く外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。内外面とも回転ナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は橙色を呈する。327はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部内外面に回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。328は土師器の皿もしくは椀の底部である。平底で体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。

329はロクロ成形の土師器杯である。平底で底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に短く外上方に延びる。体部内外面には回転ナデ調整、底部内面はナデ調整を施す。底部外面は不調整でヘラ起こしの痕が残る。焼成はややあまく、色調は橙色を呈する。330は土師器杯である。平底で体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。口縁部から体部内外面に回転ナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。331は土師器甕である。口縁部は外方にひらき口縁端部は丸味を持つ。口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は黒色を呈する。

瓦器　332は瓦器椀である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。口縁部内外面に強いヨコナデ調整を施し、口縁部内面にヨコ方向のミガキ調整を加える。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。333は瓦器椀である。器壁は比較的薄く、口縁端部は尖り気味に収める。内外面ともヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。334は瓦器椀である。高台は断面台形状で比較的高い。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。外面はナデ調整、内面はミガキ調整を加える。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。335は瓦器椀である。高台は断面三角形状で低い。内外面ともナデ調整を

施し、底部内面にヘラ描きの斜格子状文を施文する。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。

瓦質土器　336は瓦質土器火鉢片である。外面に型押しで亀甲文を施文する。焼成は良好で色調は暗灰色を呈する。奈良火鉢と考えられる。

須恵器　337は須恵器皿である。平底で体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を、体部内外面には回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成はややあまく、色調は灰色を呈する。338は須恵器椀である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味を持つ。内外面とも回転ナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。東播系と考えられる。339は須恵器鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。内外面とも回転ナデ調整を施す。口縁部外面に重ね焼き痕が見られる。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。東播系須恵器で12世紀後半代に比定される。340は須恵器鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部内外面に強い回転ナデ調整、体部内外面に回転ナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は灰白色を呈する。東播系須恵器で13世紀後半～14世紀前半代に比定される。341は須恵器鉢である。平底で体部は直線的に外上方に立ち上がる。外面に縦方向のケズリ調整を加え、格子目叩きが残る。内面にはヨコ方向のナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調は黒色を呈する。亀山焼の可能性が考えられる。

無釉陶器　342は無釉陶器擂鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は斜め方向に切る。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施す。体部外面にはナデ調整、体部内面には８条１単位の櫛描きの擂目を施文する。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。備前焼Ⅲ期相当で、14世紀代に比定される。343は無釉陶器擂鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面に凹線が２条巡る。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施し、体部外面はナデ調整を加える。体部内面には８条１単位の櫛描きの擂目を密に施文する。外面に赤土部を塗布し橙色に発色する。焼成は良好である。堺・明石産で18世紀代の所産である。344は無釉陶器甕である。体部は内彎し、頸部は短く直立する。口縁部は断面T字状を呈する。体部外面には凹線が巡る。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施し、体部内面にはナデ調整を加える。体部外面には赤土部を塗布し黒褐色に発色する。焼成はややあまい。丹波焼と考えられる。345は無釉陶器火入れである。平底で体部は直立し、口縁端部は丸味を持つ。口縁部から体部内外面には回転ナデ調整を施す。底部内面はナデ調整を施し、体部外面には赤土部を塗布して黒褐色に発色する。口縁部には敲打痕が認められる。丹波焼と考えられる。

施釉陶器　346は施釉陶器椀である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内外面とも灰釉を施釉し浅黄色に発色する。瀬戸・美濃系灰釉陶器平椀と考えられる。347は施釉陶器椀である。高台は断面台形状で幅が広く、比較的低い。底部の器壁は非常に厚い。内外面とも回転ナデ調整を施し、内外面に灰釉を施釉する。高台裏は露胎で墨書が見られる。近世の美濃焼の可能性が考えられる。348は施釉陶器皿である。高台は浅く削り出し、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内外面とも灰釉を施釉し、外面の高台脇以下は露胎である。底部内面に砂目跡が２ヶ所認められる。肥前系唐津皿で17世紀前半代に比定される。349は施釉陶器皿である。高台は浅く削り出し、体部は緩やかに外上方に立ち上がる。内外面とも灰釉を施釉し、外面の高台脇以下は露胎である。底部内面に胎土目跡が２ヶ所認められる。肥前系唐津皿で17世紀初頭に比定される。350は施釉陶器皿である。高台は低い削り出し高台で、高台裏に兎巾が残る。底部の器壁は厚い。内外面とも回転ナデ調整を施し、内外面に灰釉を施釉して灰オリーブ色に発色する。外面の高台脇以下は露胎である。肥前系唐津皿で17世紀

代前半代に比定される。

白磁　351は白磁四耳壺である。体部は大きく内彎し、肩部に横耳を貼り付ける。内外面とも透明釉を施釉し、明オリーブ灰色に発色する。華南産白磁で12世紀後半～13世紀代に比定される。

青白磁　352は青白磁梅瓶の胴部片である。器壁は全体に薄い。外面にヘラ彫りの渦巻き文を施文し、内外面とも透明釉を施釉する。景徳鎮窯産の青白磁で13世紀代に比定される。

青磁　353は青磁碗である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。体部外面に片切彫りで鎬蓮弁文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、明緑灰色に発色する。龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗で13世紀前半代の製品である。354は青磁碗である。高台は断面台形状で低い。底部の器壁は非常に厚い。内面の底部と体部の境に低い段を持つ。内外面とも青磁釉を施釉し灰オリーブ色に発色する。高台裏は露胎である。龍泉窯系青磁と考えられる。355は青磁碗である。高台は断面台形状を呈し、底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。内外面とも青磁釉を施釉し、灰暗緑色に発色する。高台裏は露胎である。龍泉窯系青磁である。

青花磁器　356は青花磁器皿である。碁笥底で体部は緩やかに外上方に立ち上がる。外面に鋸歯状文を内面には草花文を施文する。底部外面の釉は蛇の目状にかきとる。内面は灰被りで白濁する。景徳鎮民窯の製品で16世紀代に比定される。

染付磁器　357は染付磁器碗である。高台は断面台形状で比較的高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。外面には呉須で草花文を施文する。肥前系で18世紀後半代に比定される。358は染付磁器碗である。高台は細く比較的高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。外面に馬ノ目文、内面に界線を２条施文する。瀬戸・美濃系で19世紀前半以降の製品である。359は染付磁器碗である。高台は比較的細く高く、体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。内外面とも酸化コバルトで簡易な草花文を施文する。器面に粗い貫入が入る。近代以降の製品と考えられる。360は染付磁器碗である。高台は細く高く、底部の器壁は厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。外面によろけ文・界線１・２条、内面に界線２・１条・斜格子文をそれぞれ施文する。肥前系広東碗で18世紀後半～19世紀前半代に比定される。

土製品　361～364はいずれも土錘である。棒状のものに粘土を巻きつけて成形し、外面をナデ調整する。色調はにぶい黄橙色（361）、浅黄橙色（362・364）、灰白色（363）を呈する。

⑵　**金属器**（図版30　写真図版42）

M32は青銅製の銭貨で、残りが悪いが「□□通寶」が読める。M33は断面が長方形の棒状の鉄製品で、両端を欠いている。

４．小結

上下２層の遺構面を調査した。上層は圃場整備前の水田に伴う水路に切られていた水路で、18世紀から19世紀前半代の遺物が中心である。下層は掘立柱建物１棟と溝４条を検出したが、遺構からの遺物は少ない。掘立柱建物の柱穴から瓦器椀が出土しており、14世紀に位置付けられる。掘立柱建物SB210Tと溝SD203T・SD204T・SD225Tは正方位から１°～４°西偏する方位をもち、同時期性を示唆する。

掘立柱建物SB210T以降の時期は水田化されたと考えられ、以後継続して水田が作られている。

遺物は12世紀から19世紀にかけて幅広く出土しており、周辺に集落の存在が伺える。

第６章　自然科学的調査の成果

第１節　隅田遺跡･竹ノ鼻遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

１．はじめに

津名郡五色町に所在する隅田遺跡､竹ノ鼻遺跡より検出された試料について､加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

測定試料の情報、調製データは第１表のとおりである。試料№1（PLD-15489）は隅田遺跡SK124Uより出土した部位不明炭化材、試料№2（PLD-15490）は隅田遺跡４区トレンチ６より採取された土壌サンプル、試料№3は竹ノ鼻遺跡２区トレンチ10の黒色シルトより採取された土壌サンプルである。

第１表　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前　処　理
PLD-15489	遺跡名：隅田遺跡 遺構： SK124U 試料 No.1	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態： dry	超音波洗浄 酸･アルカリ･酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N,塩酸：1.2N）
PLD-15490	遺跡名：隅田遺跡 調査区４区トレンチ６ 試料 No.2 層位：黒灰色砂質シルト	試料の種類：土壌 状態： dry	湿式篩分　106 μm 酸洗浄（塩酸：1.2N）
PLD-15491	遺跡名：竹ノ鼻遺跡 調査区２区トレンチ10 試料 No.3 層位：黒色シルト	試料の種類：土壌 状態： dry	湿式篩分　106 μm 酸洗浄（塩酸：1.2N）

試料は調製後､加速器質量分析計（パレオ･ラボ､コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

３．結果

第２表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また､付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は､測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：Intcal09）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第２表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-15489 試料No.1	-26.19±0.11	617±20	615±20	1300AD（28.2%）1324AD 1346AD（26.9%）1369AD 1381AD（13.1%）1393AD	1295AD（95.4%）1399AD
PLD-15490 試料No.2	-27.88±0.11	6164±29	6165±30	5207BC（ 8.5%）5192BC 5183BC（21.3%）5144BC 5139BC（25.0%）5091BC 5081BC（13.4%）5058BC	5215BC（95.4%）5028BC
PLD-15491 試料No.3	-24.89±0.16	5212±25	5210±25	4040BC（37.6%）4014BC 4001BC（30.6%）3979BC	4048BC（95.4%）3967BC

４．考察

PLD-15489は、1σ暦年代範囲で1300-1324calAD（28.2%）、1346-1369calAD（26.9%）および1381-1393calAD（13.1%）、2σ暦年代範囲で1295-1399calAD（95.4%）となり、13世紀末～14世紀末の範囲を示した。これは鎌倉時代後期～室町時代前期にあたる。

PLD-15490は、1σ暦年代範囲で5207-5192calBC（8.5%）、5183-5144calBC（21.3%）、5139-5091calBC（25.0%）および5081-5058calBC（13.4%）、2σ暦年代範囲で5215-5028calBC（95.4%）の範囲を示した。これは関東地方の試料を中心にまとめられた縄文土器編年と暦年較正結果との対応関係（小林，2008）を参照すると、縄文時代早期末～前期初頭にあたる。

PLD-15491は、1σ暦年代範囲で4040-4014calBC（37.6%）および4001-3979calBC（30.6%）、2σ暦年代範囲で4048-3967calBC（95.4%）の範囲を示した。これは小林（2008）を参照すると、縄文時代前期中葉～後葉にあたる。

測定値は上述の通りだが、部位不明木材の場合、最外年輪部からの年輪分だけ枯死・伐採年代より古い年代となる（古木効果）。また土壌試料の場合、堆積環境によっては値に幅が出る可能性があり、注意を要する。

（伊藤茂・尾嵜大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展）

参考文献

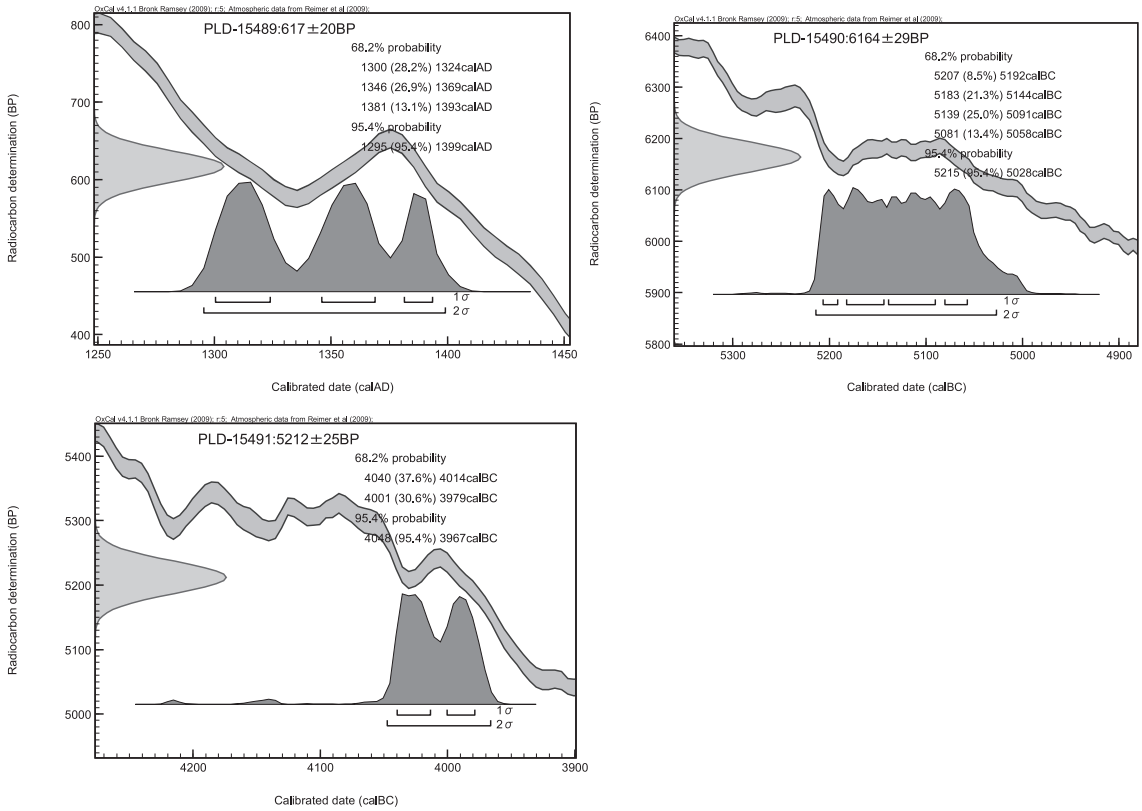
Bronk Ramsey, C.(1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．縄文時代の考古学２－歴史のものさし, 257-269, 同成社.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の^{14}C年代, 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.



第１図　暦年較正結果

第２節　白池遺跡、隅田遺跡および竹ノ鼻遺跡の地形環境

青　木　哲　哉
（立命館大学非常勤講師）

１．はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができ、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の調査区では、地形環境と人間生活の係わりについても考察できるのである。

本稿では、鳥飼川下流部の平野に位置する白池遺跡、隅田遺跡、および竹ノ鼻遺跡の地形環境を明らかにしたい。調査では、空中写真の判読と現地踏査にもとづいて地形を分類するとともに、各遺跡の調査区で堆積物の観察を実施した。地形分類は5,000分の１空中写真を用いて行った。また、堆積物に関しては、遺構検出面より上位のものだけでなく、そこから掘削したトレンチ断面で遺構検出面以深の堆積物を観察した。こうして得られた地形と地質の調査結果に発掘調査の成果を加えて、調査区付近における地形環境の考察を行った。

２．調査区周辺の地形分布

⑴　鳥飼川下流部の地形

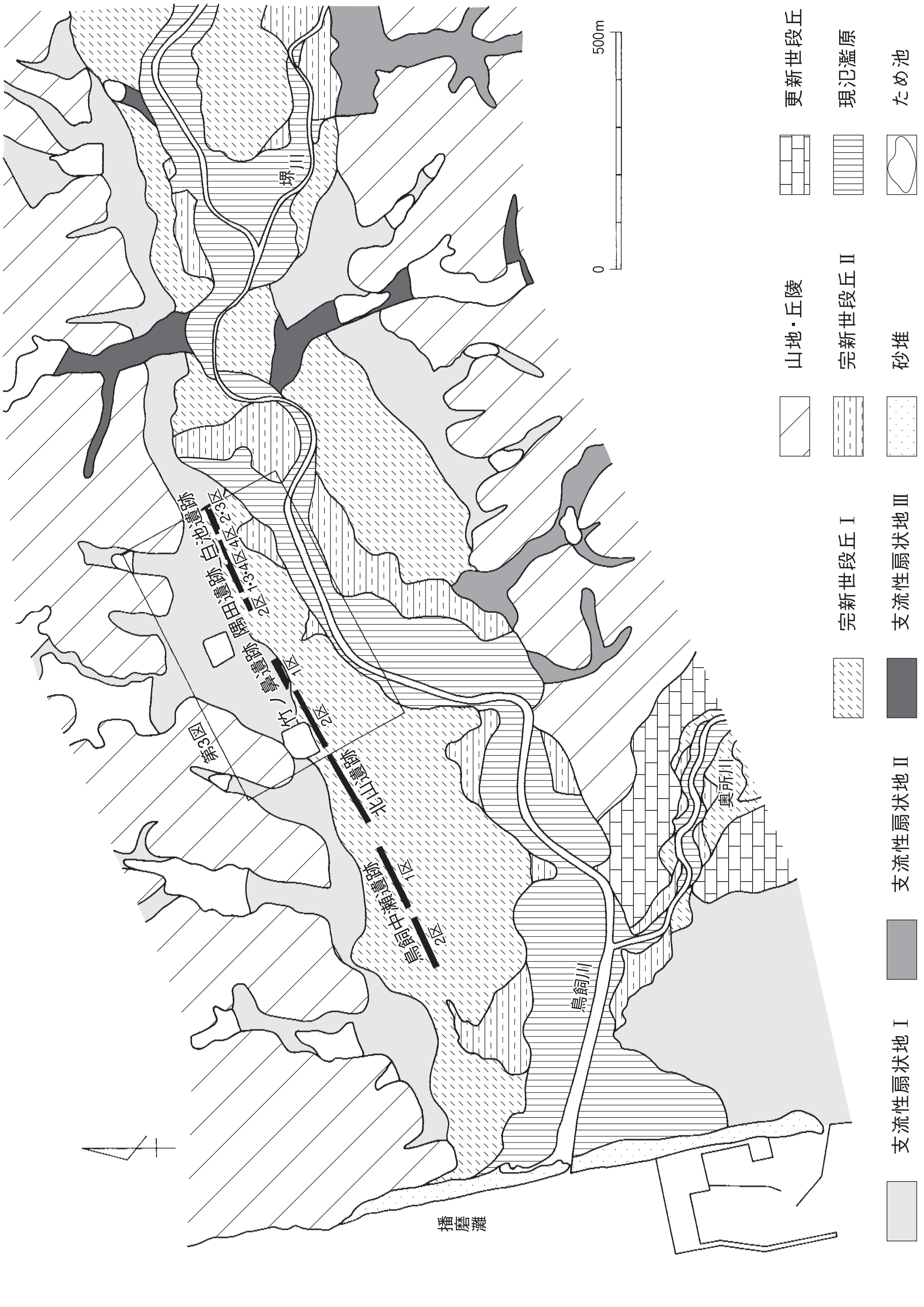
白池遺跡、隅田遺跡、および竹ノ鼻遺跡の調査区は淡路島の西部にみられる鳥飼川下流部の平野に位置する。この平野は、500～600ｍの幅で北北東－西南西方向に延び、その北と南には主に丘陵が広がる。平野を流れる鳥飼川は、やや蛇行しながら途中で堺川や奥所川などを合わせて播磨灘に注ぐ。

こうした鳥飼川下流部の平野には、更新世段丘、完新世段丘、現氾濫原、ならびに支流性扇状地などが認められる（第２図）。完新世段丘は２面存在し、本稿では高位のものを完新世段丘Ⅰ、低位のそれを完新世段丘Ⅱと呼ぶ。また、支流性扇状地は３種類認められ、形成時期の古いものから支流性扇状地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと名付ける。これらのうち、白池遺跡２～４区、隅田遺跡１～４区、および竹ノ鼻遺跡２区は完新世段丘Ⅰに、竹ノ鼻遺跡１区は支流性扇状地に位置する。

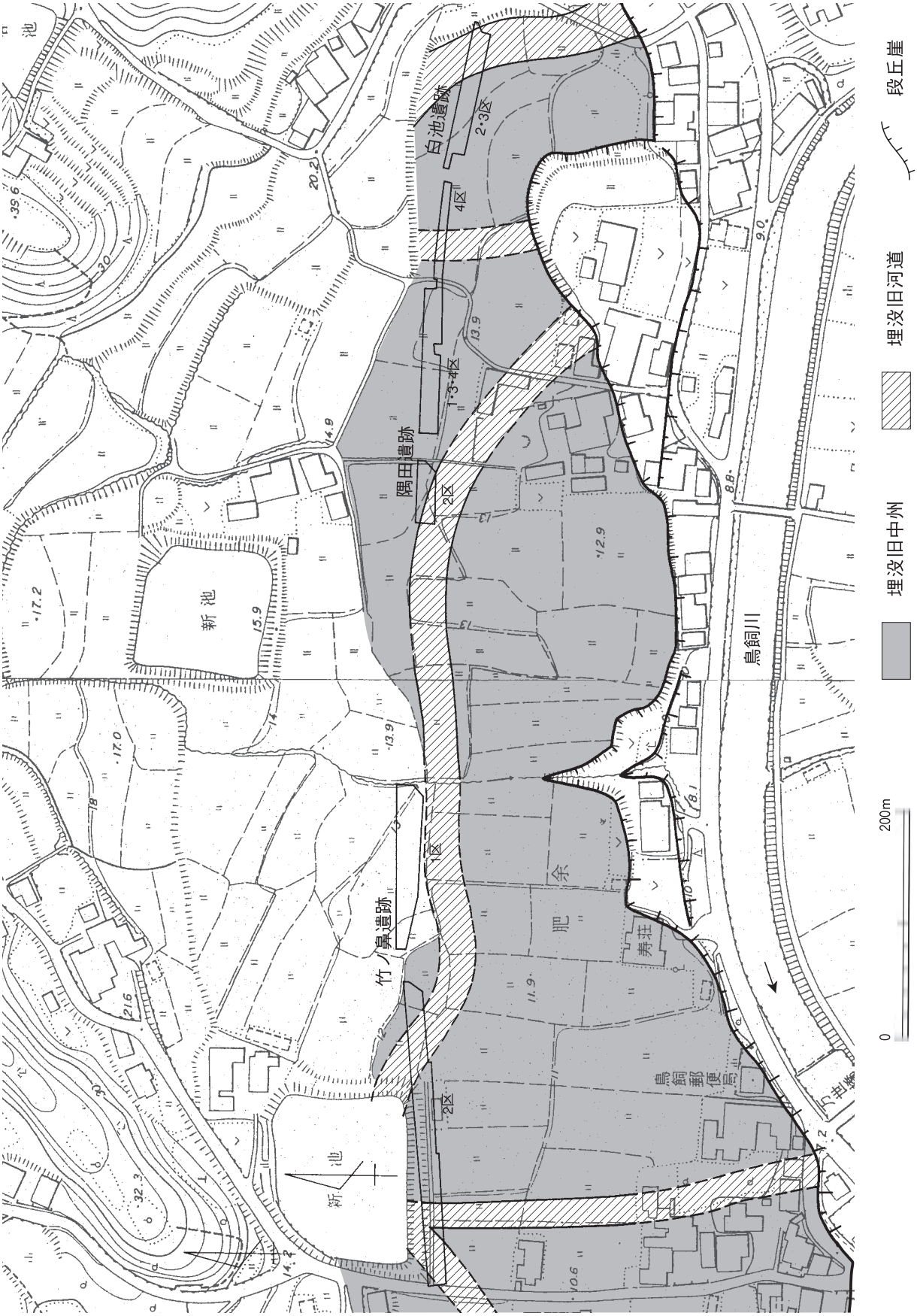
鳥飼川下流部の平野でみられる各地形の特徴は次のとおりである。

〔更新世段丘〕　これは奥所川の流域にだけ認められる。段丘面は奥所川の河床勾配と同様に下流へ比較的急傾斜し、完新世段丘Ⅰと比高およそ１～２ｍの段丘崖で接する。

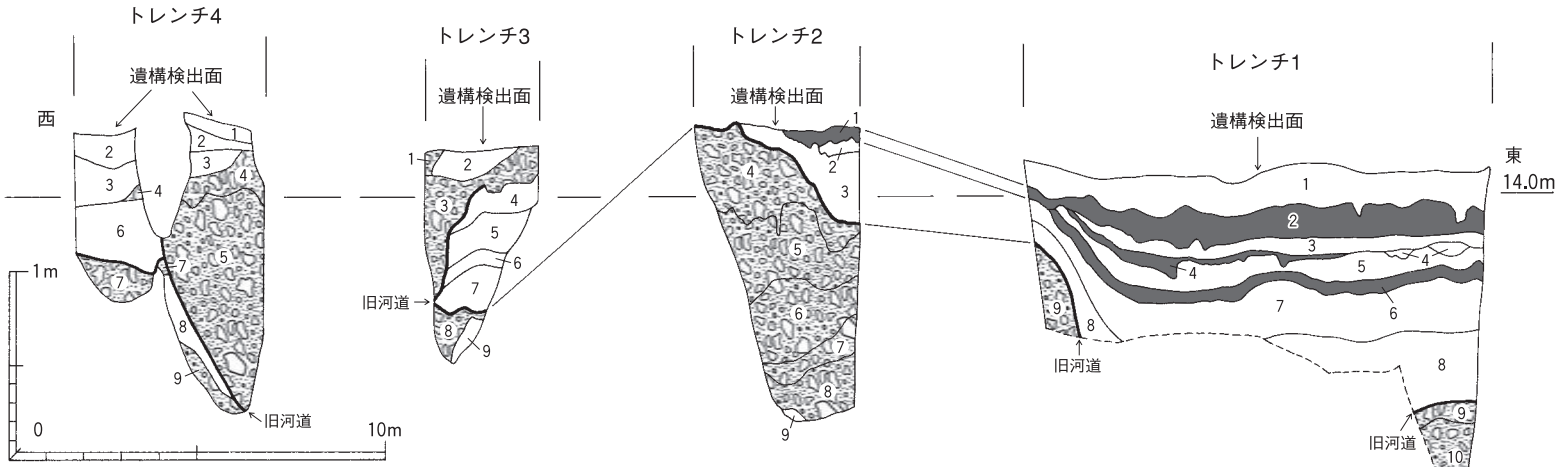
〔完新世段丘〕　完新世段丘Ⅰは最もよく発達する。これは鳥飼川や奥所川などの両岸にやや断続的ながら大きい面積で広がる。段丘面は完新世段丘Ⅱより約１ｍ高い。完新世段丘Ⅱも鳥飼川とその支流沿いにみられる。発達はあまりよくなく、断続的に分布する。段丘崖の比高は50㎝～１ｍである。



第２図　鳥飼川下流部の地形分類図



第３図　調査区付近における完新世段丘Ⅰの微地形



1 暗黄灰色 シルト
2 暗黄灰色 砂質シルト
3 暗黄灰色 シルト
4 暗黄灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
5 暗褐灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
6 黄灰色 シルト
7 暗褐灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
8 緑灰色 シルト
9 暗褐灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体

1 暗黄灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
2 暗黄灰色 シルト
3 暗褐灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
4 暗黄灰色 シルト
5 暗黄灰色 砂質シルト
6 黄灰色 シルト
7 暗黄灰色 砂質シルト
8 暗灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
9 灰色 砂質シルト

1 黒褐色 シルト
2 黄灰色 砂質シルト
3 黄灰色 シルト
4 暗褐色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
5 褐灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
6 褐灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
7 黄灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
8 暗黄灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
9 灰色 砂

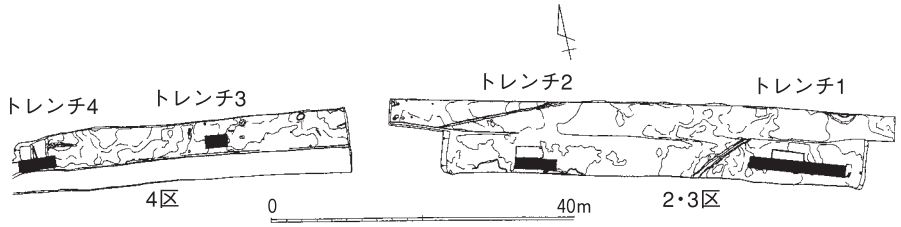
1 灰色 砂質シルト
2 黒褐色 シルト
3 暗黄灰色 シルト
4 黒灰色 シルト
5 黄灰色 シルト
6 黒灰色 シルト
7 黄灰白色 シルト
8 黄灰白色 砂質シルト
9 灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
10 灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体

砂礫・シルト質砂礫

砂

砂質シルト・シルト

黒褐色・黒灰色の砂質シルト・シルト



第４図　白池遺跡２～４区におけるトレンチ断面図

〔現氾濫原〕　これは、鳥飼川やその支流に沿って細長くみられ、比較的連続する。地表は最も低く、鳥飼川や奥所川などの氾濫時には冠水する危険性が高い。

〔支流性扇状地〕　支流性扇状地は、背後の丘陵から堆積物が供給されてできたもので、丘陵を刻む谷の中から麓にかけて認められる。地表傾斜は4.8～7.3％と急で、支流性扇状地Ⅰは完新世段丘Ⅰに、また支流性扇状地Ⅱは完新世段丘Ⅱに、さらに支流性扇状地Ⅲは現氾濫原に傾斜変換線で接する。これらのうち支流性扇状地Ⅰが最も多く分布し、複合扇状地をなすことが多い。

⑵　調査区付近の微地形

白池遺跡２～４区、隅田遺跡１～４区、および竹ノ鼻遺跡２区は完新世段丘Ⅰに、また竹ノ鼻遺跡１区は支流性扇状地Ⅰの扇端に位置する。これらは現海岸線より10～16㎞上流に認められる。白池遺跡２～４区、隅田遺跡１～４区、ならびに竹ノ鼻遺跡２区が位置する完新世段丘Ⅰは下流へ緩やかに傾斜し、北側には支流性扇状地Ⅰが迫っている。60～300ｍ南方には段丘崖がみられ、崖下には断続的に分布する完新世段丘Ⅱと比較的連続する現氾濫原が分布する。

完新世段丘Ⅰは埋没扇状地が段丘化したもので、そこには埋没した旧中州と旧河道が認められる（第３図）。埋没旧中州上には、白池遺跡２・３区の西半部と４区の東半部、隅田遺跡１・３・４区と２区の北東部、および竹ノ鼻遺跡２区の中央部が位置する。これらのうち、隅田遺跡１・３・４区では15～16世紀に建てられた掘立柱建物の柱穴跡が多数検出され、竹ノ鼻遺跡２区の中央部には12世紀後半～13世紀前半の掘立柱建物跡が確認されている。

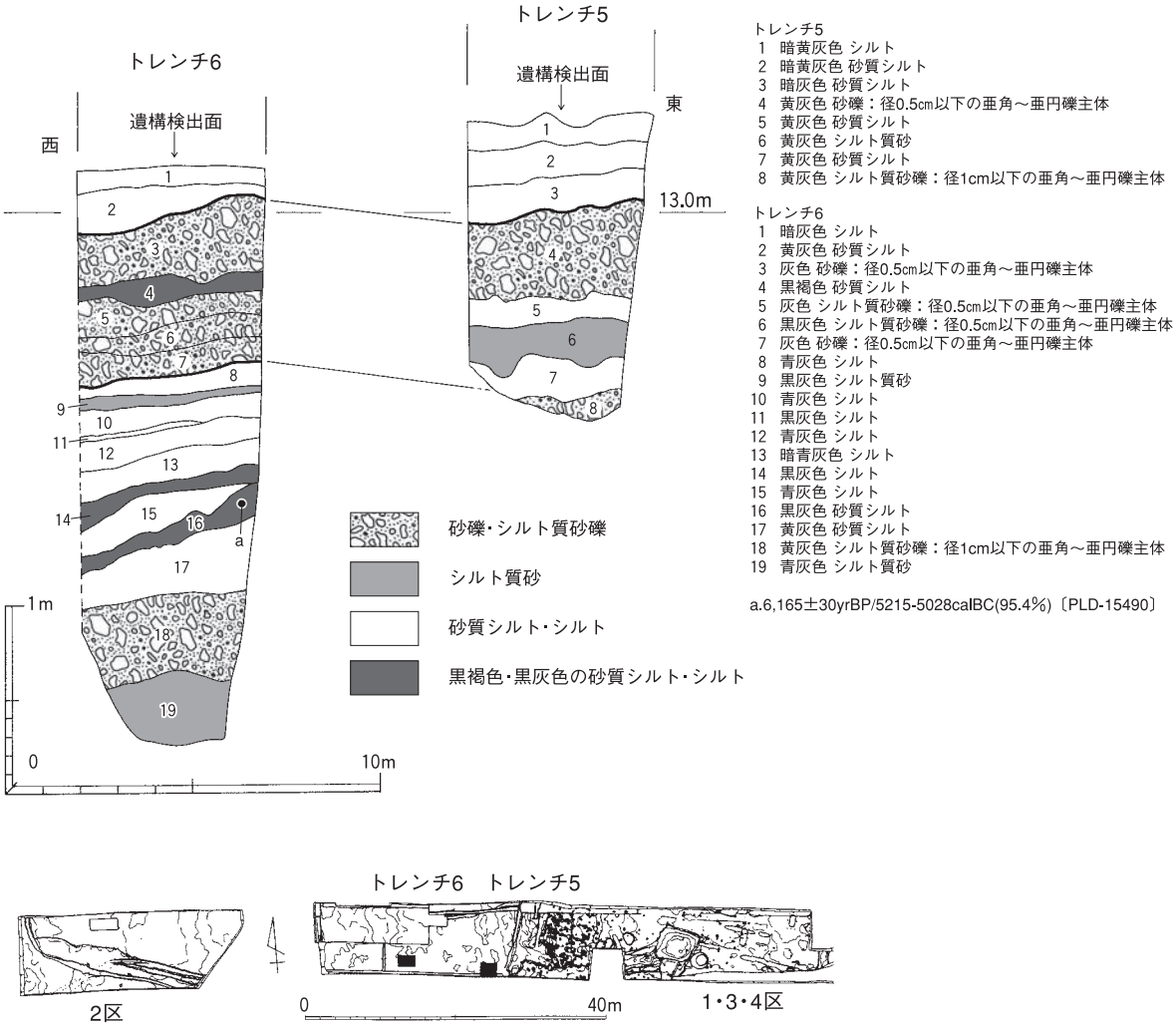
他方、埋没旧河道は白池遺跡２・３区の東部と４区の西部、隅田遺跡２区の南西部、ならびに竹ノ鼻遺跡２区の東部と西部にみられる。中でも白池遺跡２・３区の東部と４区の西部、竹ノ鼻遺跡２区の西部に存在する埋没旧河道は、北側の支流性扇状地Ⅰから連続する支流跡である。また、竹ノ鼻遺跡２区の東部と西端にみられるそれは鳥飼川の流路跡にあたると考えられる。

３．調査区における堆積物の特徴

⑴　白池遺跡２～４区の堆積物

これらの調査区における遺構検出面以深には、大きくみて砂礫とそれを覆う細粒堆積物が認められる（第４図）。砂礫（トレンチ１の堆積物９・10、トレンチ２の堆積物４～８、トレンチ３の堆積物８、およびトレンチ４の堆積物７～９）は、扇状地堆積物に相当し、主に褐灰色や黄灰色を呈する砂礫とシルト質砂礫に細分される。これらは、花崗岩が風化したマサ土からなり、礫は径0.5㎝以下の細かい亜角～亜円礫を主体とする。トレンチ２では砂礫の上面が高くなっており、２・３区の西部を中心とした埋没旧中州の存在が知られる。

砂礫を覆う細粒堆積物（トレンチ３の堆積物１・２とトレンチ４の堆積物１～３・６）は、主に４区で観察され、70～80㎝の厚さをもつ。これは、洪水堆積物であり、暗黄灰や黄灰色の砂質シルトとシルトに分けられる。２・３区東部のトレンチ１や４区のトレンチ３と４では、こうした堆積物から切り込まれる埋没旧河道がみられる。これらは調査区の北から流下する支流の流路跡である。中でも、２・３区東部の埋没旧河道は比較的大きく、20ｍ以上の幅と12ｍの深さを有する。これは砂質シルトやシルト（トレンチ１の堆積物１～８とトレンチ２の堆積物１～３）に埋積されている。他方、４区の旧河道は深さが60㎝～1.2ｍで、そこには暗褐灰色のシルト質砂礫（トレンチの堆積物）が堆積する。



第５図　隅田遺跡１・３・４区におけるトレンチ断面図

遺構検出面より上位には、灰黄褐色の砂質シルト（旧耕土）と近年の盛土がみられる。灰黄褐色砂質シルトの下面からは14世紀前半～16世紀後半の土坑や溝が検出されている。

⑵　隅田遺跡１・３・４区の堆積物

ここでは、遺構検出面以深に下位からシルト質砂とシルト質砂礫、洪水に伴う細粒堆積物、砂礫、およびそれを被覆する細粒堆積物が認められる（第５図）。これらのうち、砂礫とそれを覆う細粒堆積物は白池遺跡のトレンチ断面で観察される堆積物に連続する。

下位でみられるシルト質砂礫（トレンチ６の堆積物18）は、マサ土であり、径１㎝以下の亜角～亜円礫が主体となる。その上位で観察される細粒堆積物（トレンチ６の堆積物８～17）は、厚さ約１ｍで、青灰色や黄灰色の砂質シルトとシルトなどに細分される。中には黒灰色の砂質シルトとシルト（トレンチ６の堆積物14・16）がはさまれ、低湿な環境の存在を伺わせる。これらのうち、下位の黒灰色シルトからは6,165±30yrBP（PLD－15490）の放射性炭素年代測定値[1]が得られている。

さらに上位の砂礫（トレンチ５の堆積物４・８とトレンチ６の堆積物３・５～７）は、扇状地の旧中州堆積物に該当する。これは、灰～黒灰色の砂礫とシルト質砂礫からなり、４つ程度に細分される。い

ずれも径0.5㎝以下の礫を主体とするマサ土に該当し、全体の厚さが約１ｍである。間には、黄灰色のシルト質砂と砂質シルト（トレンチ５の堆積物５～７）、ならびに黒褐色の砂質シルト（トレンチ６の堆積物４）が部分的にはさまれる。砂礫の上位に位置する細粒堆積物（トレンチ５の堆積物１～３とトレンチ６の堆積物１・２）は15～50㎝の厚さで扇状地を覆う。これは、暗黄灰色や暗灰色の砂質シルトとシルトに分けられ、いずれも洪水堆積物に相当する。

遺構検出面より上位の堆積物は、下位からにぶい黄褐色の砂質シルト（旧耕土）、灰黄褐色のシルト（旧耕土）、および近年の盛土である。にぶい黄褐色を呈する砂質シルトの下面では、15～16世紀の掘立柱建物の柱穴跡や土坑などが認められている。

⑶　竹ノ鼻遺跡２区の堆積物

この調査区における遺構検出面以深には、大きくみて下位から砂礫、洪水に伴う細粒堆積物、砂礫、ならびにそれを覆う細粒堆積物が観察される（第６図）。これらは隅田遺跡４区の遺構検出面以深でみられる堆積物に連続する。最下位の砂礫（トレンチ７の堆積物13）は、暗黄灰色を呈し、径３㎝以下の亜角～亜円礫を多く含むマサ土である。その上位に位置する細粒堆積物（トレンチ７の堆積物８～12、トレンチ９の堆積物８、およびトレンチ10の堆積物９）は灰褐色や暗黄灰色などの砂質シルトとシルトに細分される。全体の厚さは約１ｍである。

これを覆う砂礫は扇状地の旧中州堆積物にあたる。これは1.2～1.5ｍの厚さをもち、主に暗褐灰色や橙灰色などの砂礫とシルト質砂礫（トレンチ７の堆積物２・７、トレンチ８の堆積物２・６・９、トレンチ９の堆積物５・７、およびトレンチ10の堆積物６）からなる。これらもマサ土で、礫は径１㎝以下または径0.5㎝以下の亜角～亜円礫を主体とする。間には、暗灰色や暗黄灰色を呈する砂質シルトとシルト（トレンチ７の堆積物４～６とトレンチ８の堆積物３・４・８・11）、ならびに黒色と黒灰色のシルト（トレンチ７の堆積物３、トレンチ８の堆積物７・10・12、トレンチ９の堆積物６、トレンチ10の堆積物７・８）が断続的にはさまれる。中でも、黒色と黒灰色のシルトは３つの層位でみられ、そのうち中位のそれは5,212±25yrBP（PLD－15491）の放射性年代測定値を示す[2)]。

この砂礫を切る埋没旧河道が２区西部のトレンチ９と10で３つ認められる。トレンチ９で確認される旧河道は北から流下する支流の流路跡に相当し、トレンチ10で観察されるそれは鳥飼川の流路跡と考えられる。その上位にみられる細粒堆積物（トレンチ７～10の堆積物１）は暗黄灰色のシルトである。これは20～30㎝の厚さで扇状地の旧中州と旧河道を被覆する。

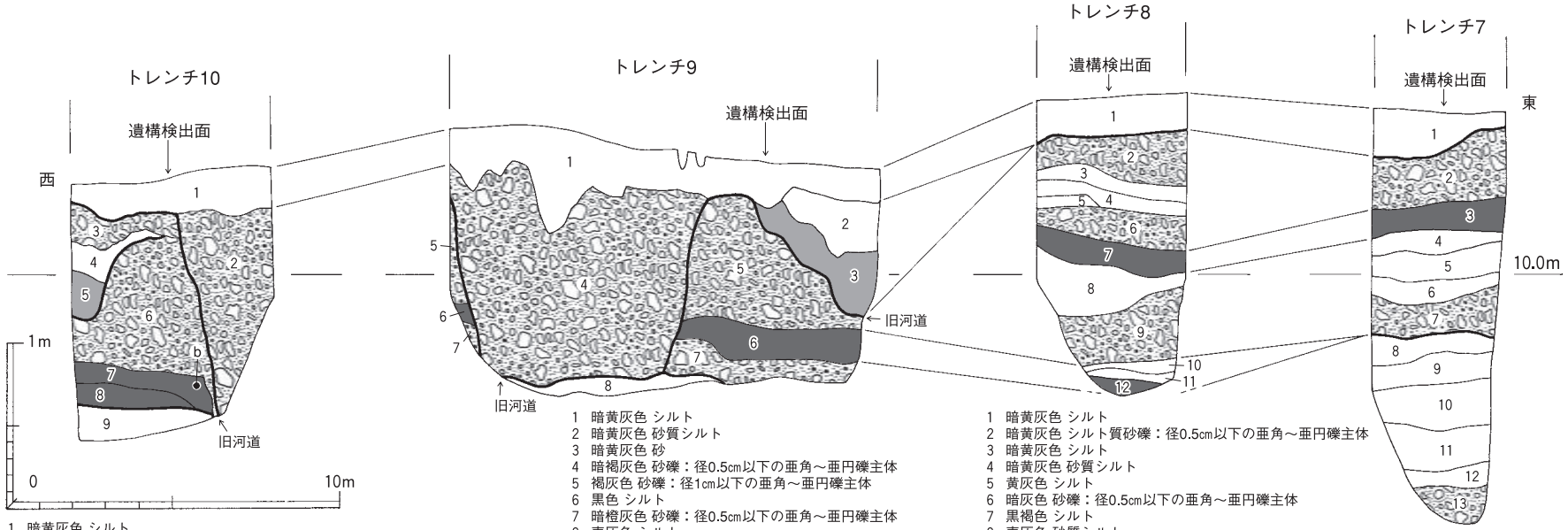
遺構検出面より上位には、黄褐色のシルト（旧耕土）と近年の盛土がみられる。２区中央部では、黄褐色シルトの下面から12世紀後半～13世紀前半の掘立柱建物跡が検出されている。

４．調査区付近における地形環境の変遷

調査区付近における地形環境はこれまでに述べた事柄から次のように考察される。

〔ステージ１〕　調査区付近には、シルト質砂や砂礫の堆積後、砂質シルトやシルトなどの細粒堆積物が洪水の度にもたらされた。これは縄文海進期に起こった現象と考えられる。こうした堆積が進行中の約6,200年前には、隅田遺跡１・３・４区で低湿な環境が現出し、黒灰色の砂質シルトが生成された。

〔ステージ２〕　縄文海進頂期を過ぎて約5,200年前になると、鳥飼川による砂礫やシルト質砂礫の堆積がはじまった。これに伴って扇状地が発達し、白池遺跡２・３区の西半部から４区の東半部、隅田遺跡



1 暗黄灰色 シルト
2 橙灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
3 暗褐灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
4 灰色 シルト
5 暗褐灰色 砂
6 暗褐灰色 砂礫：径1㎝以下の亜角～亜円礫主体
7 黒色 シルト
8 黒灰色 シルト
9 黄灰色 砂質シルト

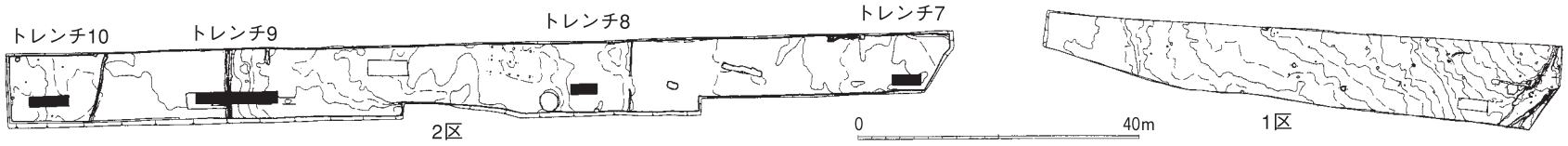
b.5,210±25yrBP/4048-3967calBC(95.4%)〔PLD-15491〕

1 暗黄灰色 シルト
2 暗黄灰色 砂質シルト
3 暗黄灰色 砂
4 暗褐灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
5 褐灰色 砂礫：径1㎝以下の亜角～亜円礫主体
6 黒色 シルト
7 暗橙灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
8 青灰色 シルト

1 暗黄灰色 シルト
2 暗黄灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
3 暗黄灰色 シルト
4 暗黄灰色 砂質シルト
5 黄灰色 シルト
6 暗灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
7 黒褐色 シルト
8 青灰色 砂質シルト
9 橙灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
10 黒灰色 シルト
11 灰色 シルト
12 黒灰色 シルト

1 暗黄灰色 シルト
2 暗褐灰色 砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
3 黒色 シルト
4 暗灰色 シルト
5 黄灰白色 砂質シルト
6 暗灰色 砂質シルト
7 橙灰色 シルト質砂礫：径0.5㎝以下の亜角～亜円礫主体
8 橙灰白色 シルト
9 灰褐色 砂質シルト
10 暗黄灰色 シルト
11 暗褐灰色 砂質シルト
12 暗黄灰色 シルト
13 暗褐灰色 砂礫：径3㎝以下の亜角～亜円礫主体

砂礫・シルト質砂礫　砂質シルト・シルト
砂　黒色・黒褐色・黒灰色のシルト



第６図　竹ノ鼻遺跡２区におけるトレンチ断面図

１・３・４区、および竹ノ鼻遺跡２区の中央部などに中州が形成された。扇状地の形成が進む中、低湿な環境が局所的に３度みられ、そこでは黒色シルトの生成が行われた。また、扇状地の形成末期には竹ノ鼻遺跡２区の西端を鳥飼川が流れ、その後流路は砂礫によって埋積された。

〔ステージ３〕 扇状地の形成後、砂質シルトやシルトなどが次々と堆積し、扇状地を覆っていった。これによって扇状地は地下浅所に埋没した。その間、支流が調査区の北から流下し、白池遺跡２・３区の東部と４区の西部、竹ノ鼻遺跡２区の西部などに流路が形成された。

〔ステージ４〕 その後海退が著しく進んだ時期に、鳥飼川の下刻がみられ、調査区付近に広がる埋没扇状地が段丘化した。こうして形成された完新世段丘Ｉの段丘面では、その後洪水のほとんど発生しない安定した環境が続いた。

〔ステージ５〕 このような環境下にあった完新世段丘Ｉでは、12世紀後半～13世紀前半になると人間生活が埋没旧中州上で行われるようになり、竹ノ鼻遺跡２区の中央部に掘立柱建物が建てられた。また、15～16世紀には隅田遺跡１・３・４区の埋没旧中州上に掘立柱建物からなる集落が立地した。

５．おわりに

白池遺跡、隅田遺跡、および竹ノ鼻遺跡の調査区は鳥飼川下流部の平野に位置する。これらは支流性扇状地Ｉの扇端に分布する竹ノ鼻遺跡１区を除いて完新世段丘Ｉにみられる。完新世段丘Ｉは、鳥飼川下流部の平野で最もよく発達し、やや断続的ながら大きい面積を占める。そこでは、縄文海進頂期以降の約5,200年前から扇状地が形成・埋没し、これがその後の著しい海退期に段丘化した。このようにして形成された完新世段丘Ｉには、埋没した旧中州と旧河道が認められ、埋没旧河道には鳥飼川の流路跡と調査区の北から流下する支流のものとが存在する。

完新世段丘Ｉでは､段丘化の後洪水のほとんど及ばない安定した環境が続いた。このような環境の下、調査区では人間の顕著な活動が12世紀後半ころからみられるようになった。12世紀後半～13世紀前半には、竹ノ鼻遺跡２区の中央部に掘立柱建物が建てられ、15～16世紀には隅田遺跡１・３・４区に掘立柱建物からなる集落が立地した。いずれも埋没旧中州上につくられたもので、安定した環境の段丘上でも周囲よりわずかに高いそれに居住域が形成された。これは埋没旧中州上が排水されやすく比較的高燥であることに起因すると考えられる。以上のように、調査区では人間生活と地形環境が密接に係わってきたのである。

注

1）この放射性炭素年代測定はパレオ・ラボAMS年代測定グループによるものである。

2）前掲1）

第７章　まとめ

第１節　要約

今回調査を実施した白池遺跡、隅田遺跡、竹ノ鼻遺跡は洲本市五色町鳥飼上と鳥飼中に所在している。調査対象地は鳥飼川北岸の扇状地に立地している。上流から白池遺跡、隅田遺跡、竹ノ鼻遺跡の順に位置している。

白池遺跡では、柱穴と土坑３基、溝３条を検出した。遺構の密度は疎らであり、14世紀前半から16世紀後半にかけて位置付けられる。このほかに、18世紀後半から19世紀前半にかけての近世の遺物が出土している。

隅田遺跡１区では、上下２層の遺構面を調査し、Ｂ・Ｃ区において高い密度の遺構分布を確認した。

上層は土坑と溝が中心で、18世紀から19世紀前半代の遺物が中心である。西側は水田面が伴う。

下層の遺構群では、重複が顕著な柱穴を検出しており、数棟以上の掘立柱建物跡が重複して存在したことが明らかである。調査区内での検討からは建物跡を復原することはできなかった。ほかに、溝・土坑・墓を検出した。西側は水田面が広がる。出土遺物は、13世紀から16世紀の遺物が出土しており、中心となる時期は15世紀から16世紀である。当該時期の集落の中でも中枢部と考えられる。

西側に位置する隅田遺跡２区は１区からの遺構面が伸びているが、検出した遺構は溝３条のみである。前後の時期も含めて水田地帯である。

遺物は縄文時代後期の土器が出土しており、注意を要する。

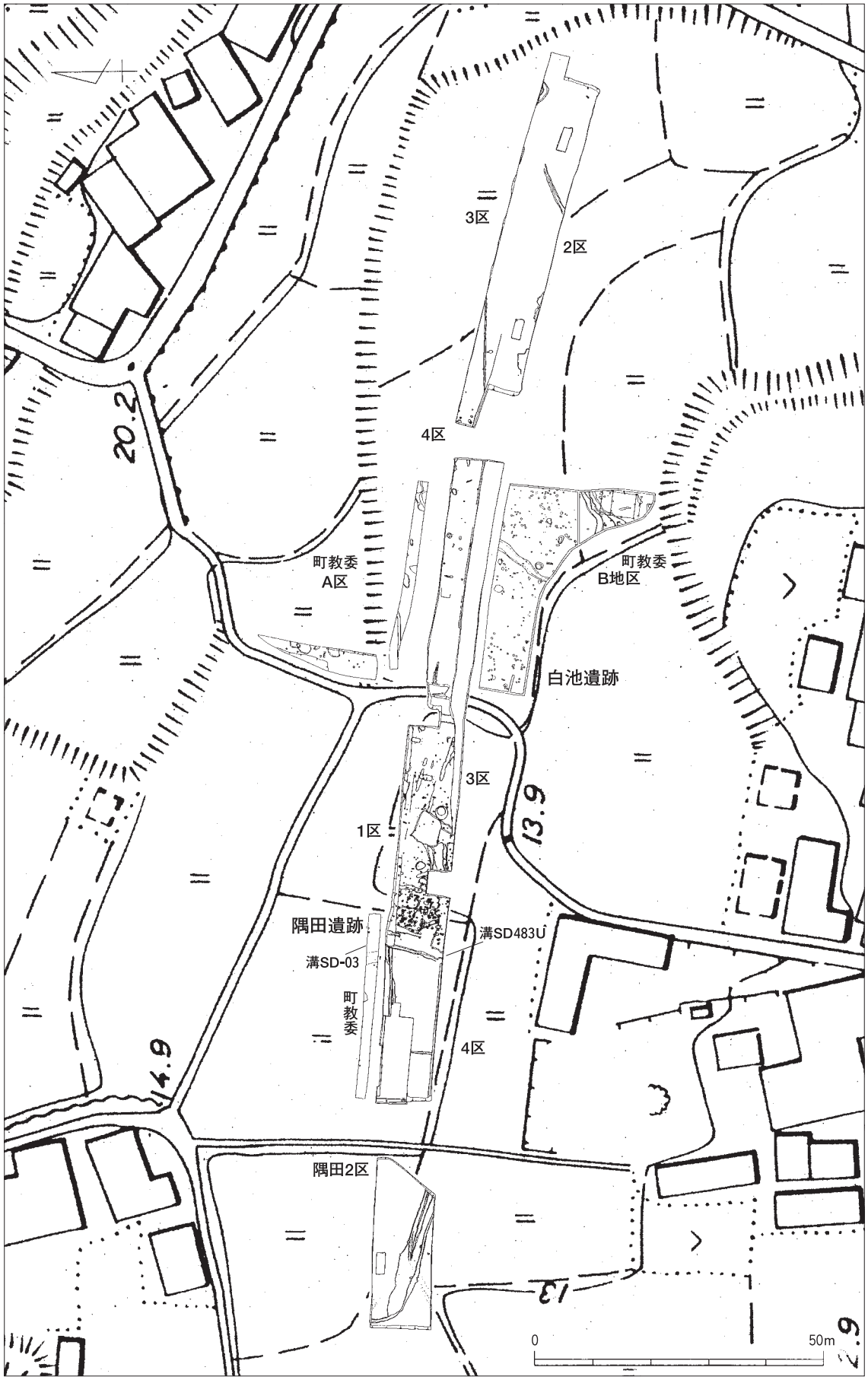
竹ノ鼻遺跡１区では、遺構面を1面調査した。検出した遺構は柵１基と自然流路１条、溝２条、土坑７基である。遺構からの遺物は少ない。土坑SK105Tから土師器鍋が出土しており、16世紀後半に位置付けられる。16世紀後半以降の時期は水田化されたと考えられ、以後継続して水田が作られている。遺物は弥生時代から16世紀にかけて幅広く出土している。

竹ノ鼻遺跡２区では、上下２層の遺構面を調査した。上層は圃場整備前の水田に伴う水路に切られていた水路で、18世紀から19世紀前半代の遺物が中心である。下層は掘立柱建物１棟と溝４条を検出したが、遺構からの遺物は少ない。掘立柱建物の柱穴から瓦器椀が出土しており、12世紀後半から13世紀前半に位置付けられる。掘立柱建物SB210Tと　溝SD203T・SD204T・SD225Tは正方位から１°～４°西偏する方位をもち、同時期性を示唆する。

掘立柱建物SB210T以降の時期は水田化されたと考えられ、以後継続して水田が作られている。

遺物は12世紀から19世紀にかけて幅広く出土しており、周辺に集落の存在が伺える。

第７図　調査地と完成した県道



第８図　白池遺跡・隅田遺跡の広がり

第２節　白池遺跡・隅田遺跡の広がり（第８図）

今回の一般県道鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴い発掘調査を実施した白池遺跡や隅田遺跡は、圃場整備事業の際に隣接地で五色町教育委員会を調査主体とした発掘調査が行われている。白池遺跡では圃場整備事業で、今回調査を実施した白池遺跡４区の北側でA地区、南側でB地区の、合わせて660㎡の発掘調査を行っている。隅田遺跡では隅田遺跡１区西端の北側で150㎡の発掘調査を行っている。

五色町教育委員会では、試掘調査の状況と地形を踏まえ、白池遺跡と隅田遺跡の二つの別の遺跡として登録していた。今回の発掘調査で、従来は遺跡の範囲に含められていなかった両遺跡間でも、遺構が濃密に存在していることが判明した。

以上のような状況から、白池遺跡と隅田遺跡は同一の遺跡群として捉えたほうが良いと考える。ただし、白池遺跡では平安時代の遺構や遺物が出土しており、やや古い様相を示す。これは遺跡群中に置ける時期的な変遷を考えるべきであろう。中世以降、広い範囲に遺構が存在しているが、隅田遺跡の南側に位置する段丘上の現在の集落は、中世以来の白池・隅田遺跡群を踏襲する集落であると考えられる。

遺構の分布や地形から遺跡の景観を検討する。五色町教育委員会が調査した隅田遺跡の溝SD-03と今回調査を実施した隅田遺跡の溝SD483Uは同一であると考えられる。この溝から東側の隅田遺跡と白池遺跡は遺構検出面が高位にあり柱穴や土坑などの遺構を検出し、住生活にかかわる領域の様相を呈している。また、この溝から西側は地形的に一段下がっており、何層もの水田面が広がっている。従って、この溝を境に東側は居住域、西側は生産域という景観が復原できる。

圃場整備事業に伴う白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡の発掘調査の成果については、淡路市教育委員会大石雅一氏に有益なご教示を頂いた。

第３章から第４章にかかわる引用・参考文献

上田秀夫　1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№2　日本貿易陶磁研究会
大橋康二　1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館
岡田章一・長谷川　眞　2003 「兵庫津出土の土製煮炊具」『研究紀要』第３号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
小野正敏　1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』№2　日本貿易陶磁研究会
兵庫県教育委員会　2004 『兵庫津遺跡Ⅱ』
横田賢次郎　森田　勉　1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館

第３表　土器一覧(1)

遺跡名	報告No.	図版	写真図版	種別	器種	産地等	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法量(cm) 口径	器高	底径	腹径	実測No.
白池遺跡	101	8	9	土師器	皿		口縁部	2005010	2区	SD016S		(6.8)	1.2			S01
白池遺跡	102	8	9	瓦器	椀		底部	2005010	2区	SD016S		−	1.1+	3.7		S02
白池遺跡	103	8	9	須恵器	杯		底部	2005010	2区	包含層		−	1.8+	(9.6)		S04
白池遺跡	104	8	9	土師器	杯		底部	2005010	3区	SK012S		−	0.7+	6.6		S05
白池遺跡	105	8	9	土師器	椀		底部	2005010	3区	SK012S		−	1.0+	(6.0)		S06
白池遺跡	106	8	9	土師器	皿		口縁部～底部	2005010	3区	SK012S		12.4	2.6	7.0		S07
白池遺跡	107	8	9	土師器	皿		口縁部～底部	2005010	3区	SK012S		13.4	2.8	6.5		S08
白池遺跡	108	8	9	土師器	焙烙		口縁部	2005010	3区	包含層		(34.0)	2.7+	−		S10
白池遺跡	109	8	9	土師器	焙烙		口縁部	2005010	3区	包含層		(25.1)	2.4+	−		S11
白池遺跡	110	8	9	土師器	皿		口縁部～底部	2005010	3区	包含層		(7.4)	1.3	5.8		S09
白池遺跡	111	8	9	土師器	皿		底部	2005010	4区	包含層		−	1.5+	(7.4)		S15
白池遺跡	112	8	9	土師器	椀		底部	2005010	4区	包含層		−	1.6+	(7.0)		S12
白池遺跡	113	8	9	土師器	鍋		口縁部	2005010	4区	包含層		(31.0)	3.6+	−		S16
白池遺跡	114	8	9	土師器	鍋		口縁部	2005010	4区	包含層		−	3.5+	−		S19
白池遺跡	115	8	9	土師器	鍋		口縁部	2005010	4区	包含層		(33.4)	2.4+	−		S17
白池遺跡	116	8	9	須恵器	杯		底部	2005010	4区	包含層		−	1.3+	(10.2)		S13
白池遺跡	117	8	9	須恵器	壺		底部	2005010	4区	包含層		−	2.4+	(7.2)		S14
白池遺跡	118	8	9	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2005010	4区	包含層		−	4.0	−		S18
白池遺跡	119	−	9	緑釉陶器	不明			2005010	2区	包含層						S03
隅田遺跡	201	16	23	土師器	皿		底部	2005011	1区	SD001U		−	0.7+	(6.0)		M14
隅田遺跡	202	16	23	土師器	皿		口縁部	2005011	1区	SD126U		(7.8)	1.4+	−		M18
隅田遺跡	203	16	24	無釉陶器	甕	備前	底部	2005011	1区	SD005U		−	13.3+	(29.7)		M17
隅田遺跡	204	16	25	染付磁器	碗	肥前系	底部	2005011	1区	SD005U		−	3.0+	(4.6)		M16
隅田遺跡	205	16	25	染付磁器	碗	瀬戸・美濃	底部	2005011	1区	SD005U		−	3.7+	3.0		M15
隅田遺跡	206	16	23	土師器	皿		口縁部	2005011	1区	SK114U		(8.6)	1.3	−		M01
隅田遺跡	207	16	23	土師器	皿		底部	2005011	1区	SK114U		−	1.2+	(6.3)		M02
隅田遺跡	208	16	24	無釉陶器	−	丹波	底部	2005011	1区	SK114U		−	5.4+	(13.0)		M03
隅田遺跡	209	16	23	土師器	皿		口縁部	2005011	1区	SK124U		(12.0)	1.8+	−		M04
隅田遺跡	210	16	23	土師器	皿		底部	2005011	1区	SK124U		8.8	1.8	6.0		M05
隅田遺跡	211	16	23	土師器	皿		口縁部	2005011	1区	SK124U		(12.9)	1.8+	−		M06
隅田遺跡	212	16	24	土師器	鍋		口縁部	2005011	1区	SK124U		(17.0)	3.9+	−		M07
隅田遺跡	213	16	23	土師器	皿		口縁部	2005011	1区	ST150U		11.0	1.7+	−		M11
隅田遺跡	214	16	23	土師器	皿		底部	2005011	1区	ST150U		−	1.3+	5.6		M12
隅田遺跡	215	16	24	土師器	鍋		口縁部	2005011	1区	ST150U		(28.0)	3.5+	−		M13
隅田遺跡	216	16	23	土師器	皿		口縁部～底部	2005011	1区	SK153U		7.8	1.3	6.0		M08
隅田遺跡	217	16	23	土師器	椀 or 杯		底部	2005011	1区	SK153U		−	1.1+	7.4		M10
隅田遺跡	218	16	24	青花磁器	皿	景徳鎮民窯	底部	2005011	1区	SK153U		−	1.4+	4.6		M09
隅田遺跡	219	16	25	土師器	皿		口縁部～底部	2005011	1区	P086U		(7.5)	1.2	6.0		M29
隅田遺跡	220	16	25	土師器	皿		口縁部～底部	2005011	1区	P119U		6.5	1.1	5.2		M34
隅田遺跡	221	16	25	土師器	皿		底部	2005011	1区	P087U		−	0.9+	6.0		M30
隅田遺跡	222	16	25	土師器	皿		底部	2005011	1区	P161U		−	1.2+	6.2		M35

第３表　土器一覧(2)

遺跡名	報告No.	図版	写真図版	種別	器種	産地等	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法量(cm) 口径	器高	底径	腹径	実測No.
隅田遺跡	223	16	25	土師器	皿		口縁部	2005011	1区	P187U		(11.9)	1.7+	−		M36
隅田遺跡	224	16	25	土師器	皿		底部	2005011	1区	P043U		−	1.0+	3.3		M24
隅田遺跡	225	16	25	土師器	皿		口縁部	2005011	1区	P029U		(12.4)	1.7+	−		M22
隅田遺跡	226	16	25	土師器	皿		口縁部	2005011	1区	P013U		(13.4)	1.4+			M21
隅田遺跡	227	16	25	土師器	皿		口縁部	2005011	1区	P031U		(10.0)	1.2+	−		M23
隅田遺跡	228	16	25	土師器	皿		口縁部～底部	2005011	1区	P098U		(11.8)	1.5+	(4.4)		M32
隅田遺跡	229	16	25	土師器	甕		口縁部	2005011	1区	P066U		(26.0)	2.4+	−		M26
隅田遺跡	230	16	25	土師器	鍋		口縁部	2005011	1区	P067U		(23.7)	4.1+	−		M27
隅田遺跡	231	16	25	土師器	鍋		口縁部	2005011	1区	P092U		(26.0)	3.9+	−		M31
隅田遺跡	232	16	23	土製品	土塊			2005011	1区	P045U		長7.5	幅4.3	厚2.8		M25
隅田遺跡	233	16	23	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2005011	1区	P082U		−	5.6+	−		M28
隅田遺跡	234	16	23	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2005011	1区	P117U		−	4.4+	−		M33
隅田遺跡	235	16	23	瓦器	椀		口縁部	2005011	1区	包含層		(17.0)	2.2+	−		M19
隅田遺跡	236	16	23	土製品	土錘			2005011	1区	包含層		長3.5	幅1.0	厚0.9	重2.7ｇ	M20
隅田遺跡	237	17	26	土師器	皿		底部	2005011	3区	SD303U		−	1.1+	6.0		M37
隅田遺跡	238	17	26	土師器	鍋		口縁部	2005011	3区	SD306U		(20.0)	5.3+	−		M38
隅田遺跡	239	17	26	土師器	皿		口縁部	2005011	3区	SK153U		10.4	1.8	−		M47
隅田遺跡	240	17	26	土師器	皿		口縁部	2005011	3区	SK153U		11.8	2.0	−		M46
隅田遺跡	241	17	26	土師器	皿		口縁部	2005011	3区	SK153U		11.8	1.4			M48
隅田遺跡	242	17	26	土師器	皿		口縁部	2005011	3区	SK153U		9.7	1.2	−		M43
隅田遺跡	243	17	26	土師器	皿		口縁部～底部	2005011	3区	SK153U		7.9	0.7	6.0		M45
隅田遺跡	244	17	26	土師器	皿		口縁部～底部	2005011	3区	SK153U		6.4	0.9	5.0		M42
隅田遺跡	245	17	26	青磁	碗	龍泉窯系	口縁部	2005011	3区	SK153U		(13.0)	2.5+			M44
隅田遺跡	246	17	26	土製品	土錘			2005011	3区	SK153U		長4.5	幅2.4	厚2.3	重21.0ｇ	M49
隅田遺跡	247	17	26	土師器	皿		口縁部	2005011	3区	SE304U		(13.0)	1.5+	−		M39
隅田遺跡	248	17	26	瓦器	椀		口縁部	2005011	3区	SE304U		(13.0)	1.8+	−		M41
隅田遺跡	249	17	26	青磁	碗	龍泉窯系	口縁部	2005011	3区	SE304U		(12.0)	2.5+	−		M40
隅田遺跡	250	17	26	土師器	皿		口縁部	2005011	3区	P338U		(12.4)	1.5+	−		M51
隅田遺跡	251	17	26	土師器	皿		口縁部	2005011	3区	P339U		(6.4)	1.0+	−		M52
隅田遺跡	252	17	26	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2005011	4区	SD402U		(30.0)	5.6+	−		M60
隅田遺跡	253	17	26	無釉陶器	鉢	備前	口縁部	2005011	4区	SD402U		(32.0)	5.1+	−		M61
隅田遺跡	254	17	26	土師器	鍋		口縁部	2005011	4区	SD406U		(25.0)	3.8+	−		M62
隅田遺跡	255	17	26	土師器	皿		口縁部	2005011	4区	SD415U		(12.5)	1.8+	−		M64
隅田遺跡	256	17	26	無釉陶器	壺	備前	口縁部	2005011	4区	SD415U		(13.0)	3.1+	−		M63
隅田遺跡	257	17	26	土師器	皿		口縁部～底部	2005011	4区	SK401U		6.9	1.2	4.0		M65
隅田遺跡	258	17	26	無釉陶器	壺		口縁部	2005011	4区	SK401U		(12.6)	4.7+	−		M79
隅田遺跡	259	17	26	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2005011	4区	SK401U		−	6.0+	−		M77
隅田遺跡	260	17	27	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2005011	4区	SK401U		(31.0)	3.8+	−		M66
隅田遺跡	261	17	27	無釉陶器	擂鉢	堺・明石	口縁部	2005011	4区	SK401U		(31.0)	8.4+			M80
隅田遺跡	262	17	27	染付磁器	碗	肥前系波佐見	口縁部	2005011	4区	SK401U		(9.4)	5.0+			M82
隅田遺跡	263	17	26	青磁	碗	龍泉窯系	口縁部	2005011	4区	SK401U		(9.8)	4.6+			M81

第３表　土器一覧(3)

遺跡名	報告No.	図版	写真図版	種別	器種	産地等	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法量(cm) 口径	器高	底径	腹径	実測No.
隅田遺跡	264	17	27	瓦	軒丸瓦			2005011	4区	SK401U		長5.0	幅1.6＋			M78
隅田遺跡	265	17	27	土師器	皿		口縁部	2005011	4区	P407U		(7.0)	1.0＋	－		M67
隅田遺跡	266	17	27	土師器	皿		底部	2005011	4区	P412U		－	0.8＋	(6.3)		M69
隅田遺跡	267	17	27	土師器	皿		口縁部	2005011	4区	P423U		(6.2)	2.0＋	－		M70
隅田遺跡	268	17	27	土師器	皿		底部	2005011	4区	P430U		－	1.2＋	(6.4)		M71
隅田遺跡	269	17	27	土師器	皿		口縁部～底部	2005011	4区	P432U		6.0	1.0	5.2		M72
隅田遺跡	270	17	27	土師器	皿		口縁部	2005011	4区	P454U		(12.0)	1.6＋	－		M73
隅田遺跡	271	17	27	土師器	皿		口縁部	2005011	4区	P454U		(12.4)	1.4＋	－		M74
隅田遺跡	272	17	27	無釉陶器	鍋		口縁部	2005011	4区	P494U		(24.0)	4.7＋	－		M76
隅田遺跡	273	17	27	土製品	鋳型			2005011	4区	P464U		長3.6	幅3.7	厚2.5		M75
隅田遺跡	274	18	28	土師器	皿		口縁部	2005011	4区	包含層		(12.4)	1.9＋	－		M68
隅田遺跡	275	18	28	土師器	皿		口縁部	2005011	4区	包含層		(13.9)	1.2＋	－		M92
隅田遺跡	276	18	28	土師器	皿		口縁部～底部	2005011	4区	包含層		8.3	0.7	5.5		M89
隅田遺跡	277	18	28	土師器	皿		底部	2005011	4区	包含層		－	1.2＋	6.0		M90
隅田遺跡	278	18	28	土師器	台付杯		口縁部	2005011	4区	包含層		(26.0)	4.4＋			M84
隅田遺跡	279	18	28	土師器	鍋		口縁部	2005011	4区	包含層		(19.8)	3.4＋	－		M95
隅田遺跡	280	18	28	土師器	鍋		口縁部	2005011	4区	包含層		(22.0)	7.1＋	－		M88
隅田遺跡	281	18	31	土師器	鍋		脚部	2005011	4区	包含層		－	1.7＋	－		M85
隅田遺跡	282	18	28	瓦器	椀		底部	2005011	4区	包含層		－	2.3＋	5.4		M93
隅田遺跡	283	18	28	須恵器	鉢		口縁部	2005011	4区	包含層		(28.4)	4.3＋	－		M91
隅田遺跡	284	18	28	無釉陶器	鉢	備前	口縁部	2005011	4区	包含層		(30.6)	5.9＋	－		M86
隅田遺跡	285	18	28	無釉陶器	甕	備前	口縁部	2005011	4区	包含層		(25.6)	6.7＋	－		M87
隅田遺跡	286	18	28	青磁	碗	龍泉窯系	口縁部	2005011	4区	包含層		(16.0)	5.8＋			M83
隅田遺跡	287	18	28	白磁	碗		底部	2005011	4区	包含層		－	1.7＋	4.7		M94
隅田遺跡	288	20	31	縄文土器	鉢		口縁部	2005011	2区	包含層		－	2.1＋	－		M54
隅田遺跡	289	20	31	土師器	皿 or 杯		底部	2005011	2区	包含層		－	1.2＋	7.3		M56
隅田遺跡	290	20	31	土師器	鍋		口縁部	2005011	2区	包含層		(14.3)	5.7＋	－		M55
隅田遺跡	291	20	31	須恵器	鉢		口縁部	2005011	2区	包含層		(26.0)	4.4＋	－		M58
隅田遺跡	292	20	31	須恵器	鉢		口縁部	2005011	2区	包含層		(28.0)	3.3＋	－		M57
隅田遺跡	293	20	31	青磁	碗	龍泉窯系	口縁部	2005011	2区	包含層		(15.0)	4.0＋			M53
隅田遺跡	294	20	31	土製品	土錘			2005011	2区	包含層		長7.8	幅－	厚1.5	重54.0ｇ	M59
竹ノ鼻遺跡	301	24	34	土師器	鍋		口縁部	2005012	1区	SD101T		(17.0)	3.5＋	－		T02
竹ノ鼻遺跡	302	24	34	青磁	碗	龍泉窯系	底部	2005012	1区	SD101T		－	2.0＋	6.0		T01
竹ノ鼻遺跡	303	24	34	土師器	鍋		口縁部	2005012	1区	SK105T		(24.0)	5.4＋	－		T03
竹ノ鼻遺跡	304	24	34	土師器	皿		底部	2005012	1区	P115T		－	1.4＋	(6.0)		T04
竹ノ鼻遺跡	305	24	34	土師器	皿		口縁部～底部	2005012	1区	P135T		9.6	1.1	7.0		T05
竹ノ鼻遺跡	306	24	34	土師器	皿		口縁部～底部	2005012	1区	包含層		6.6	1.1	5.0		T09
竹ノ鼻遺跡	307	24	34	土師器	皿 or 杯		底部	2005012	1区	包含層		－	1.1＋	5.0		T12
竹ノ鼻遺跡	308	24	34	土師器	皿 or 杯		底部	2005012	1区	包含層		－	1.3＋	5.0		T06
竹ノ鼻遺跡	309	24	34	土師器	杯		口縁部	2005012	1区	包含層		－	1.3＋	(7.2)		T10
竹ノ鼻遺跡	310	24	34	土師器	壺		底部	2005012	1区	包含層		－	2.4＋	4.3		T11

第３表　土器一覧(4)

遺跡名	報告No.	図版	写真図版	種別	器種	産地等	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法量(cm) 口径	器高	底径	腹径	実測No.
竹ノ鼻遺跡	311	24	35	土師器	足鍋		脚部	2005012	1区	包含層		－	10.1＋	－		T14
竹ノ鼻遺跡	312	24	35	土師器	足鍋		脚部	2005012	1区	包含層		－	7.7＋	－		T13
竹ノ鼻遺跡	313	24	35	須恵器	削りかす			2005012	1区	包含層		長2.7	幅1.3	厚0.8		T15
竹ノ鼻遺跡	314	24	35	須恵器	鉢		口縁部	2005012	1区	包含層		(30.0)	4.0＋	－		T08
竹ノ鼻遺跡	315	24	34	土製品	土錘			2005012	1区	包含層		長4.9	幅1.3	厚1.2	重7.0ｇ	T07
竹ノ鼻遺跡	316	29	40	瓦器	椀		口縁部	2005012	2区	SB210T	P212U	(15.0)	2.0＋	－		T16
竹ノ鼻遺跡	317	29	40	須恵器	鉢		口縁部	2005012	2区	SD232T		(27.6)	3.0＋	－		T27
竹ノ鼻遺跡	318	29	40	染付磁器	碗	肥前系波佐見	底部	2005012	2区	SD232T		－	3.7＋	3.4		T29
竹ノ鼻遺跡	319	29	40	染付青磁	碗	肥前系	底部	2005012	2区	SD232T		－	3.1＋	4.0		T28
竹ノ鼻遺跡	320	29	40	須恵器	杯		底部	2005012	2区	SD232T		－	1.1＋	(6.9)		T30
竹ノ鼻遺跡	321	29	40	無釉陶器	鉢		口縁部～底部	2005012	2区	SD232T		14.8	5.9	10.5		T31
竹ノ鼻遺跡	322	29	40	土師器	皿		口縁部～底部	2005012	2区	SD231T		6.8	0.9	5.0		T32
竹ノ鼻遺跡	323	29	40	須恵器	杯		底部	2005012	2区	SD231T		－	1.2＋	(7.9)		T34
竹ノ鼻遺跡	324	29	42	施釉陶器	秉燭	信楽	口縁部～底部	2005012	2区	SD231T		3.2	4.1	5.3		T33
竹ノ鼻遺跡	325	29	41	土師器	皿		口縁部～底部	2005012	2区	包含層		8.0	1.3	5.0		T41
竹ノ鼻遺跡	326	29	40	土師器	皿		口縁部～底部	2005012	2区	包含層		8.6	1.8	5.8		T58
竹ノ鼻遺跡	327	29	40	土師器	皿		底部	2005012	2区	包含層		－	2.0＋	(6.0)		T24
竹ノ鼻遺跡	328	29	40	土師器	皿 or 椀		底部	2005012	2区	包含層		－	1.9＋	6.0		T22
竹ノ鼻遺跡	329	29	40	土師器	杯		口縁部～底部	2005012	2区	包含層		11.2	2.9＋	6.0		T25
竹ノ鼻遺跡	330	29	40	土師器	杯		口縁部～底部	2005012	2区	包含層		14.0	3.3	11.0		T50
竹ノ鼻遺跡	331	29	40	土師器	甕		口縁部	2005012	2区	包含層		(21.0)	2.9＋	－		T21
竹ノ鼻遺跡	332	29	40	瓦器	椀		口縁部	2005012	2区	包含層		(15.0)	2.0＋	－		T17
竹ノ鼻遺跡	333	29	40	瓦器	椀		口縁部	2005012	2区	包含層		(12.4)	1.3＋	－		T35
竹ノ鼻遺跡	334	29	40	瓦器	椀		底部	2005012	2区	包含層		－	2.1＋	(8.0)		T51
竹ノ鼻遺跡	335	29	40	瓦器	椀		底部	2005012	2区	包含層		－	0.9	(6.0)		T43
竹ノ鼻遺跡	336	29	40	瓦質土器	火鉢		体部	2005012	2区	包含層		－	3.4＋	－		T59
竹ノ鼻遺跡	337	29	41	須恵器	皿		口縁部～底部	2005012	2区	包含層		12.6	2.5	8.8		T18
竹ノ鼻遺跡	338	29	41	須恵器	椀		口縁部	2005012	2区	包含層		(12.0)	2.9＋			T60
竹ノ鼻遺跡	339	29	41	須恵器	鉢		口縁部	2005012	2区	包含層		(31.0)	4.7＋	－		T42
竹ノ鼻遺跡	340	29	41	須恵器	鉢		口縁部	2005012	2区	包含層		(30.6)	6.3＋	－		T49
竹ノ鼻遺跡	341	29	41	須恵器	鉢		底部	2005012	2区	包含層		－	3.7＋	(12.0)		T19
竹ノ鼻遺跡	342	29	41	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2005012	2区	包含層		(18.0)	7.5＋	－		T37
竹ノ鼻遺跡	343	29	41	無釉陶器	擂鉢	堺・明石	底部	2005012	2区	包含層		(34.0)	5.2＋	－		T63
竹ノ鼻遺跡	344	29	41	無釉陶器	甕	丹波	口縁部	2005012	2区	包含層		(28.0)	7.7＋	－		T36
竹ノ鼻遺跡	345	29	41	無釉陶器	火入れ	丹波	口縁部～底部	2005012	2区	包含層		9.1	6.3	9.6		T64
竹ノ鼻遺跡	346	29	41	施釉陶器	椀	瀬戸・美濃	口縁部	2005012	2区	包含層		(13.8)	3.4＋	－		T39
竹ノ鼻遺跡	347	29	41	施釉陶器	椀		口縁部～底部	2005012	2区	包含層		11.7	5.0	5.4		T40
竹ノ鼻遺跡	348	29	41	施釉陶器	皿	肥前系唐津	底部	2005012	2区	包含層		－	1.4＋	4.0		T55
竹ノ鼻遺跡	349	29	41	施釉陶器	皿	肥前系唐津	底部	2005012	2区	包含層		－	2.4＋	4.4		T54
竹ノ鼻遺跡	350	29	41	施釉陶器	皿	肥前系唐津	底部	2005012	2区	包含層		－	2.2＋	4.0		T57
竹ノ鼻遺跡	351	30	4･42	白磁	四耳壺	華南	体部	2005012	2区	包含層		－	3.8＋	－		T20

第３表　土器一覧(5)

遺 跡 名	報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	産地等	部　位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法　量(cm)				実測No.
												口径	器高	底径	腹径	
竹ノ鼻遺跡	352	30	4･42	青白磁	梅瓶	景徳鎮窯	体部	2005012	2区	包含層		－	5.1＋	－		T56
竹ノ鼻遺跡	353	30	4･42	青磁	碗	龍泉窯系	口縁部	2005012	2区	包含層		(13.0)	2.7＋	－		T38
竹ノ鼻遺跡	354	30	4･42	青磁	碗	龍泉窯系	底部	2005012	2区	包含層		－	2.3＋	(6.0)		T52
竹ノ鼻遺跡	355	30	4･42	青磁	碗	龍泉窯系	底部	2005012	2区	包含層		－	3.2＋	4.6		T53
竹ノ鼻遺跡	356	30	4･42	青花磁器	皿	景徳鎮民窯	底部	2005012	2区	包含層		－	2.0＋	3.0		T23
竹ノ鼻遺跡	357	30	41	染付磁器	碗	肥前系	底部	2005012	2区	包含層		－	4.8＋	4.8		T46
竹ノ鼻遺跡	358	30	41	染付磁器	碗	瀬戸・美濃	底部	2005012	2区	包含層		－	3.1＋	(3.6)		T44
竹ノ鼻遺跡	359	30	41	染付磁器	碗		底部	2005012	2区	包含層		－	2.3＋	3.4		T45
竹ノ鼻遺跡	360	30	41	染付磁器	碗	肥前系	口縁部～底部	2005012	2区	包含層		10.2	6.7	5.4		T62
竹ノ鼻遺跡	361	30	42	土製品	土錘			2005012	2区	包含層		長7.8	幅3.1	厚2.8	重54.5ｇ	T47
竹ノ鼻遺跡	362	30	42	土製品	土錘		完存	2005012	2区	包含層		長7.3	幅3.9	厚3.7	重86.3ｇ	T48
竹ノ鼻遺跡	363	30	42	土製品	土錘			2005012	2区	包含層		長5.1	幅1.9	厚1.9	重13.7ｇ	T26
竹ノ鼻遺跡	364	30	42	土製品	土錘			2005012	2区	包含層		長3.8	幅1.1	厚1.1	重3.8ｇ	T61

第４表　石器一覧

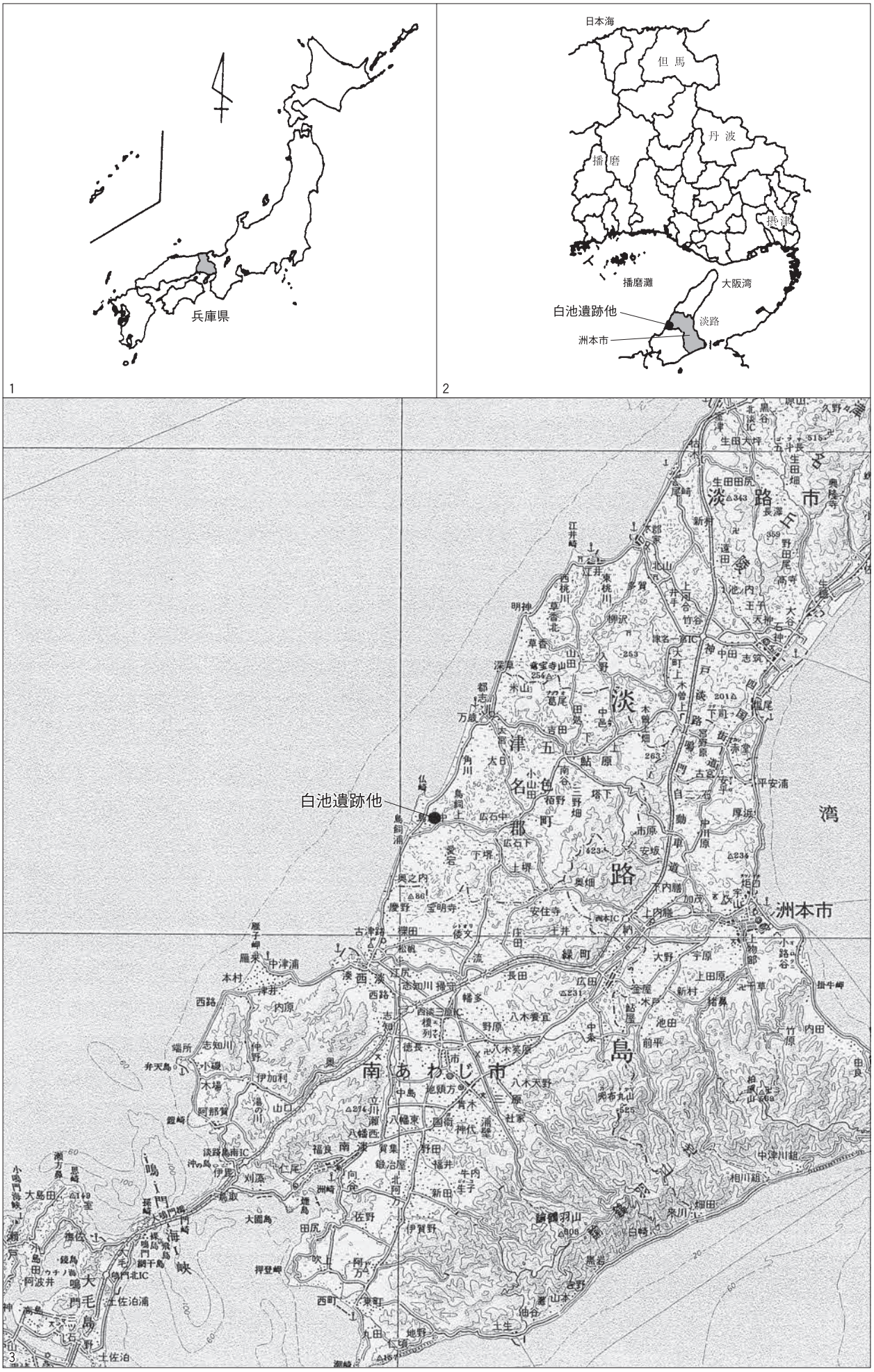
遺跡名	報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	石　材	調査番号	調査区	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	残　存	重量(ｇ)	実測No.
隅 田 遺 跡	S21	18	29	石製品	石臼		2005011	1区	SK124U	11.1	10.5	3.1	直径20cm　孔3cm	358.7	石 M1
隅 田 遺 跡	S22	18	29	石製品	石臼		2005011	4区	包含層	7.6	6.5		直径29cm	214.5	石 M2
隅 田 遺 跡	S23	18	29	石製品	石鏃	サヌカイト	2005011	4区	P493U	2.2	1.6	0.4		1.0	石 M3
隅 田 遺 跡	S24	20	31	石製品	石包丁	片岩	2005011	2区	包含層	7.2	3.4	0.9		42.8	石 M4
隅 田 遺 跡	S25	－	29	石製品	不明		2005011	1区	SK114U					4.0	－
竹ノ鼻遺跡	S31	24	35	石製品	削器（片刃）	サヌカイト	2005012	1区	SD101U	6.8	3.9	0.9		22.4	石 T1
竹ノ鼻遺跡	S32	24	35	石製品	二次加工のある剥片	サヌカイト	2005012	1区	包含層	6.1	3.2	0.7		11.0	石 T2

第５表　金属器一覧

遺跡名	報告No.	図版	写真図版	種　別	器　種	調査番号	調査区	遺　構	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(ｇ)	実測No.
隅 田 遺 跡	M21	18	29	銅銭	寛永通寶	2005011	1区	SK186U	2.4	2.4	0.1	1.8	鉄 M01
隅 田 遺 跡	M22	18	29	鉄製器	刀子	2005011	3区	包含層	2.4	1.3	0.3	1.1	鉄 M08
隅 田 遺 跡	M23	18	29	鉄製器	釘	2005011	3区	ST156U	2.6	0.6	0.4	1.0	鉄 M05
隅 田 遺 跡	M24	18	29	鉄製器	釘	2005011	3区	ST156U	2.8	0.5	0.4	0.7	鉄 M06
隅 田 遺 跡	M25	18	29	鉄製器	不明	2005011	3区	SK153U	8.0	1.3	0.4	5.7	鉄 M03
隅 田 遺 跡	M26	18	29	銅製品	不明	2005011	4区	SK401U	6.5	2.1	0.1	14.8	鉄 M02
隅 田 遺 跡	M27	20	31	鉄製器	釘	2005011	2区	包含層	3.1	0.6	0.4	1.2	鉄 M07
隅 田 遺 跡	M28	20	31	鉄製器	釘	2005011	2区	包含層	4.9	2.8	0.7	15.0	鉄 M04
竹ノ鼻遺跡	M31	24	35	銅製品	釣針	2005012	1区	包含層	3.6	1.3	0.1～0.3	1.4	鉄 T02
竹ノ鼻遺跡	M32	30	42	銅銭	□□通寶	2005012	2区	包含層	2.4	2.5	0.1	1.5	鉄 T01
竹ノ鼻遺跡	M33	30	42	鉄製器	不明	2005012	2区	包含層	9.9	1.0	0.3	8.4	鉄 T03

図版

図版1



1．兵庫県の位置　　2．洲本市の位置　　3．白池遺跡の位置

図版2

図版3	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	時代	種類
1	920001	岡の谷遺跡	津名郡五色町都志	古墳	散布地
2	920002	菊友遺跡	洲本市五色町都志	中世	散布地
3	920003・920004	岡の谷古墳群	洲本市五色町都志	古墳	古墳
4	920005	岡の谷遺跡	洲本市五色町都志	古墳	散布地
5	920006	坂口遺跡	洲本市五色町都志	中世	散布地
6	920007	中ノ熊遺跡	洲本市五色町都志	中世	その他
7	920008	竹ノ内遺跡	洲本市五色町都志	弥生	散布地
8	920016	原遺跡	洲本市五色町都志大宮	奈良	散布地
9	920017	宮の西遺跡	洲本市五色町都志大宮	弥生・中世	散布地
10	920018	宮ノ前遺跡	洲本市五色町都志大宮	平安	散布地
11	920025	縄手遺跡	洲本市五色町都志	中世	散布地
12	920015	都志中須賀遺跡	洲本市五色町都志万歳	古墳・中世	集落
13	920014	岡ノ山遺跡	洲本市五色町都志万歳	古墳・中世・近世	集落
14	920019	白畑遺跡	洲本市五色町都志	中世	散布地
15	920020	北地遺跡	洲本市五色町都志	中世	その他の墓
16	920021	北地南遺跡	洲本市五色町都志	弥生	散布地
17	920022	塚町遺跡	洲本市五色町都志	中世	その他の墓
18	920023	都志城跡	洲本市五色町都志	中世	城郭
19	920024	宮山遺跡	洲本市五色町都志	弥生	集落
20	920012	角川上ナダ遺跡	洲本市五色町都志角川	中世	散布地
21	920013	鴨ヶ市遺跡	洲本市五色町都志角川	中世	散布地
22	920052	藤谷Ａ遺跡	洲本市五色町鳥飼浦	中世	散布地
23	920053	藤谷Ｂ遺跡	洲本市五色町鳥飼浦	中世	散布地
24	920054	岡田城跡	洲本市五色町鳥飼	中世	城郭
25	920055	寺谷遺跡	洲本市五色町鳥飼	中世	散布地
26	920056	岡田中瀬遺跡	洲本市五色町鳥飼浦	中世	散布地
27	920068	下條遺跡	洲本市五色町鳥飼	平安・中世	集落
28	920069	モウゼン遺跡	洲本市五色町鳥飼	平安・中世	集落
29	920070	山崎遺跡	洲本市五色町鳥飼	平安	集落
30	920071	高丸城跡	洲本市五色町鳥飼	中世	城郭
31	920131	北山遺跡	洲本市五色町鳥飼浦	平安・中世	集落
32	920073	鳥飼中瀬遺跡	洲本市五色町鳥飼	平安・中世	集落
33	920133	ダイソヲ遺跡	洲本市五色町鳥飼	平安・中世	集落
34	920075	とみのはら遺跡	洲本市五色町鳥飼とみのはら	奈良	散布地
35	920076	鳥飼八幡宮遺跡	洲本市五色町鳥飼	弥生・平安・中世	社寺・散布地
36	920130・920074	竹ノ鼻遺跡・肥余遺跡	洲本市五色町鳥飼	平安・中世	集落
37	920087	隅田遺跡	洲本市五色町鳥飼	平安・中世	集落
38	920126	白池遺跡	洲本市五色町鳥飼上	奈良～中世	集落
39	920089	弐斗代遺跡	洲本市五色町鳥飼上	中世	散布地
40	920084	天郷遺跡	洲本市五色町鳥飼中	中世	散布地
41	920085	小田西遺跡	洲本市五色町鳥飼	中世	散布地
42	920090	小田東遺跡	洲本市五色町鳥飼	中世	散布地
43	920091	市城跡	洲本市五色町鳥飼	中世	城郭
44	920077	下川遺跡	洲本市五色町鳥飼	中世	散布地
45	920078	ハリノキウ遺跡	洲本市五色町鳥飼	中世	散布地
46	920079	鳥飼代遺跡	洲本市五色町鳥飼	中世	散布地
47	920080	宗田原遺跡	洲本市五色町鳥飼	奈良・中世	散布地
48	920081	石出遺跡	洲本市五色町鳥飼	弥生～中世	集落・散布地
49	920086	松光寺遺跡	洲本市五色町鳥飼	中世	散布地
50	920088	森延遺跡	洲本市五色町鳥飼	中世	散布地
51	920082	奥ノ下遺跡	洲本市五色町鳥飼	縄文・弥生・平安・中世	集落・散布地
52	920083	殿熊遺跡	洲本市五色町鳥飼	古墳	その他
53	920132	ゴカン遺跡	洲本市五色町鳥飼	弥生	集落
54	920110	石池ノ西遺跡	洲本市五色町鳥飼	中世	その他の墓
55	920111	中島遺跡	洲本市五色町鳥飼浦字中島	縄文	散布地
56	920112	倉谷遺跡	洲本市五色町鳥飼浦字倉谷	弥生	散布地
57	920113～920115	愛宕山古墳群	洲本市五色町鳥飼	古墳	古墳
58	920092	大崩遺跡	洲本市五色町下堺	弥生	集落
59	920093	家の東遺跡	洲本市五色町下堺	弥生	散布地
60	920094	居内遺跡	洲本市五色町下堺	中世	散布地
61	920095	才ノ神遺跡	洲本市五色町下堺	中世	散布地
62	920096	五反田遺跡	洲本市五色町下堺	弥生・中世	集落・散布地
63	920097	外ヶ鼻遺跡	洲本市五色町下堺	縄文・弥生中世	集落
64	920098	岡坊遺跡	洲本市五色町下堺	中世	散布地
65	920099	井出ノ上遺跡	洲本市五色町下堺	中世	散布地
66	920120	奥ノ池古窯址	洲本市五色町下堺字焼沢	奈良	生産遺跡
67	920116・920117	角床古窯址群	洲本市五色町下堺字角床	奈良	生産遺跡
68	920118・920119	桑穴古墳群	洲本市五色町下堺	古墳	古墳
69	920121	愛賀地遺跡	洲本市五色町上堺字愛賀地	中世	散布地
70	920100	喜住西遺跡	洲本市五色町広石下	弥生・平安・中世	集落・散布地
71	920101	喜住遺跡	洲本市五色町広石下	弥生	集落
72	920102	飛谷遺跡	洲本市五色町広石下	弥生・平安	集落
73	920103	コゴ谷遺跡	洲本市五色町広石下	中世	散布地
74	920104	曽禰遺跡	洲本市五色町広石下	弥生	集落・散布地
75	920107	奥ノ内北遺跡	洲本市五色町鳥飼奥の内	中世	散布地
76	920108	落合山田遺跡	洲本市五色町鳥飼奥の内	中世	散布地
77	920109	奥ノ内南遺跡	洲本市五色町鳥飼奥の内	中世	散布地
78	960011	次郎谷遺跡	南あわじ市西淡町松帆慶野北所	弥生	散布地
79	960008	慶野北松原遺跡	南あわじ市西淡町松帆慶野北慶野	奈良	散布地
80	960010	中の御堂遺跡	南あわじ市西淡町松帆慶野西原	弥生	銅鐸出土地
81	960009	北所遺跡	南あわじ市西淡町松帆慶野北所	縄文	散布地
82	960007	戎神社遺跡	南あわじ市西淡町松帆慶野	弥生～中世	散布地
83	960006	松原千畳敷遺跡	南あわじ市西淡町松帆古津路松原	弥生	散布地
84	960022	樋田遺跡	南あわじ市西淡町松帆樋田内田	縄文	散布地
85	960023	赤金遺跡	南あわじ市西淡町松帆樋田赤金	奈良・平安	その他の墓
86	940006	萩原遺跡	南あわじ市緑町倭文庄田	弥生	散布地
87	940007	加地館跡	南あわじ市緑町倭文庄田	中世	城郭
88	940008	船越館跡	南あわじ市緑町倭文庄田	中世	城郭

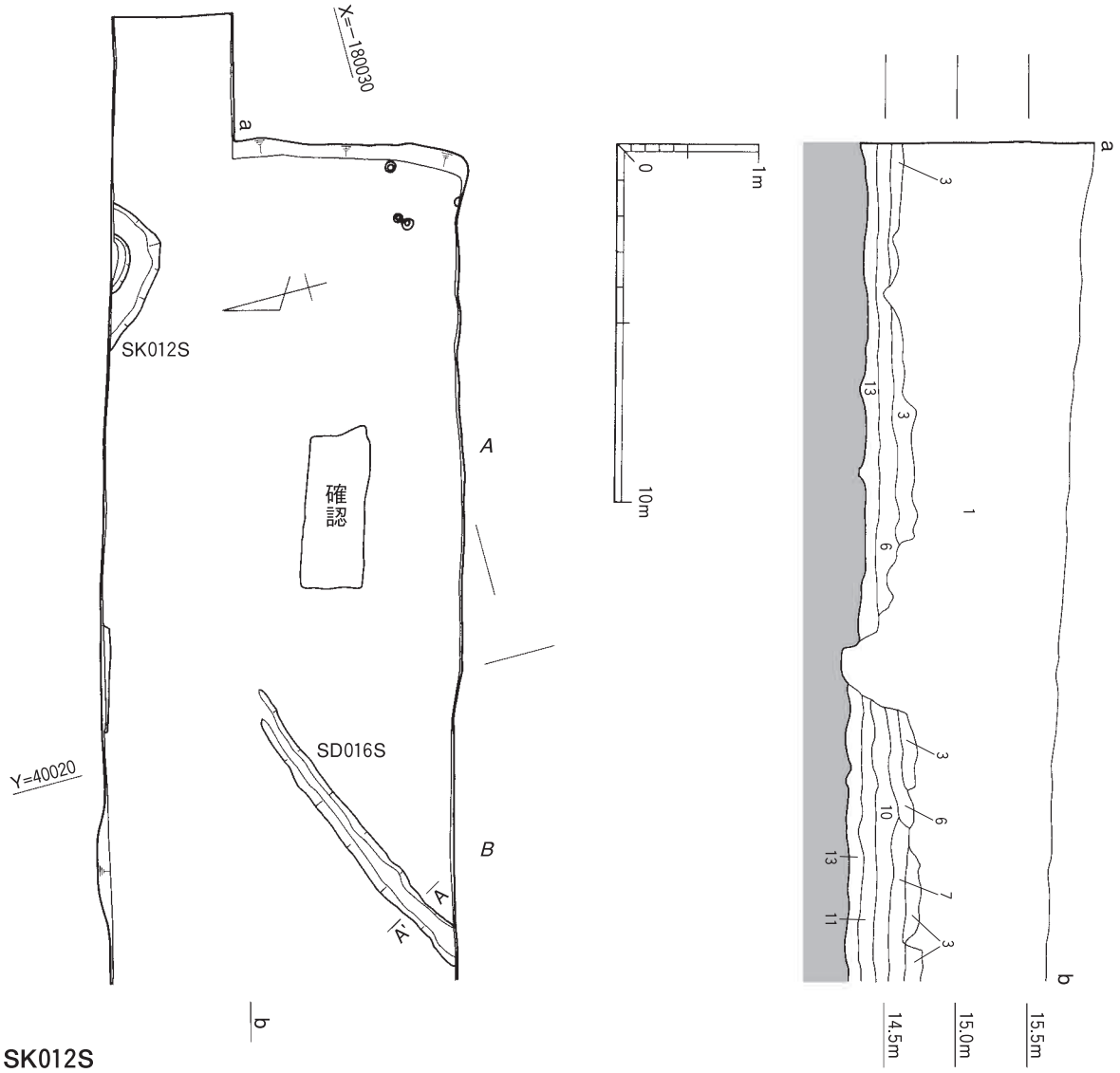
白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡周辺の遺跡一覧

図版3

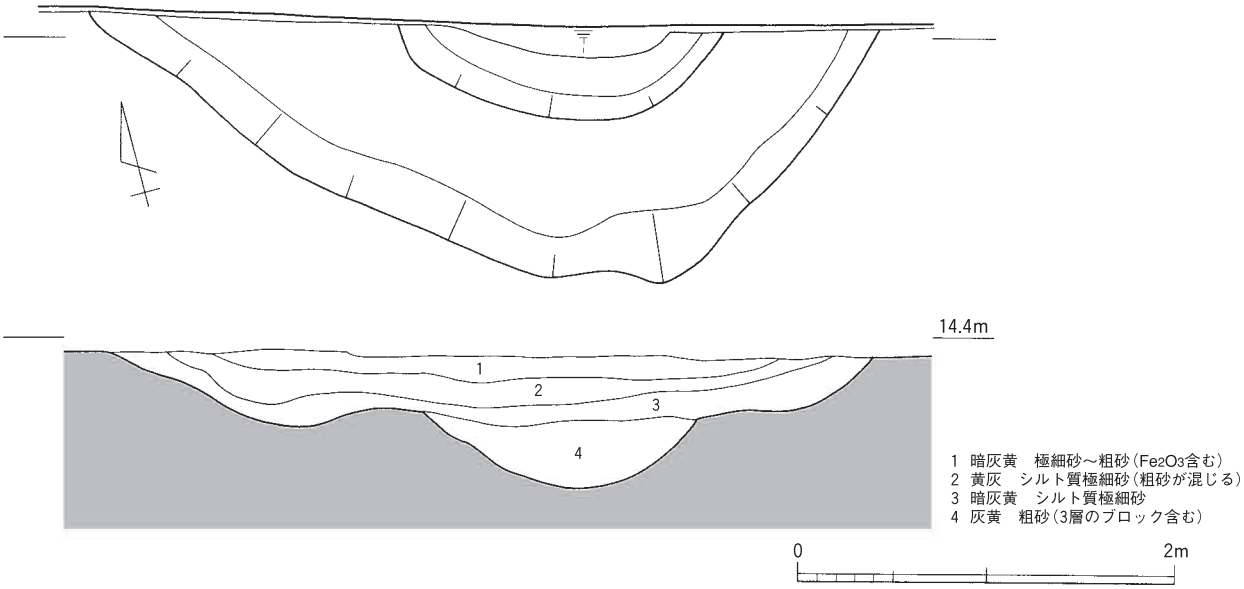
白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡地形と主要遺跡（1/35000）

図版4

白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡調査区の位置図（1/2500）

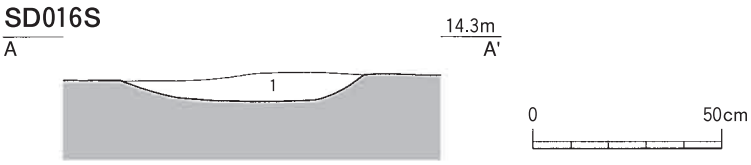


SK012S



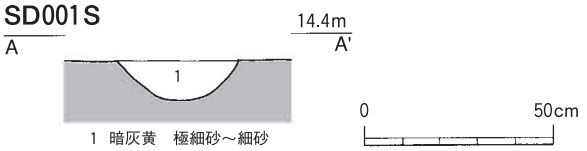
1 暗灰黄　極細砂～粗砂（Fe_2O_3含む）
2 黄灰　シルト質極細砂（粗砂が混じる）
3 暗灰黄　シルト質極細砂
4 灰黄　粗砂（3層のブロック含む）

SD016S

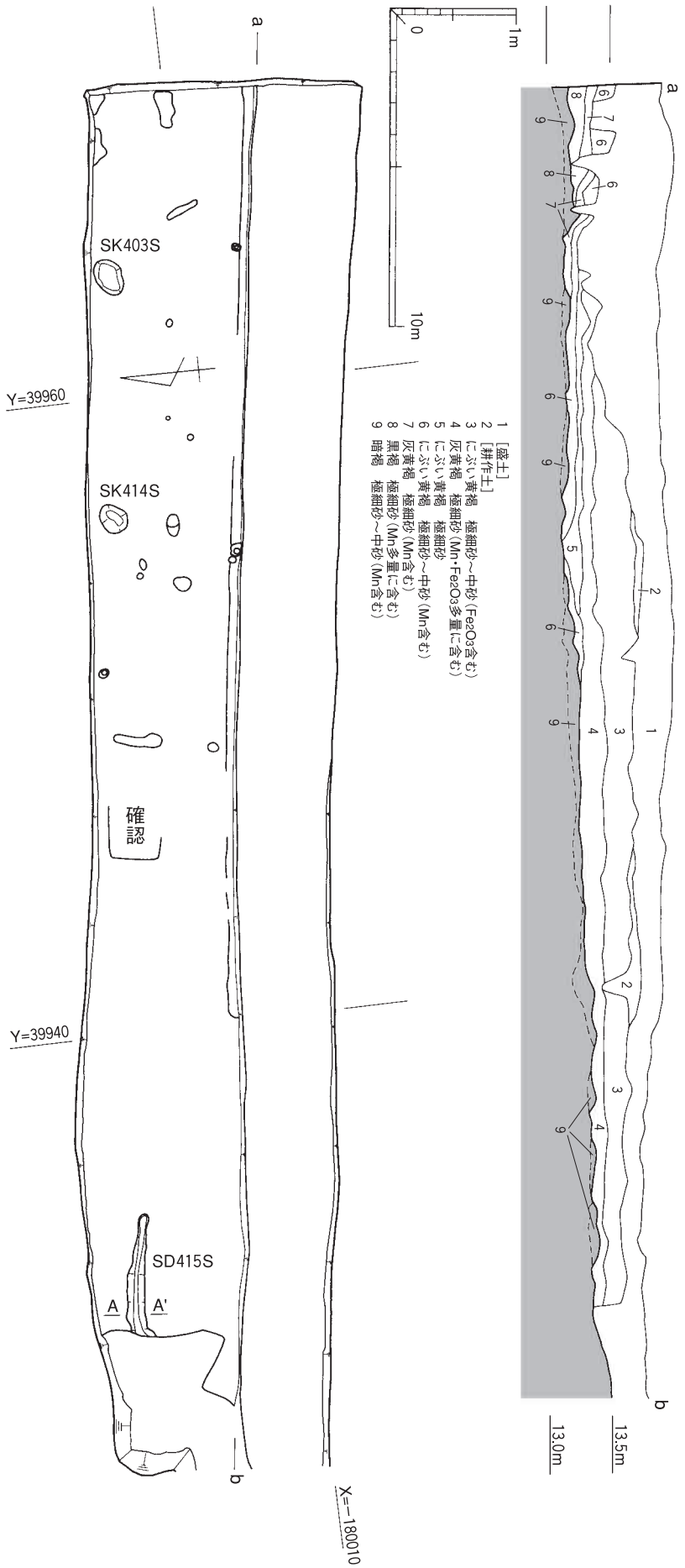


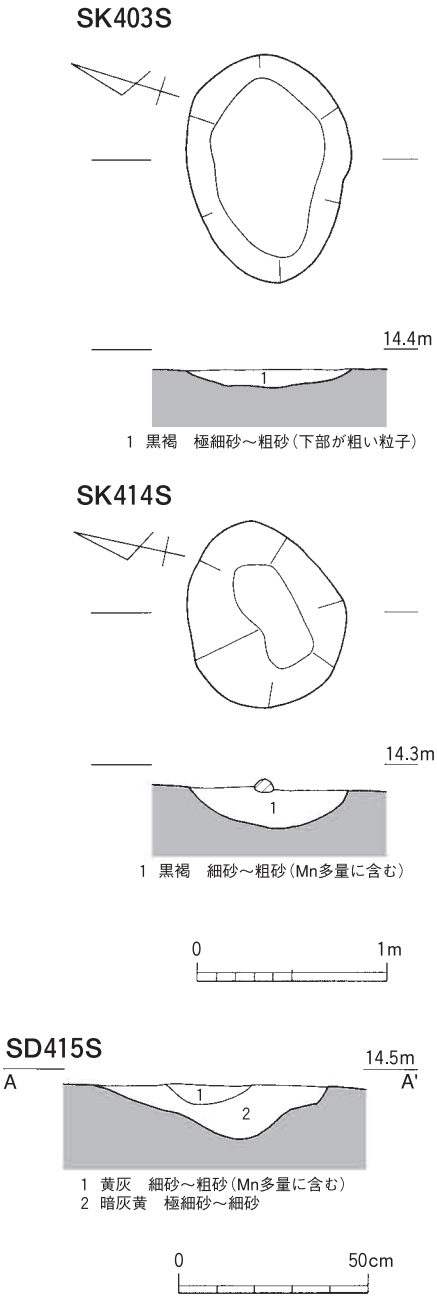
1 灰黄褐　極細砂～細砂

平面図・断面図（1/50・1/200）　SK012S（1/40）　SD016S（1/20）

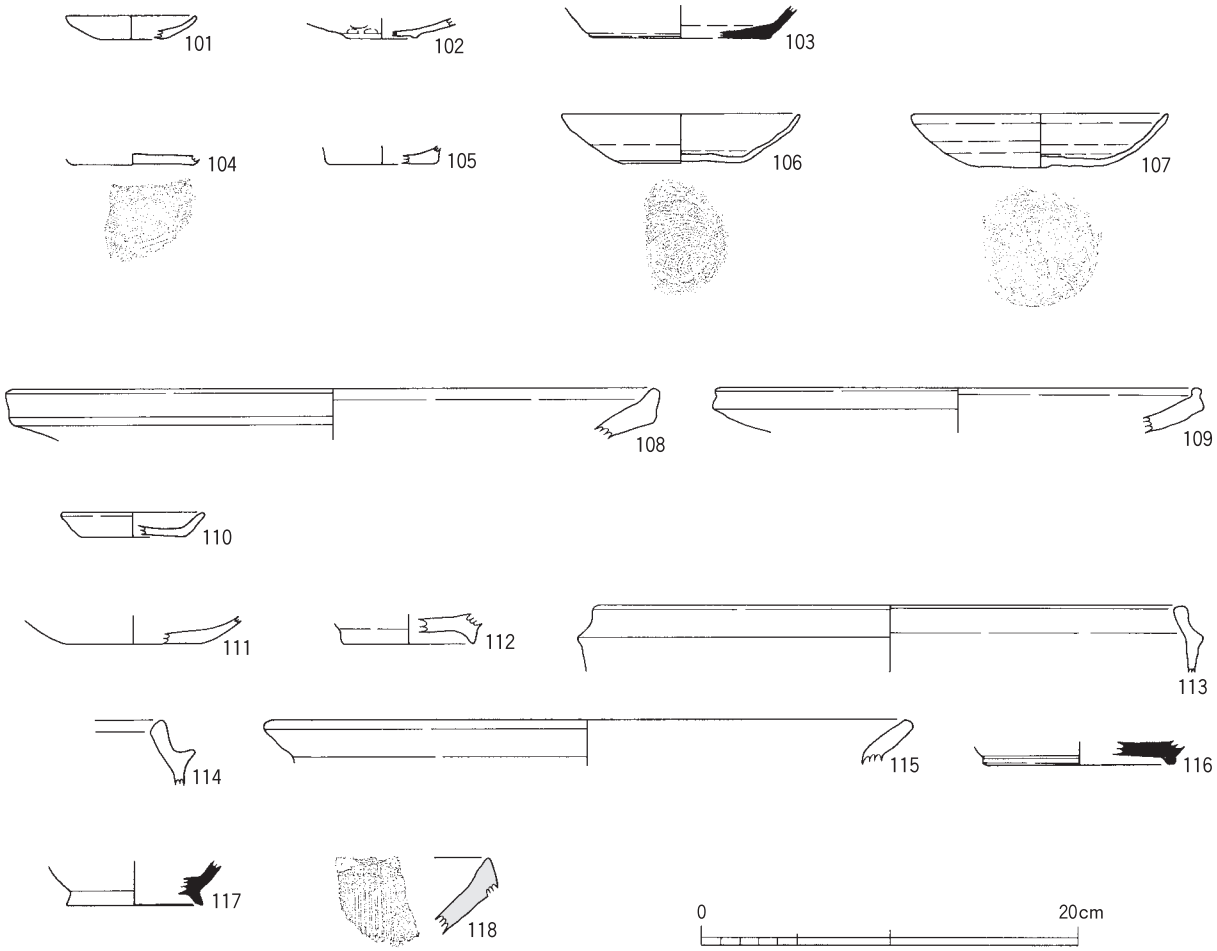


平面図・断面図（1/50・1/200）　SD001S（1/20）



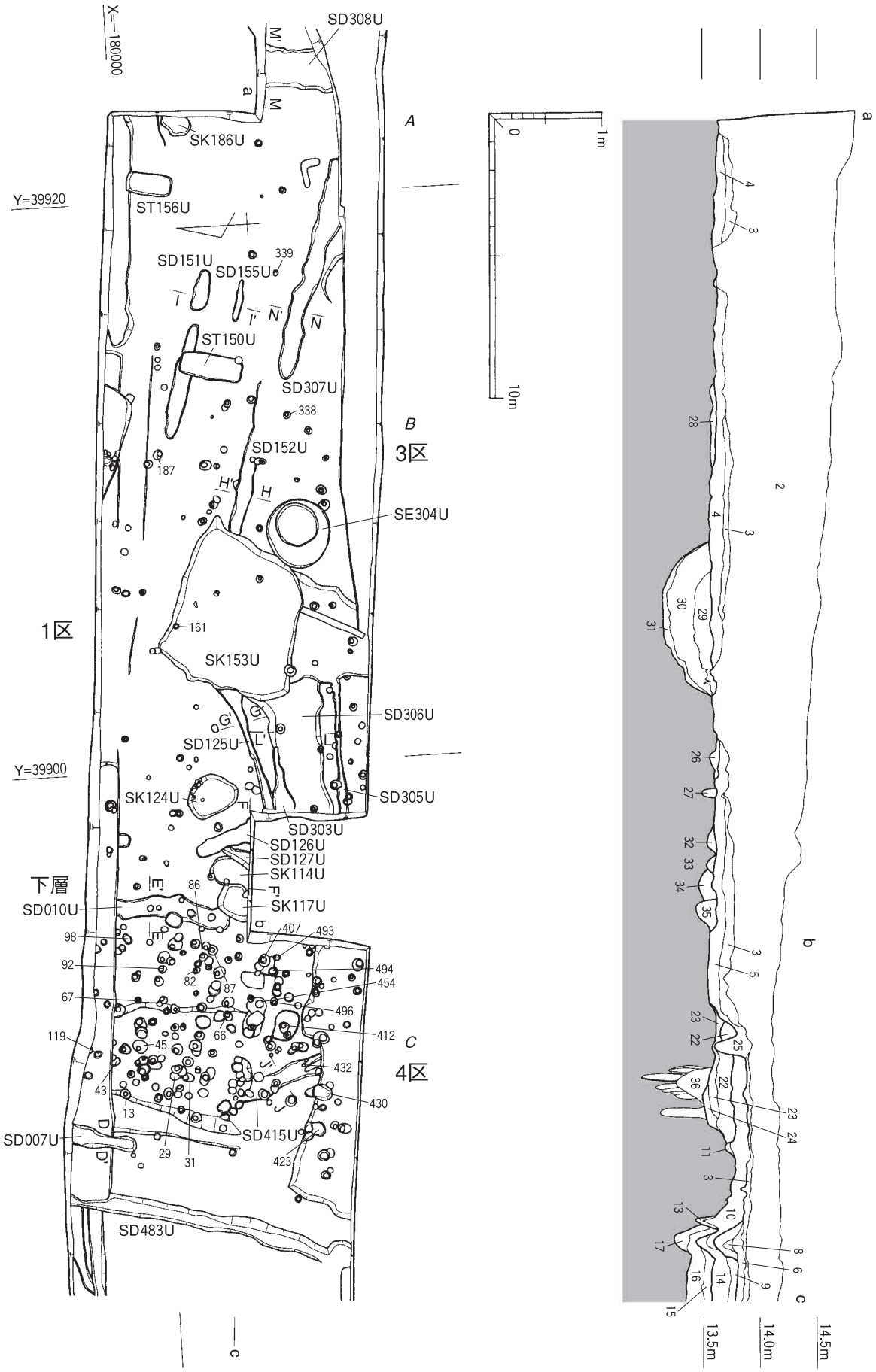


平面図・断面図（1/50・1/200）　SK403S・SK414S（1/40）　SD415S（1/20）


101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
0
20cm

土器（101～118）

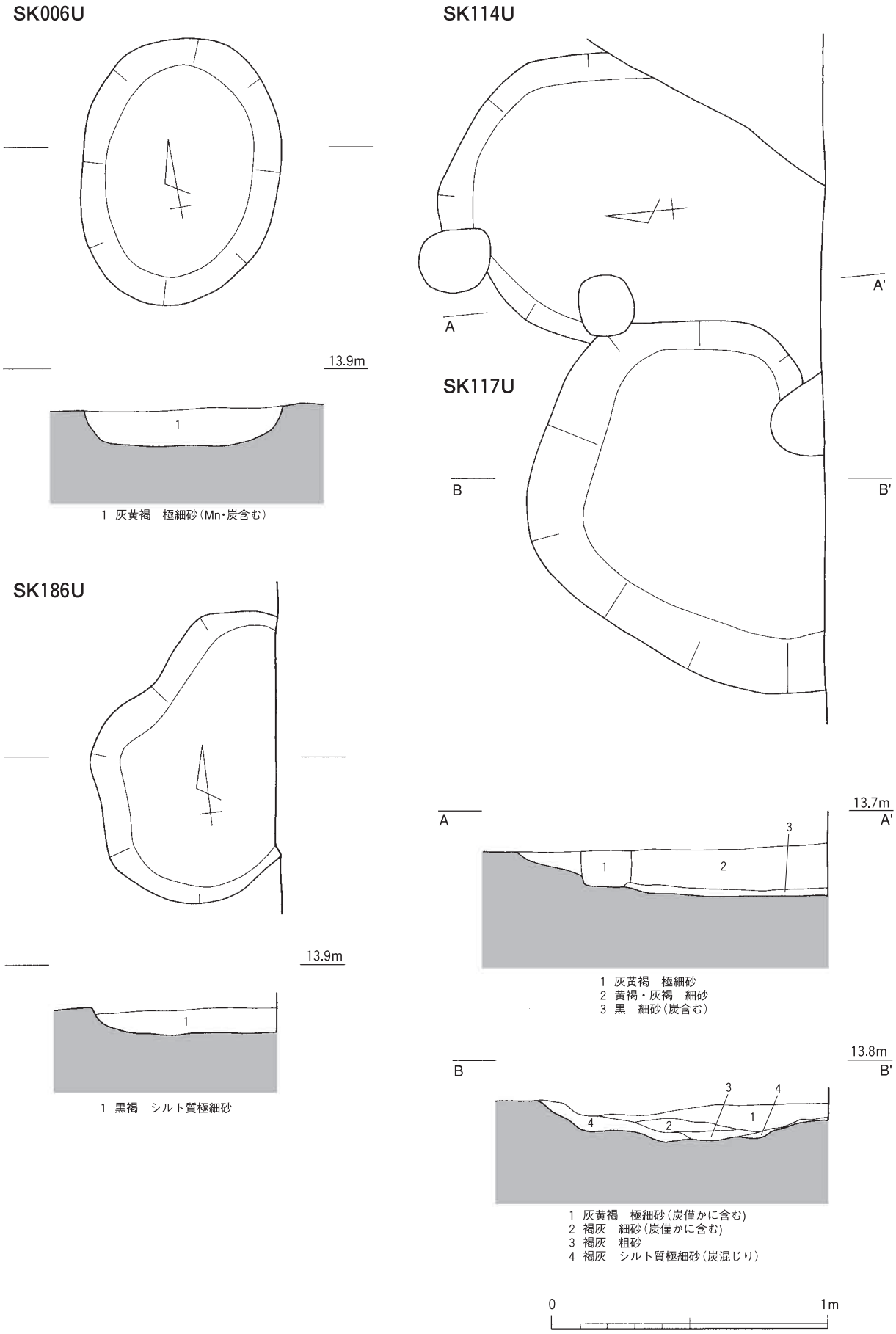
図版9　隅田遺跡　1区　遺構



平面図・南壁断面図（1/50・1/200）

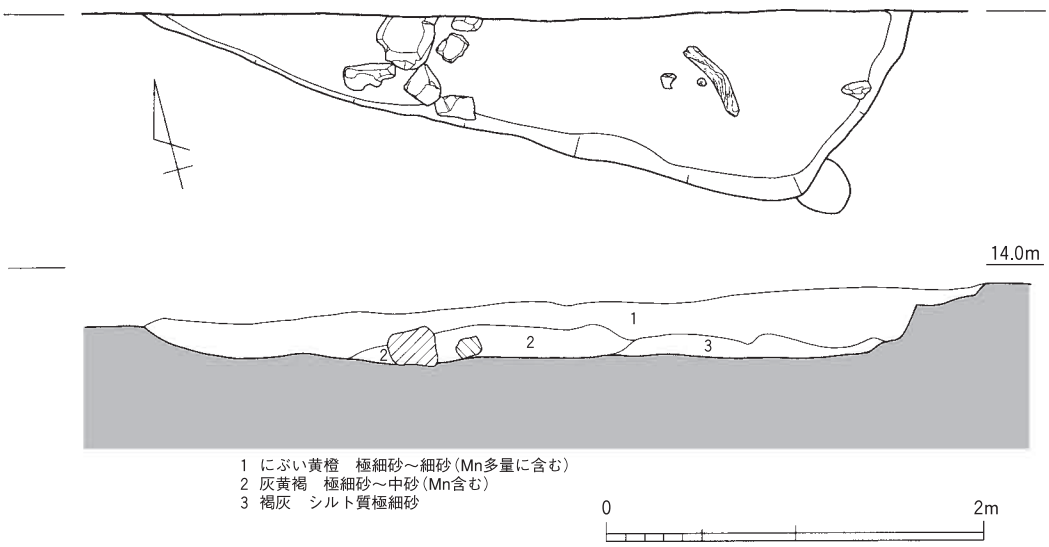
図版10　隅田遺跡　1区　遺構

平面図・南壁断面図（1/50・1/200）



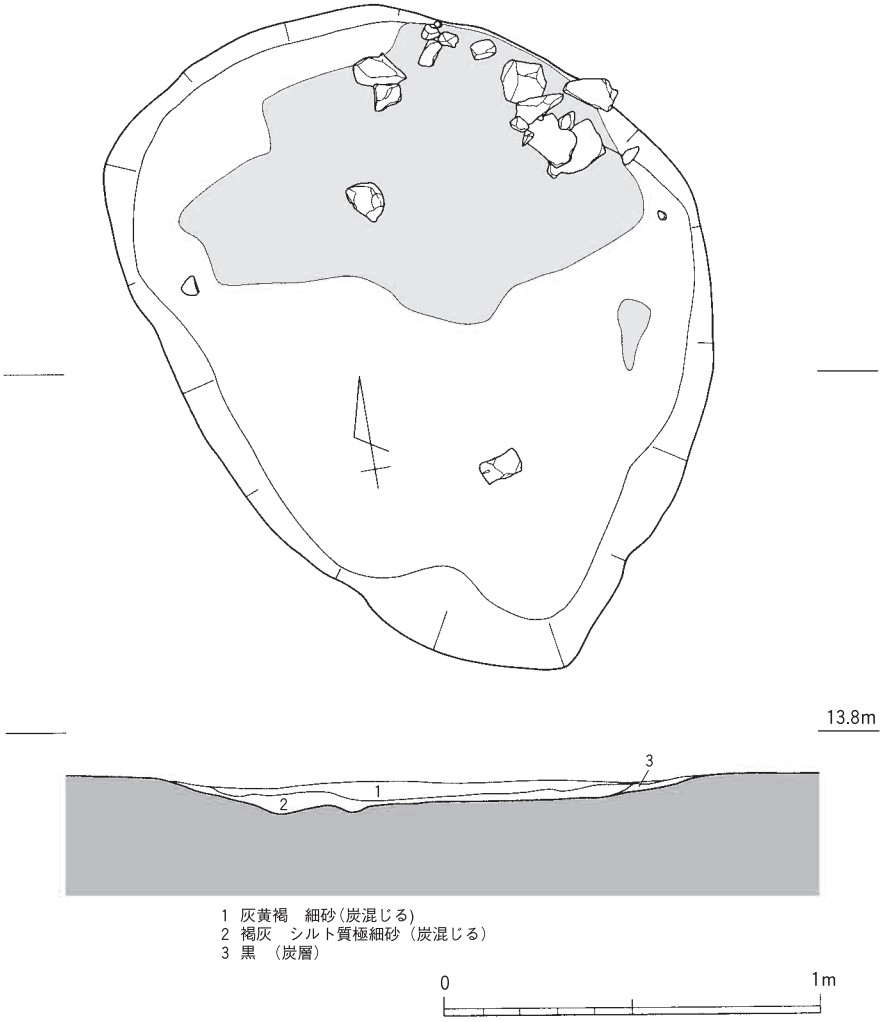
土坑SK006U・SK114U・SK117U・SK186U（1/20）

SK154U



1 にぶい黄橙　極細砂～細砂（Mn多量に含む）
2 灰黄褐　極細砂～中砂（Mn含む）
3 褐灰　シルト質極細砂

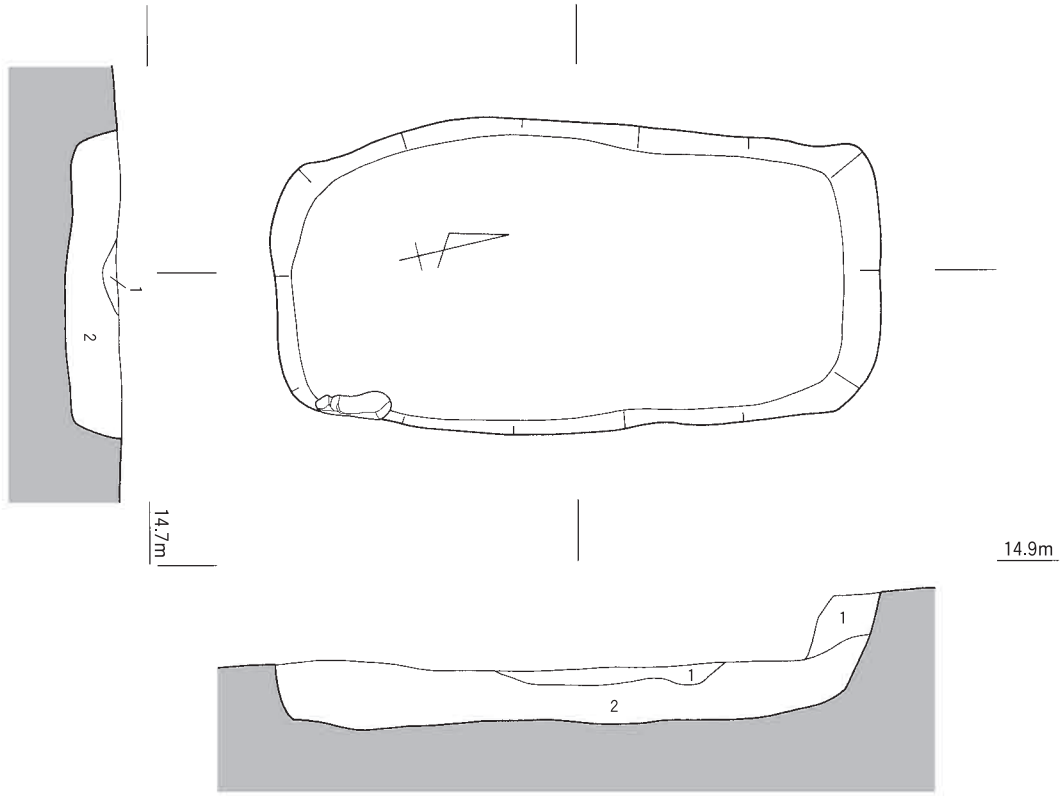
SK124U



1 灰黄褐　細砂（炭混じる）
2 褐灰　シルト質極細砂（炭混じる）
3 黒　（炭層）

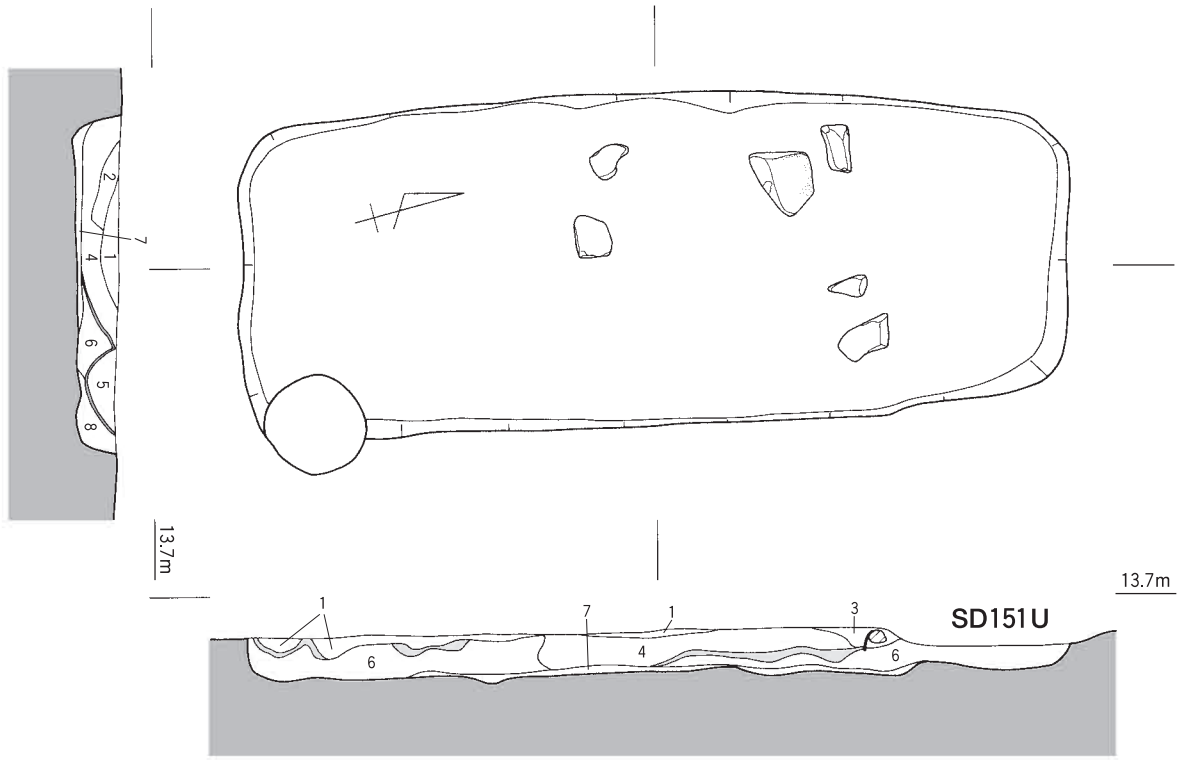
土坑SK154U（1/40）　SK124U（1/20）

ST156U



1　黒褐　シルト混極細砂～粗砂（極粗砂～細礫僅かに含む）
2　黄褐　極細砂質シルト（黄褐ブロック・炭含む）

ST150U

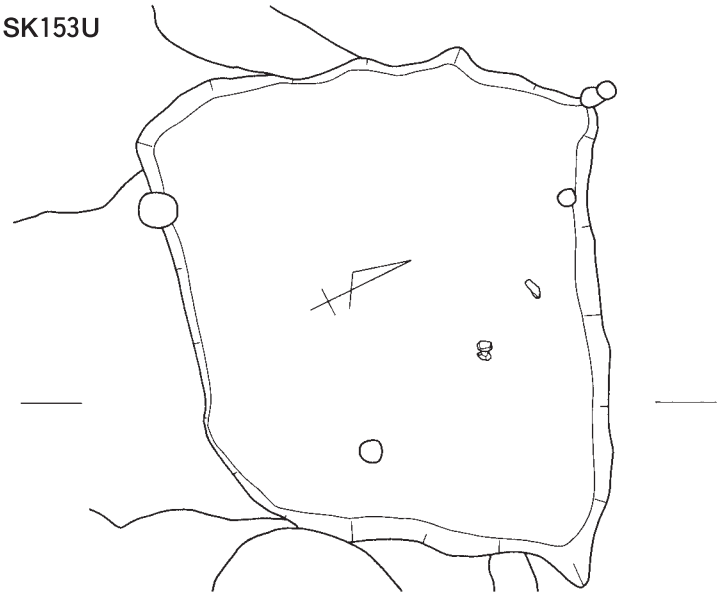


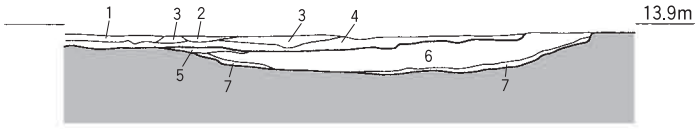
1　黄灰　極細砂～粗砂
2　黄褐　シルト質極細砂（粗砂とシルトの相互ブロック状、炭化物粒を含む）
3　灰黄褐　細砂～粗砂
4　暗灰黄　粗砂～極粗砂粒含む
5　褐　シルト質極細砂（暗赤褐シルトブロックと炭化物含む黒褐極細砂ブロックを含む）
6　にぶい黄褐シルト質極細砂と黒褐極細砂～シルトの相互ブロック
7　黄灰　シルト質極細砂
8　黄灰　細砂（にぶい黄褐シルト質極細砂ブロックを多量に含む）

0　1m

土坑ST156U・ST150U（1/20）

SK153U

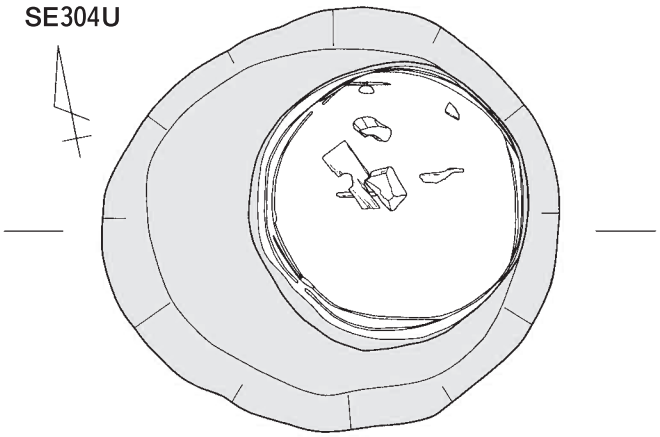


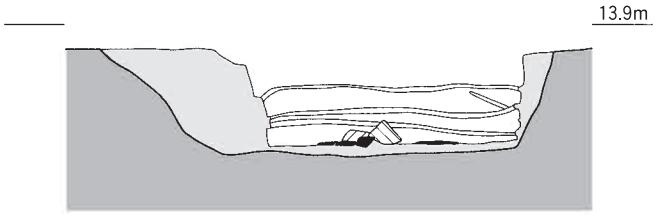


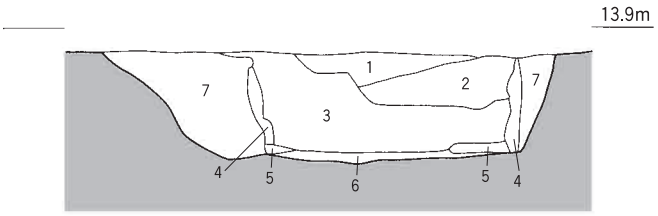
1　灰黄　細砂～粗砂［SD302］
2　灰黄　細砂～粗砂［SD303］
3　暗灰黄　極細砂～粗砂
4　黒褐　シルト質極細砂
5　黒褐　シルト質極細砂（炭粒含む）
6　黄褐　シルト質極細砂（基盤層のブロック含む）
7　黒褐　極細砂～細砂

0　2m

SE304U



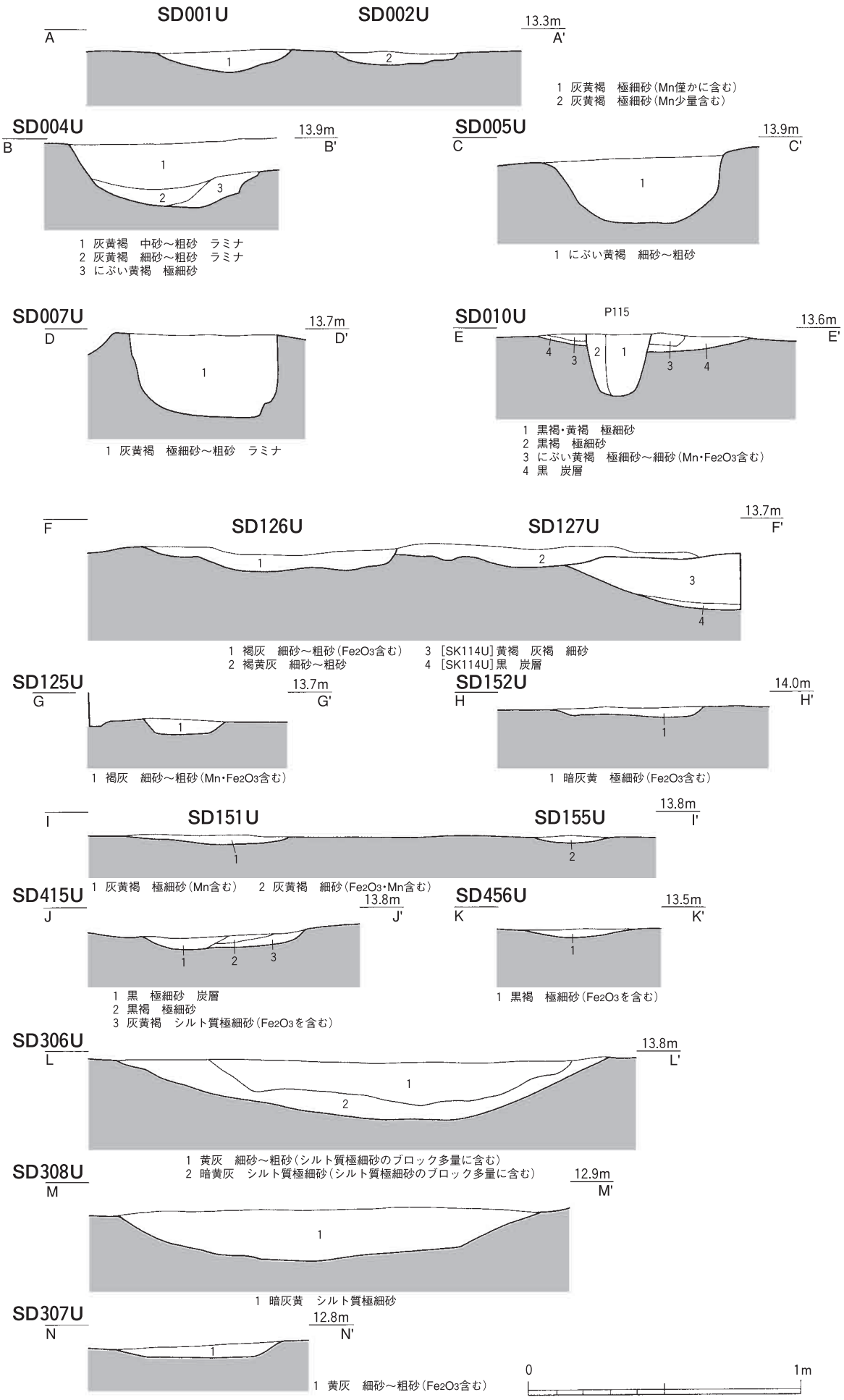




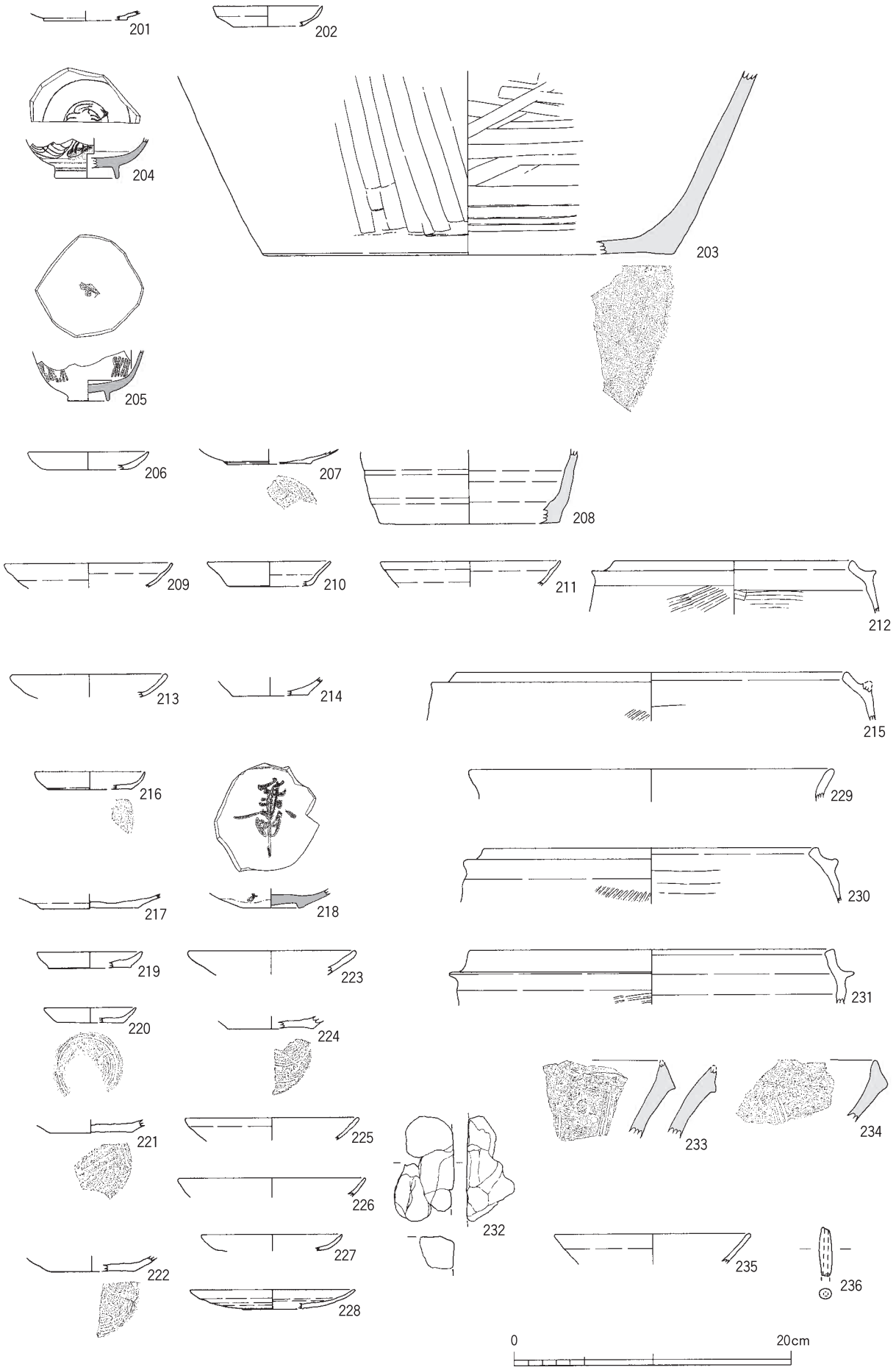
1　黄灰　シルト質極細砂～粗砂（にぶい黄シルト質極細砂ブロック含む）
2　暗灰黄　シルト質細砂～粗砂（Fe_2O_3・Mn斑を含む）
3　7層が流入
4　黄灰・暗灰黄　シルト質極細砂　木枠（桶の腐朽痕）
5　黄灰　シルト質極細砂
6　黄灰・暗灰黄　シルト質極細砂　木枠（桶の腐朽痕）
7　にぶい黄シルト質極細砂と黄灰シルト質細砂～粗砂の相互ブロック

0　2m

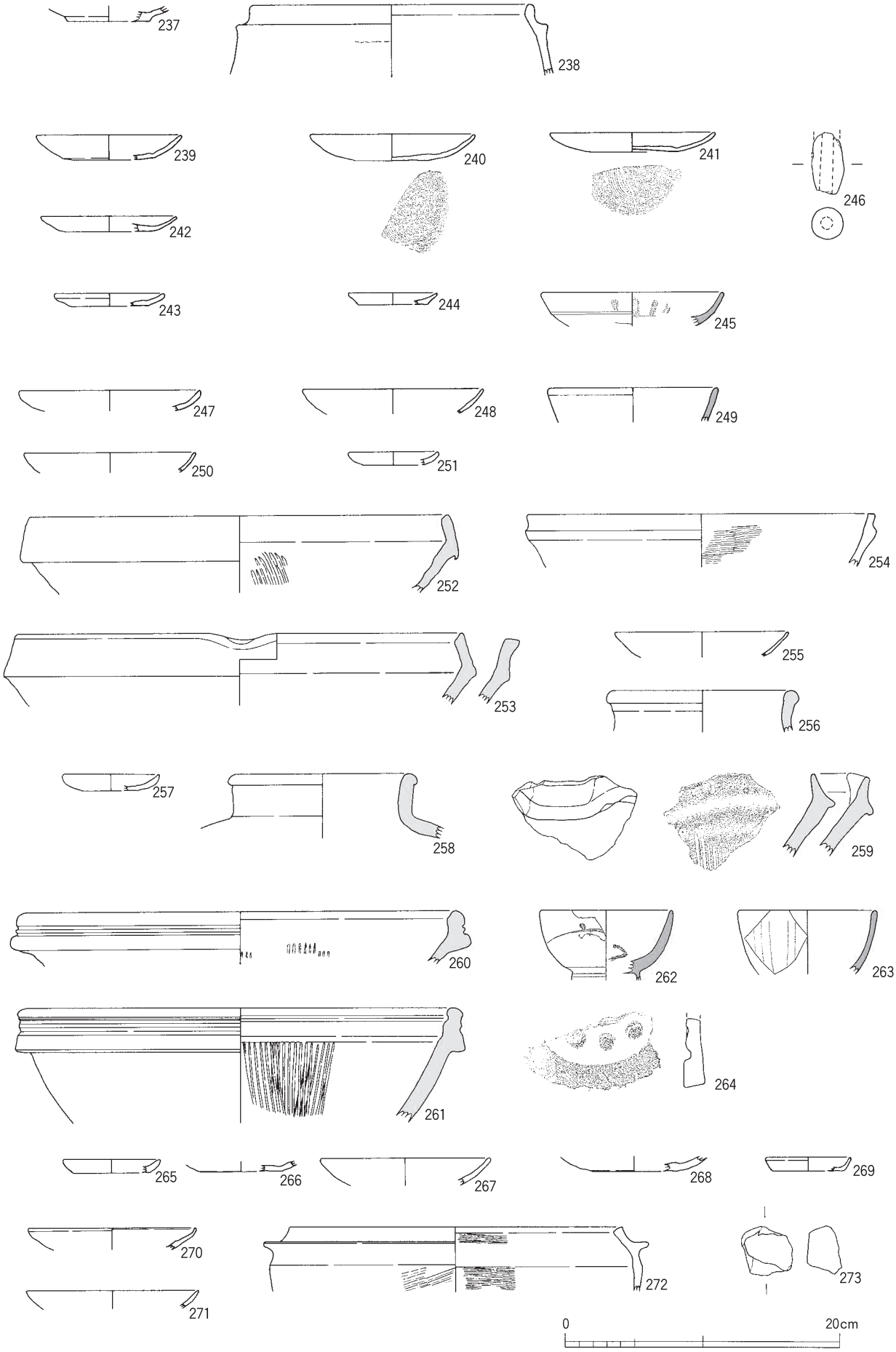
土坑SK153U（1/80）　水溜SE304U（1/40）



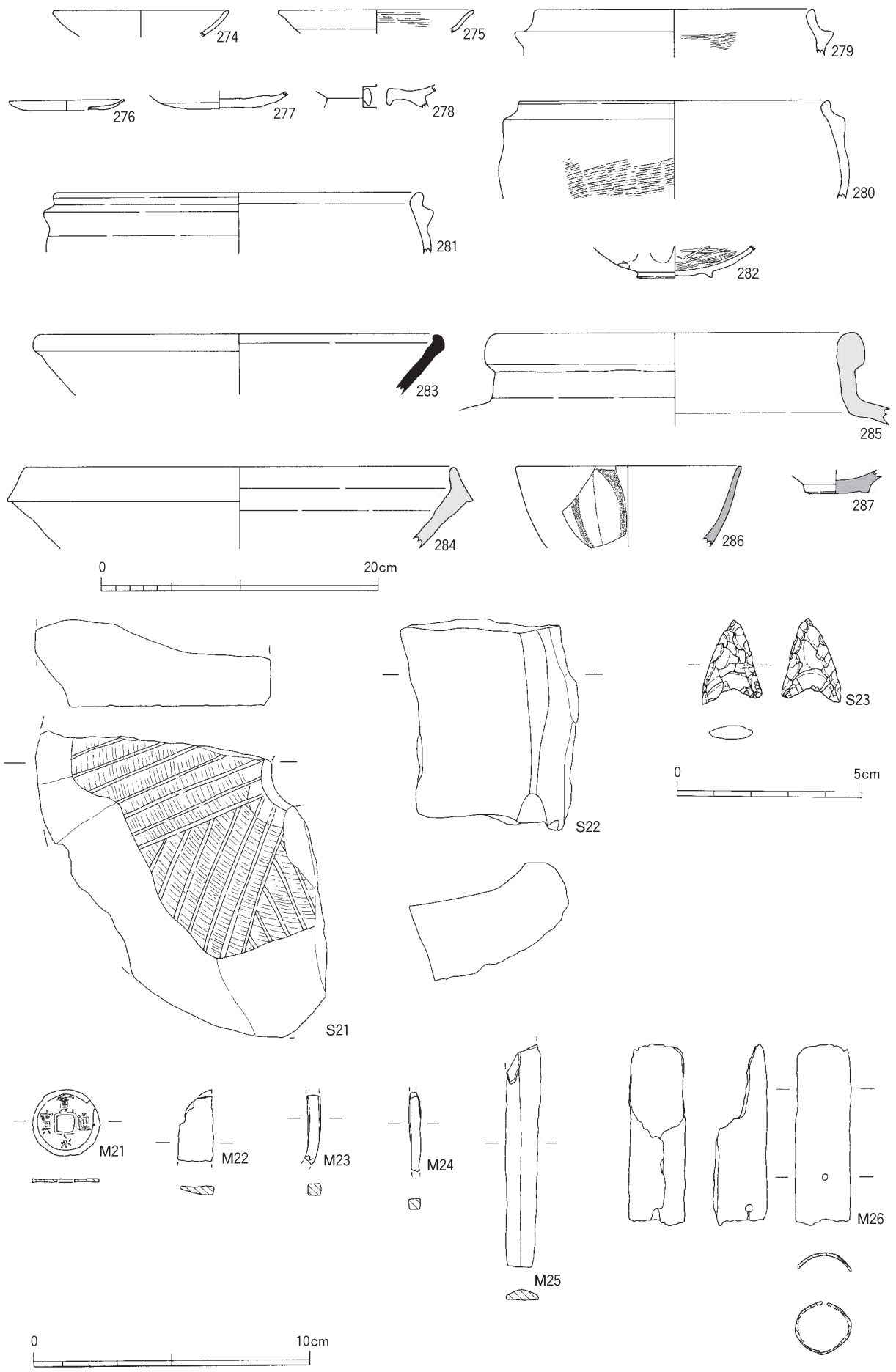
溝SD001U・SD002U・SD004U・SD005U・SD007U・SD010U・SD126U・SD127U・SD125U・SD152U・SD151U・SD155U・SD415U・SD456U・SD306U・SD308U・SD307U（1/20）


201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
0
20cm

土器１（201～236）

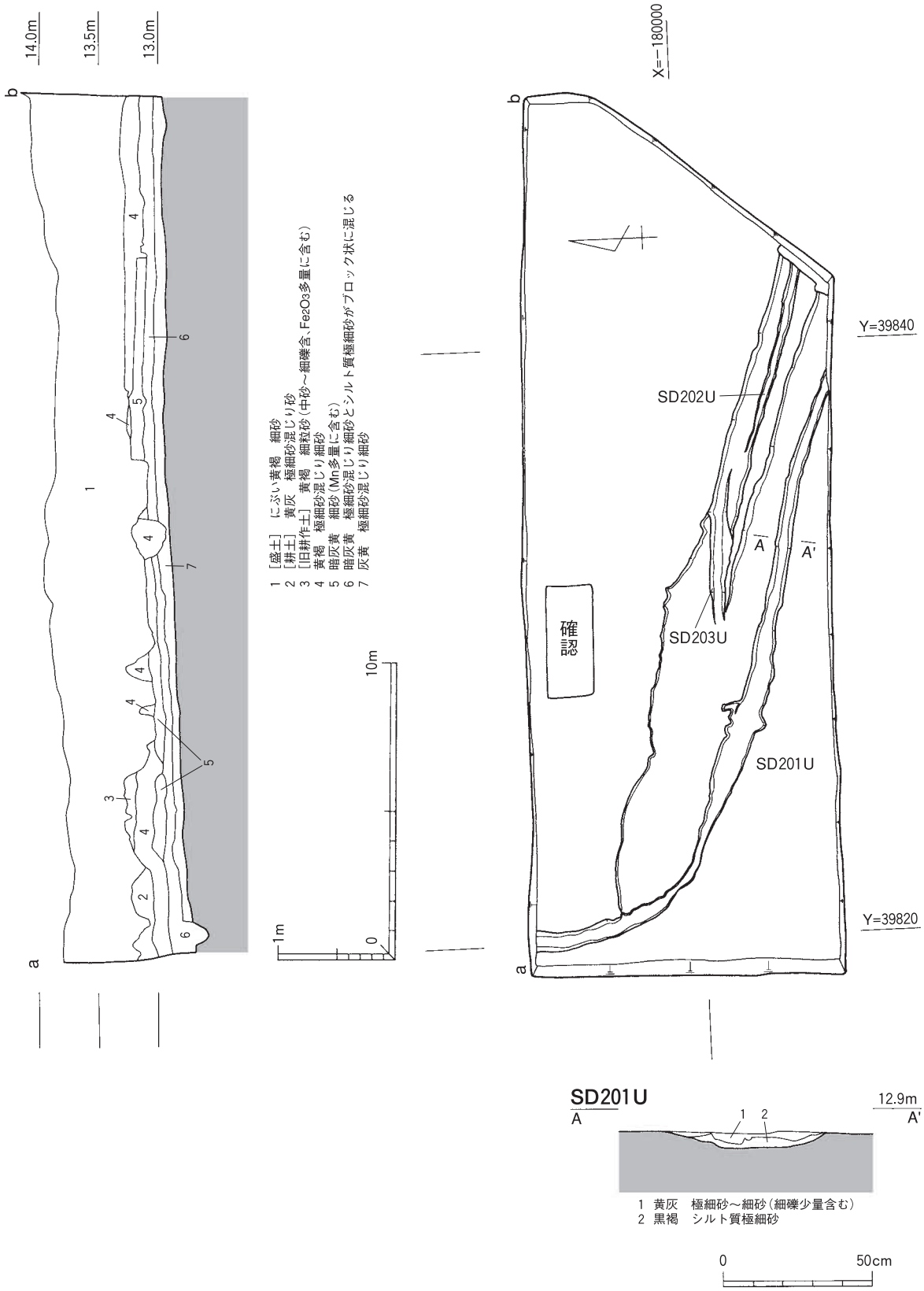

237
238
239
240
241
246
242
243
244
245
247
248
249
250
251
252
254
253
255
256
257
258
259
260
262
263
261
264
265
266
267
268
269
270
272
273
271
0
20cm

土器２（237～273）

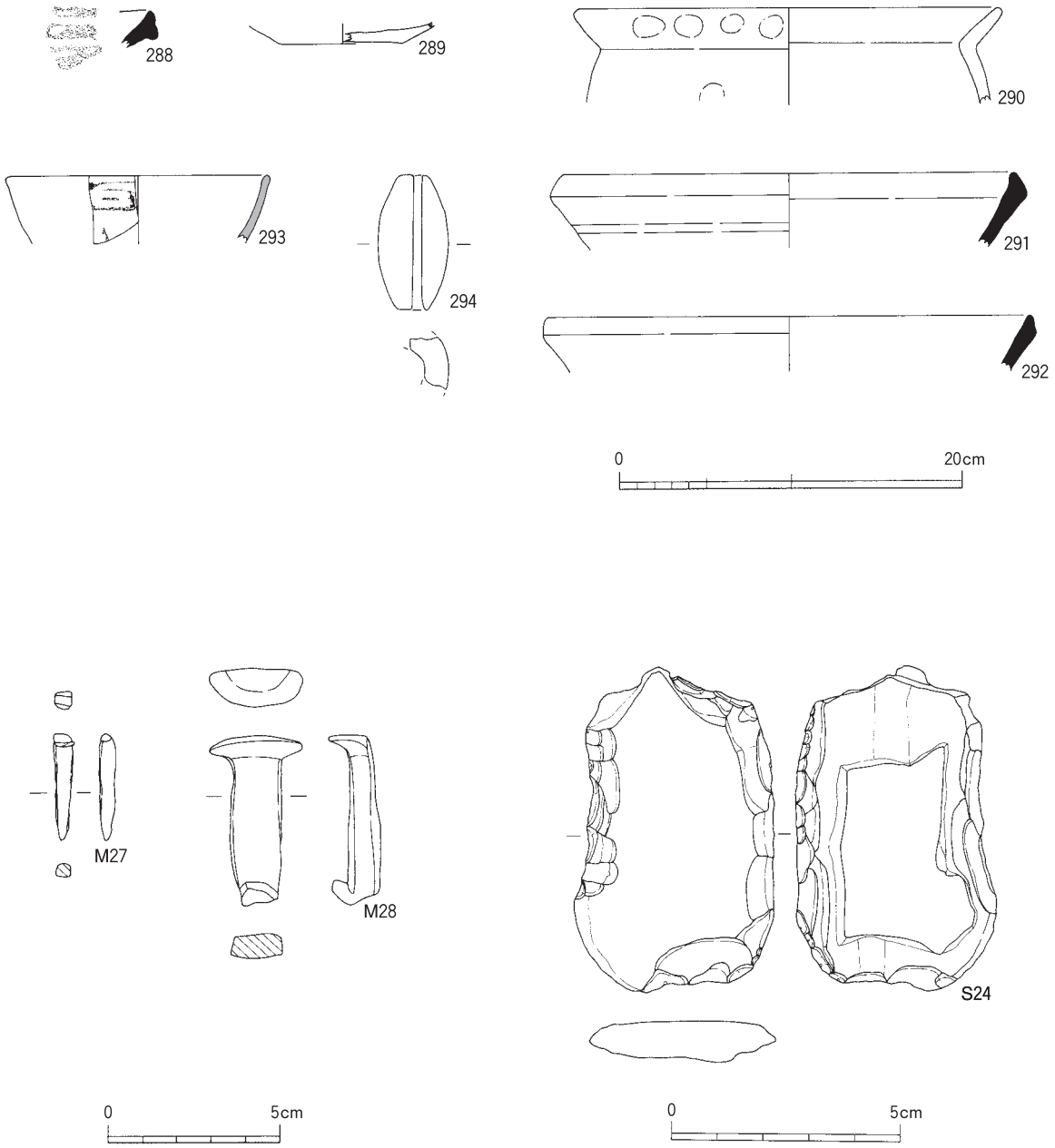


土器３・石器・金属器（274～287・S21～S23・M21～M26）

図版19　隅田遺跡　2区　遺構

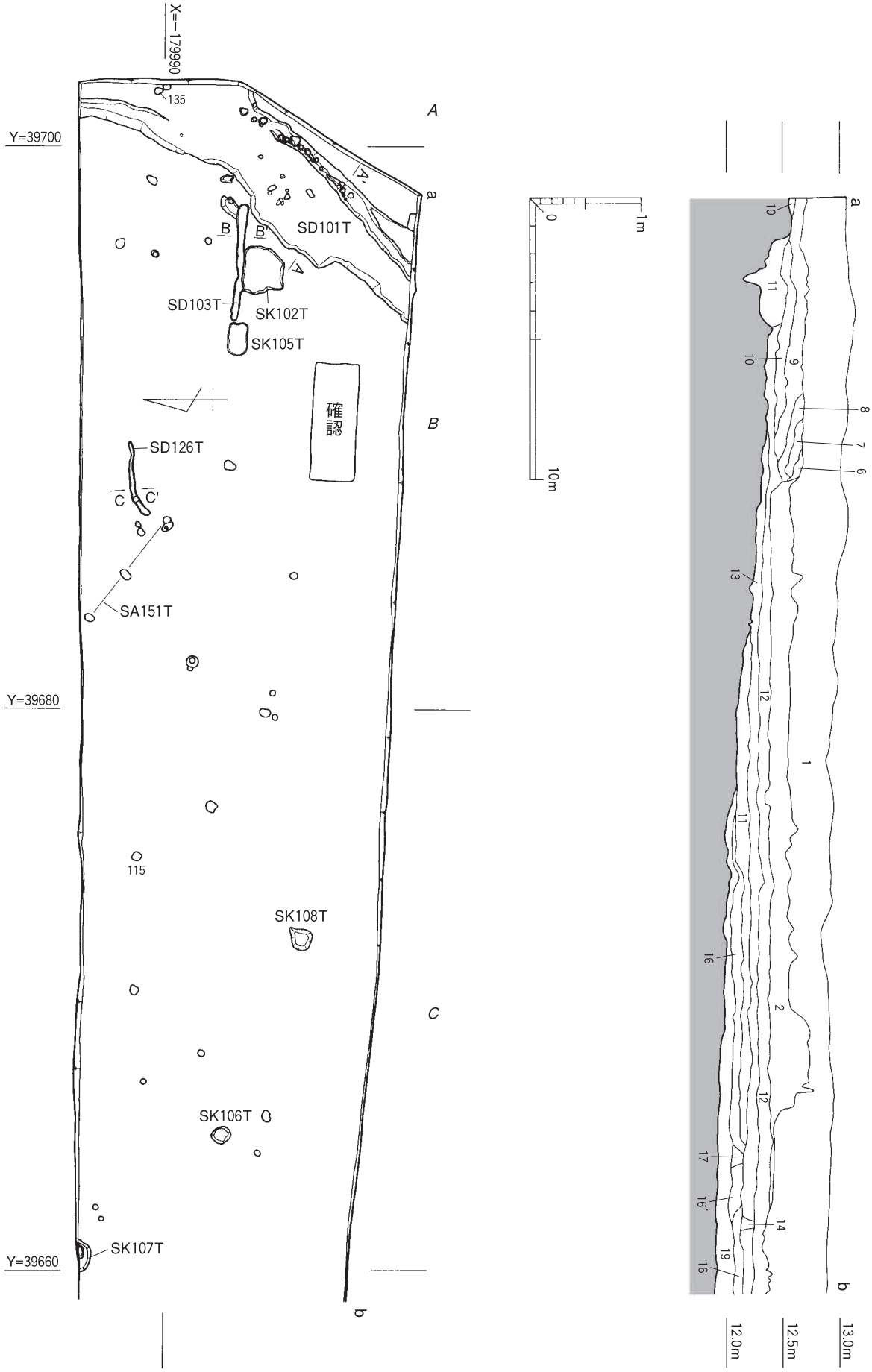


平面図・北壁断面（1/50・1/200）　SD201U（1/20）



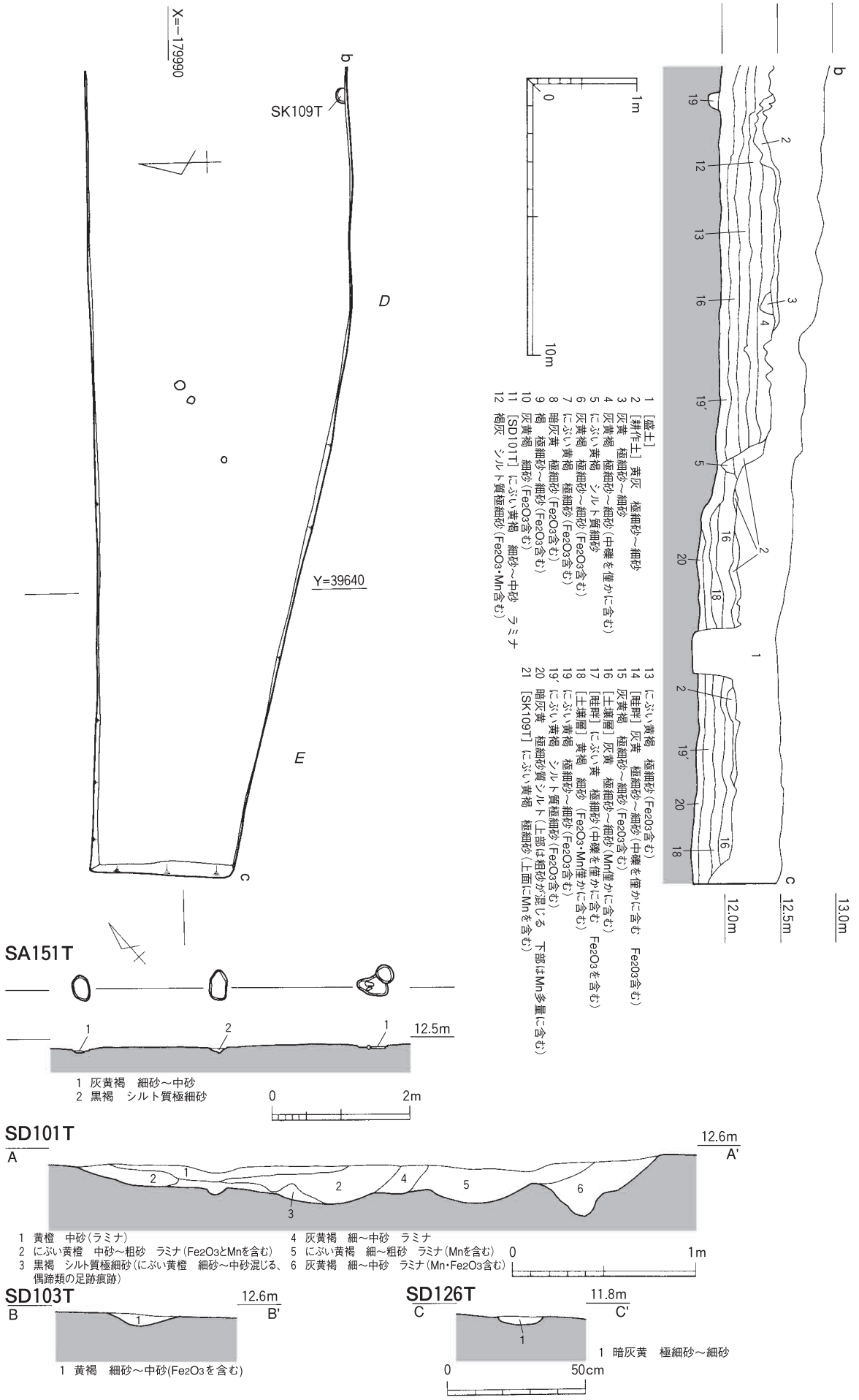
土器・石器・金属器（288～294・S24・M27・M28）

図版21　竹ノ鼻遺跡　1区　遺構



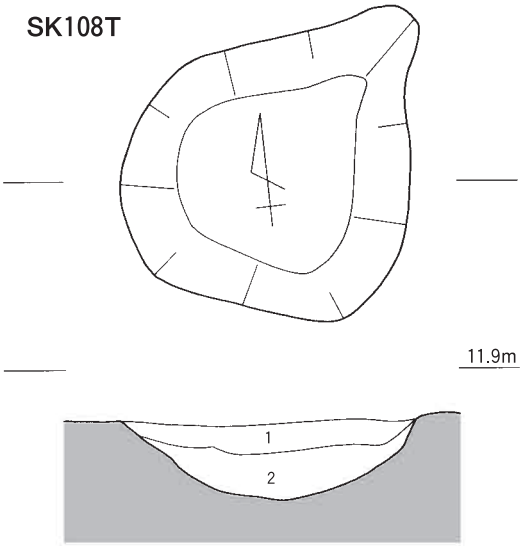
平面図・南壁断面図（1/50・1/200）

図版22　竹ノ鼻遺跡　1区　遺構



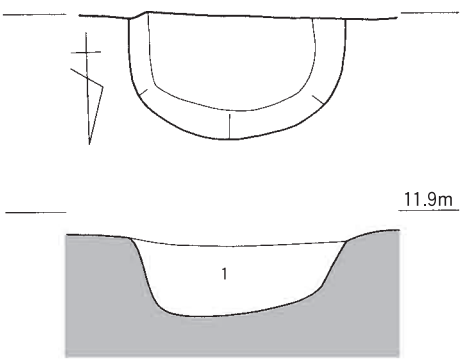
平面図・南壁断面図（1/50・1/200）　柵列SA151T（1/80）　溝SD101T（1/30）　SD103T・SD126T（1/20）

SK108T



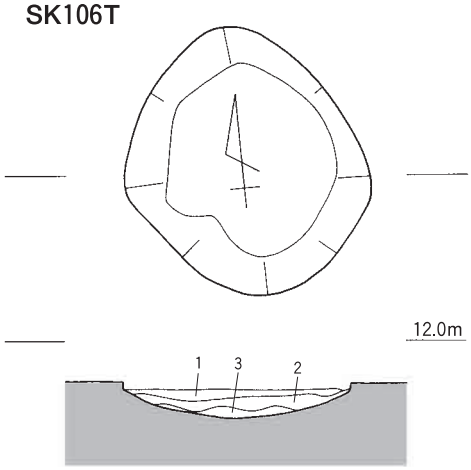
1　灰黄褐　シルト質極細砂（上部にFe_2O_3）
2　暗黄褐　シルト質極細砂（下部に細砂～中砂のラミナ）

SK109T



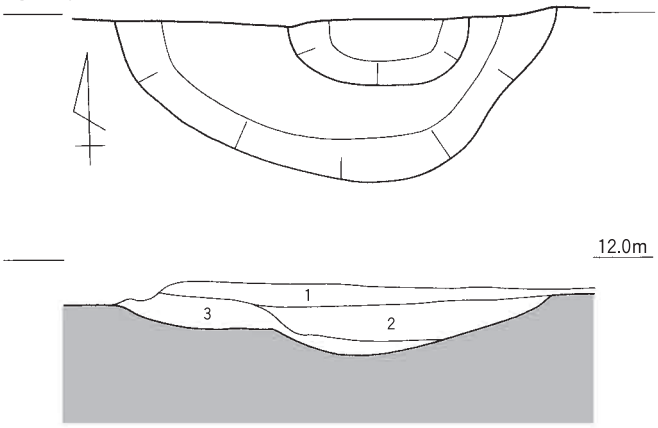
1　にぶい黄褐　極細砂（上にMn）

SK106T



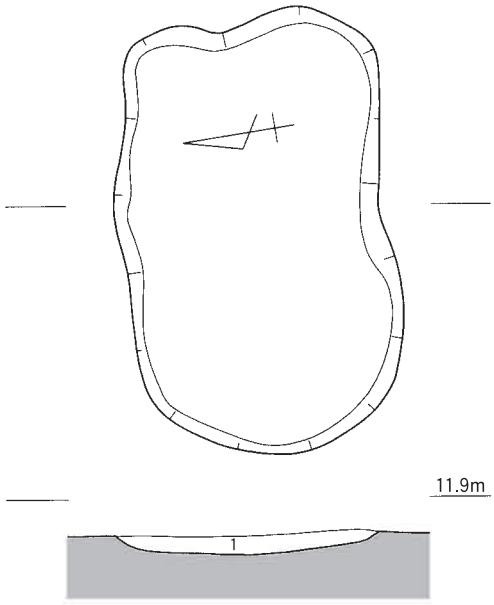
1　灰黄褐　極細砂（Mn含）
2　灰黄褐　細砂～粗砂
3　黒褐　極細砂（Mn含）

SK107T



1　にぶい黄褐　シルト質極細砂（Fe_2O_3含む）
2　灰黄褐　細砂～粗砂
3　黒褐　極細砂（Mn含）

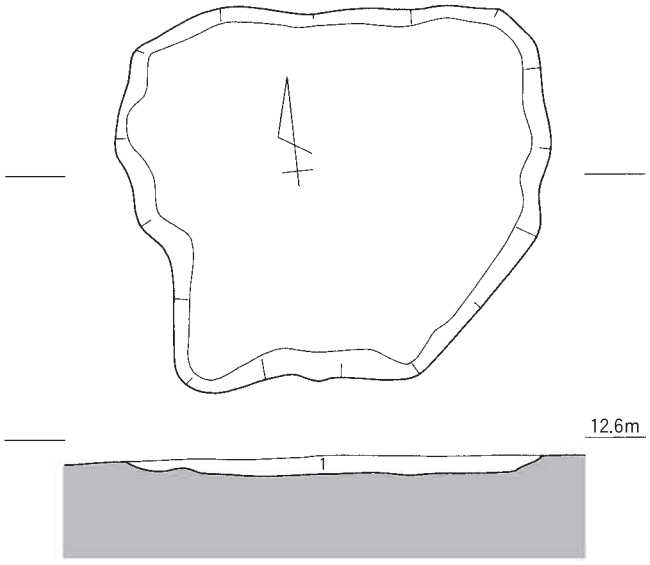
SK105T



1　暗灰　極細砂

0　50cm

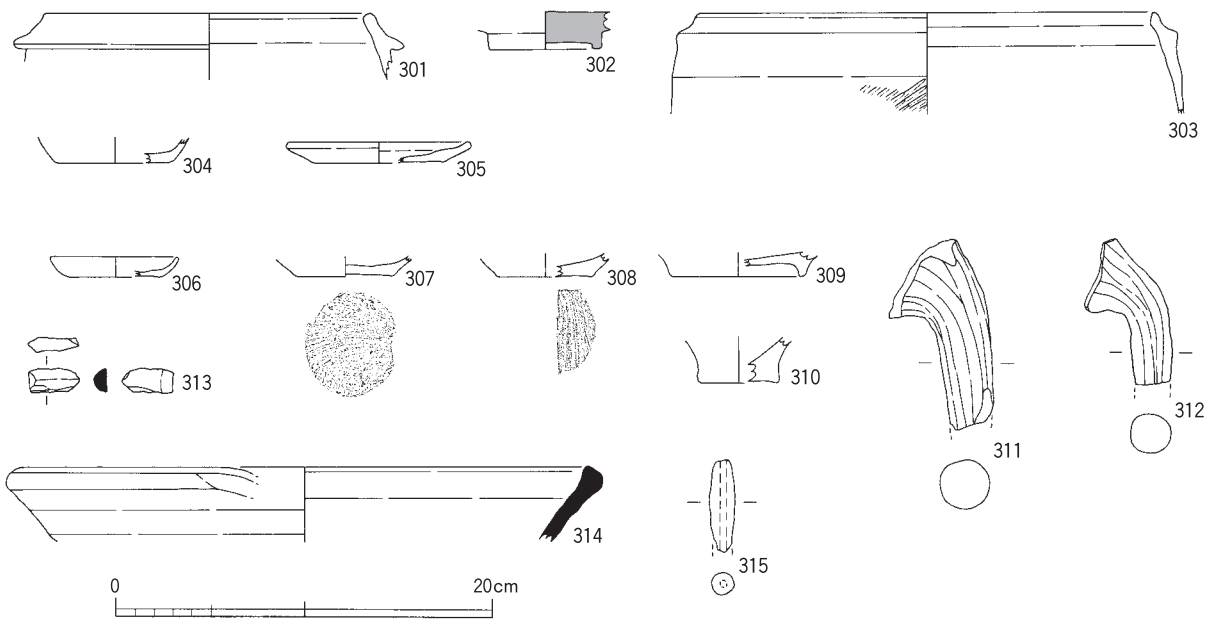
SK102T

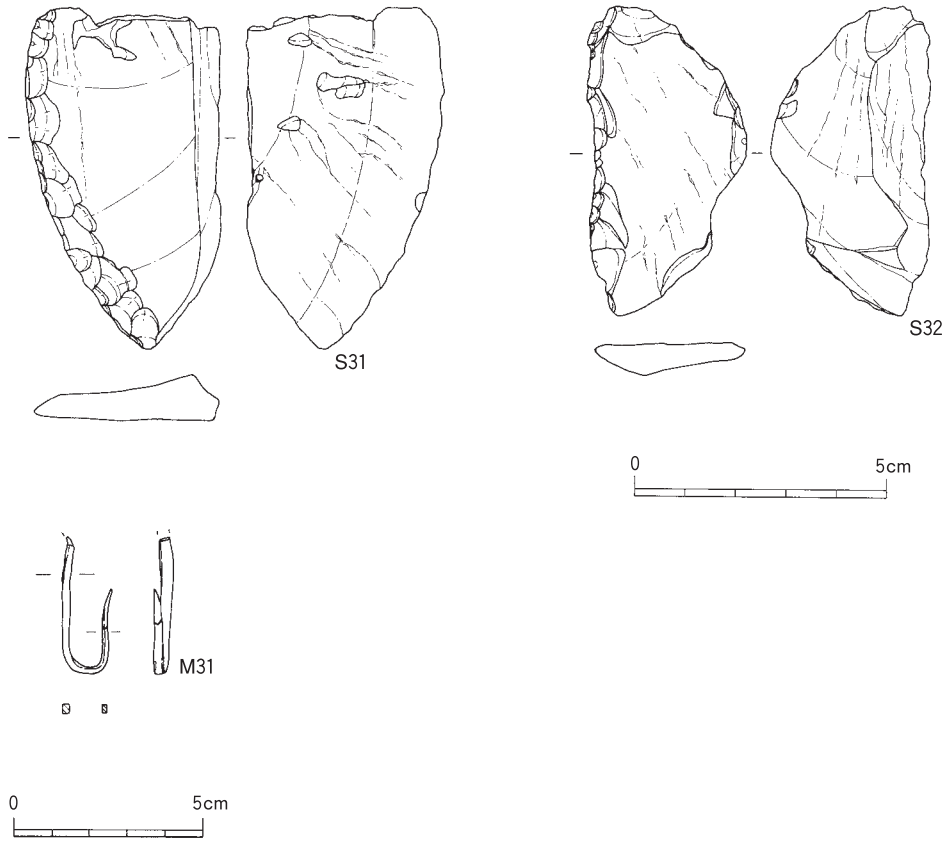


1　暗灰褐　細砂～中砂（オリーブ黒　シルト質極細砂混じる）

0　1m

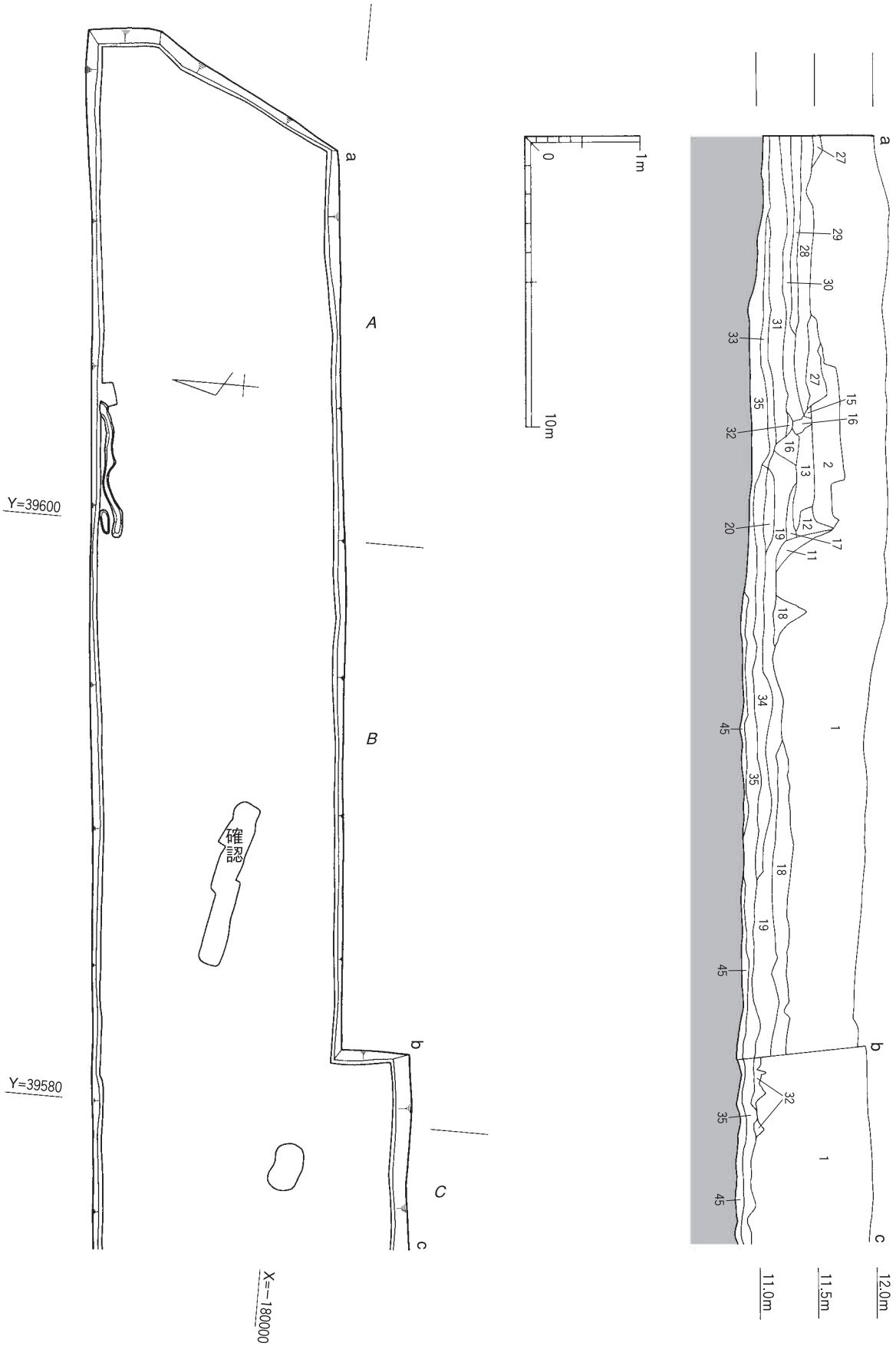
土坑SK108T・SK109T・SK106T・SK107T・SK105T（1/20）　SK102T（1/30）





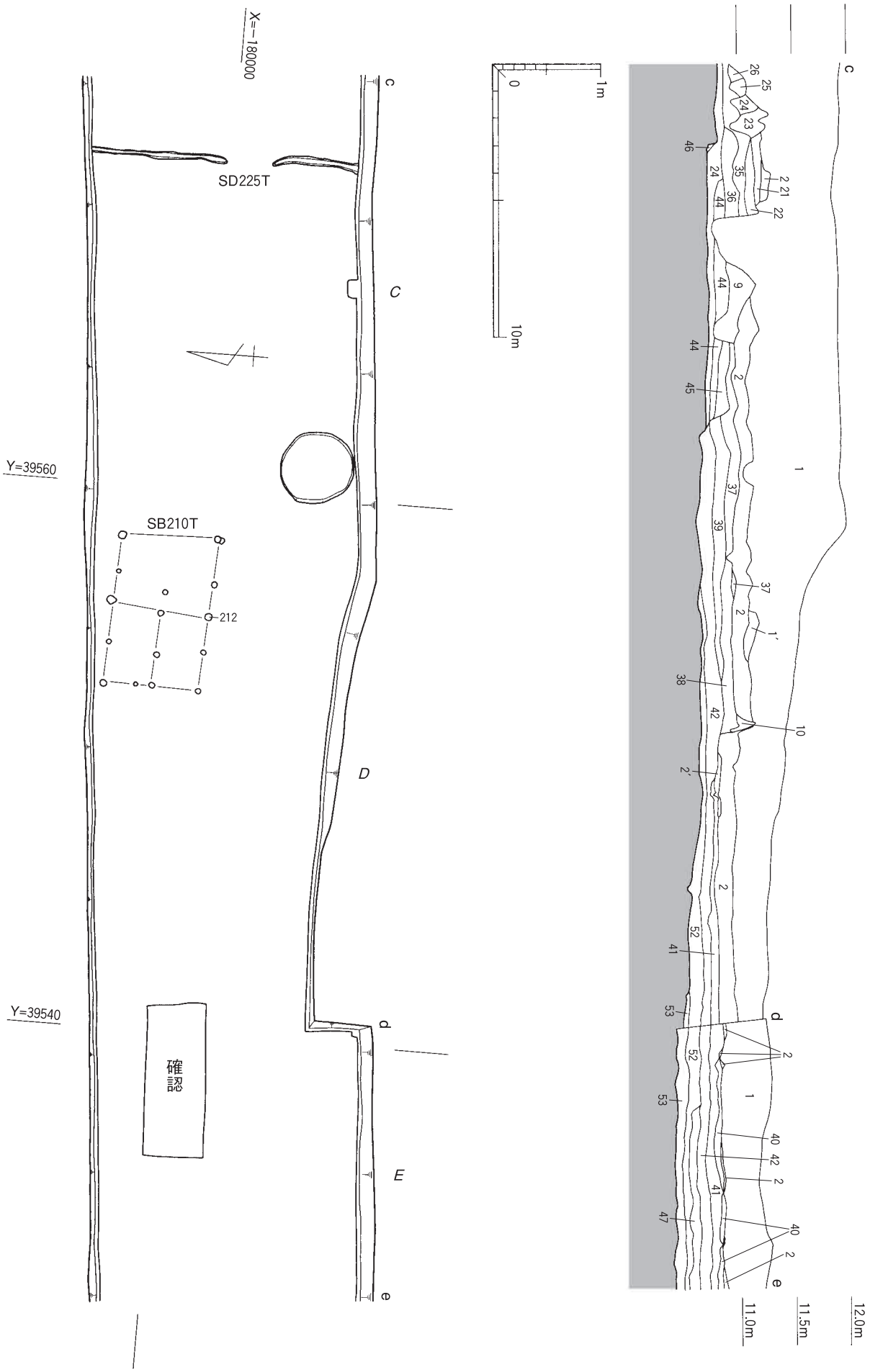
土器・石器・金属器（301～315・S31・S32・M31）

図版25　竹ノ鼻遺跡　2区　遺構



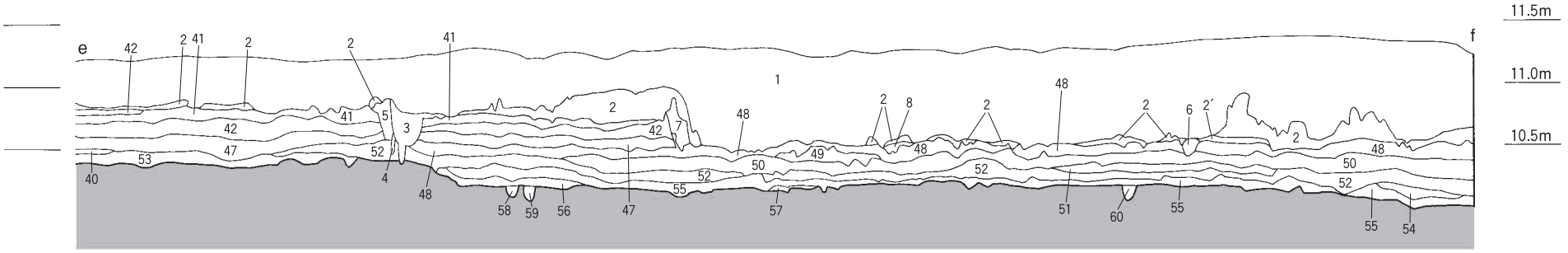
平面図・南壁断面図（1/50・1/200）

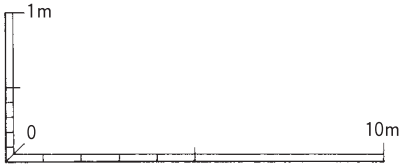
図版26　竹ノ鼻遺跡　2区　遺構



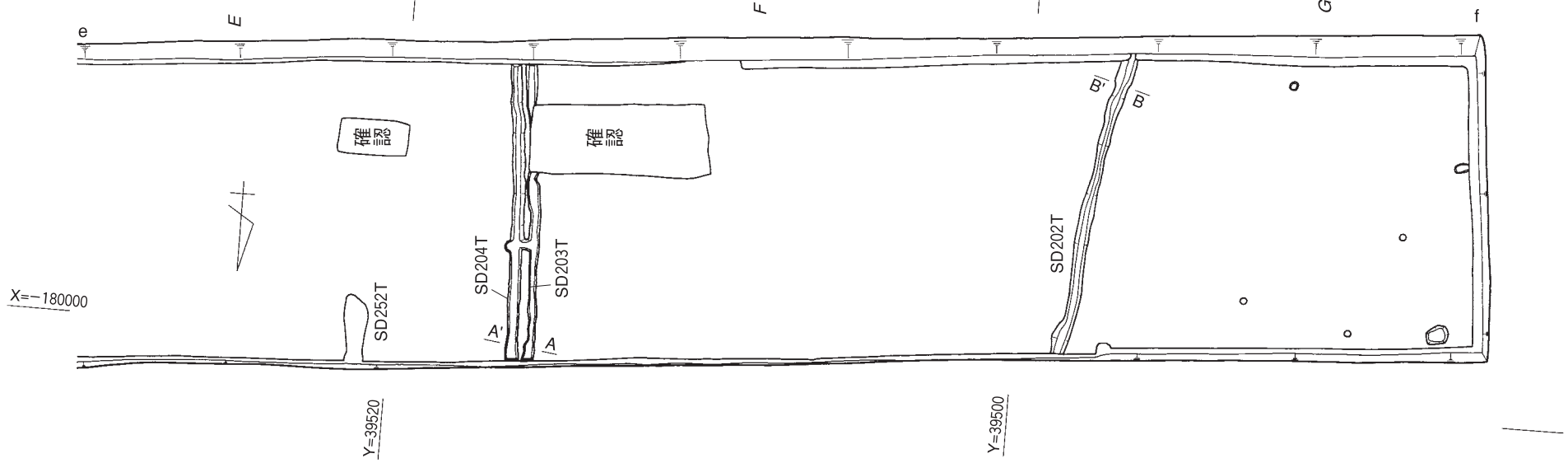
平面図・南壁断面図（1/50・1/200）

図版27　竹ノ鼻遺跡　2区　遺構

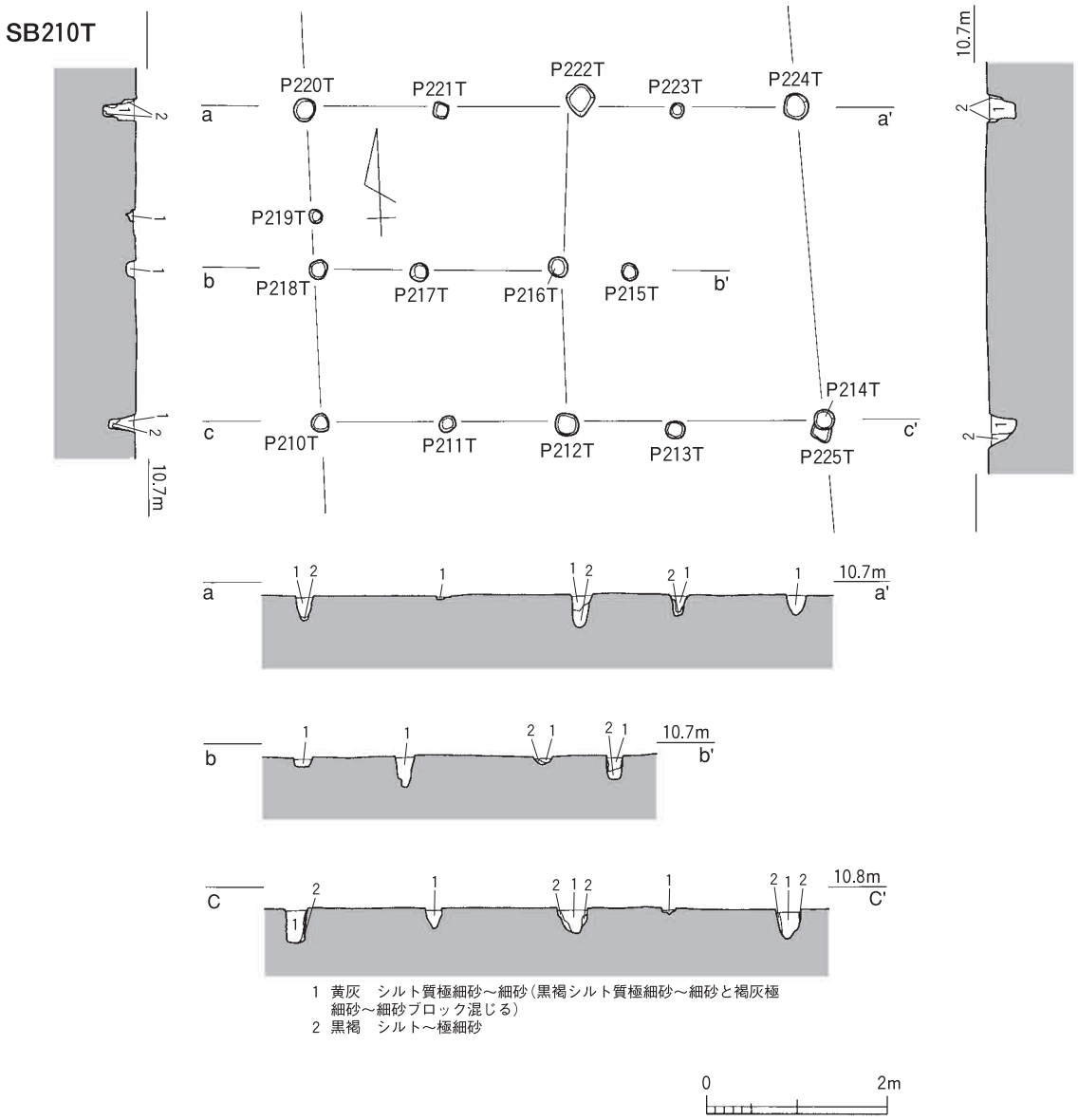


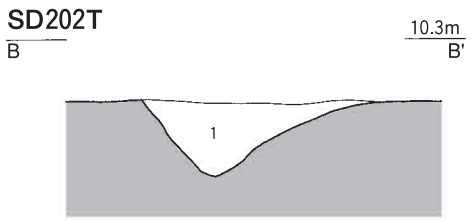


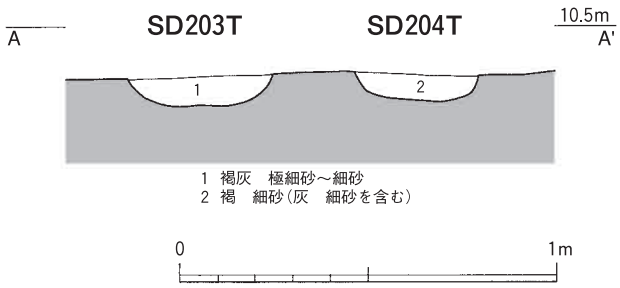
1 ［埋土］
2 ［耕作土］　褐灰　極細砂
3 ［圃場整備前の水路］にぶい黄橙　細砂～小礫　ラミナ
4 ［杭の痕跡］にぶい黄褐　極細砂
5 ［SD231］にぶい黄橙　極細砂～中砂
6 にぶい黄褐　細砂～極細砂
7 灰黄　細砂～粗砂
8 灰黄褐　極細砂
9 灰黄　極細砂
10 にぶい黄橙　極細砂（Fe_2O_3含む）
11 にぶい黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
12 にぶい黄橙　極細砂（Fe_2O_3含む）
13 にぶい黄橙　極細砂
14 灰黄褐　極細砂
15 灰黄褐　極細砂～細砂
16 にぶい黄橙　極細砂～細砂（Mn含む）
17 にぶい黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
18 にぶい黄橙　極細砂（Fe_2O_3含む）
19 にぶい黄　極細砂（Fe_2O_3・Mn含む）
20 灰黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
21 黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
22 にぶい黄橙　極細砂～中砂（Fe_2O_3含む）
23 にぶい黄橙　細砂（Fe_2O_3含む）［溝］
24 にぶい黄橙　極細砂～中砂　ラミナ（Fe_2O_3含む）
25 にぶい黄橙　細砂～粗砂　ラミナ
26 灰黄褐　極細砂
27 灰黄褐　極細砂（Fe_2O_3多量に含む）
28 灰黄褐　極細砂～細砂（Fe_2O_3含む）
29 灰黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
30 にぶい黄橙　極細砂（Fe_2O_3含む）
31 にぶい黄橙　極細砂
32 黄褐　極細砂（Fe_2O_3多量に含む）
33 灰黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
34 にぶい黄　極細砂（Fe_2O_3・Mn含む）
35 黄褐　極細砂～中砂
36 黄褐　極細砂～中砂（Fe_2O_3含む）
37 明黄褐　極細砂（Fe_2O_3多量に含む）
38 にぶい黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
39 にぶい黄橙　極細砂（Fe_2O_3含む）
40 にぶい黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
41 黄褐　極細砂（Fe_2O_3多量に含む）
42 にぶい黄橙　極細砂（Fe_2O_3含む）
43 にぶい黄褐　極細砂（Mn含む）
44 褐　極細砂
45 にぶい黄褐　極細砂
46 ［SD225T］
47 灰黄　極細砂
48 にぶい黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
49 にぶい黄橙　極細砂（Fe_2O_3含む）
50 にぶい黄橙　極細砂（Fe_2O_3・Mn含む）
51 にぶい黄褐　極細砂（Fe_2O_3多量に含む）
52 灰黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
53 にぶい黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
54 にぶい黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
55 灰黄褐　極細砂（Fe_2O_3含む）
56 にぶい黄橙　極細砂（Fe_2O_3・Mn含む）
57 にぶい黄　細砂
58 ［SD204T］
59 ［SD203T］
60 ［SD202T］



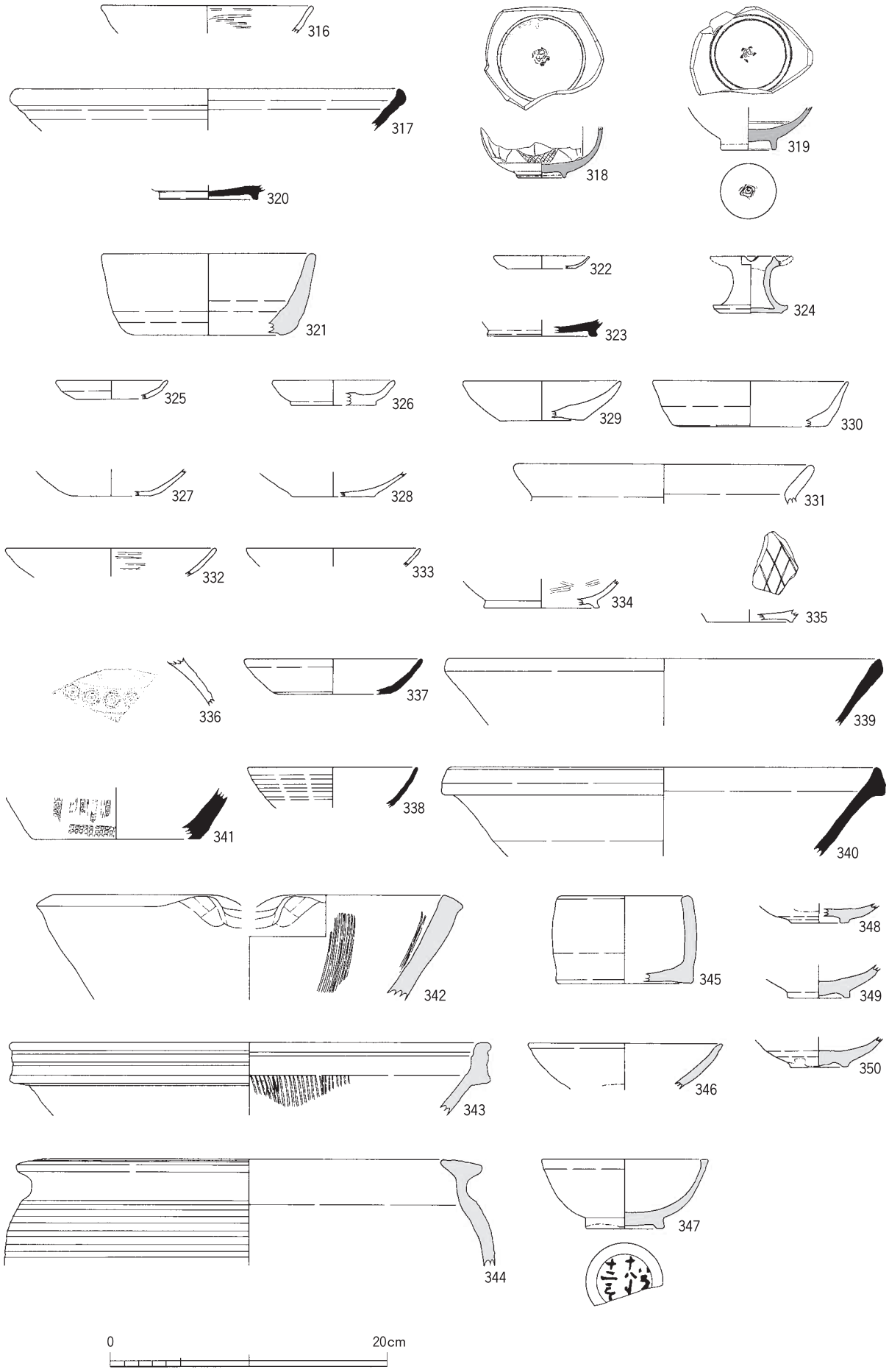
平面図・南壁断面図（1/50・1/200）



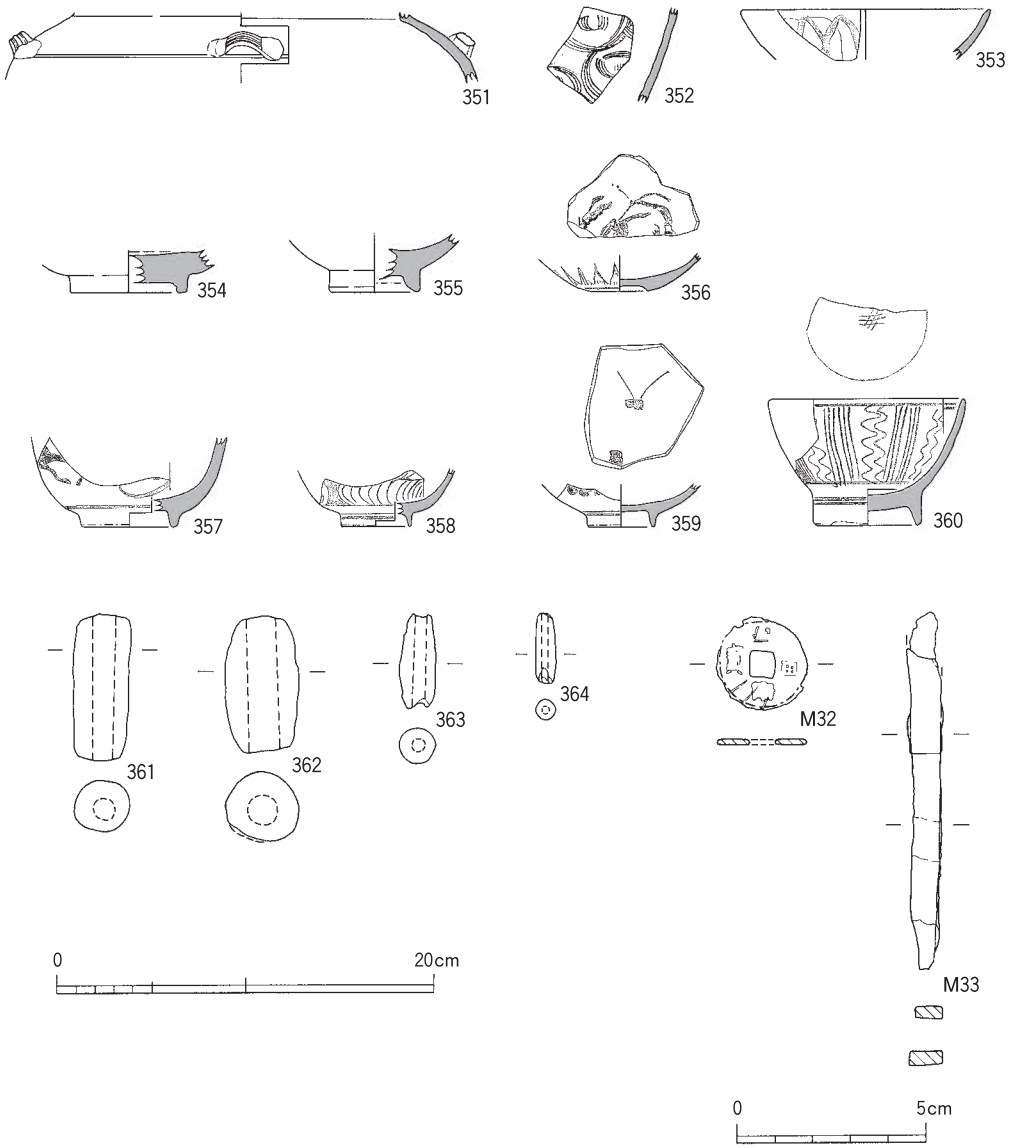




掘立柱建物SB210T（1/80）　溝SD202T・SD203T・SD204T（1/20）


316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
329
330
327
328
331
332
333
334
335
336
337
339
338
341
340
342
345
348
349
343
346
350
344
347
0
20cm

土器１（316～350）



土器２・石器・金属器（351～364・M32・M33）

写真図版

1　調査地　遠景（西から）

2　調査地　遠景（東から）

3　調査地　遠景（北から）

4　調査地　遠景（南から）

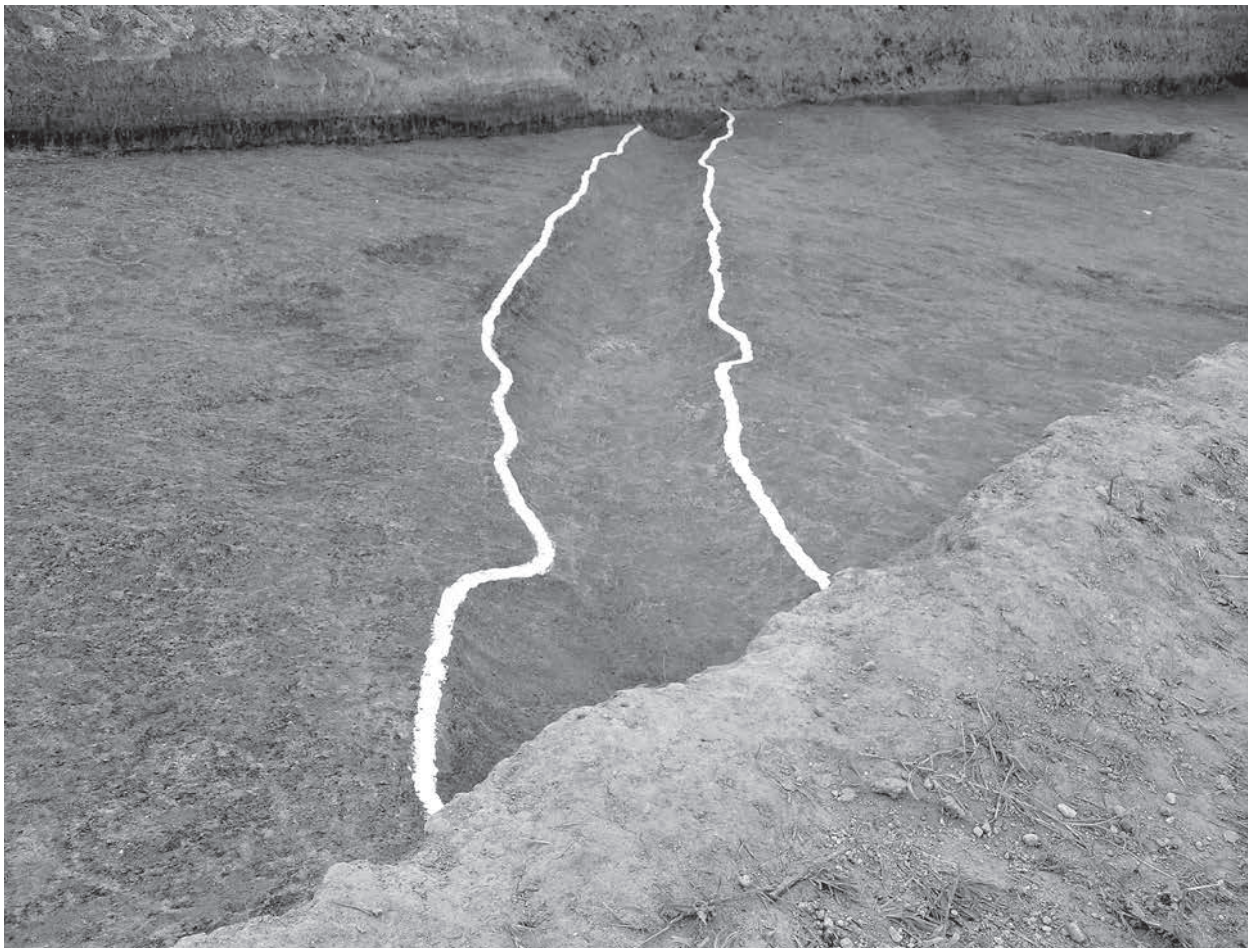
5　白池遺跡から西を望む（東から）

6　隅田遺跡から東を望む（西から）

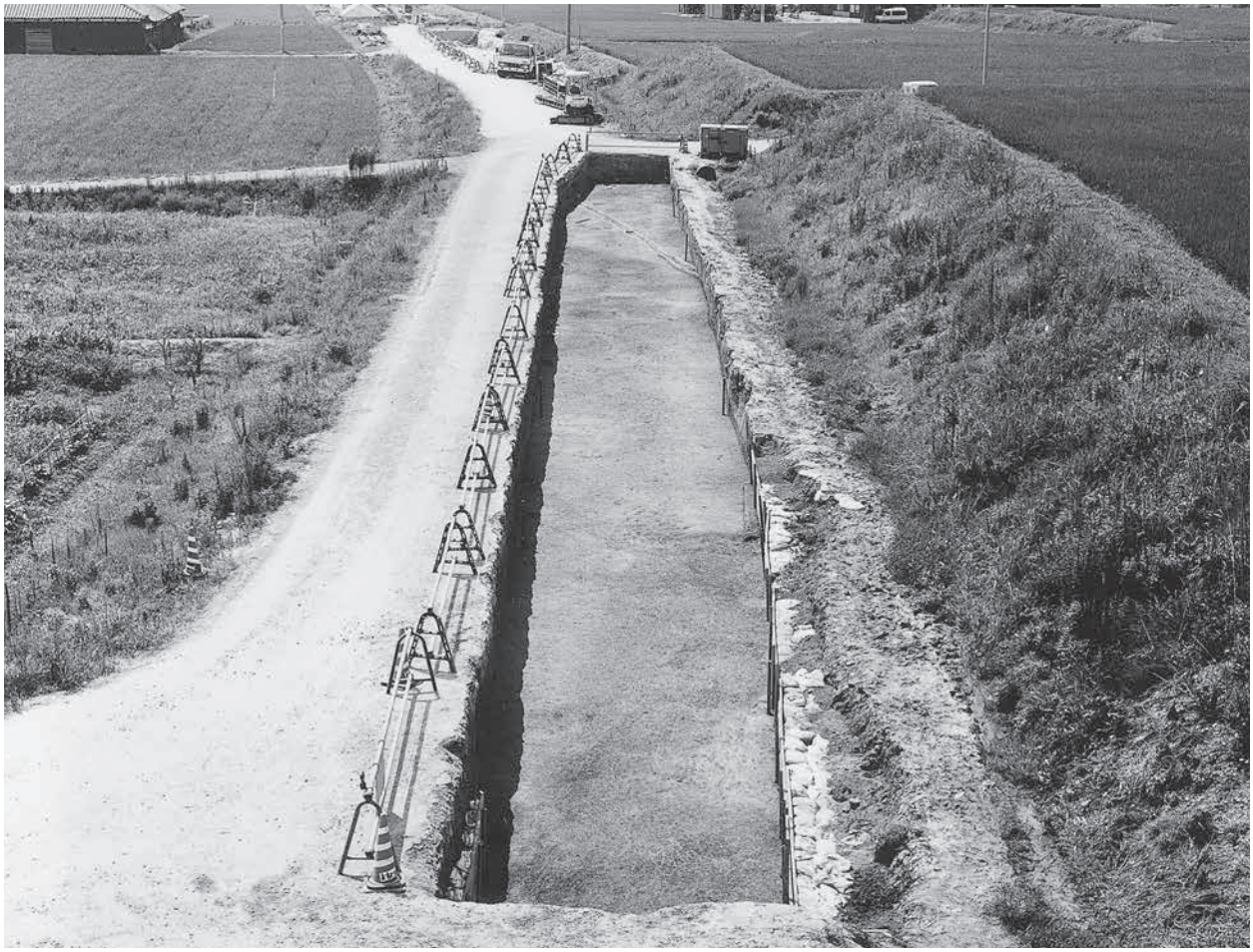
7　竹ノ鼻遺跡から東を望む（西から）

陶磁器

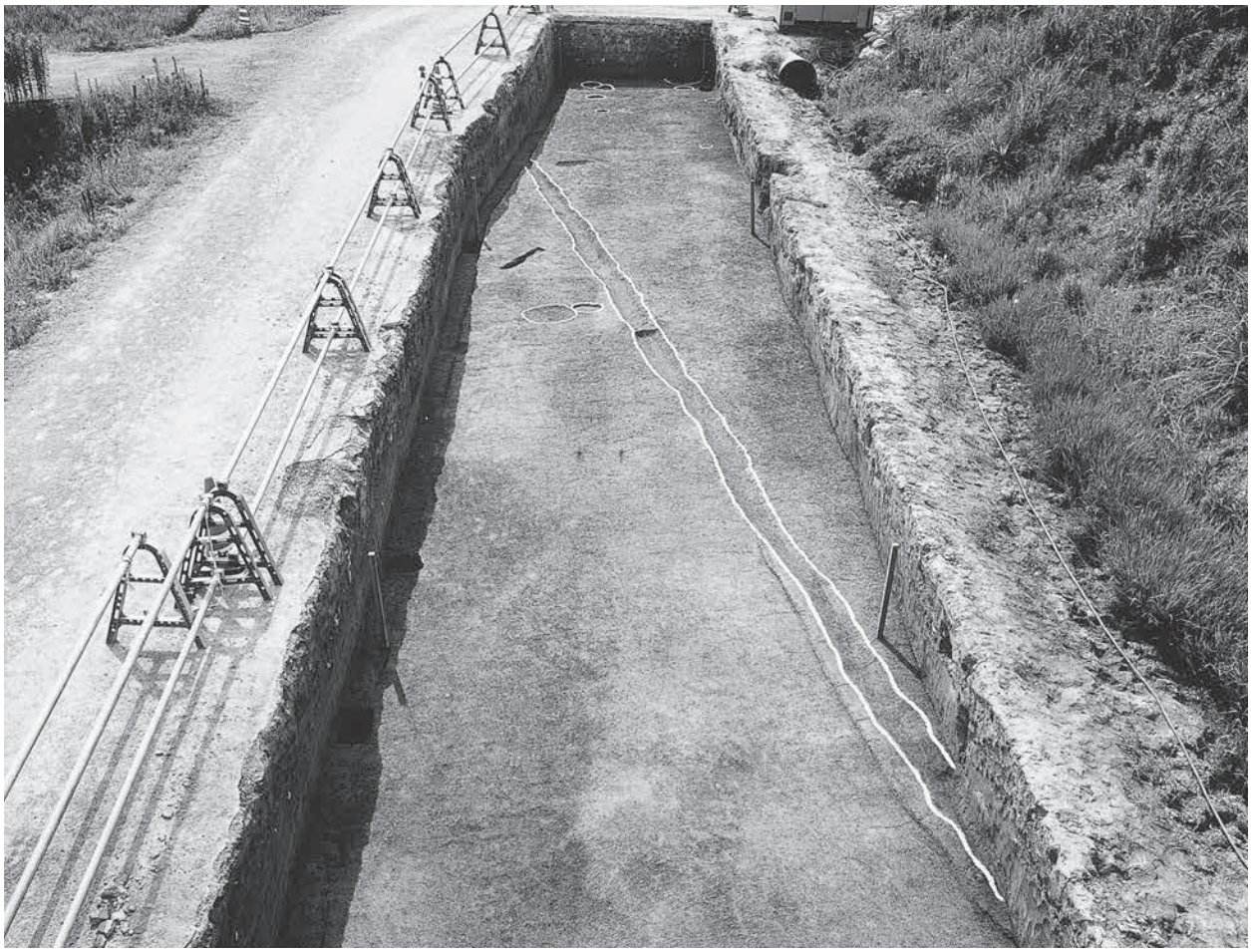
8　2区全景（東から）



9　溝SD016S（南西から）



10　3区全景（東から）

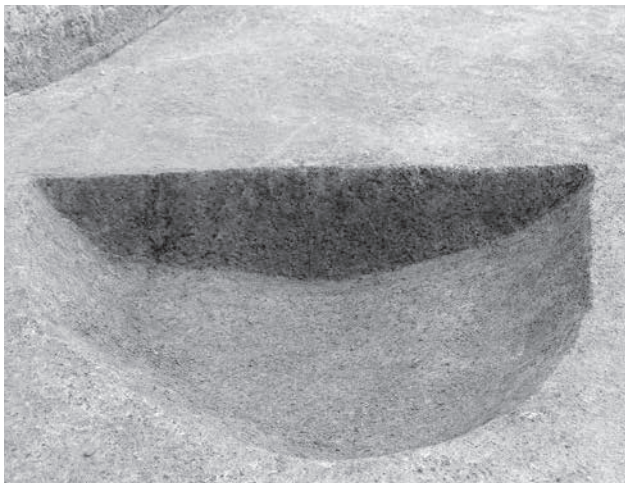


11　溝SD001S（西から）

12　4区全景（東から）

13　4区全景（西から）

14　土坑SK012S　断面（南から）

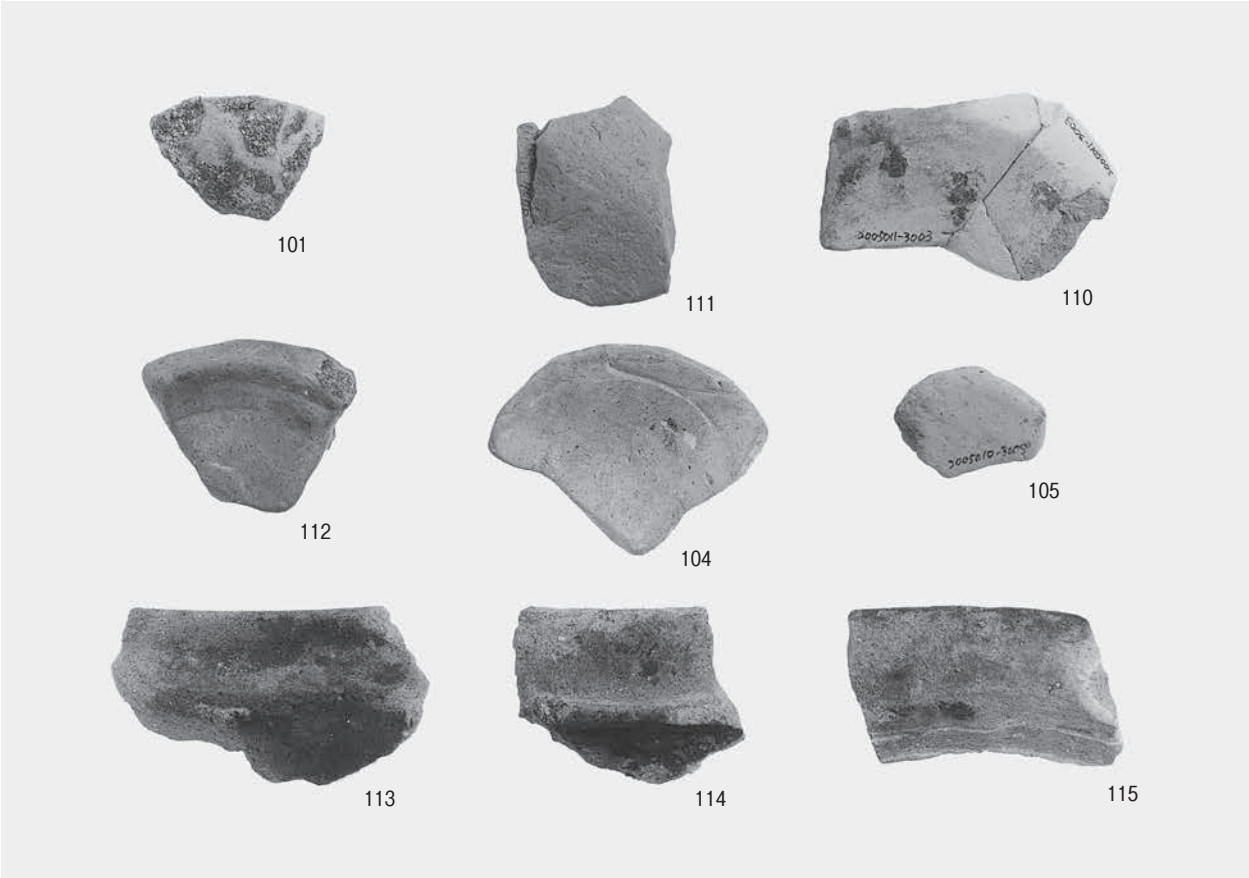


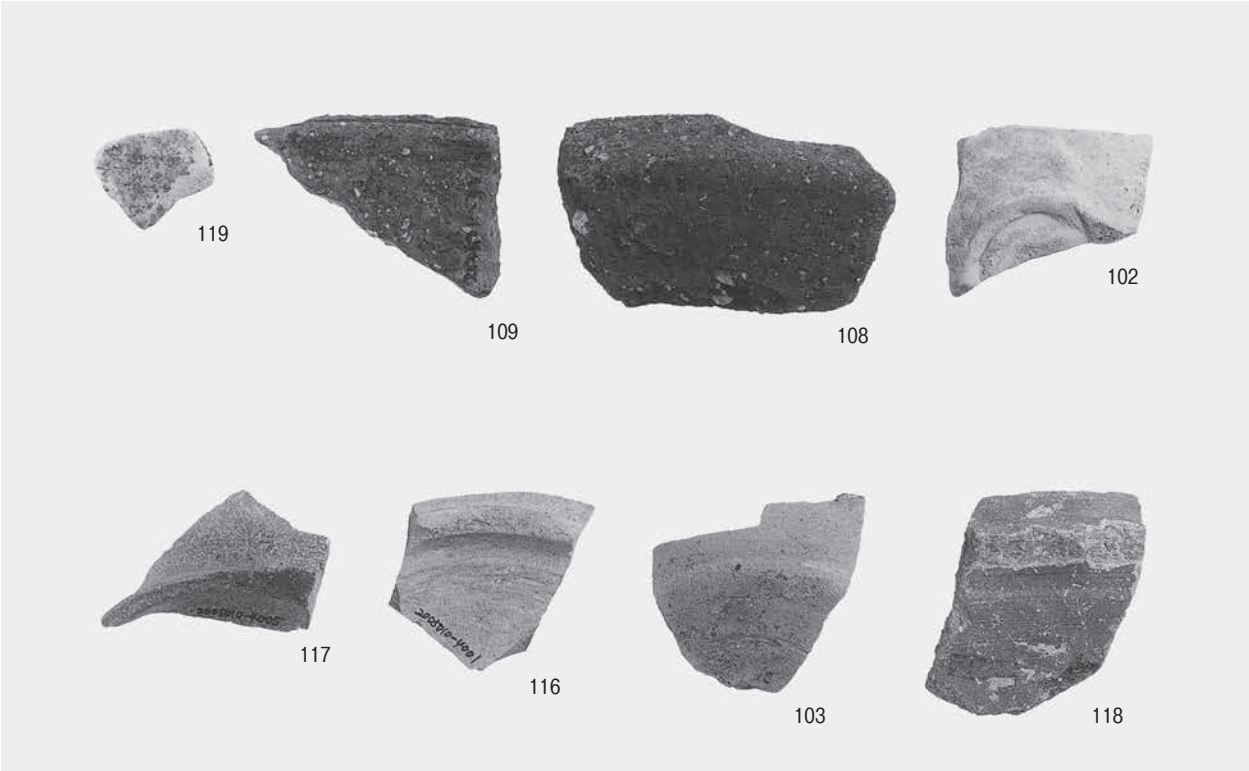
15　土坑SK403S　断面（西から）

16　土坑SK414S　断面（西から）

17　溝SD016S　断面（南西から）

18　溝SD001S　断面（西から）


101
111
110
112
104
105
113
114
115

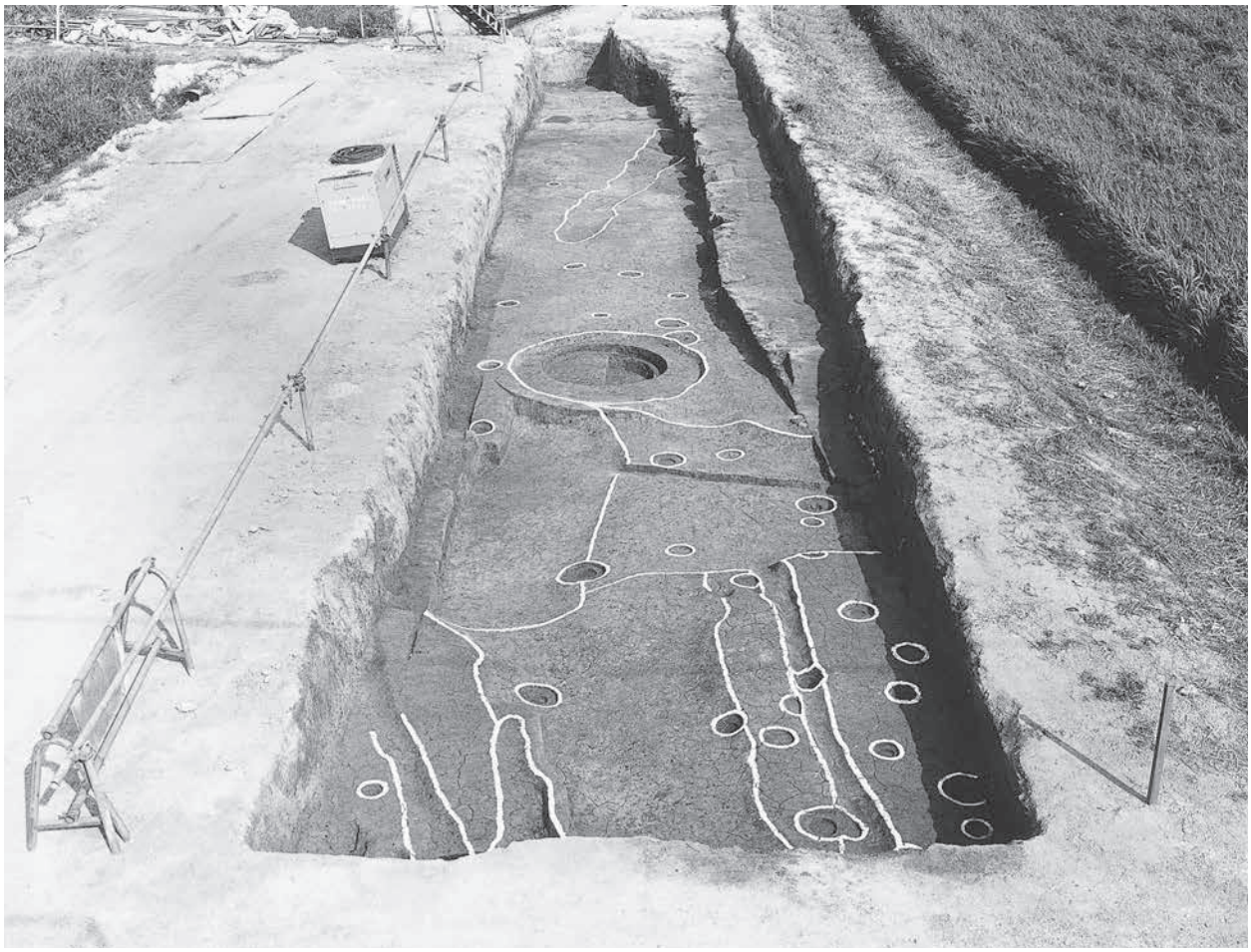

119
109
108
102
117
116
103
118

106

107

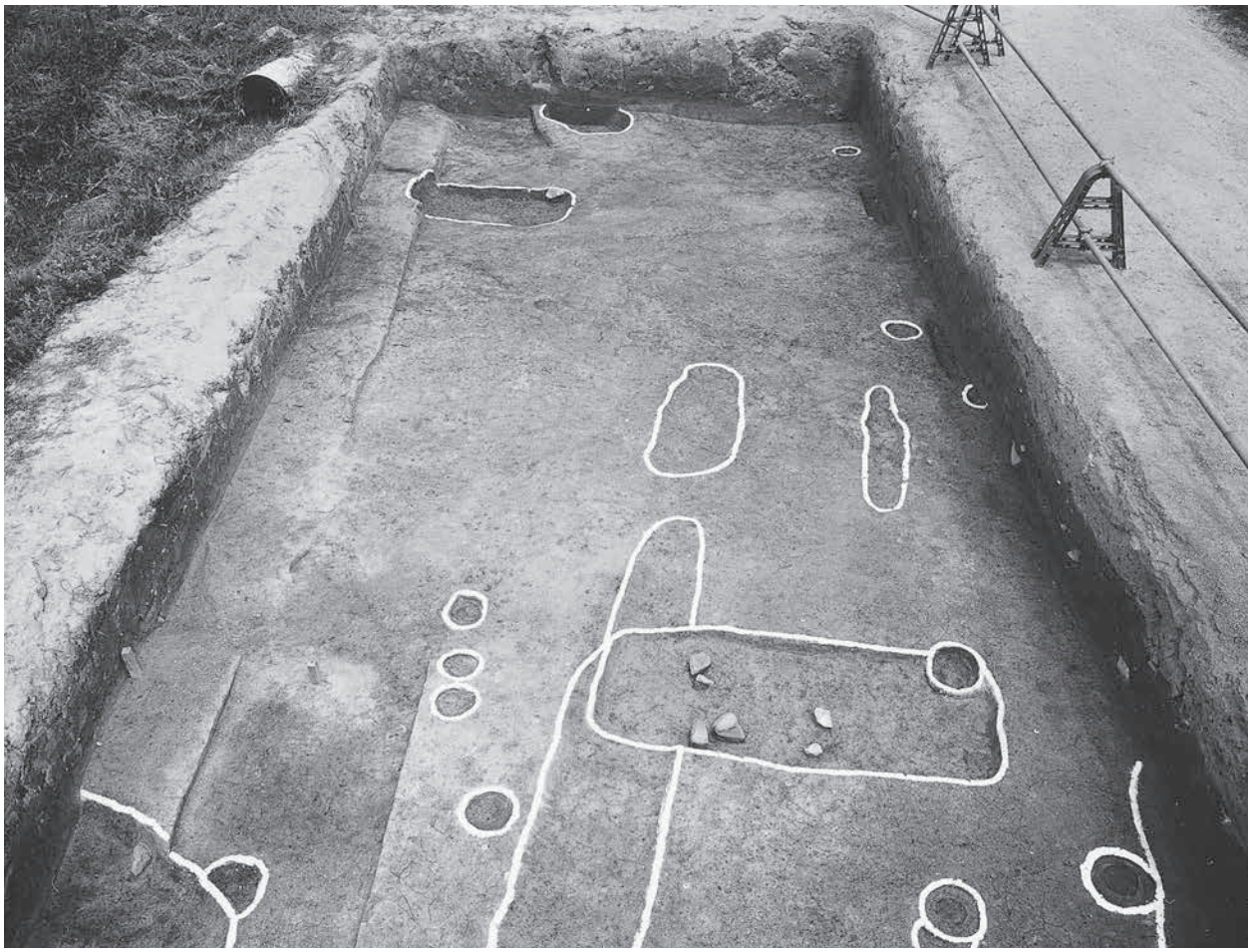
土器

19　隅田遺跡3区から白池遺跡を望む（西から）



20　3区　全景（西から）

21　1区東半（東から）

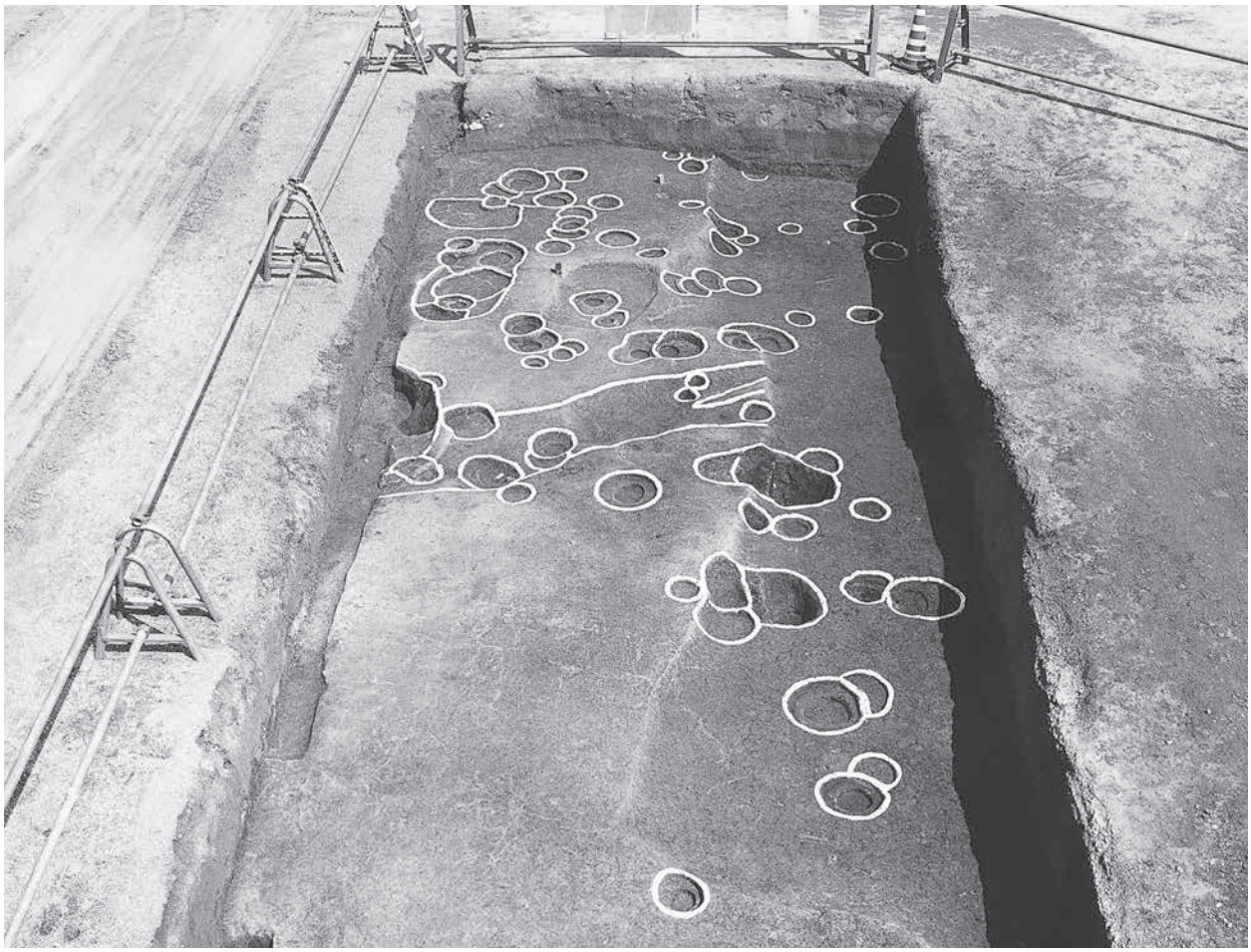


22　1区東端（西から）

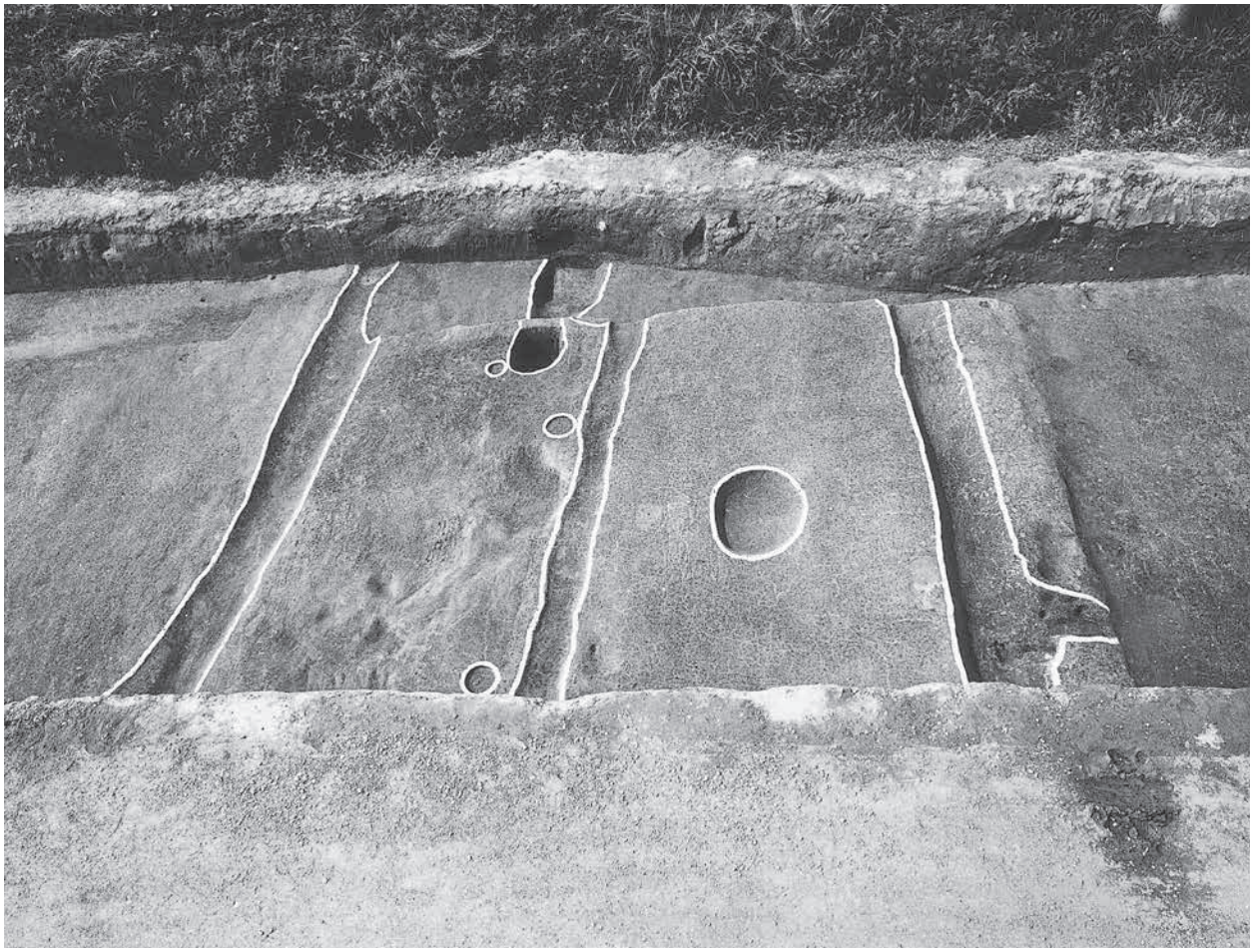
23　1区東半（西から）

24　1区中央部（東から）

25　4区　全景（西から）

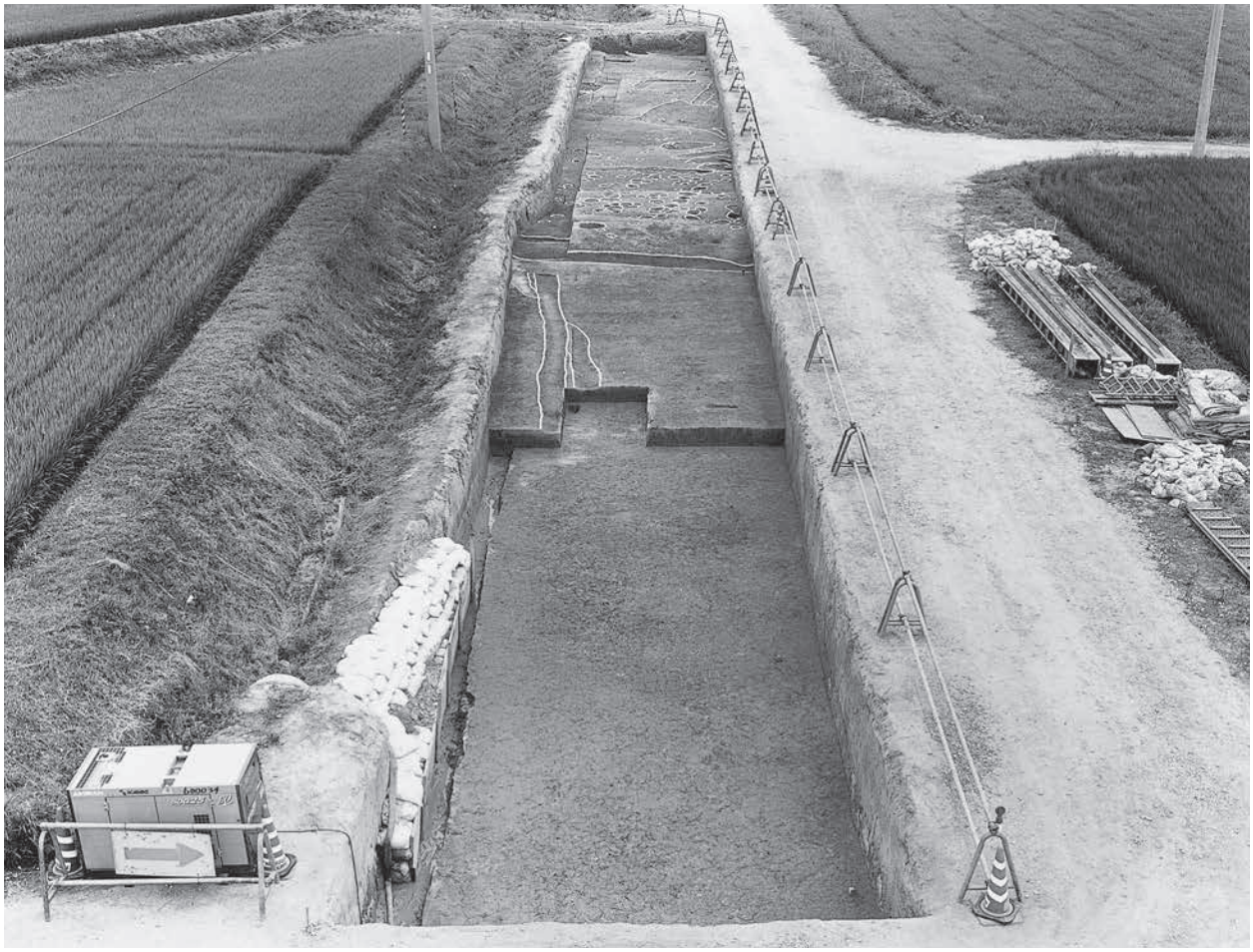


26　4区東端（西から）



27　1区中央部（南から）

28　4区東端（西から）

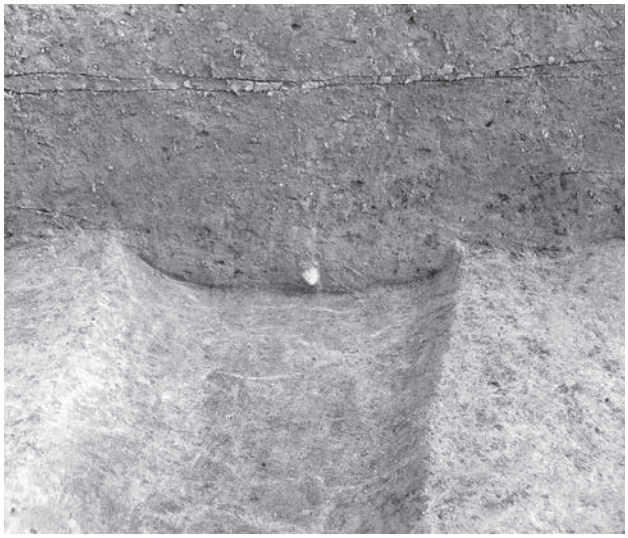


29　3区　全景（西から）

30　隅田遺跡3区から白池遺跡を望む（西から）

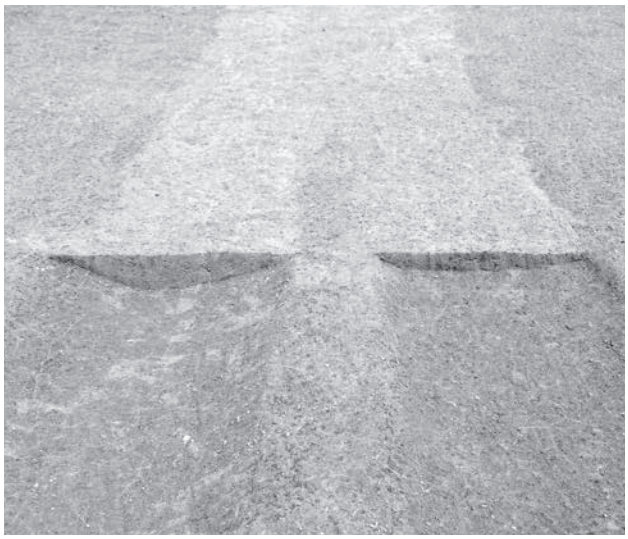
31　土坑SK006U　断面（南から）

32　溝SD005U　断面（北から）

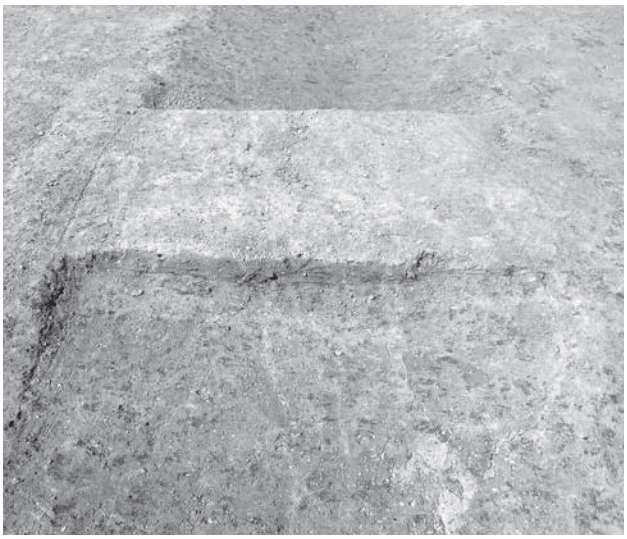


33　溝SD004U　断面（北から）

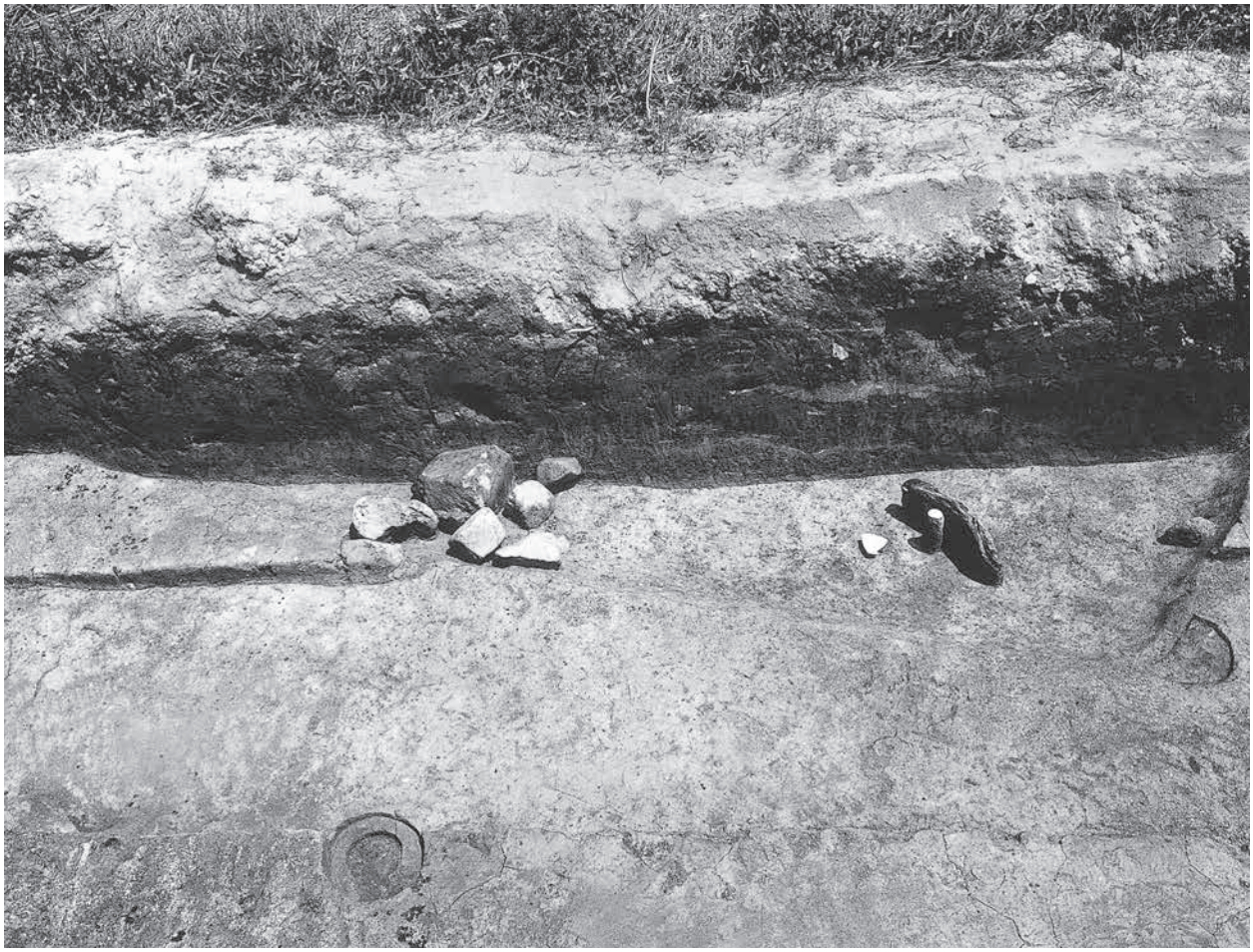
34　溝SD003U　断面（北から）



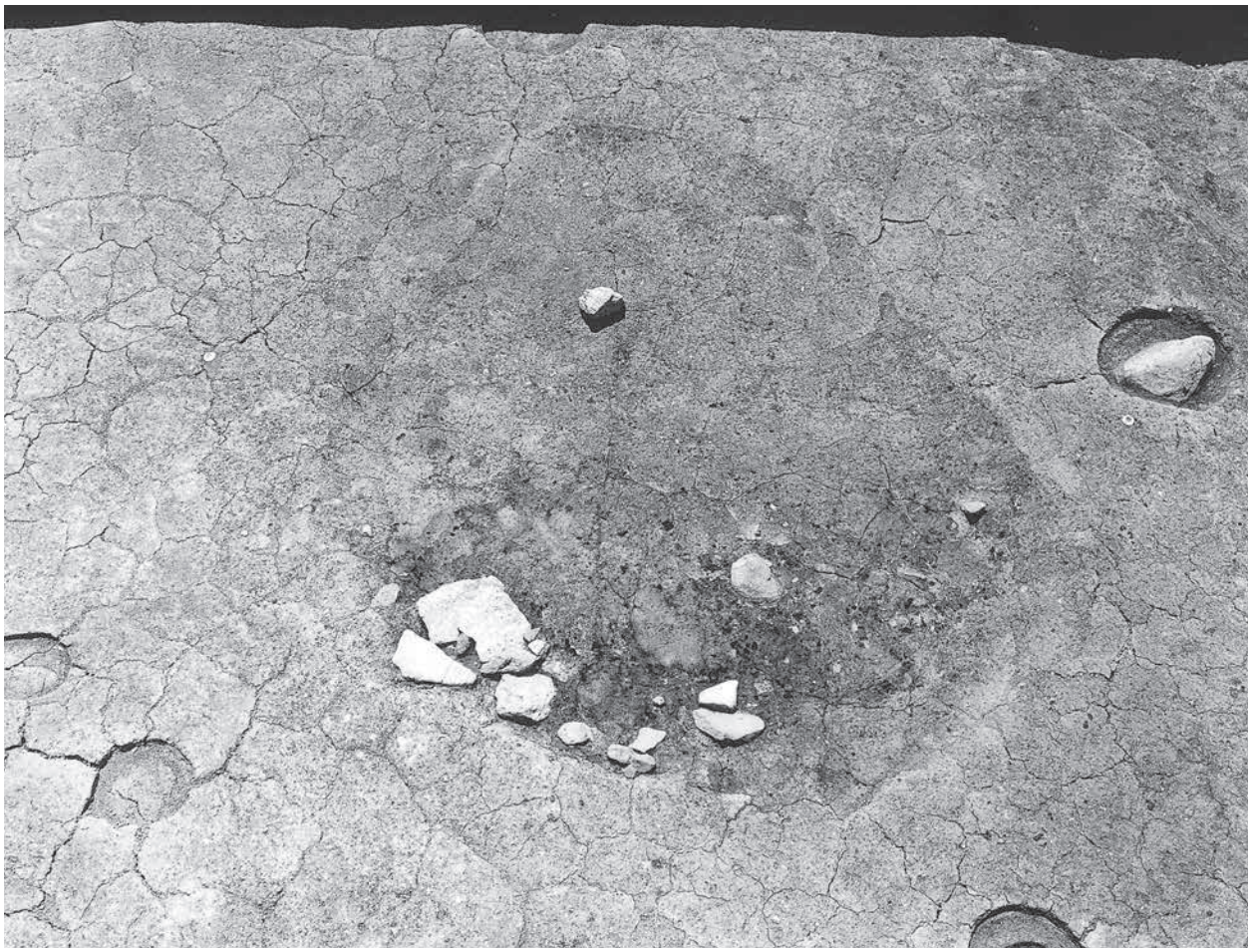
35　溝SD001U・SD002U　断面（西から）



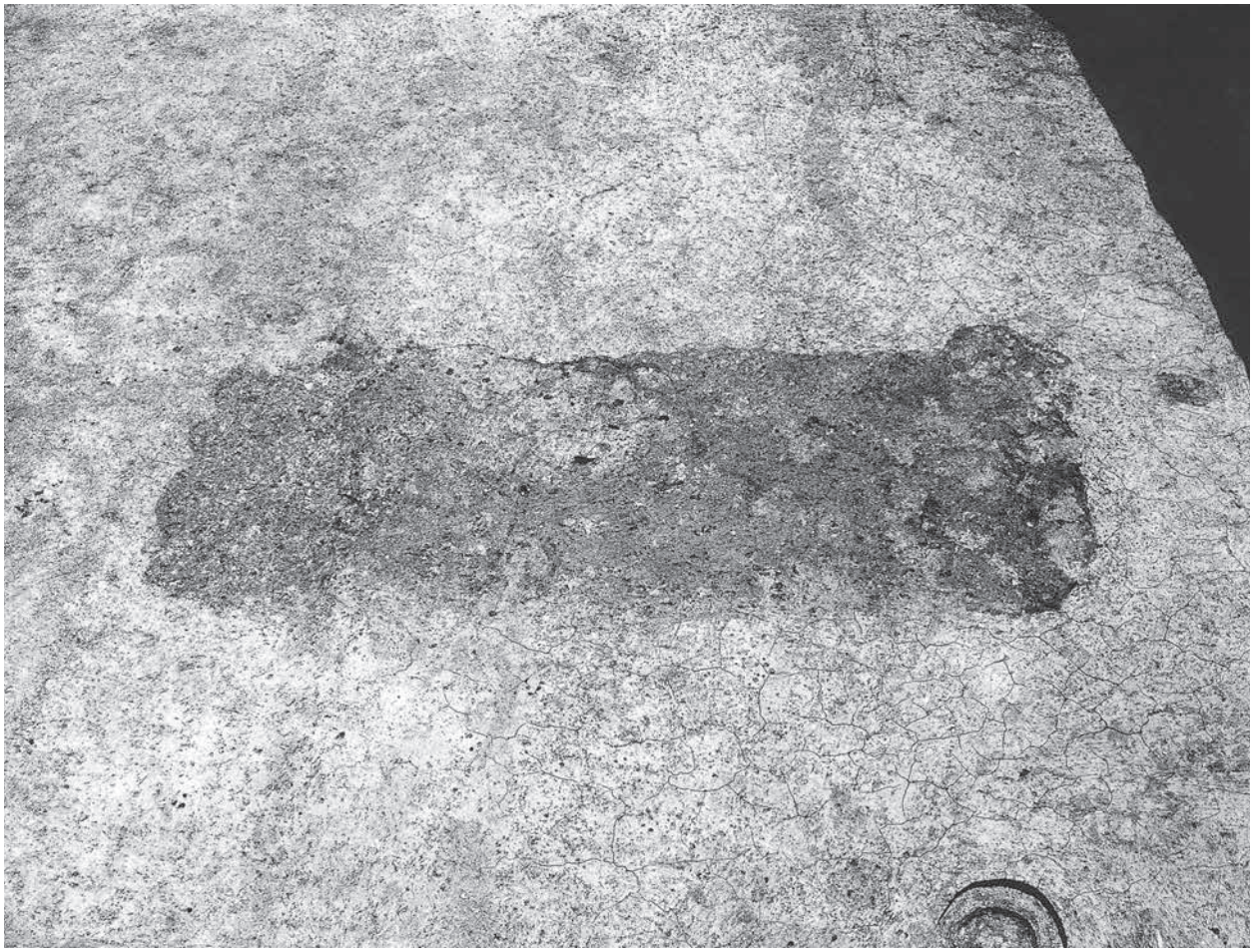
36　溝SD456U　断面（南から）



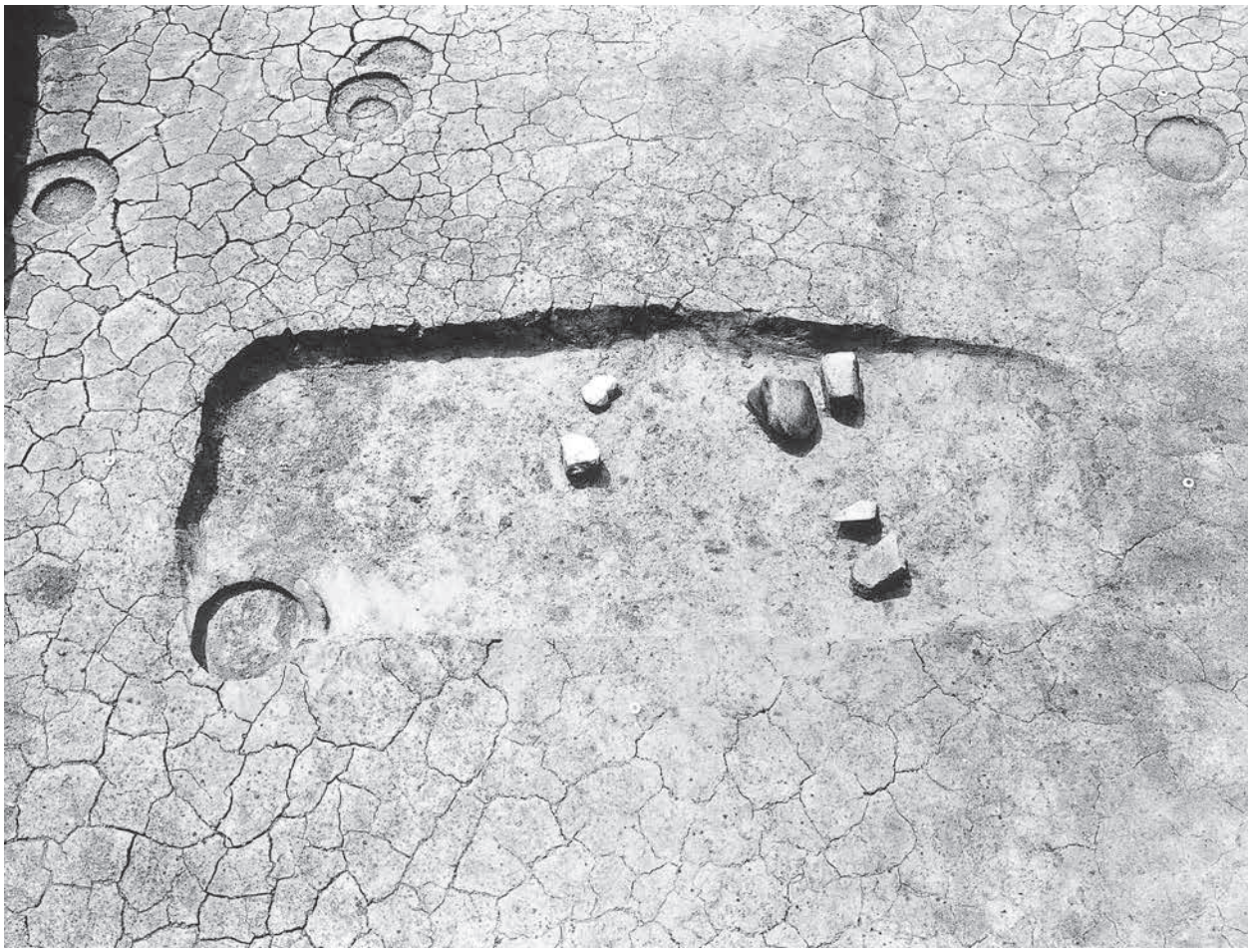
37　土坑SK154U 検出状況（南から）



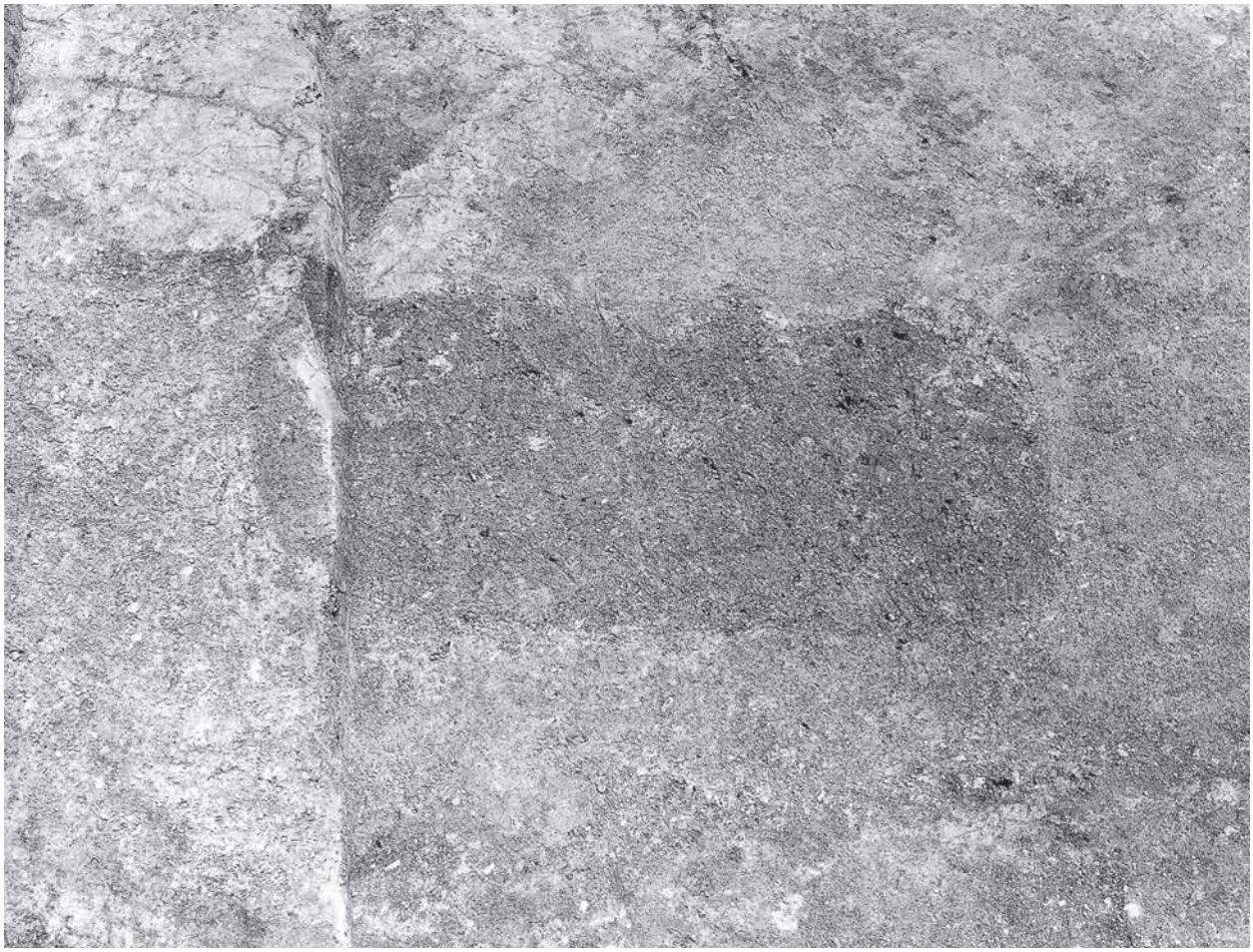
38　土坑SK124U（北から）



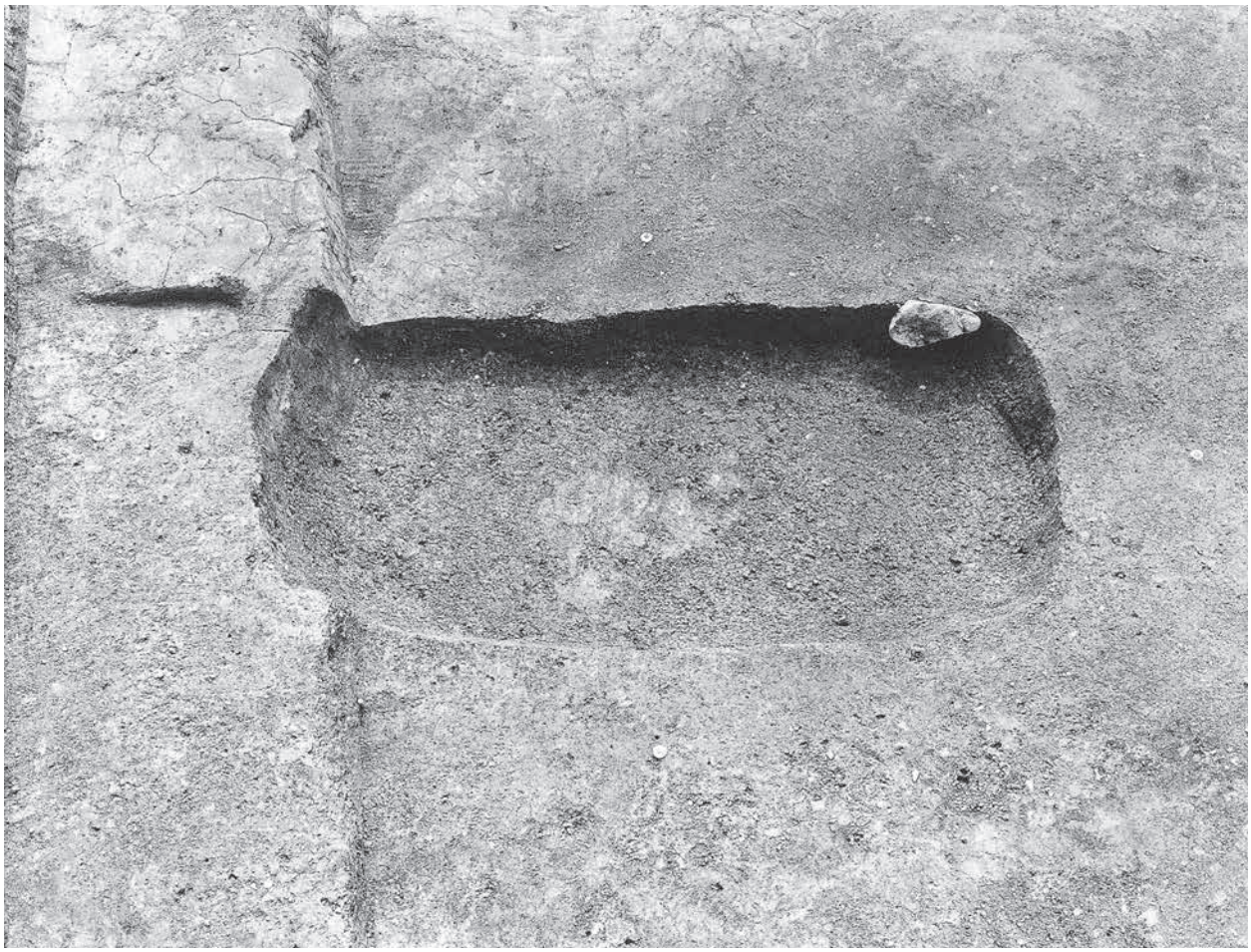
39　墓ST150U 検出状況（西から）



40　墓ST150U（東から）



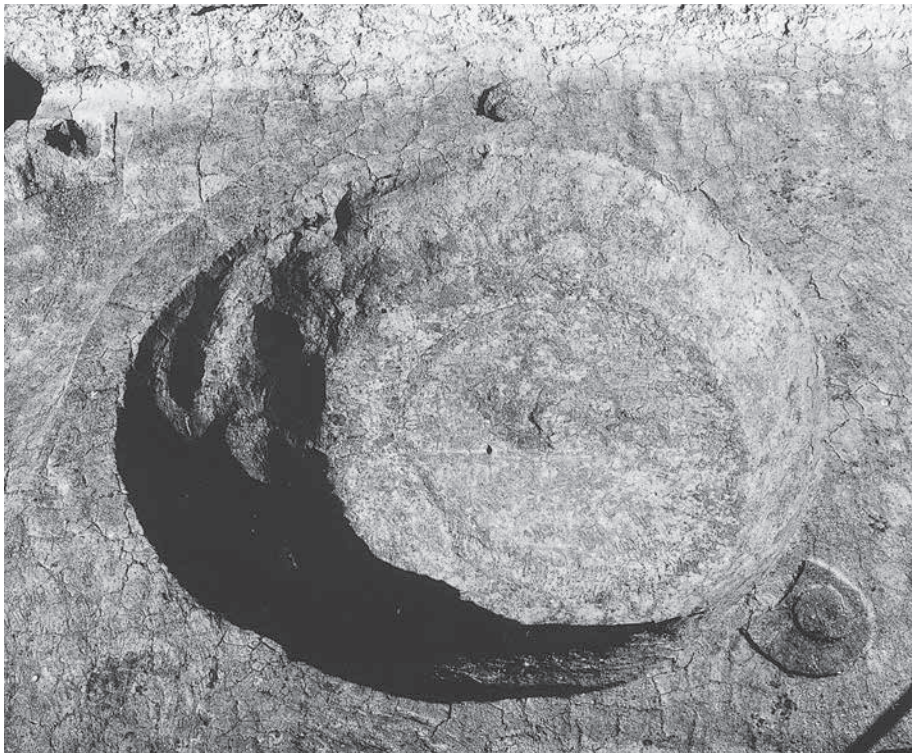
41　墓ST156U 検出状況（西から）



42　墓ST156U（西から）

43　水溜SE304U（南から）

44　水溜SE304U　断面（南から）

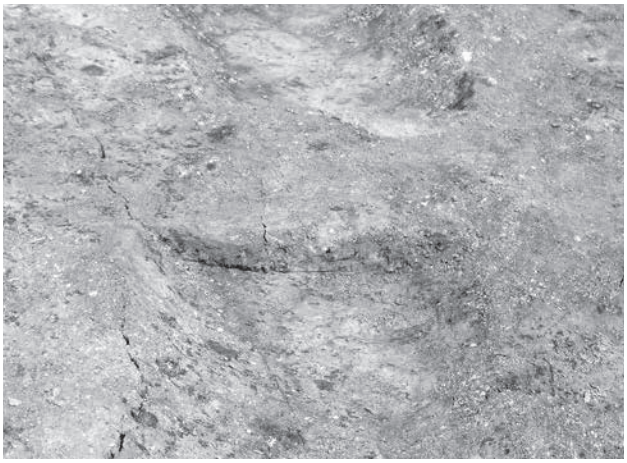


45　水溜SE304U　掘形（南から）

46　溝SD125U　断面（南から）

47　溝SD152U　断面（東から）

48　溝SD151U　断面（西から）



49　溝SD155U　断面（西から）

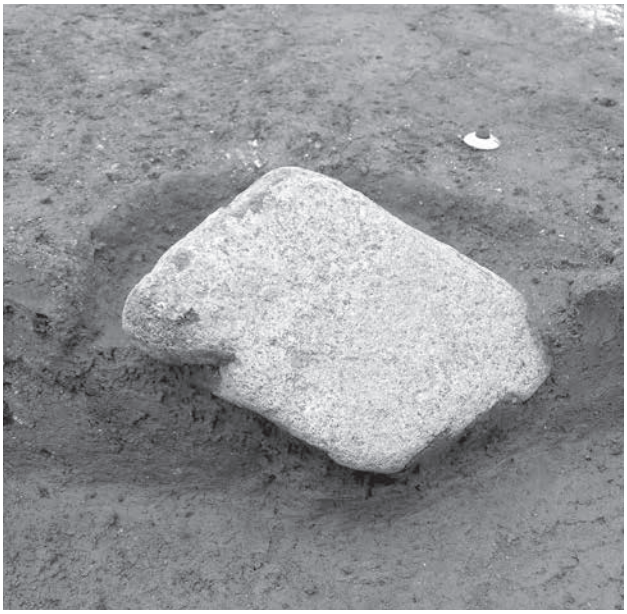
50　溝SD307U　断面（東から）

51　溝SD306U　断面（東から）

52　溝SD308U　断面（南から）

53　溝SD415U　断面（南から）

54　柱穴P132U　断面（南から）



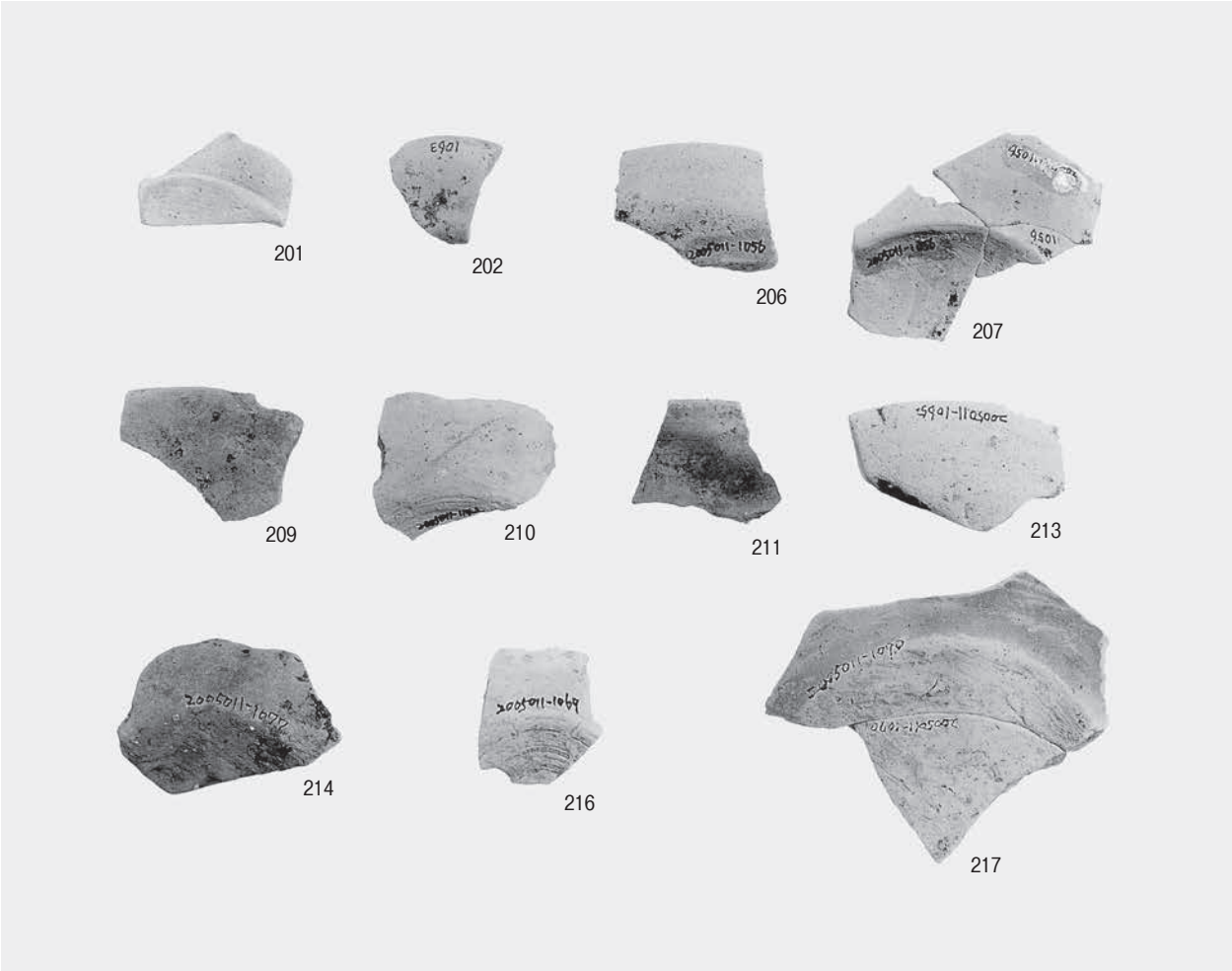
55　柱穴P133U　断面（東から）

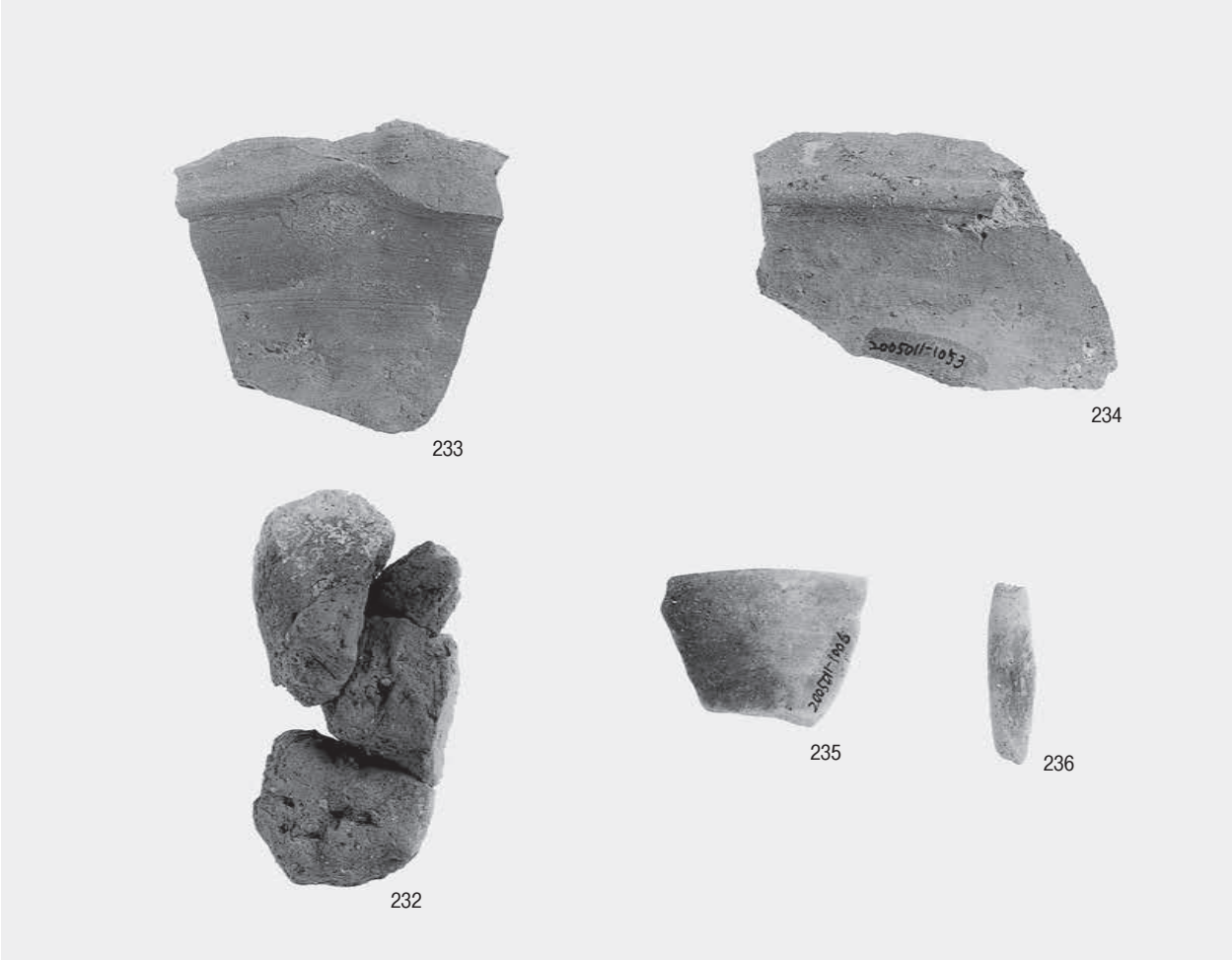
56　柱穴P335U　断面（西から）

57　柱穴P075U　断面（西から）

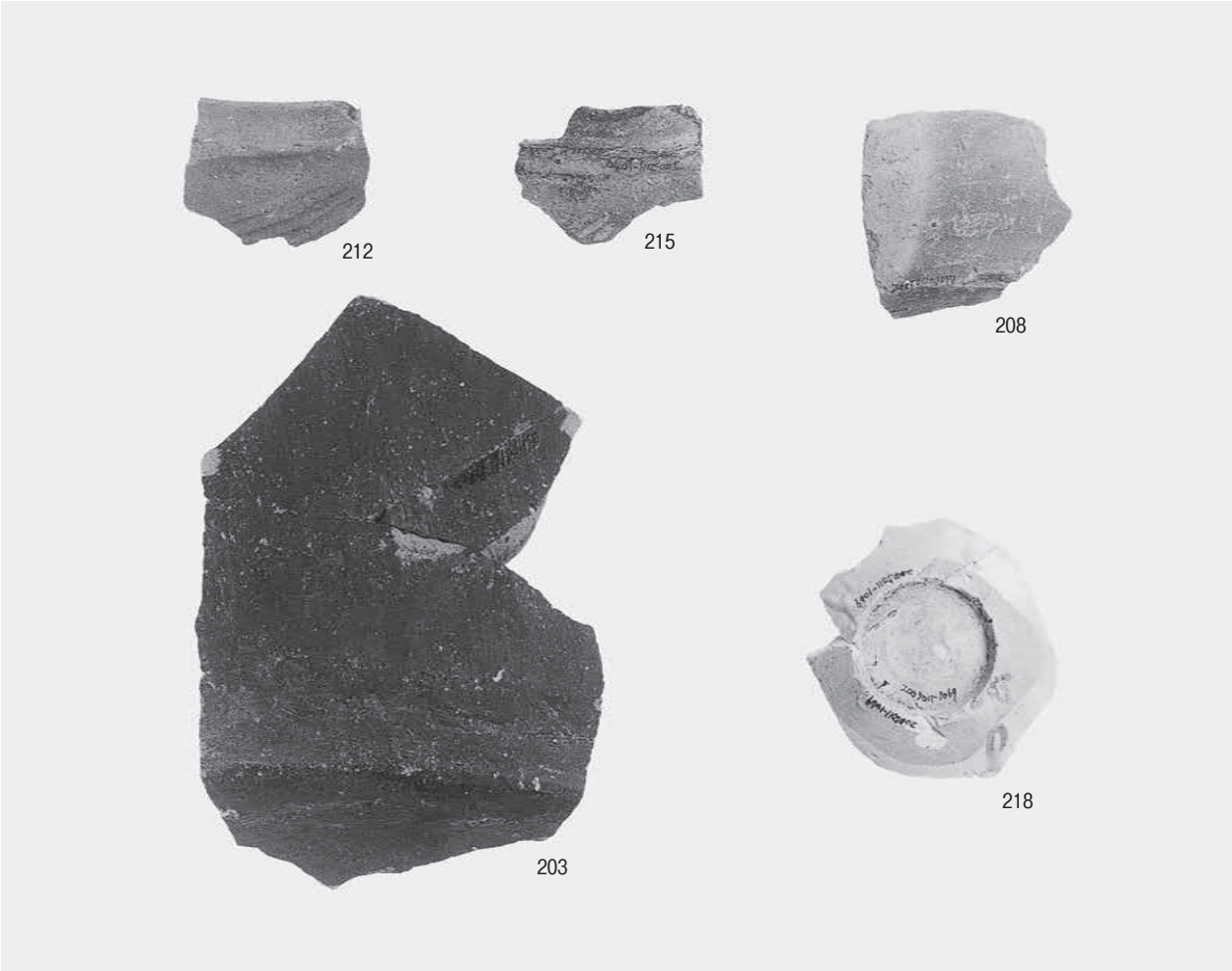
58　柱穴P447U　断面（東から）

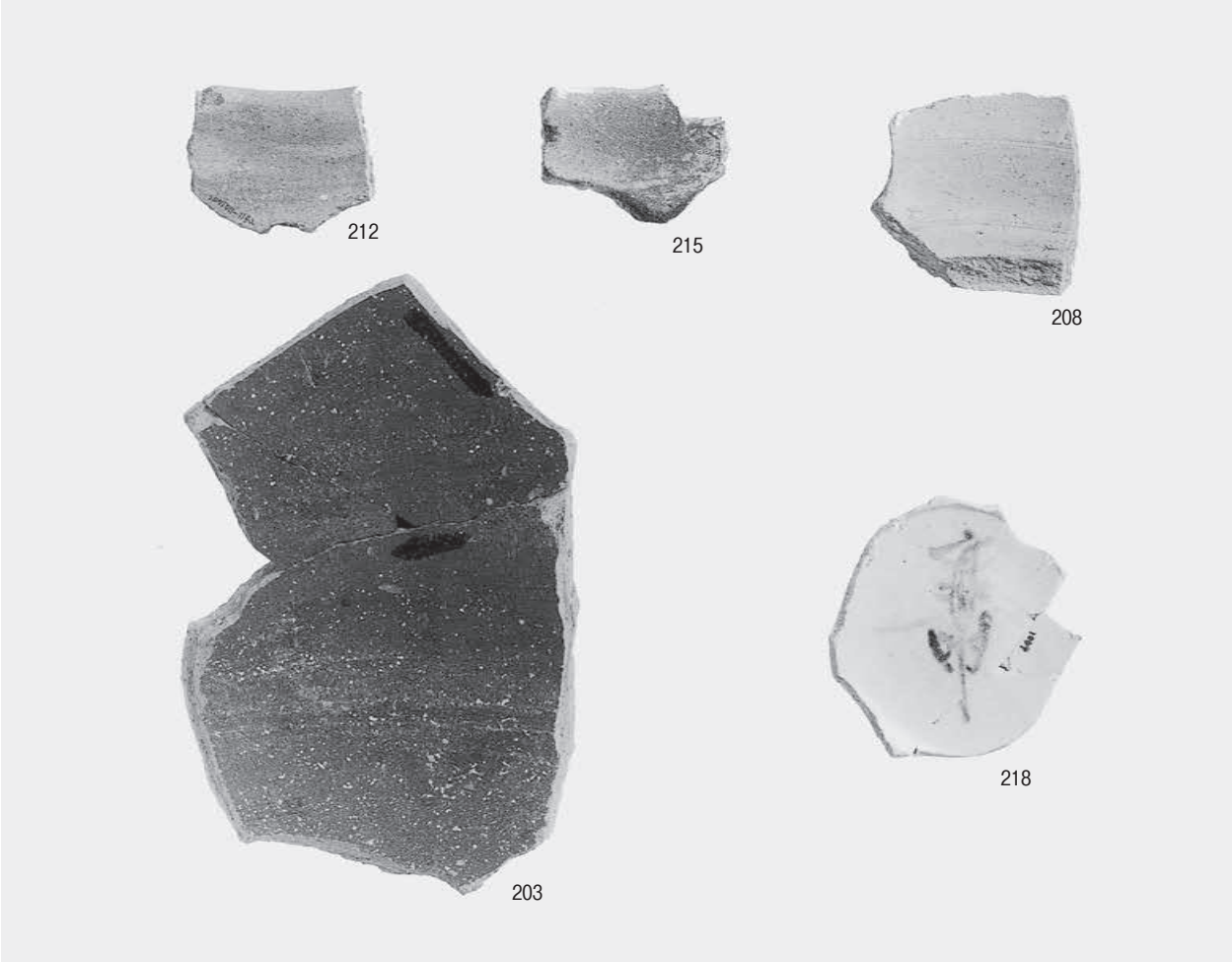
59　柱穴P038U　断面（東から）





土器(1)





土器(2)

205

204

219

225

226

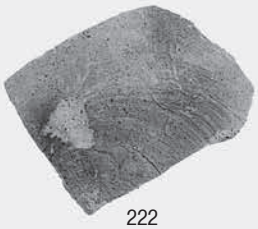
227

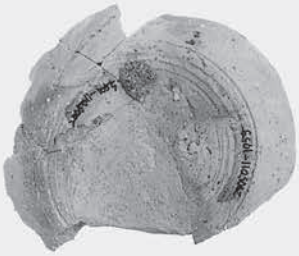
223

228

224

221

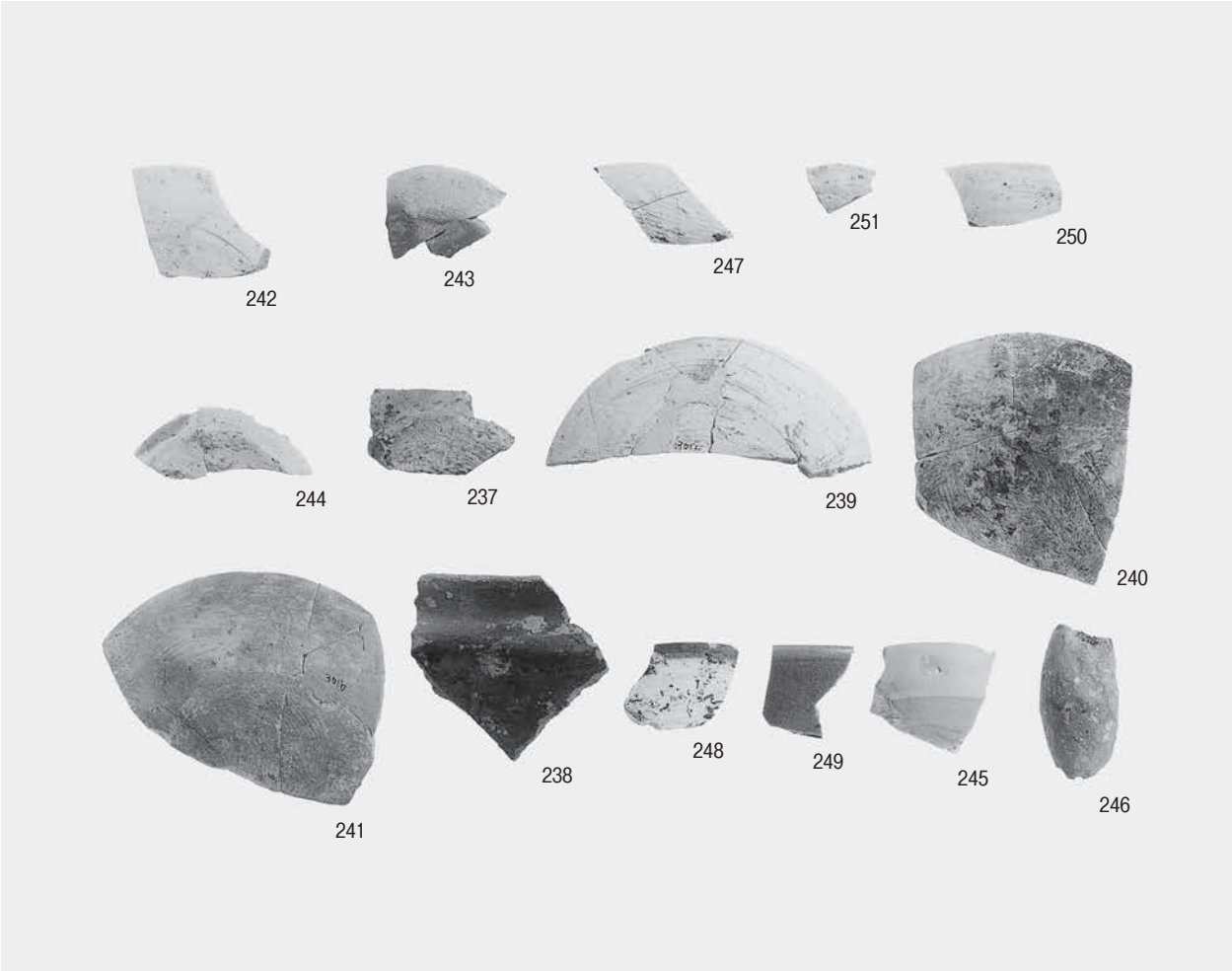

222

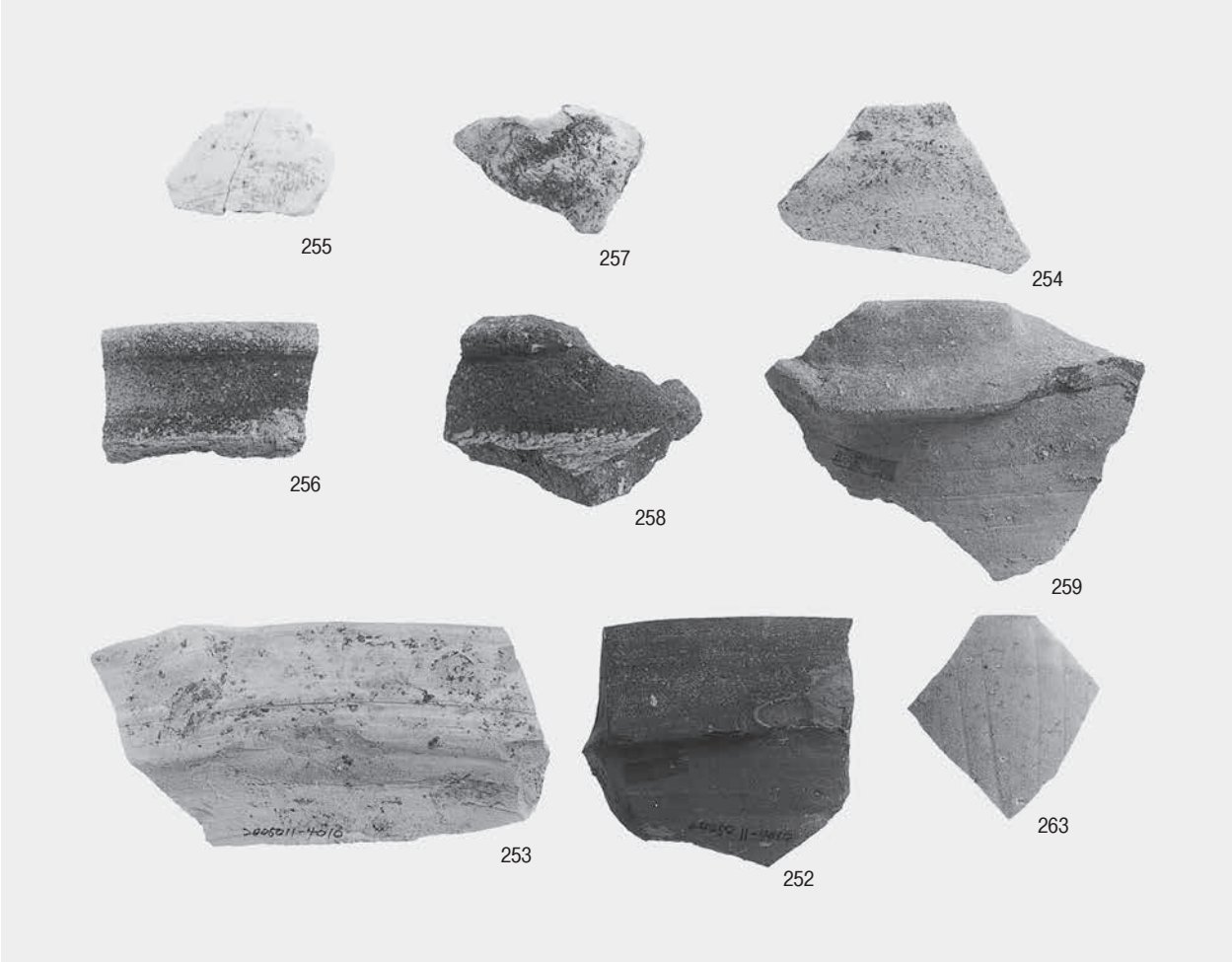

220

229

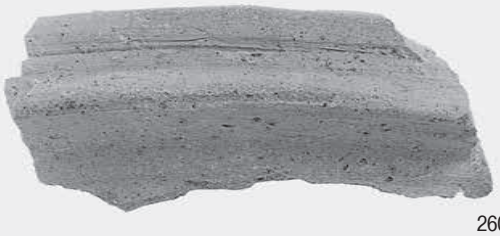
230

231


242
243
247
251
250
244
237
239
240
241
238
248
249
245
246


255
257
254
256
258
259
253
252
263

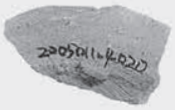
土器(4)

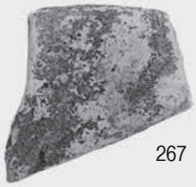

260

261

262

264


265


267

271

270

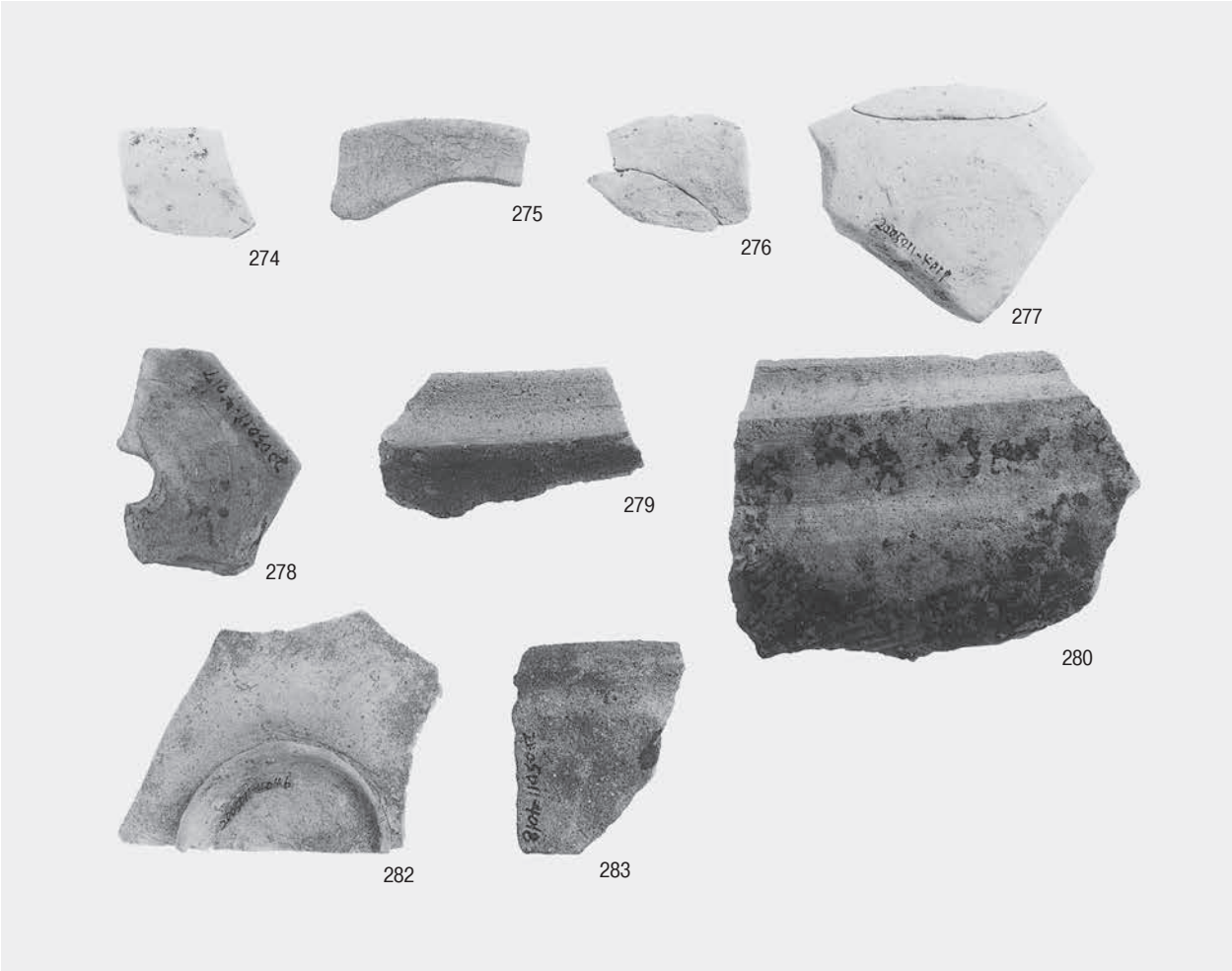
266

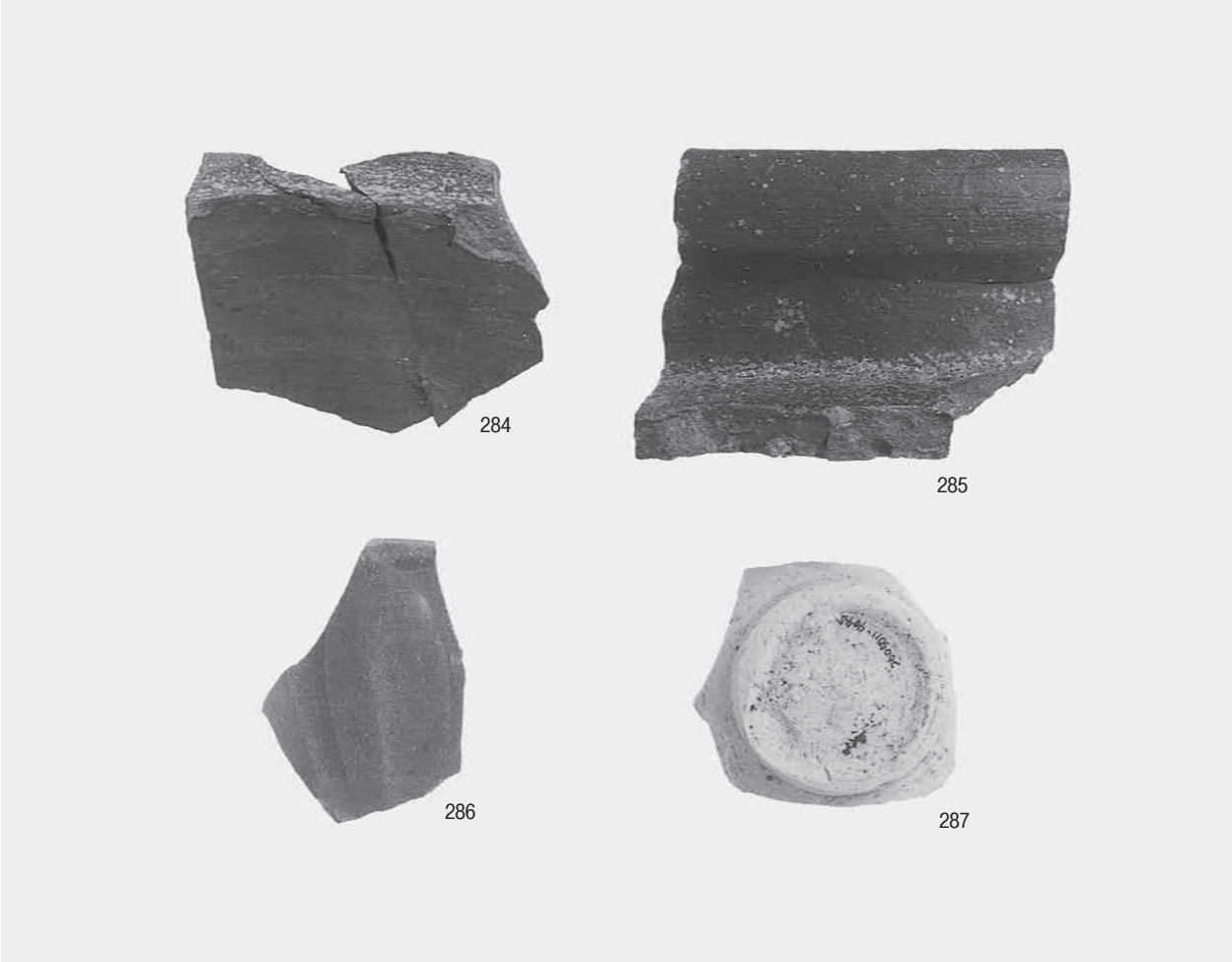
268

269

272

273





土器(6)

S21

S22

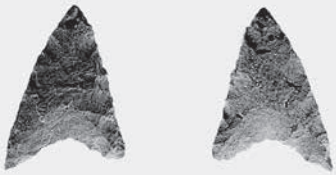
M21

M24

M23

M25

M22



S23

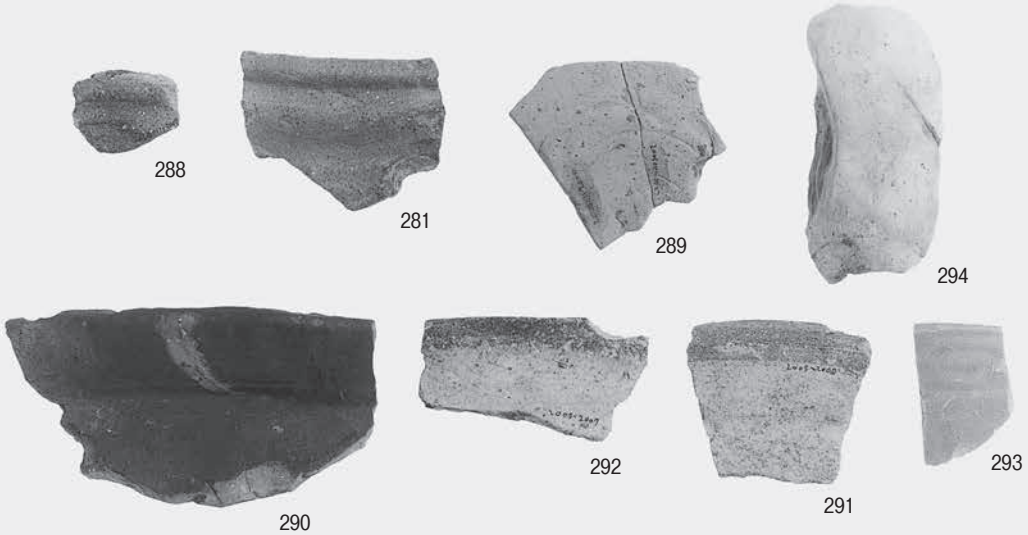
S25

M26

石器・金属器

60　全景（西から）

61　全景（東から）

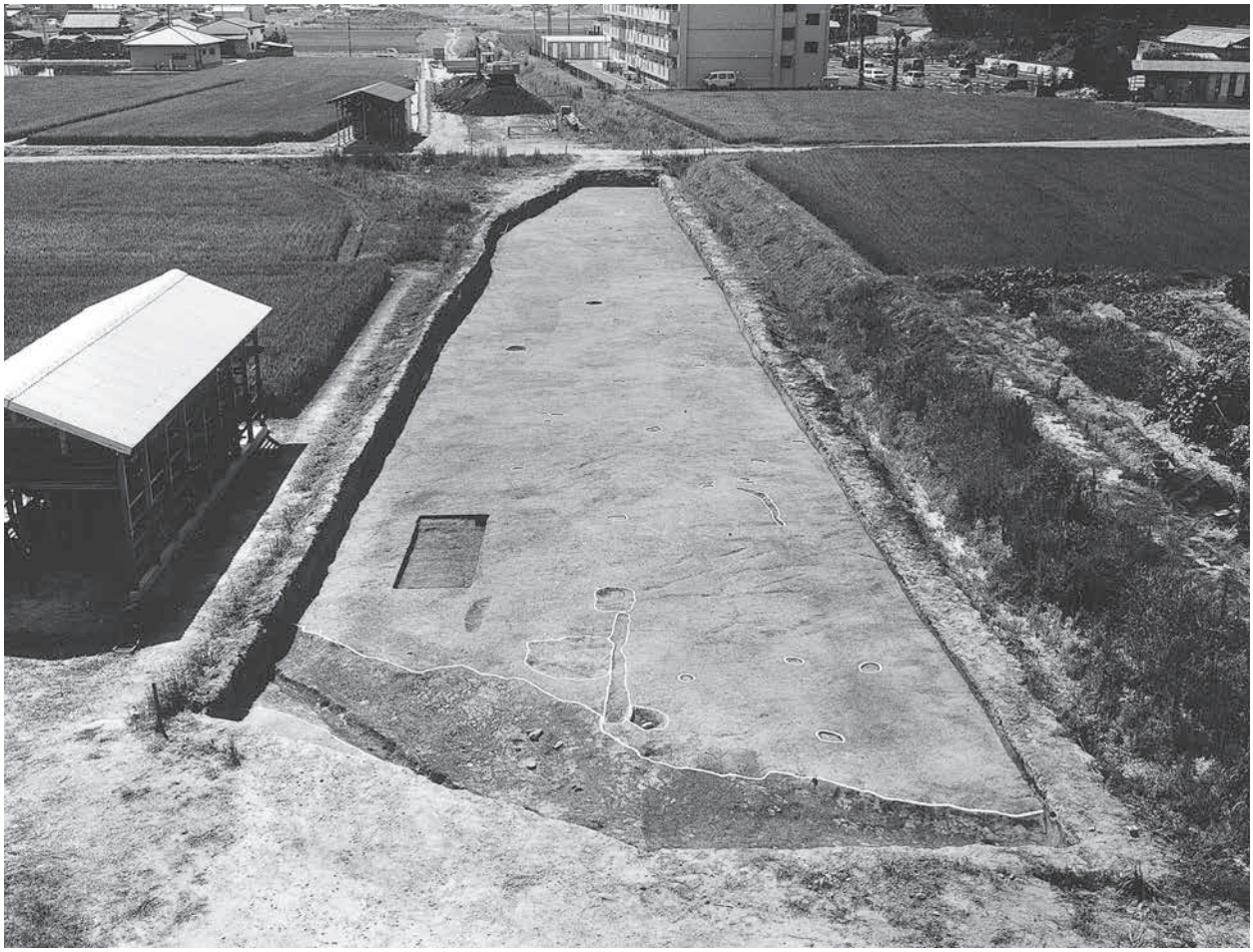


M27

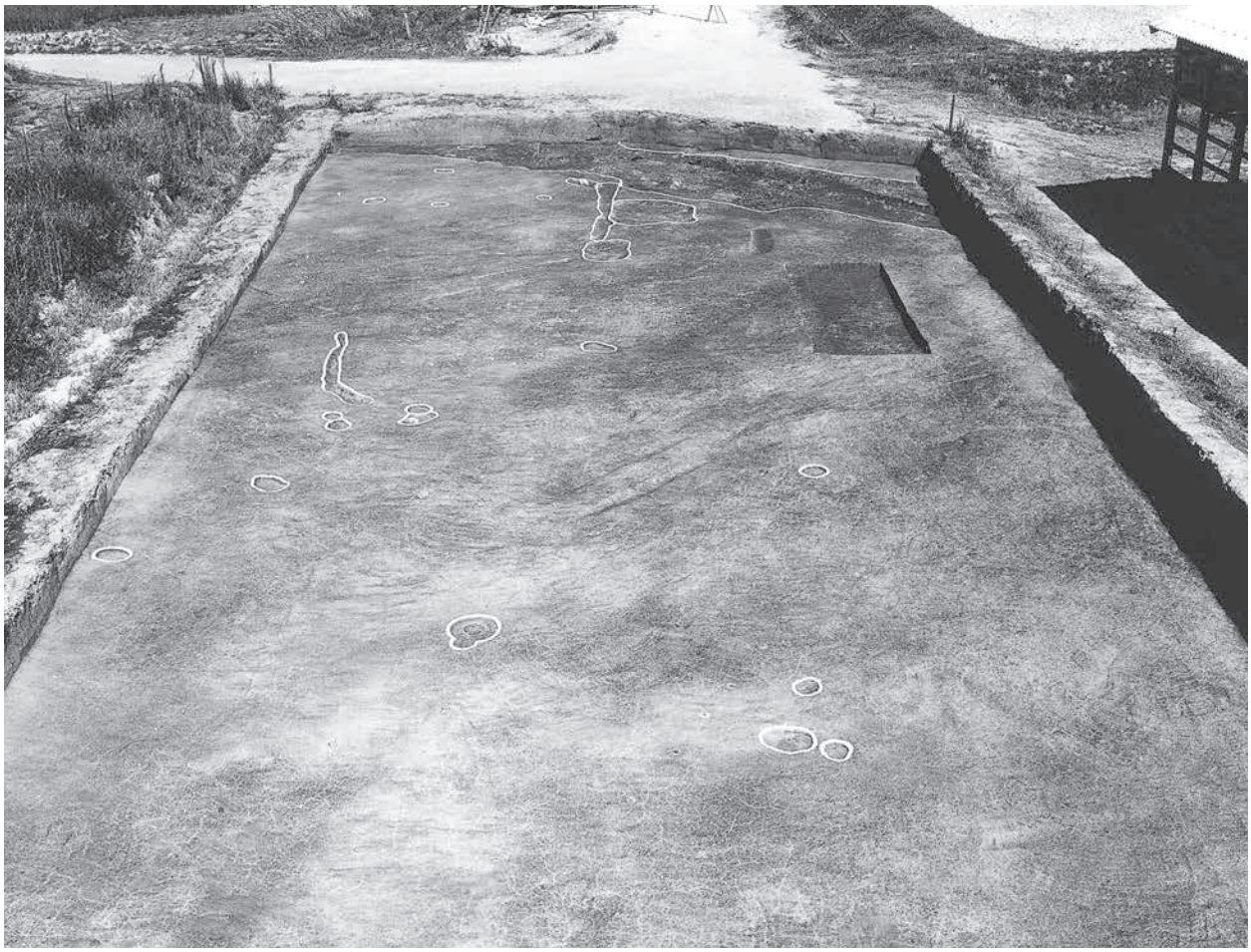
M28

S24

土器・石器・金属器



62　全景（東から）

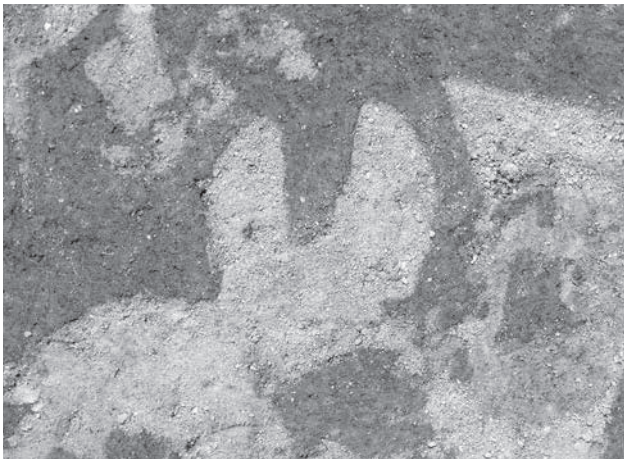


63　東半部全景（西から）

64　南壁土層断面（北から）

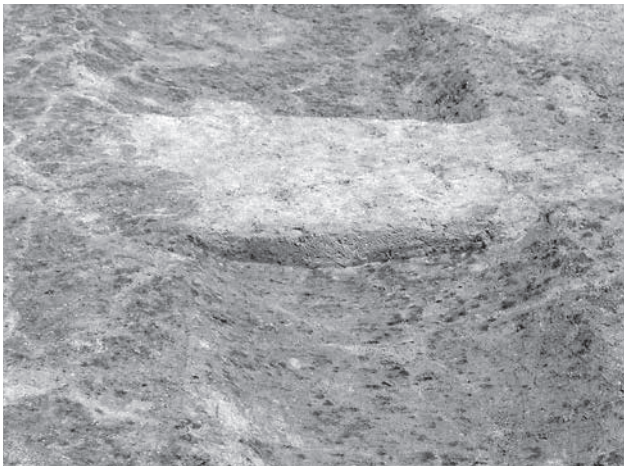
65　溝SD101T　断面（南西から）

66　土坑SK106T　断面（南から）

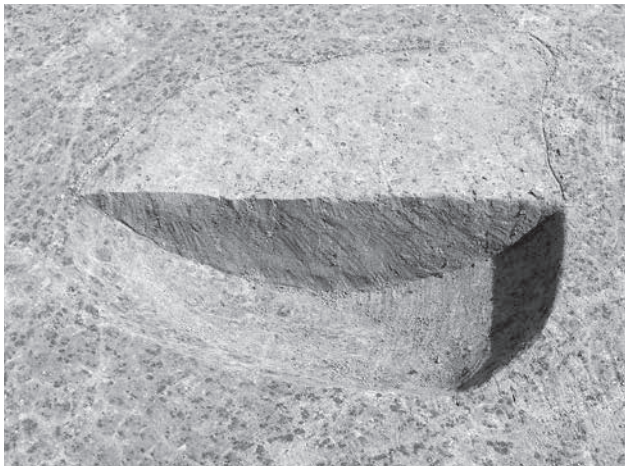


67　溝SD101T　偶蹄類足跡（南西から）

68　土坑SK107T　断面（南から）



69　溝SD103T　断面（西から）



70　土坑SK108T　断面（南から）

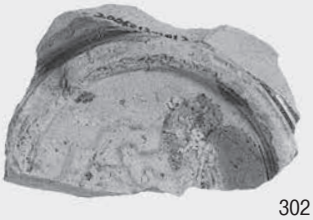
71　土坑SK104T　断面（南西から）

305

304

303

301


302

306

308

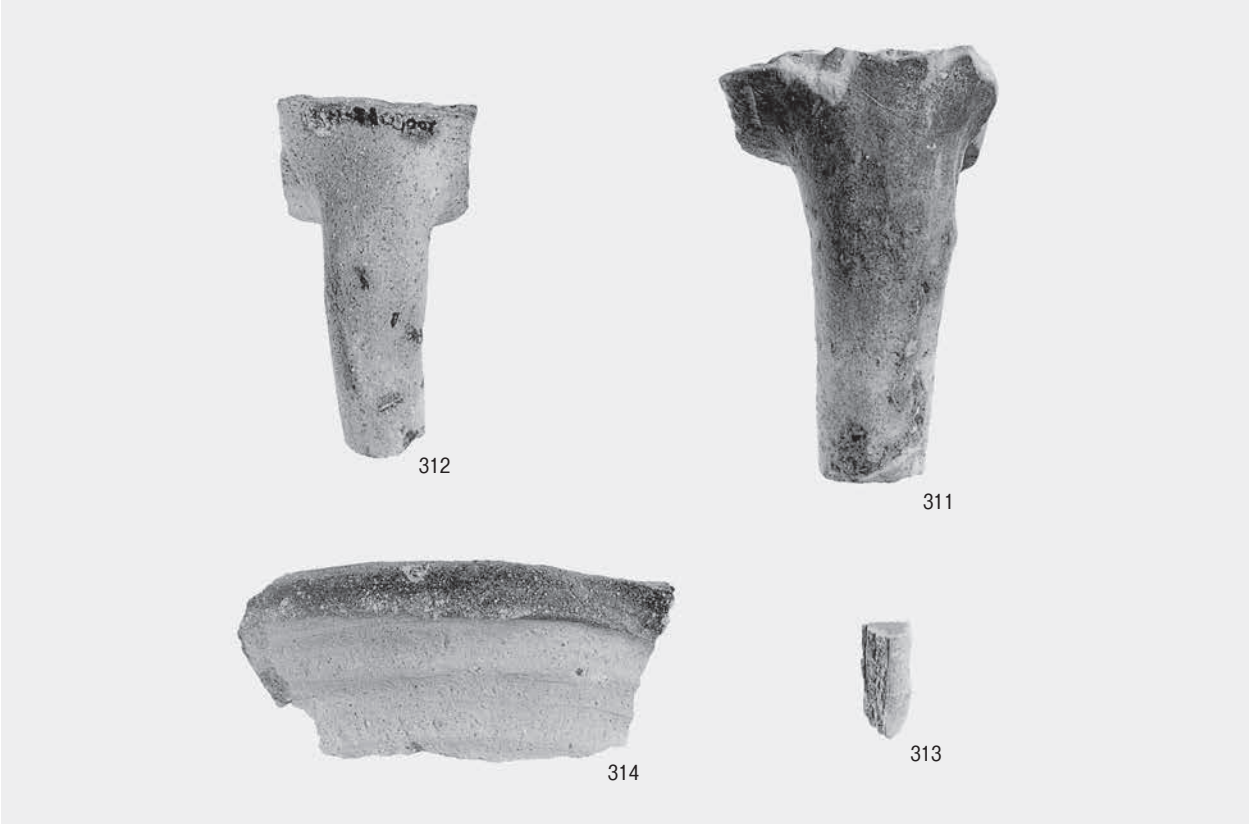
307

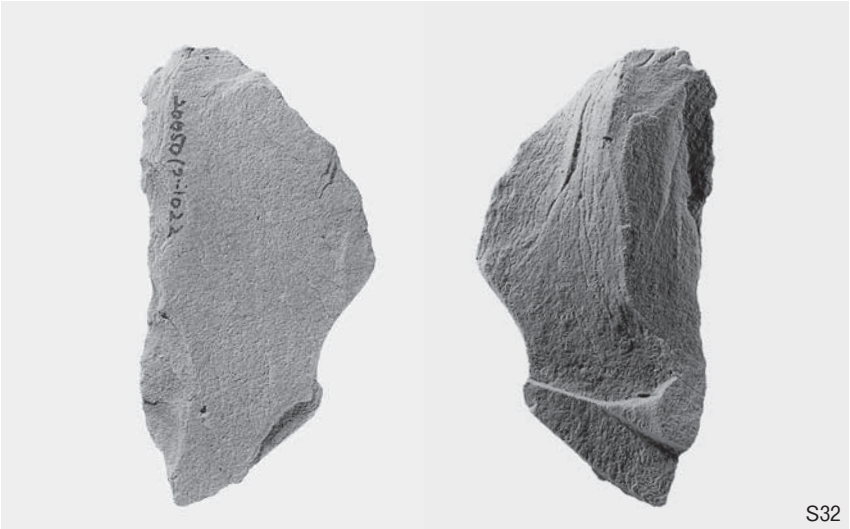
309

310

315

土器(1)





土器(2)・石器・金属器

72　全景（西から）

73　全景（東から）

74　2区東半部（西から）

75　掘立柱建物SB210T（西から）

76　掘立柱建物SB210T（東から）

77　掘立柱建物SB210T（南から）

78　南壁土層断面（北から）

82　掘立柱建物SB210TP213T（南から）

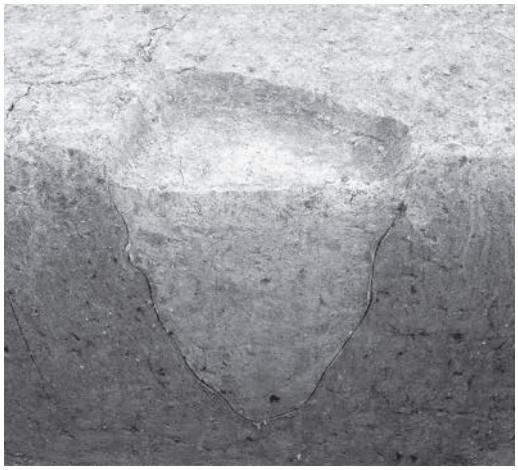
79　溝SD203T・SD204T 検出状況（南から）

83　掘立柱建物SB210TP217T（南から）

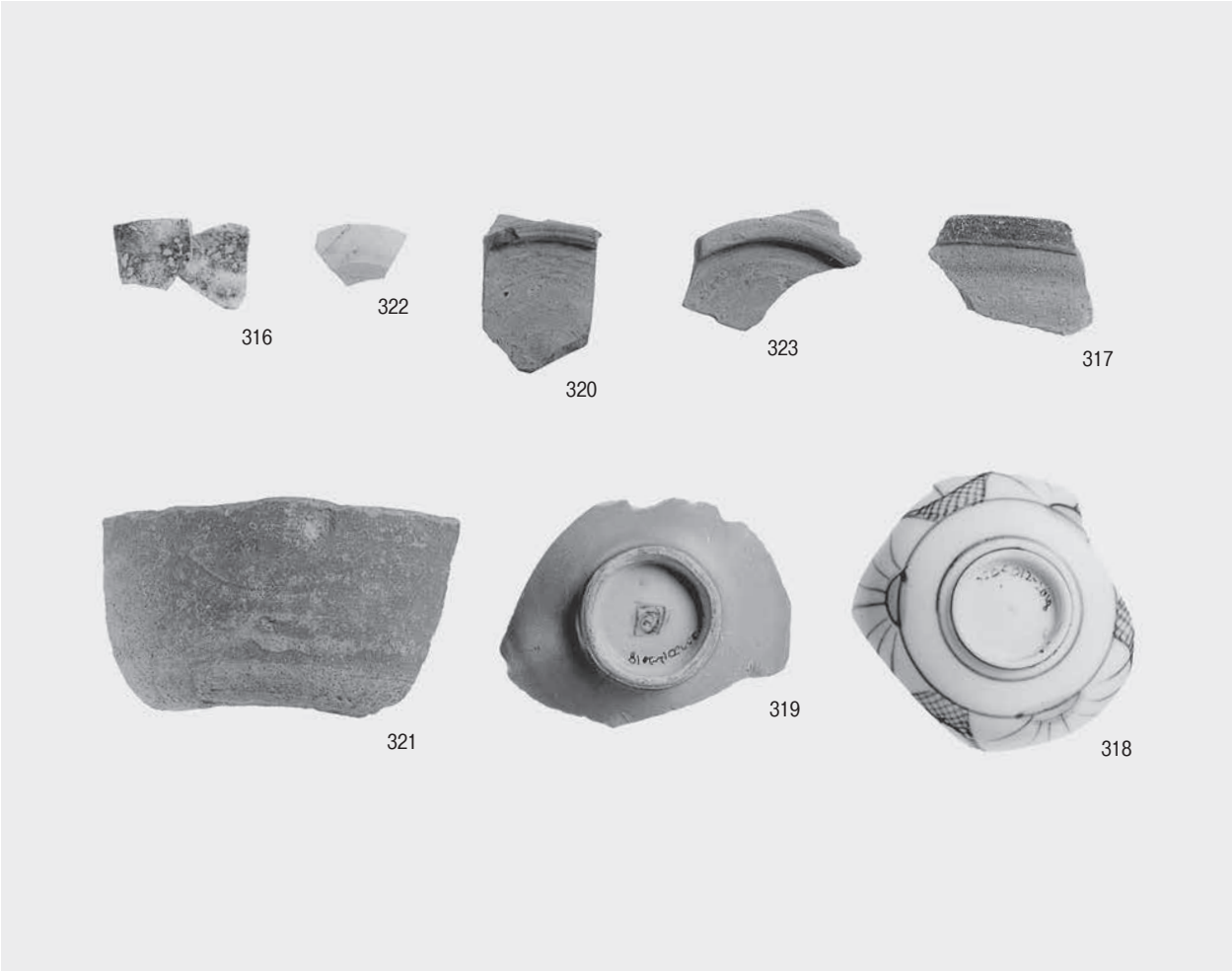
80　溝SD203T・SD204T　断面（南から）

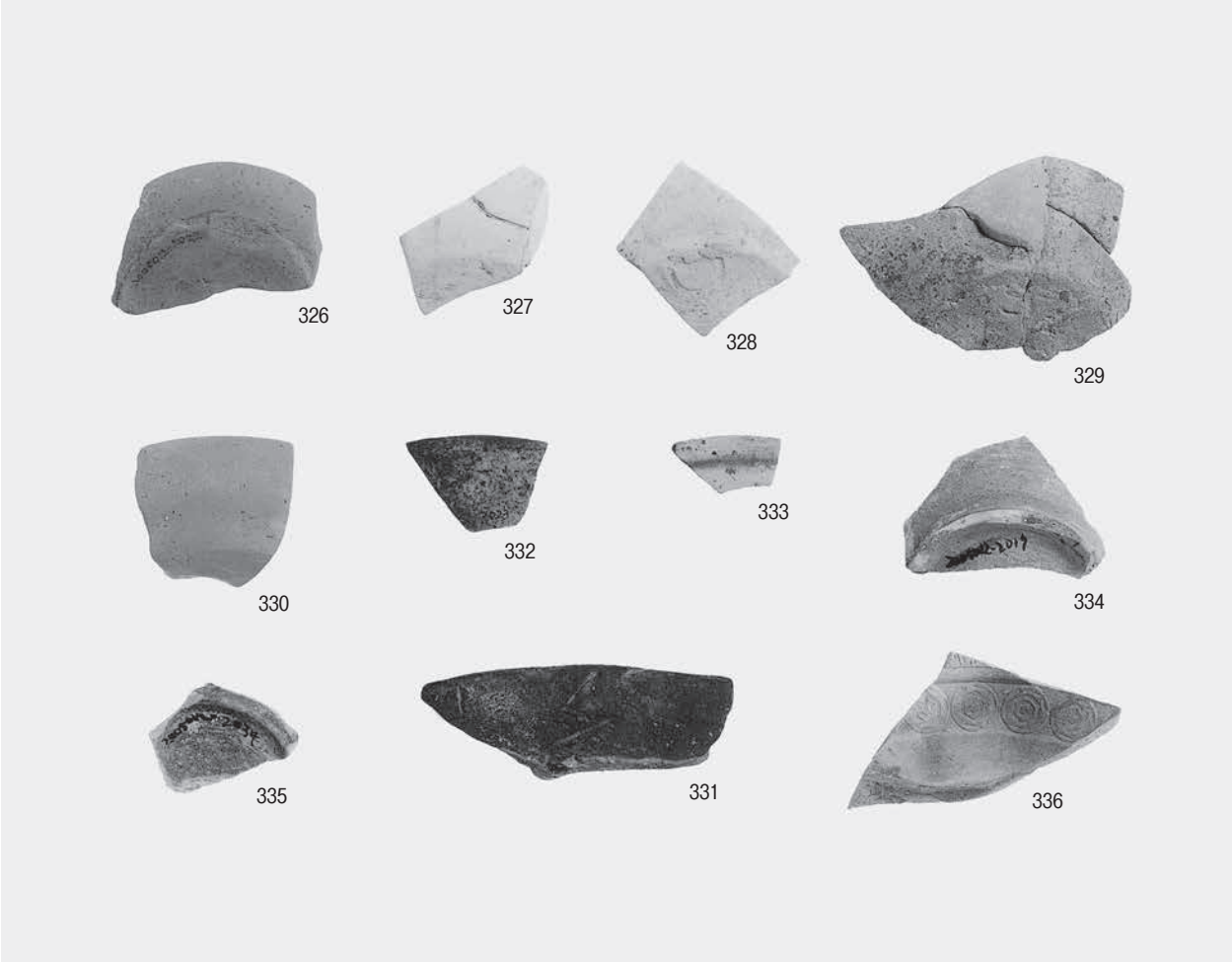
84　掘立柱建物SB210TP222T（南から）

81　溝SD202T　断面（南から）

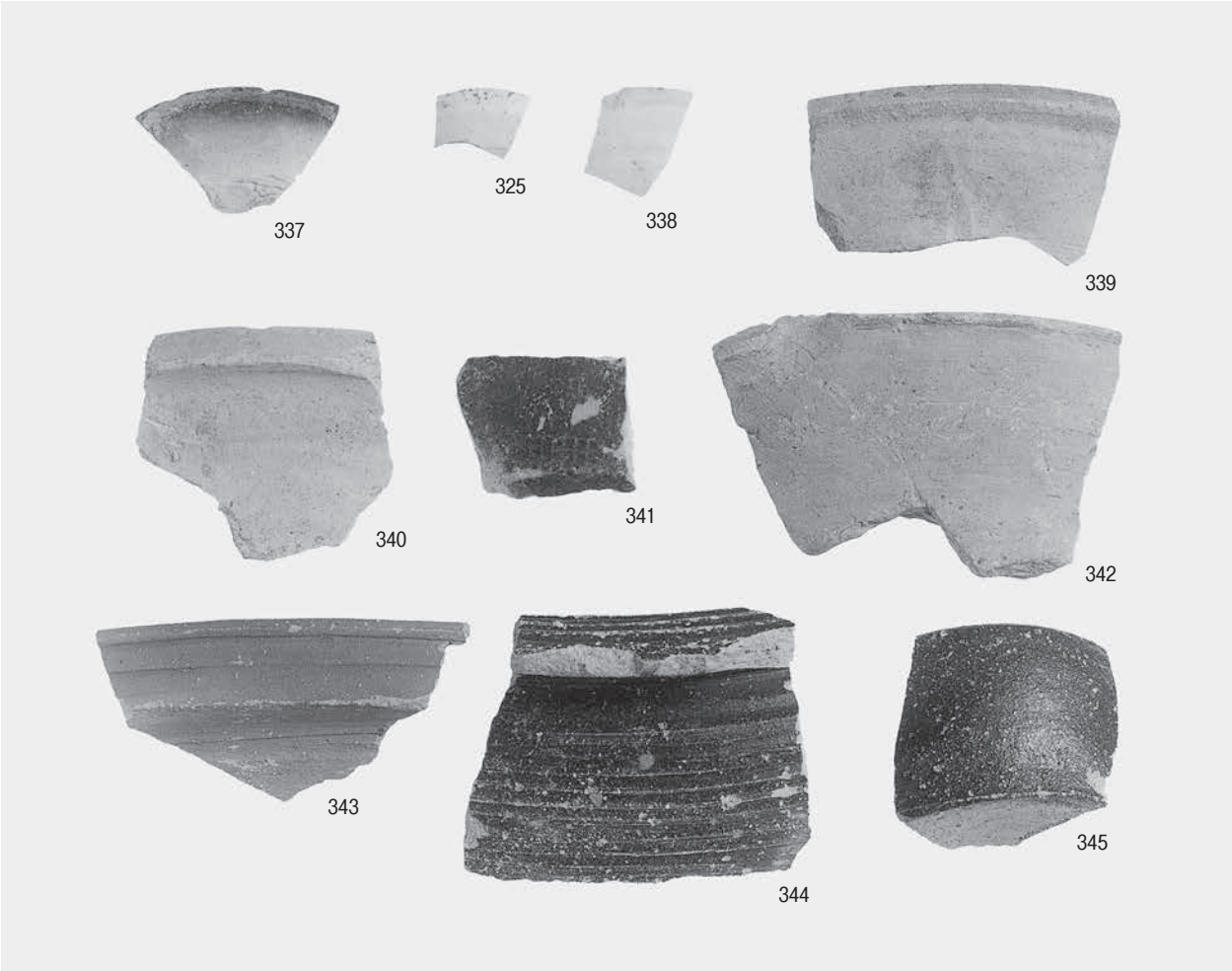


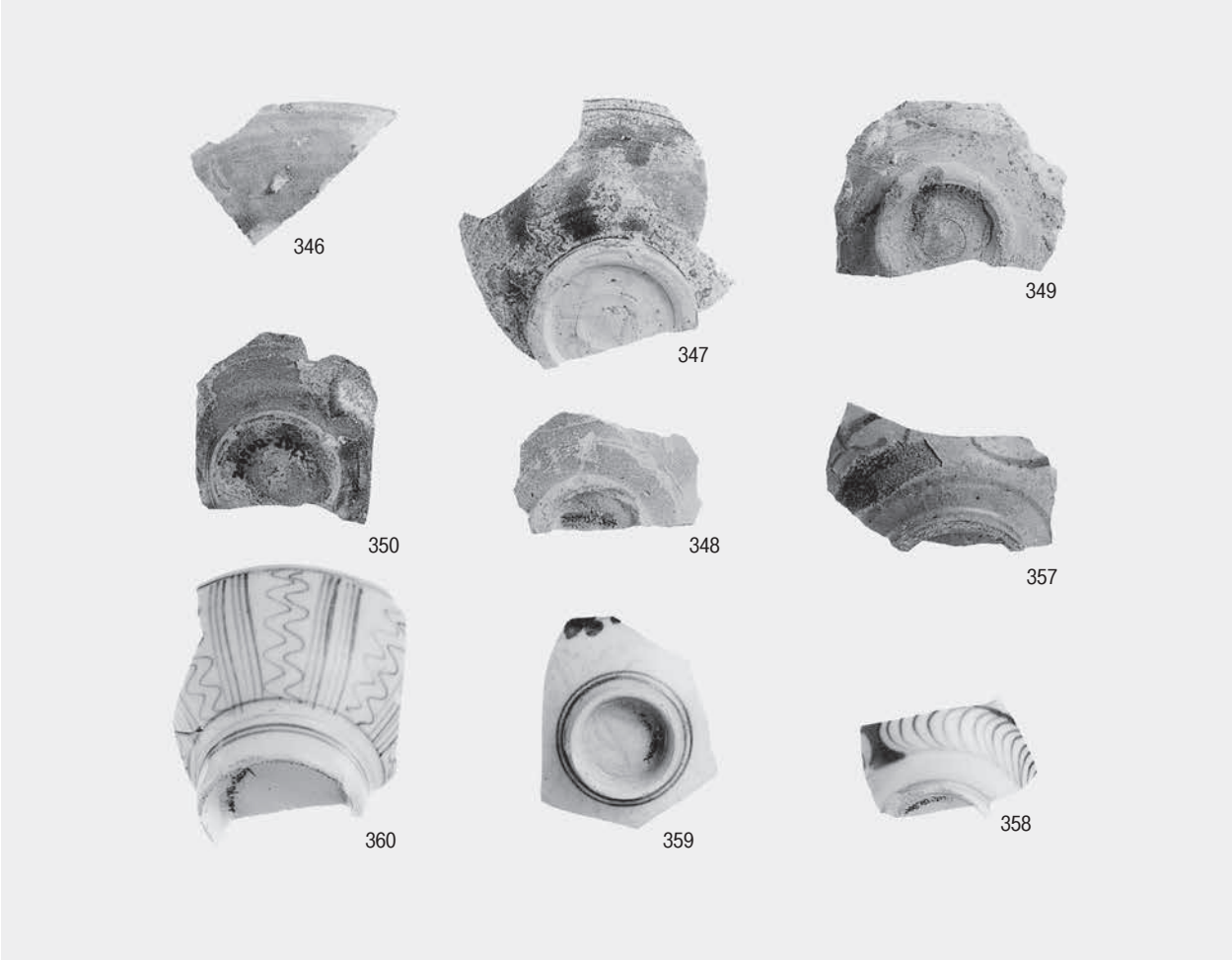
85　掘立柱建物SB210TP221T（南から）


316
322
320
323
317
321
319
318


326
327
328
329
330
332
333
334
335
331
336

土器(1)


337
325
338
339
340
341
342
343
344
345


346
347
349
350
348
357
360
359
358

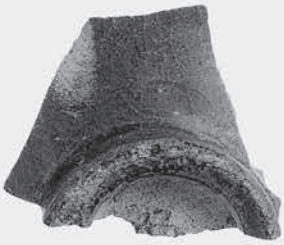
土器(2)

351

352

353

354


355

356

324

364

363

362

361

M32

M33

土器(3)・金属器

報　告　書　抄　録

ふりがな	しらいけいせき　すみだいせき　たけのはないせき
書名	白池遺跡　隅田遺跡　竹ノ鼻遺跡
副書名	県道鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第400冊
編著者名	篠宮　正（編）・岡田章一・青木哲哉・パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目１番１号　　TEL　079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　　TEL　078-341-7711
発行年月日	2011(平成23)年３月24日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白池遺跡（いらいけいせき）	兵庫県洲本市五色町鳥飼上（ひょうごけん すもとし ごしきちょうとりかいかみ）	28205	920126	34度22分36秒	134度45分48秒	本発掘調査 2005年6月29日～9月22日	本発掘調査 (2005010) 868㎡	県道鳥飼浦洲本線道路改良事業
隅田遺跡（すみだいせき）	兵庫県洲本市五色町鳥飼中（ひょうごけん すもとし ごしきちょうとりかいなか）	28205	920087	34度22分56秒	134度46分2秒	本発掘調査 2005年6月27日～9月22日	本発掘調査 (2005011) 843㎡	県道鳥飼浦洲本線道路改良事業
竹ノ鼻遺跡（たけのはないせき）	兵庫県洲本市五色町鳥飼中（ひょうごけん すもとし ごしきちょうとりかいなか）	28205	920130	34度22分35秒	134度46分6秒	本発掘調査 2005年7月11日～9月22日	本発掘調査 (2005012) 1,866㎡	県道鳥飼浦洲本線道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白池遺跡	集落	室町時代～安土桃山時代	土坑・溝・柱穴	土師器・須恵器・備前焼	
隅田遺跡	集落	縄文時代 鎌倉時代～安土桃山時代 江戸時代	土坑・木棺墓・溝・柱穴 溝	縄文土器・石鏃 土師器・瓦器・須恵器・備前焼・白磁・青磁・土錘 石臼・鉄釘 寛永通宝	
竹ノ鼻遺跡	集落	鎌倉時代～安土桃山時代 江戸時代	掘立柱建物・柵・土坑・溝 溝	土師器・瓦器・須恵器・備前焼・白磁・青磁・土錘 銅銭 陶器・磁器	

調査概要	白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡は鳥飼川北岸の扇状地に立地している。 白池遺跡と隅田遺跡は同一の遺跡と考えられ、12世紀後半から16世紀にかけて継続する集落である。復原できなかったが、掘立柱建物・土坑・墓・溝があり、西側は溝を伴う水田地帯が広がる。上層には江戸時代の土坑や溝がある。隅田遺跡部分が集落の中心で、白池遺跡側は遺構の密度が低い。 竹ノ鼻遺跡は14世紀から16世紀にかけての集落で掘立柱建物・土坑・溝を調査した。遺構の密度は希薄である。

※緯度・経度は平成14年４月１日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告　第400冊

白池遺跡・隅田遺跡・竹ノ鼻遺跡

県道鳥飼浦洲本線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011(平成23)年３月24日　発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
TEL 079-437-5589

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　ウニスガ印刷株式会社
〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39